

国際的芸術祭を事例とする組織化概念の 実証的展開

2019 年 3 月

新潟大学大学院

現代社会文化研究科

星井進介

目次

序章.....	1
第 1 節 本研究の背景と課題.....	1
第 2 節 本研究の目的と意義.....	10
第 3 節 本研究の構成.....	13
序章の注.....	14
第 1 章 組織理論研究と方法論の考察	15
第 1 節 既往の組織理論研究の考察	16
第 2 節 組織論における研究分析視座.....	24
1. 組織論のメタファー.....	24
2. 社会科学におけるパラダイム.....	27
第 3 節 解釈主義に立脚する質的研究.....	31
1. 定性的研究アプローチ	31
2. 計量テキスト分析	33
第 4 節 機能主義パラダイムに依拠する量的研究	42
1. 定量的研究アプローチ	42
2. 実証研究手法	43
第 5 節 まとめ	45
第 1 章の注.....	47
第 2 章 Weick 組織化論と実証的研究アプローチへの展開	48
第 1 節 Weick の組織観と組織化.....	48
1. 組織化モデルのプロセスと構成要素	49

2. 組織化の中心的概念としてのイナクトメント	54
3. センスメーキングと組織化	62
第2節 組織論における社会構成主義	65
1. 社会構成主義をめぐる議論	66
2. 社会構成主義と組織研究	73
第3節 社会的表象理論	79
1. Moscovici (1984) における社会的表象理論	79
2. 社会的表象理論と社会構成主義	84
第4節 まとめ	87
第2章の注	90
第3章 地域活性化の取り組みと大地の芸術祭	91
第1節 地域活性化とソーシャル・イノベーション	91
1. 現代社会の課題と地域活性化の取り組み	91
2. ソーシャル・イノベーション概念	97
第2節 調査地域の概要と対象とする事例	99
1. 調査対象地域の概要（新潟県十日町市）	99
2. 調査対象事例（大地の芸術祭）	103
第3節 まとめ	105
第3章の注	106
第4章 大地の芸術祭を対象としたテキスト分析による事例研究	108
第1節 「市報とおかまち」における大地の芸術祭	109
1. テキストの前処理と分析手法	109
2. 市報とおかまちにおける大地の芸術祭関連記事の推移	110

3. 計量テキスト分析による検証.....	112
第2節 総括報告書（本文）のテキスト分析	118
1. テキストの前処理と分析手法.....	118
2. 総括報告書（本文）全体をとおした分析・検証	119
3. 総括報告書（本文）の各開催回ごとの分析・検証.....	122
第3節 総括報告書（資料編：アンケート結果）のテキスト分析	128
1. テキストの前処理と分析手法.....	128
2. 対象資料全体をとおした分析・検証.....	129
3. 各開催回ごとの分析・検証	132
第4節 自由回答アンケート結果をとおして見る大地の芸術祭と地元住民との関わり	139
1. テキストの前処理と分析手法.....	139
2. 共起性の検討と対応分析.....	141
3. コーディングによる処理と分析	146
第5節 まとめ	151
第4章の注.....	155
第5章 大地の芸術祭でのインバウンド・ツーリストを対象とした実証調査	157
第1節 調査研究の背景.....	157
1. インバウンド・ツーリズムと地域振興.....	157
2. コトの世界への転換と社会的表象.....	159
第2節 実証調査の実施概要	161
1. 本調査の目的と方法論	161
2. 構成概念の操作化	164

3. 質問紙調査の概要	166
第3節 実証調査結果	167
1. 基本統計量の結果	167
2. 因子分析の結果.....	168
3. 構造方程式モデリング	176
4. 実証結果の考察.....	182
第4節 まとめ	185
第5章の注.....	188
終章.....	189
第1節 まとめ	189
第2節 今後の課題.....	196
終章の注.....	198
引用文献.....	199
付録.....	212
大地の芸術祭「総括報告書」記載の自由記述アンケートの回答結果の内容.....	212
謝辞.....	228

序章

第1節 本研究の背景と課題

現在の日本社会は、人口減少社会の到来や少子高齢化の進展など、今までに経験したことのない未曾有の状況に向かって進みつつある。人口問題については、いわゆる「増田レポート」において、地方自治体が消滅するというショッキングな報告がなされ、新潟県内でも18市町村が消滅可能性都市として挙げられている（増田編 2014）。このような人口問題を背景とする社会的課題の進展は、誰しもが経験したことのない新奇な事柄であり、これに対する取り組みとして、各地域の資源を活用した内発的な活性化策が講じられている（増田 2015；時事通信社編 2015）¹⁾。各地における種々の施策はソーシャル・イノベーションとしてとらえることが可能である（大室 2009；趙・李 2016）。ソーシャル・イノベーションとは、2000年代に入って広く議論されるようになった考え方で、社会的なニーズや課題への新規の解決策を創造し、実行するプロセスとして定義され、新しいアイデアの実現と社会へのインパクトを強調している（渡辺 2009）。

ソーシャル・イノベーションの世界的な事例として、世界の貧困層への融資を可能にしたムハマド・ユヌス氏によるグラミン銀行の取り組みが挙げられる（内藤・涌田編 2016：132）。このマイクロファイナンスの事業は、貧困という社会的課題を解決するための新たな社会的仕組みを構築する作用として注目され、ノーベル平和賞を受賞するまでに至る大きな社会的インパクトを与え、大きな影響力を持って世界中に受け止められている。

一般的に言われるイノベーション同様、ソーシャル・イノベーションも最初から成功するのかどうか、社会がその価値を認めて広く受け入れられる活動として普及するかどうかは予測することは難しい。最初は一人の人間の熱意からスタートするが、それが広く社会的・公共的な広がりをもって認知されるかは、多くのステークホルダーとの関わり、相互作用を繰り返しながらソーシャル・イノベーションが進展していく過程をとらえる視点が重要となる。渡辺（2009）では“Everyone a changemaker の層の厚み”の中からソーシャル・イノベーションが生まれると論じており、日本における地域活性化の取り組みにおいても、その活動が大きな社会的インパクトを与える事業となるか否かは、様々な立場の人々や組織の関わりが重要な働きを果たすものととらえられ、広く社会的な事柄として認

識されるにあたっては、その活動の事前・事後を通して展開される一連の人々の相互作用を伴う回顧的な解釈の過程としてのセンスメイキングプロセスが人々の間の共有意味の形成に大きく関与するものと思われる。

日本国内におけるソーシャル・イノベーションに即した地域振興事例として、大室 2009；李 2016；古村ら 2011 より以下の 4 つを示す。

(1) NPO 法人北海道グリーンファンド（北海道）

市民が風車を所有して発電事業を行い、それにより自然エネルギーの重要性の認識と環境問題への取り組み推進を図り、自然エネルギーの選択という行為につなげることを目指す活動である。市民風力発電という取り組みを進めるにあたって、市民による出資で環境問題という社会的課題の解決に向かう仕組みを作った。市民風車という事業形成が社会的な新たな価値の創造と普及という意義を有している。

(2) すまいる市（滋賀県）

里山保全や環境保全型農業の構築、地域経済の活性化を目指したバイオマスタウン構想にもとづく太陽光発電を利用した地域通貨制度と地産地消の推進を図る事業である。行政組織をはじめとする地域内の多くの事業者や市民などの様々な立場の人々が携わり、活動を進めている。様々な目的を持つ人と組織とが、この活動を通じて地域が抱える課題を認識し、この活動が持つ社会的価値を理解し、課題解決につながっていくプロセスを構築している。

(3) 東日本大震災の震災復興事業（宮城県）

継続的な復興支援事業の一つとして「南三陸復興ダコの会」の活動を取り上げる。大学のボランティア支援が活動開始のきっかけとなり始まった事業で、工房においてオクトパス君というキャラクターのグッズを販売するほか、繭製品やせんべいなどの食品開発・販売も行っている。この工房は商品開発とものづくりで雇用を生み出すだけではなく、南三陸町にある宿泊研修施設を連携して研修プログラムにも参画し、地域資源の体験現場としての役割も果たしている。事業を進める南三陸復興ダコの会はまちづくりにこだわり、南三陸町の異なる業種、組織、人をつなぎ、地域の内と外とをつなぐ仕組みを作り上げた。

(4) NPO 法人スペースふう（山梨県）

環境問題などの社会的課題を解決するためリユース食器という社会的商品のレンタル事業を展開する NPO 法人の事例である。使い捨て食器によるゴミ問題という社会的課題を認知し、それを解決するためドイツの先進的環境問題事例の一つとしてリユース食器に着目した。そしてスポーツスタジアムで行われる環境省によるリユースカップ実験での事業化の気づきを経て、経済産業省による助成金を獲得してリユースカップの製造・事業化を進め、地元サッカーチームのヴァンフォーレ甲府のホームスタジアムにおいてリユースカップ活動という社会的事業の推進を図った。ここから、事業化を進めた社会的事業家と、活動に関わる多様なステークホルダーの参画という相互作用プロセスの中で双方が事業推進のための学習を深め、経験を共有しながら社会的・公共的意味合いを持つ取り組みの実現に向かっていったことが認められた。

各事例を通して、地域振興の視点から見たソーシャル・イノベーションとは、社会的課題を抱えた地域が、地域自身のヒトやモノといった内部資源に依拠して、社会性・公共性の立場のもとで価値観の転換、社会構造の転換を図る取り組みであり、そこには多数のステークホルダーが存在しており、異なった立場、異なった目的を有する様々な人々や組織が関わる相互作用にもとづく関係性のコトづくりのプロセスが展開されている。

これらの事例や定義から分かるようにソーシャル・イノベーションは社会的課題の解決を目指す創造と実行の過程を表す動的な概念といえる。このような特性をもつソーシャル・イノベーションを議論するにあたっては、静的な枠組みでは創造と実行の過程をとらえることはできないことから動的な視点が必要となる。人口減少や少子高齢化といった社会的課題と対峙する地方が取り組むソーシャル・イノベーションに即した施策について議論するにあたっては、その創造と実行の過程、変化のプロセスをとらえ、認識するための新たな視点からの分析視座が必要となる。

未曾有の社会現象の進展に伴う社会的課題に取り組むにあたって、組織現象は構造や管理システムといった静的なものではなく、つながりや相互作用、関係性をキーワードとするダイナミズムを伴う変化の過程として見なければならないと考える。本研究では、ダイナミックな動的視座を持って社会現象にアプローチする組織理論として Weick が説く組織化という考え方に着目した。組織研究者である Weick が強調するのは、組織化

organizing という言葉が示すとおり組織プロセスでの組織メンバーの行為や言説、相互作用に焦点が置かれ、それらがどのように進展し、どのような意味や解釈が生まれるのか、そして、規範、価値観、制度、常識といった社会組織のシステムを形成するのかという点が中心的な命題となる。組織化では、組織や環境は客観的な所与の实在物として存在するわけではなく、行為者による意味解釈のプロセスを通じて構成される立場のもとで主体的な構成物として認識される点が重要である。

経営学・組織論における組織に対するイメージとして、ある構造や規定を有する客観的な実体としての存在、目的を持った合理的に機能する存在といったものがある。このような組織イメージは我々がもつ特定の見方、認識枠組みに依存しており、特定の組織を対象とした研究においても、その研究者のパースペクティブによって多元的なアプローチがなされることは容易に想像される。一つの組織に対する多元的な見解は、組織自体が持つ多面性とそれに伴う組織パースペクティブの多様性によるものである。

「群盲象を評す」のたとえ話がある。複数の盲人が象の一部だけに触れて、ある人は柱のようだと言い、別の人は壁のようなものと言うなど、象の異なる箇所を触れた各人が異なる感想を論じ合うという寓話であり、盲人が象の体を撫でて、それぞれが自分の触れた部分だけで大きな象の全体を判断するように、人が大人物や大事業の全体を見渡すことができない比喻として使われる用語²⁾である。自分の手が届く範囲だけが知覚できる世界としてとらえられ、それ以外の世界で起こっている現象を自分自身の知覚手段に頼ってとらえることは困難であり、限られた空間の外に实在を仮定することは容易ではない。組織研究にあてはめれば、研究者が盲人であり、組織が象である。組織現象の全体像を把握するのは容易ではなく、その取り組みは、組織というものの存在をどのようにイメージし、どのような視点で組織をとらえようとするかによって影響を受ける。

組織をとらえる際にどのようなパースペクティブに立脚しているかという点について主なフレームワークを概観すると、1950年代には Boulding によるシステム階層論が、70年代には Burrell and Morgan による社会科学パラダイムにもとづく類型化が、90年代には Scott による分類モデルが提示された。Boulding (1956) は一般システム理論に依拠してシステム階層論を示し、組織を分析・説明するのに適したレベルシステムの視点を提供

した。Burrell and Morgan (1979) では社会科学におけるパラダイムと組織アプローチが関連づけて説明され、社会科学の性質について存在論、認識論、人間論、方法論という4つの立場に分けて述べられ、「客観－主観」と「ラディカル・チェンジャーレギュレーション」という次元を設定し類型化を行っている。Scott (1998) は人と組織との関係、外部環境からの影響という視点に立って「合理的－自然体系的」、「クローズ－オープン」という次元を設定し、分類したモデルを提示した。そして、Hatch and Cunliffe (2014) では組織論の展開を歴史的な流れに沿って前史(1900～1950年代)、モダン(1960～70年代)、シンボリック(1980年代)、ポストモダン(1990年代)のパースペクティブとして示し、各パースペクティブにおける主な研究者を挙げている。例えば、前史ではA.Smith、F.W.Taylor、H.Fayol、M.Weber、C.I.Barnardらの名前が、モダンではL.V.Bertalanffy、K.Boulding、March and Simon、Burns and Stalker、Lawrence and Lorschらの名前が、シンボリックではA.Schutz、P.Selznick、Berger and Luckmann、K.E.Weick、C.Geertzらの名前が、ポストモダンではM.Foucault、J.Derrida、J.F.Lyotard、J.Baudrillardらの名前が確認できる。

ここでは本論文で議論するモダンとシンボリックの両パースペクティブについて、その特徴と論点を表1にまとめた。このような組織パースペクティブの類型化の成果は、組織論の進展に及ぼす大きな流れの一つであり、それぞれのパースペクティブにおける研究手法の確立と理解は現実社会での組織理論の実践において、理論と実践とを取り結ぶ上で大きな価値と意義をもつ。

客観的な現実として組織が存在するという確信のもとで語られるモダン・パースペクティブの世界では、組織現象を説明する方法として、何らかの原因があつて、それに影響されたかたちとして人々の行動や現象という結果が生じるという因果関係にもとづく考えに従って考察する立場をとる。研究手法という側面においては、組織を客観的実在物としてとらえて目的志向的な合理的な存在という前提に立ち、論理実証主義的研究が展開されることになる。組織構造はモダン・パースペクティブの研究対象であり、階層構造、分業、調整メカニズムという側面から議論される(Hatch and Cunliffe 2014 : 145-190)。権限の階層は公式の命令、報告関係を定義し、その階層構造にもとづいて課業を分解し、複雑

表 1 組織論のモダン、シンボリック・パースペクティブ
(Hatch and Cunliffe 2014:3-190、第 1 章～第 4 章より作成)

パースペクティブ	モダン (合理的パースペクティブ、実証学派、定量的アプローチ)	シンボリック (解釈主義、定性的アプローチ)
研究対象	因果関係の説明 定量的データ分析にもとづき因果関係の推論を立証 因果説明としての理論	主観性に根ざした現象(文化、シンボルの活用、ナラティブ、意味形成) 研究対象が関心を持つ現象をどのように定義し、相互作用し、解釈しているかの理解を定性的な記述にもとづき研究する理解としての理論
立場	客観的存在論の立場 外界に存在するゆるぎない存在としての現実(厳密には客体でなくとも客観体として扱う)を対象として独立観察する。 競争優位や収益性を生み出すために組織の問題を診断し、解決策を探索する。 世界は独立した客体であり、存在自体がそれについての知識に依存せず、現実が主体外部に客観的にあるという信念にもとづく。	主観的存在論の立場 私的な思考、感覚で明らかになるもの、自己を文脈の影響下に置くことで明らかになるものに焦点を向ける。 シンボルや意味に関わる現象において解釈から生じる微妙な意味の違いが実証主義的説明を補完すると考える。 主観的な認識から切り離して外部の客観的な現実を知ることはできないという信念にもとづく。
現実や知識とは	現実世界を客観的に観察し、現実社会での客観的観察を通して理論が検証されることで創り出される。 データとは、大きなサンプル集団から抽出した数字で示される「ハード」なデータを指し、事実とは情報にもとづく既に存在している唯一のもので普遍的なものを指す。	体験に意味を与える文脈を通してのみ知識は作られ、理解できる。そこに関わる人次第で異なる解釈と理解が数多く存在するかもしれないという多様性を有する。 データとは、構造化されていないインタビューによって作られたデータなどの「ソフト」なもので、意味・解釈にもとづき社会的に構築された多様なもので個別なものとなる。
組織とは	現実世界で機能する客観的かつ現実的な存在であり、適切にデザインされ管理された組織は、目標達成のために合理性、効率性、有効性の規範下で決定、行為するシステム	絶えず構成されるコンテクストがその行為者のシンボリックに媒介された相互作用によって再構築されたもので、意味の連鎖のように社会的に構築された現実とは、感情の結びつきとメンバー間のシンボリックな連結を産出
組織論の焦点	組織を統治する普遍的な法則・原則の発見 組織とそのパフォーマンスを説明する理論の規定 理論とその知見を実践する方法論の開発 構造、ルール、標準化、ルーティンを強調	どのように組織化が行われるかを理解するために、儀式とその意味深い活動という組織コンテクストにおいて、どのように人々の生活が繰り広げられるか記述すること 価値、人工物から組織文化を明らかにするため、シンボルを解釈することが好まれる。
組織と環境	環境は組織の境界の外に位置する客観的実体であり、分析にあたっては組織と環境との境界を明確にし、分析対象の組織と関わりのある競争、規制、社会的圧力を通じて対象組織に影響を及ぼしている他組織との結びつきを明確にする。	環境を個々の行為者と彼らによる社会的相互作用および関係を伴う意味解釈により社会的に構築されたものとしてとらえており、組織が環境を直接創造するといった積極的役割を果たすという立場をとる。 構築された環境は、行為者や組織の認知・感覚に影響を与え、組織が異なれば構築される環境も異なるし、同じ組織でも環境の構築が変われば環境に反応する行動も変化するといふかたちで組織と環境は相互に影響を及ぼし合い、作用し続けるという仮定に立つ。
組織の構造	客観主義的存在論に依拠して、組織とは、階層、権限関係、職責、様々な統合メカニズムといった要素からなる社会構造の客体であり、構造を事物、実体、客体、要素ととらえる。 組織図、方針、規則、調整メカニズムなどの事柄を分析し、組織の社会構造の存在を確認し、それらについての関連にもとづき結論を導出する。	主観主義存在論に立脚して、組織の社会構造は人々の意識や社会的相互作用から独立して存在することはないと主張し、組織の現実とは、人々が行為し、彼らを取り巻く物的資源と相互作用するとき現出する。構造を人間の創造物とみなし、固定的な組織は存在せず、プロセスとしての組織化だけがあると仮定し、社会的相互作用と集団的意味形成から現れるダイナミックな進行中の作用としてとらえる。各人の相互作用の進行に伴ってこれらの作用が安定的なものとして識別可能な関係と認められることが社会構造を定め、業務遂行の方法に貢献する。

な目標を各階層に応じた小さな目標に分けて割り当てる。そして公式の規則や手続きといった体系化された調整メカニズムに則り、各階層におけるルーティン化された作業行為が進展していく。その際に行動に先立つ意思決定という点が問題となる。March and Simon (1958) はこの問題をとらえて制限された合理性という考えを提唱した。一般に合理的な意思決定をするためには全ての可能性を把握し、それに伴う結果を知った上で、どの選択肢を選ばばいいのかという判断基準が必要となるが、我々は実際にはこのような合理的な意思決定にもとづく最適解をすることは不可能である。経済人モデルとは異なり、我々の認知能力は不完全で限界があり、意思決定する上での知識や情報も不足し、何が最適なのかの明確な価値判断基準も持ち合わせていない。知識・情報の不足と判断能力の限界によって制約を受ける個人の合理性を克服するために組織の存在意義がある。組織の階層構造や分業、調整メカニズムといったシステムに従って単純化したモデルを提供し、人は、経営人モデルにおける人としてそれに従うことで最大かつ最善な結果を生む最適な意思決定ではなく、行為者にとって十分かつ満足な意思決定が可能になるのである。組織によって体系化された仕組みの中で、所与の目的に向かって定められた手続き・規則に従い、分業され専門化した役割のもとで行動が実行され、期待される成果が産出される（渡辺 2007：26-29）。モダン・パースペクティブでは、関心事象の原因と得られる結果との因果関係の説明が研究の対象となる。

一方、組織や環境は社会的に構成されるもので、人々の認知の結果として存在するという構成主義的前提に立脚し、相互作用による意味形成や認知プロセスを重視する立場においては、解釈主義的な研究手法がとられることになる。Hatch and Cunliffe (2014) ではシンボリック・パースペクティブに位置づけられる Weick は人々の相互作用や関係性を中心とした組織過程を分析の対象とする組織化 *organizing* という動名詞で表される理論を提起し、客観的で合理的な組織観ではつかみきれない組織現象を説明するために、イナクトメントを根源とする組織化プロセスによる社会環境創出というダイナミックな構成主義的側面を強調し、組織のとらえ方における多様性を拮げ、組織論の新たな可能性を見いだした。シンボリック・パースペクティブの視座に立脚する場合、環境や組織はイナクトメント、センスメイキングによって社会的に構成されるものであり、これらによる相互

作用および関係性構築に伴う意味解釈プロセスをとらえる分析レベルが採用される (Hatch and Cunliffe 2014 : 118-119)。この意味解釈による環境創出は行為者の認知と感覚からもたらされるものであり、同じ外部環境に置かれていても行為者ごとに異なる環境が構築されることもあるし、構築された環境が異なれば、環境が及ぼす影響も異なり、行動も変化することが容易に想像できる。人々の知覚や行動の多様性の発現は、組織化過程における多義性削減プロセスを必要とし (Weick 1979)、行為者同士の新たな相互作用や関係性によってルーティンを変化させ、お互いに共有する価値観や意味を形づくっていく (Weick 1998)。これらの構成プロセスは、Weick が主張したように、ダイナミックな展開を示す進行中の過程であり、このことから固定的・静態的な組織は存在せず、あるのは動態的な組織化というプロセスだけということになる。

このような視座を持つ Weick が説く組織論は、組織研究の領域で幅広くレビューされており、組織のミクロ・マクロ研究 (Rousseau 2011) や組織マネジメントにおける理論構築プロセスに関する系統的レビュー研究 (Shepherd and Suddaby 2017)、人々の歴史的意識が組織変革モデルに及ぼす影響 (Suddaby and Foster 2017)、企業・学校経営での理念浸透に関する研究レビュー (福嶋 2015) といった組織運営や変革における理論的考察の分野、不確実性のもとでの事業失敗に伴うキャリアの意味作り (Ucbasaran, et al., 2013) や東日本大震災で被災した従業員のワークキャリアの再形成 (上野山・櫻田 2016) といったキャリア研究に関する分野、その他にも、調査分析と知識創造の双方に有益で効率を高める事後探索的科学データ分析に関する論考 (Hollenbeck and Wright 2017)、組織行為と意味解釈に関する論考 (山内・平本 2015 ; Yamauchi 2015)、マインドフルネスに関するフレームワークの体系化に関する研究 (Good, et al., 2016) などの研究領域において Weick の考え方にもとづく議論がなされている。

組織研究の領域で多くの影響を与えている Weick の組織論であるが、その多くは理論研究にとどまり、現実の社会レベルでの現象において適用される実証事例はほとんど見られない。

本研究は、新潟県十日町地域で開催されている「越後妻有アートトリエンナーレ 大地の芸術祭」を研究対象として取り上げ、人口減少や少子高齢化、過疎化といった社会的課

題解決のために行われている、ソーシャル・イノベーションに即した地域活性化策である大地の芸術祭に関わる人々の意識・行動変容についての検証を試みる。

大地の芸術祭の舞台である十日町市は、日本が抱える課題の先進地域ともいえる特性を持ち、広く社会的な影響を及ぼして多くのフォロワーを生み出した大地の芸術祭という地域活性化策を他の地域に先駆けて開催した。大地の芸術祭は多くの人々を巻き込みながら連携・協働をキーワードとして進められてきた活動で、社会的に意義のあるソーシャル・イノベーション的施策として位置づけられる。現代日本における社会的課題と言える人口減少問題について、かつて増加傾向を続けていた日本の人口は 2008 年を境に減少に転じ、将来の人口予測によれば 2050 年には一億人を下回ることが示されている。人口減少は少子化が原因であるが、同時に高齢化も進展している。65 歳以上の高齢者が人口に占める割合は一貫して上昇しており、2013 年には 25%となった。そして高齢化率は 2030 年には 30%を超えることが予測されている。人口減少と少子高齢化の問題は国全体の社会問題としてとらえられているが、地方においては、その現状はより厳しいものがある。本研究で実証調査の対象とする十日町市の人口は 1950 年をピークに減り続けており、年齢別の人口構成比を見ると 2010 年の時点で 65 歳以上の高齢者は 32.1%を占めている。このように人口減少や少子高齢化など、国全体の指標を先取りするかたちで進展する問題を抱えた課題先進地域としての側面を十日町市は有している。その十日町市で地域振興策として開催されている大地の芸術祭は、現代アートを媒介とした地域活性化の試みとして大きな注目を受け、例えば、“大規模な国際現代美術展”と題して「越後妻有アートトリエンナーレ」という言葉が現代用語の基礎知識（自由国民社、2001 年版）に掲載されたり、横浜トリエンナーレ（第 1 回：2001 年開催）、瀬戸内国際芸術祭（第 1 回：2010 年開催）、あいちトリエンナーレ（第 1 回：2010 年開催）、中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス（第 1 回：2014 年開催）といった文化芸術による地域振興の取り組み事例が各地で展開されるようになった。この大地の芸術祭は、旧来の産業振興による地域活性化のように特定の企業や組織の強い力に頼ることなく、社会的・公共的な立場のもとで地域住民やボランティアをはじめとする多くのステークホルダーが互いに関わり合いながら活動の推進が図られた。この一連の過程は、お互いの相互関係性や意味づけのプロセスによつ

て住民自身が住み、生活する地域の魅力や価値を改めて認識・構築して、新たな街づくりにつなげようとする取り組みであるといえる。このように課題先進地域と言える十日町市を舞台として、その課題解決のために開催された大地の芸術祭は、アートによる地域活性化の先駆的事例として多くのフォロワーを生み出す存在となり、社会的・公共的な特性を持ちながら多くの人々が関わり合い、相互作用を起こしながら新たな関係性、つながりを形成し、地域に新しい社会的な価値と意味を与える事象となった。このような性格を持つ大地の芸術祭の活動推進の過程や地域に及ぼした影響について検証することは、今後の地方創生のあり方や地域住民の活性化の観点において有意義なものと考えられる。これらの理由から大地の芸術祭を当研究の実証調査における対象事例として取り上げた。

本研究を遂行するにあたっては、動態的視座に立つ Weick 組織化論に着目して理論的深耕を行い、実証研究に向けた組織化論の課題を指摘する。その上で、組織化論の課題を補完するために社会構成主義と社会的表象理論の考え方を導入して理論展開を進め、社会的課題へのアプローチと実証研究への展開を図ることとする。本研究で目指す学術的貢献は以下の 2 点である。

(1) 組織論に新たな視座を提起した Weick 組織化について、組織化の始原であるイナクトメントに焦点を当てて論考し、理論的背景である社会構成主義の考えのもと、社会的表象理論を導入して、ミクロ的視座に立つ組織化の課題を補完し、実証研究への道筋について探ること

(2) 大地の芸術祭を事例とする実証研究において、社会的表象理論に依拠したモデルを構築し、社会的表象というマクロな存在が人々の行動というミクロな事象に結びつく関係性を見いだすこと

このようにして地方で展開されているソーシャル・イノベーション的施策における人々の思考やふるまいに及ぼす影響に関する分析枠組みを提示することは、今後も進む厳しい社会環境において有意義な貢献を果たすものととらえている。

第 2 節 本研究の目的と意義

本研究で議論の中心とするのは、様々な社会課題の進展と人々を取り囲む環境の変化と

いったものが人々の思考やふるまいにどのような影響を与えるのかという点である。

モノの世界からコトを中心に据えた世界への転換が唱えられており（富山 2014）、社会状況の変化に伴い、社会現象・組織現象をとらえるにあたって新たな研究アプローチと分析視座が必要となる³⁾。本研究で提起する組織化概念を始原とする論理展開と研究アプローチの採用は、今後の混沌とした不確実な未来を見据える上で重要な役割を果たし、経営学・組織論の分野に貢献するものと考えている。

本論文は過去においてポストモダンや組織認識論、解釈主義からの影響を指摘される Weick 組織化論（Weick 1979）を取り上げ、それに関する理論的深耕を図るとともに新たな解釈のもとで新しい視座を提示することにより、現実の社会現象の分析と理解に展開しようとする⁴⁾。Weick が説く組織化論は経営学の組織論の世界に新たな観点を提起して注目を集めたものの、理念的で具体性が乏しいこと、二人の間の相互作用（相互連結行動）を議論の基盤に置くというミクロな視点、実証的研究への展開の困難さといった理由から、実際の社会現象の分析といった応用面では広がりや欠いてきた側面がある。組織化論の理論的前提として社会構成主義の考え方があることが指摘できるが、社会構成主義は個別的な事柄を対象とする個別理論ではなく、従来の主客 2 項対立図式で説明される認識論に抜本的な改定を迫るグランドセオリー的な特性が強いことから、現実の組織現象をとらえるにあたっては、社会構成主義と親近性のある社会的表象理論の考え方を導入した。社会的表象理論では、人々が認識する現実もまた何かの表象に過ぎず、その表象も知覚や記憶、想像との関係性を経て形づくられるものとしてとらえて、種々の様態として出現したり消失したりする関係性や行動、言葉などを具現化することに作用するものとして表象を意味づけており、特に未曾有と形容される事象の場合に有効性が高いと言われている（平松 2015）。不確実な状況や激しい社会環境の変化、今までにない新奇な事象をとらえるにあたって、組織化論と社会的表象理論の考え方は有効な視座になるものと考えられる。

本研究では、社会現象の分析と理解にあたって Weick が提唱する組織化論に依拠する立場のもと、理論的背景として社会構成主義の考えがあることを指摘し検証する。しかしながら、組織化論の背景として社会構成主義の考え方があることを指摘したが、社会構成

主義は個別的な事柄を対象とする個別理論ではないことから、現実の社会現象をとらえるにあたっては、社会構成主義と親近性があり、マクロ的視座を持つ社会的表象理論に着目した。マクロ的特性を有する社会的表象理論を研究アプローチに導入して、実証的方法論の確立と有効性を示すことを目指す。マクロ的視座を持つ社会的表象理論の導入は、ミクロ的視座の組織化論を補完する意味合いも合わせ持ち、実証研究への展開における可能性を提起できる。

本研究の実証研究における調査対象は、新潟県十日町地域で開催されている「大地の芸術祭」である。人口減少や少子高齢化の進展、過疎化といった社会課題と向き合い、ソーシャル・イノベーションに即した地域活性化の取り組みとしてとらえられる大地の芸術祭を事例としてアプローチするに際して、どのような分析手法を採用するかに関して、上述の組織パースペクティブの視点からは、論理実証主義に依拠する定量的分析と、解釈主義に依拠する定性的分析が提示される。各パースペクティブはそれぞれ時間経過の流れの中に置くことができるが、後から出てきたものが既存の理論を上書きして、いずれかの視点が優れているというようなものではない (Hatch and Cunliffe 2014 : vii)。本研究では課題への近接のために多角的な分析手法により事例にアプローチすることとする。大地の芸術祭に関わる地元住民の意識変容については、Weick が立脚するシンボリック・パースペクティブにおける分析視座に則り人々の言葉に着目して、テキスト分析により明らかにする。そして、芸術祭における今後の課題として挙げられるインバウンド・ツーリズムへの対応については、アンケート調査による定量的実証調査を実施し、社会的表象が旅行者の行動や満足感に与える影響プロセスについて検証する。

Weick 組織化論と社会構成主義、社会的表象理論との間の理論的関連性に関する検証からミクロからマクロへの展開が図られ、実証的研究へと結びつく可能性が示されるものと思われる。社会現象をとらえるにあたって、本論文で掲げた組織化論と社会的表象理論にもとづく分析アプローチの有効性が提示できれば、ミクロ的な視座の組織化論を主軸に、マクロ的な視座をもつ社会的表象理論の考え方を導入する研究手法の有用性を示すことができると考えている。このアプローチは社会的課題を背景とした地域活性化の取り組みにとどまらず、その他の領域においても応用が可能であり、幅広い展開が期待できる。

第3節 本研究の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

序章では、現代日本が抱える社会問題として人口減少や少子高齢化といった課題を提示し、社会的課題解決に資するソーシャル・イノベーションに即した地域活性化の取り組みにおける人々の思考と行動に影響を及ぼすプロセスをとらえるにあたって Weick 組織化論に依拠しながら、社会構成主義と社会的表象理論へと展開を図り、実証的に社会現象と人々の意識・行為との関係性を明らかにする上での目的と意義を述べた。

第1章では、理論研究として、次章以降で実施する実証研究に向けて組織理論の類型と方法論について考察を行う。社会科学分野でのパラダイムと基本的なフレームワークを検証し、定量的かつ実証的アプローチを含む機能主義的な研究パラダイムと、定性的かつ質的アプローチを含む解釈主義的な研究パラダイムについてレビューする。

第2章では、理論研究として Weick が説く組織化論について理論深耕した結果を述べる。組織化プロセスを構成する各要素に関する検討を行うとともに、組織化論の重要概念であるイナクトメントに着目して議論を進める。さらに、組織化論の理論的背景といえる社会構成主義の考え方と、マクロ的な視座を有する社会的表象理論に関するレビューを行い、実証的な研究アプローチへの展開可能性を提起する。

本研究では、新潟県十日町地域で開催されている大地の芸術祭という地域活性化事例を調査対象として実証研究を展開するが、第3章では、前章までの理論的先行研究の知見にもとづき、次章以降で実施する調査分析にあたっての予備的検討のために、文化芸術活動に依拠した地方創生活動事例を概観し、近年提唱されたソーシャル・イノベーション概念を取り上げる。さらに、対象地域である十日町市の現況と対象事例である大地の芸術祭に関する基礎的調査を実施する。

第4章では、過去開催された大地の芸術祭を対象として詳細なテキスト分析を試みる。関係性やつながりといった概念をキーワードとする現象を読み解くにあたっては、言語やテキストといった言説が重要な役割を果たすことから、計量テキスト分析の手法を用いて、大地の芸術祭に関わる記事内容や報告書資料、アンケート回答結果に対する分析を行い、

大地の芸術祭という事業が地元地域に及ぼす効果・影響の検討と、地元住民の意識変化について明らかにすることを指す。

第5章では、今後の大地の芸術祭の展開を見据えて、外国人観光客を対象としたアンケート調査を実施し、社会的表象が及ぼすイメージとコンセプトへの影響がツーリストの行動や満足感に与える関係性についての検証を試みる。この動態的メカニズムを明らかにするために理論仮説モデルを構築し、その構成概念に対する相関関係について検証を行う。外国人観光客のアンケート回答結果にもとづく定量的実証調査により、社会的表象理論をめぐるダイナミックな関係性プロセスに関して議論する。

最後に終章では、本研究のまとめと今後の課題について述べる。Weick 組織化論の考えをもとに理論的検証を進め、実証研究につながる研究アプローチへの道筋を見いだしたことを論じ、これまで実証的研究成果が示されてこなかった理論に依拠して大地の芸術祭の調査サンプルを使用して実証できたという成果を提示する。併せて、これらの結果をふまえて、今後さらなる研究展開が必要な課題について論じる。

序章の注

- 1) 消滅可能性都市や各地での活性化施策については第3章で述べる。
- 2) 大辞林 第6版（三省堂）より
- 3) コトの世界への転換については第5章で述べる。
- 4) Hatch and Cunliffe (2013 : 56-58) は、Weick 組織化論について、最初に組織を認知プロセスであるとみなしたものと称し、組織研究者が目をつけるべきは組織という構造体ではなく、組織化という現象であると述べている。組織化のイナクトメントを通じて、現実の構成という確信がなされ、協働を含む相互作用プロセスによって、意味の集团的探索の産物である組織が現れる。そして、イナクトメントやセンスメイキング、社会構築という概念の関連付けが、客観的で合理的な組織論パースペクティブでは説明不可能なふるまいを論じる上で有効なアプローチとなる可能性を提起している。

第1章 組織理論研究と方法論の考察

これまで大地の芸術祭は、ソーシャル・キャピタル概念の視点から芸術祭の地域活性化効果の検証（鷺見 2012）、地域づくりの有効なツールとしてのアート作品の導入と制作に関する考察（勝村 他 2008；田中 他 2009）、地域課題に対するソフト重視型事業としての芸術祭の役割（唐沢 2007）、芸術祭の意義を文化芸術面での評価を通して行ったもの（小林 2005）といった様々な観点から研究報告がなされ、対象事例への近接と検証が行われている。人は手段によって真実を見つけられる（Gergen, K.J. and Gergen, M. 2004 : 137）の言葉のとおり、研究対象となる事象に実践的にアプローチして覆い隠されている事実を見だし、事象に関わる人々が保持する共有意味解釈を理解し検証するためには何からの研究視座に依拠し、何らかの分析手法が必要となる。多くのステークホルダーが関わり、多角的な特性を有する大地の芸術祭における人々の意識・行動の変容と関係性を読み解くにあたっては、研究アプローチのトライアングレーションの採用によって事象の諸側面を多く取り入れることができ、研究対象への近接性が高まると考える。トライアングレーションという概念は、ある研究対象の分析・検証を行う際に複数の理論的立場や研究技法などを用いた、より多角的、包括的な調査デザインのことを意味している（Flick 1995 : 327）。個々の研究方法が有する弱点や盲点を補い合うため、異なった方法論的なアプローチを組み合わせることで研究対象をより広い視野でとらえることができる。

本章は理論研究編として、組織現象を理解・説明する上での基本的枠組みとしての立場を確認するために、先行研究として既往の組織理論に関して考察し、概説する。そして、組織現象は人々による様々な営みから構成される関係性や相互作用から生じたものであり、これらは社会現象の一つとしてとらえられ、社会科学の一つの研究領域に属するものといえることから、社会科学の準拠枠組みを検証し、組織研究における方法論について考察する。先にみたとおり Weick が説く組織化論はシンボリック・パースペクティブに属する組織理論であり、定性的なソフトなデータを対象とした解釈主義的アプローチが望ましいとされる。一方で、解釈主義的なアプローチであっても、機能主義・実証主義的なアプローチであっても、それぞれの組織パースペクティブのもとでの特定の分析手法におけ

る限定的な知見が得られるにとどまり、対象事象の説明・理解において限界があることは否定できない。「実際のところ、ある現象に対する、これしかあり得ないという決定的な説明方法などは存在しない」（Parker 2004：197）のである。本論文では、多元的な視座で対象事例にアプローチすることで課題への近接を目指して、実証研究に際しては質的データである文章・言葉を対象としたテキスト分析の手法と、量的データを対象とした定量分析アプローチの双方を採用することから、これらについて検証する。

第1節 既往の組織理論研究の考察

経営学における組織に関する研究は、組織をどのような視点からとらえるか、組織と人の関わりをどうとらえるか、ということによって様々な分類がなされている。その中で、「合理的－自然体系的」、「クローズド－オープン」という関係を設定し、この2種類の座標軸関係にもとづいて分類したモデルがある¹⁾（岸田・田中 2009；渡辺 2007）。「合理的－自然体系的」とは、人と組織との関係において、組織が人の行動を規制して全体的な一定の秩序に向かうのか（合理的）、それとも、人間一人一人の行動や欲求が礎となって組織という秩序を形作るのか（自然体系的）という問題である。「クローズド－オープン」という関係は、組織と人が、それを取り巻く環境によって影響を受けるのか否かという問題である。

○合理的アプローチ：組織の合理的・効率的な手段により目的達成へと導く視点が強調され、一定の規定や構造のもとに人間の行動や組織プロセスを明らかにしようとする立場

○自然体系アプローチ：人の多様な欲求や動機を背景とした人間の行動に着目して、人々の行動から組織形成へとつながる関係に依拠して組織を理解しようとする立場

○クローズドシステムアプローチ：組織と環境との相互作用を考慮しない立場で、組織を自己完結した確定的なシステムとしてとらえて組織内の分析に焦点をあてるもの

○オープンシステムアプローチ：組織と環境との相互作用を前提として、環境に開かれた

システムとして組織現象をとらえようとする立場

これら「合理的－自然体系的」、「クローズド－オープン」という 2 つの関係軸から、それぞれ「クローズド－合理的」モデル、「クローズド－自然体系」モデル、「オープン－合理的」モデル、「オープン－自然体系的」モデルの 4 つのモデルが構成される。

本論文において研究の始原となる Weick が説く組織化論はこれらのモデルの中で「オープン－自然体系」モデルに属する。このモデルは、人間がもつ特性としての非合理性、多様性を前提として、人間同士や環境との相互関係を重視とする側面を有している。このモデルでの環境は組織に影響を及ぼすものではなく、人々の行動や組織活動によって形成されるアウトプットとしての存在としてとらえられる。そして、組織現象の分析にあたっては、人々の絶えざる相互作用や行動、組織と環境との関わりを通じた組織形成や変化の過程が議論の対象となる。Weick は組織が存続するための条件として安定性と柔軟性のバランスの維持を挙げており (Weick 1979 : 280)、組織を静態的なものとしてではなく、動態的な組織化のプロセスとしてとらえている。組織化は、生態学的変化－イナクトメント－淘汰－保持という 4 つの要素によって構成されるプロセスであり、“意識的な相互連結行動によって多義性を削減するのに妥当だと皆が思う文法”と定義される。組織化では、環境で生じた何らかの変化をイナクトメントによってとらえ、相互依存や互惠的行動といった Weick が組織行動の分析単位と呼ぶ二重相互作用を伴う 2 者関係の進展により組織が構成される。Weick は行動に先立つ意図や動機は存在せず、行動のもつ意味は回顧的に形成されるととらえており、行動の後にその行動が有意味なものになるよう、事後的に目的や意図を設定するという考えである。Weick は組織や環境をア・プリオリな存在としてではなく、構成的な存在としてとらえる組織観を持ち、組織は行為や言説を通して形づくられるという立場を示している。

以下、これまで提起された主要な組織理論を取り上げ 4 つの分類にもとづき考察した。

Taylor が提起した科学的管理法は、組織と環境との相互作用を考えないモデルで、最適な組織構造が重視され、組織メンバーの行動が管理・規制して組織目的の合理的かつ効率的な実現を目指す立場として「クローズド－合理的」モデルに属する。

Taylor の科学的管理法が目指したのは、生産性の向上によって組織（雇用者）と組織参

加者（労働者）の双方にとって最大の繁栄を確保することにあった。19 世紀末の工場の作業現場では（1）生産量の増加が失業につながるという労働者の誤った認識、（2）生産量の増加が賃金増加に結びつかない不適切な管理システム、（3）労働者の経験にもとづく非効率な作業方法が採られていたことを背景として労働者による組織的怠業が発生し、労使間の協調が欠いた状況であった（Taylor 1947 : 232）。Taylor はこれらの問題をふまえて科学的な管理法を提唱し、その考えを構成する 4 つの原理を示した（Taylor 1947 : 313-336）。第 1 の原理は、作業における科学的視点を導入し進展させることである。従来、個人的で労働者まかせな作業であった方法に代えて科学的な方法を導入することによって複雑な作業工程を分析して、労働者の作業動作・作業時間を決定する。第 2 の原理は、労働者を科学的な観点から選抜することである。各労働者の作業遂行能力を調べて、それぞれの作業に適した労働者を配置することで作業能率を高める。第 3 の原理は、労働者の科学的な訓練・教育による能力の向上である。労働者の能力を高めて、科学的な作業にもとづく取り組みを効率化させる。第 4 の原理は、管理者と労働者の有効的な協働である。管理者と労働者双方が科学的見地に立って所定の手続き、作業規則に従って行動することが要求され、全ての仕事が科学的かつ合理的に実施される。具体的な作業内容（課業）の設定にあたっては、（1）一日の課業を高く設定すること、（2）課業達成のために工具や作業環境を標準化すること、（3）課業達成の差異には高い賃金を払うこと、（4）課業達成に失敗した際には損失を負担すること、という原則があり、さらに、成果が上がった段階では、（5）課業は第一級の労働者だけが達成できる困難なものであること、が追加された（Taylor 1947 : 91-92）。これらの原則のもとで労働者の作業時間と動作を研究し、作業工程を分析することによって、不要な動作を省き、課業達成のために必要な作業時間と作業内容が設定された。そして管理の仕組みとして、差別出来高給制度（課業を達成した労働者への高待遇）、計画部門の設置（管理者と労働者の分業による計画と実行の分離）、機能別職長制度（職務の専門化の推進）、指導票制度（管理部門で決定された作業内容に基づく現場指導）といった制度が提起された。すなわち科学的管理法とは、仕事を科学的な視点で分析し、設定された仕事（課業）に取り組むにあたっての最適な方法確立し、選抜し訓練された労働者を高賃金によって動機づけて、組織の効率化を図ろうとするもの

であった。

Mayo（1933）、Roethlisberger and Dickson（1939）、Roethlisberger（1941）によって1924年から1932年にかけて米国シカゴのウエスタン・エレクトリック社ホーソン工場で行われた生産性向上のための作業条件改善に関する調査、いわゆるホーソン実験では、組織には公式組織以外の非公式組織があり、その非公式な組織の規範が組織メンバーの行動と作業現場の効率に重要な影響を与えるという結果が導き出され、そこから人間関係論が提起された。この人間関係論は「クローズド・自然体系」モデルに属し、人々の行動の結果として自然発生的に組織構造が生じるものと考え、組織の人々の行動に主要な関心をおくモデルである。

実験の当初は、科学的管理法と同様に生産性の増大につながる最適な作業条件があり、それら物理的な条件を調整すると労働者の作業性が向上して生産性が高まると考えられていた。しかし、作業現場の照明度や作業時間、休憩時間、賃金の支払い方法などを変化させても（逆に作業条件を悪化させても）生産性は高まったことから、客観的・物理的な作業条件や経済的条件とは別な要因が作業効率や生産性に影響を与えることが推測された。どのような要因が人を動機づけて生産性の増大に結びつけたのかという点については、労働者の心理と社会的要因との関係が指摘できる。労働者の心理については、モラル（morale）の視点から、それに影響を及ぼす管理監督方法や人々の関係性のつながりが明らかになった。この実験のために特別に選抜された女性作業員らは、社内で注目されている実験に参加できたことで業務への意欲が高まるとともに、選抜された作業員同士で特別な集団を形成しているという良好な集団意識が醸成されたことに伴い生産性の向上に寄与したと考えられた。このような生産性に影響を及ぼす労働者の作業への士気、意欲を背景として、Roethlisberger and Dickson（1939）は、作業環境における事柄や対象物は単なる客観的な事物として扱うことはできないのであり、それらは社会的に価値あるものと意味づけられ、人々の思考や行動に影響を与える存在としてとらえることが必要である指摘している²⁾。社会的要因との関係については、非公式組織の存在に関することが指摘できる。ある作業現場の生産性は、公式に定められたものではなく非公式組織の規範によって制限されていることが明らかになった。労働者の賃金は出来高によるものであるが、

全体の生産高が多すぎると、経営者側によって賃金体系が変更されて出来高の賃金が減らされてしまうと労働者が信じていたために、“働きすぎてはいけない、怠けすぎてはいけない、仲間に不利益になるようなことを管理者に話してはいけない”などの非公式な規範が存在していた（Mayo 1933）。これは、非公式組織の存在と人々との関係が作業効率と生産性に影響を及ぼす重要な要因であることを表している。このホーソン実験から、組織内の非公式な組織集団が公式組織の業績や労働者の作業効率に大きな影響を及ぼすことが明らかになり、これまでの科学的管理法において検証されることのなかった人間の感情や非公式な集団規範の存在、そして組織内での人々の関係性をとらえることの重要性の観点が導き出された。

Barnard は人々の行動、相互作用の側面からの検討により組織理論の枠組みを構築した。Barnard (1938) が提起した組織の定義として、“二人以上の人々の意識的に調整された活動や諸力の体系”がある。組織とは人間の活動で構成される一つの体系であり、組織として秩序的に構造化されるのは個々の人間ではなく、人々の行為や行動、影響力であると説いた（Barnard 1938 : 80-87）。Barnard の組織理論は「クローズド・自然体系」モデルに属する。Barnard によれば、人々の活動により構成される一つの協働システムとしての組織は、「伝達（コミュニケーション）」と「貢献意欲」、「共通目的」の3つの基本要素により成立し、組織目的を達成する能力と達成度合いを意味する「有効性」ならびに個人の活動を誘因して動機の満足に関わる「能率」を確保することで組織の存続が可能であるとされる（Barnard 1938 : 85-99）。協働システムとしての組織には、協働の目的としての共通目的が必要である。この目的は、「目的が組織を構成する努力を提供している人々によって容認されるのでなければ、協働的活動を鼓舞することにならない」（Barnard 1938 : 90）ものであり、「協働体系の基礎として役立つ客観的目的は、それが組織のきめられた目的であると貢献者（もしくは潜在的貢献者）によって信じ込まれている目的」（Barnard 1938 : 91）でなければならないと Barnard は説く。さらに、協働システムとしての組織には、人々の協働のための貢献意欲が必要である。これは組織の目的に貢献しようとする人々の努力・意欲が協働システムのためには不可欠であり、その行為は自己の人格を放棄し、組織への強い結びつきに依拠したものでなければならない。それによ

って人々の活動は調整されたものとなる。そして、伝達（コミュニケーション）は共通目的を人々に周知させるために必要なものである。Barnard は「組織の構造、広さ、範囲は、ほとんどまったく伝達技術により決定されるから、組織の理論をつきつめていけば、伝達が中心的地位を占めることになる」（Barnard 1938 : 99）として、伝達（コミュニケーション）を重要視してとらえており、この伝達に関わる技術は、組織にとって重要な要素となる。そして、組織の存続は、そのシステムとしての均衡を維持しうるかどうかにかかっており、組織が存続するためには、組織の目的達成に関わる「有効性」と個人の動機の満足に関わる「能率」が必要であるとされる。組織の有効性とは「環境状況に対して組織目的が適切か否かの問題」（Barnard 1938 : 86）である。組織の継続は、その目的を遂行する能力に依存しており、目的を達成できない場合には、組織が有効的に機能しなかったり、組織崩壊につながる。また、その目的を達成することによっても存在意義を失い自ら解体する。そのために、適切に組織の目的を変更することや新しい目的を採用する意思決定が重要な側面となる。そして、組織の能率とは「組織と個人との間の相互交換の問題」（Barnard 1938 : 86）であり、協働体系に必要な個人的貢献の確保を意味する概念である。人は自分の行為によって動機が満たされていることが認識できれば協働的行為を継続するが、そうでない場合には貢献を止めてしまう。組織に参加する個人の貢献を続けさせる場合には、個人の負担と満足とを釣り合わせることを求められることから（Barnard 1938 : 59）、組織活動への十分な貢献が得られるように、組織は個人の動機を満たすような誘因を提供することが求められる。

コンティンジェンシー理論は「オープン－合理的」モデルに属し、組織と環境との相互作用を考慮し、その上で合理的かつ適応的な組織構造などのあり方を検討するモデルである。Lawrence and Lorsch（1967）は、組織が対応すべき環境の条件が異なれば、それに適応した組織のあり方はどのように違ってくるのかという点を解明することを目的として（Lawrence and Lorsch 1967 : 3）、組織はオープンシステムであり、そのシステムは大規模化に伴って複数に分化するとともにシステム全体として存続するために個々の部分を統合する必要があること、また、全体としてのシステムと各構成部分としてのシステムは環境に適応していくという重要な機能を有していることを指摘して（Lawrence

and Lorsch 1967 : 8-9) 、プラスチック産業や食品産業、容器製造の企業を対象に実証研究を行った。組織の外部環境は、情報は明確であるかどうか、因果関係は明確であるかどうか、結果のフィードバックの時間が長いか短いのか、の3つの事項で測定される (Lawrence and Lorsch 1967 : 28-36) 。組織の分化の程度は、目標志向 (部門内に焦点をあてるのか部門外にまで焦点が及ぶのかといった管理者が焦点をあてる目標の次元) 、時間志向 (長期的視野に立つか短期的視野に立つか) 、対人志向 (人間関係を重視するか業務達成を重視するか) 、構造の公式性 (管理階層、目標達成基準の具体性や詳細さ) 4つの事項で示される (Lawrence and Lorsch 1967 : 11-13) 。そして、「環境の要請に一体となって努力するために必要とされる部門間の協力状態の質」と表される統合 (Lawrence and Lorsch 1967 : 14) は、統合のパターン、統合の手段、コンフリクト解消の型の3つで示される。研究結果によれば、外部環境の特性はプラスチック産業が最も不確実性が高く、次いで食品産業が中程度、容器産業は安定的で多様性は低かった。各産業で高業績をあげた組織の調査では、容器産業は不確実性が低い環境のもとで組織の分化は低く、統合は公式の管理システムにもとづくものであったが、一方、プラスチック産業では組織の分化レベルは高く、その分化した各部門の統合のために公式の管理システム以外にも統合担当部門の設置や、部門管理者による直接的な折衝が実施されるなどの手段が活用されていることが明らかになった (Lawrence and Lorsch 1967 : 162-163) 。Lawrence and Lorsch は、外部環境の条件に対して組織内部の構造やシステムが適合するならば、すなわち、組織が対峙する環境に則したレベルの組織分化をするとともに各部門の適切な統合が達成できるならば、その組織は環境に効果的に対処して高い業績をあげるだろうとして、次のように述べている。

プラスチック産業のような、相対的に多様でダイナミックな分野では、組織の有効性を高めるために高度の分化と高度の統合が必要になる。容器産業のような、相対的に安定で多様性の少ない環境下にある組織では、その有効性を高めるために分化の度合いは相対的に小さくする必要があるが、統合はやはり高度に達成する必要がある (Lawrence and Lorsch 1967 : 127) 。

コンティンジェンシー理論以前の組織理論は、あらゆる状況に該当し適応する唯一最善の方法（one best way）が存在するという想定のもと、それを追求する傾向が強かった。しかしコンティンジェンシー理論は、あらゆる状況に適応する普遍的で唯一最善の組織構造や管理システムは存在せず、組織を取り巻く環境の特性に依存して構造や管理システムが異なるという仮定のもとで、どのような組織構造が最適であるかは環境に依存して決定されるとして、それぞれの状況に則した有効な組織のあり方を実証的に探究する理論であった。

以上、経営学における組織理論を「合理的－自然体系」、「クローズド－オープン」という関係をもとにした4つの枠組みにもとづき、Weick 組織化論を含む既往の組織理論に関して概説した。多くの組織理論は目的の先行性や目的先与性といった言葉で表されるように、既定の目的を達成することを目指した手段の探求という形でとらえられ、組織目的（全体）から出発し、いかに合理的な仕組みで目的を達成しうるのかという立場のもと、構造や管理システムなどの手段（部分）のあり方が検討されるという流れになる（稲垣 2002 : 247）。一方で後述するように Weick は、組織化という過程や相互関係といった能動的・動態的な側面に焦点をあてており、組織現象の理解においては、人々の相互作用や環境変化との関係性に依拠する人々の行動（手段）が組織目的（全体）に優先して発生することが強調される。このように従来の組織理論では、組織の存在をすでに形成されたものとしてある所与の存在として認識しており、その既定の組織の目的達成に向かって合理的・機能的な手段を通じて人々の配置やマネジメントの仕組みが決定される。それに対して Weick は、組織を構成するという組織化（organizing）の過程に焦点をあてた組織理論を説いた。それは、組織化という一連のプロセスが組織に先行、優先するという概念である。組織目的が所与のものとしてあり、その達成に向かって行為するという手段によって組織化が進展する全体から部分へのプロセスを組織分析の対象とするのではなく、人々の相互行為（手段）から組織構造や目的が事後的・回顧的に形成されるという部分から全体への流れに着目して議論する考え方を取り入れた組織理論である。次章では Weick が提起した組織理論である組織化の考え方を取り上げて検討を行う。

第2節 組織論における研究分析視座

1. 組織論のメタファー

組織の問題が経営学上で議論されるのは科学的管理論からである。Taylor は、あらかじめ設定されたなされるべき仕事（課業、タスク）を中心とした科学的な管理法を提唱した。このような組織は、個人的な感情的要素を排除した上で目的達成を志向する官僚制組織に類似したものとなる。一方で、組織メンバーの心理的要因に着目した人間関係論の研究も行われた。その後、Barnard が組織と管理に関する包括的な理論枠組みを提示した新しい組織モデルを構築し、近代組織論の原点となった。この Barnard の理論にもとづき、意思決定の問題に焦点をあてた Simon の組織モデルが構築された。この近代組織論においても外部環境との適応という視点が組み込まれていなかった。コンティンジェンシー理論では、組織と環境との関係が組織論に取り込まれた。

このような組織理解のために研究者は様々なシステムをメタファーとして用いてきた³⁾。このメタファーとしての視点は Von Bertalanffy や Boulding が体系的、階層的に示した「一般システム理論」にもとづいている。Bertalanffy (1968) は自然科学から社会科学にまで見られるあらゆる科学的現象（原子、分子、細胞、器官、有機体、個人、集団、社会といった対象）をシステムという概念でとらえ、そうしたあらゆるシステム一般を説明できる本質的な一般原理を一般システム理論として提示した。一般システム理論が持つ重要な命題は、あるレベルのシステムはそれより下位レベルのサブシステムの特性を内包しているという内包性である。そして、Boulding (1956) では、システムの内包性のレベルと複雑性のレベルにしたがって単純なものから複雑なものへと9つの階層レベルにシステムを体系化して、システムのハイアラーキー論を展開された。ここでは上位のレベルに進むにつれて、単純なものから複雑なものへ、クローズド（閉鎖系）からオープン（開放系）へ、部分から全体へ、受動的から能動的へとシフトしていく。

表 1 システムの階層論

レベル	システム		
1	フレームワーク	最も単純なシステムで静的（2 以上は動的）	クローズド・システム
2	クロックワーク	規則的・反復的な機械のような動的システム	
3	コントロール (=サイバネティクス)	フィードバック処理で均衡維持を図るシステム	
4	オープン・システム	細胞が典型例で、自己維持のため環境に依存	オープン・システム
5	植物	遺伝と発生のシステム、各器官の相互依存性	
6	動物	情報知覚や神経システムによる目的的行動	
7	人間	自意識の保有、シンボルや意味の創造、解釈	
8	社会組織	サブシステム(人間)との相互作用	
9	超複雑システム	複雑性を特定できず、全体像は不明	

(坂下 2002:11-15 より作成)

組織は、システムのハイアラーキー論の中では第 8 レベル (社会組織) に位置している。この社会組織というシステムは第 7 レベル以下のシステムのあらゆる特性を内包性として持っている。したがって、組織研究においては第 8 レベルの社会組織の特性そのものに注目した組織論を展開できるが、今までの組織論は理論展開が容易であるなどの理由により単純な第 7 レベル以下のシステムをメタファーにすることが多かった。現在までの典型的な組織論がどんなシステムをメタファーとしていたのかを「一般システム理論」に則してみると次のようになる。

【第 1 世代の組織論】

一般システム理論におけるごく単純なシステム (精密機械) をメタファーにした組織論であり、伝統的管理論や官僚制組織論がこれに相当する。

Weber は近代的合理的組織の理念型としての官僚制組織論を展開した。官僚制組織の特徴は (1) 規則の体系、(2) 階層的職務権限、(3) 文書主義、(4) 専門的訓練、(5)

没人格性である。このような特徴を持つ官僚制組織は正確性、確実性、予測可能性、情実の排除、公平性という点で優れており、迅速性、慎重性、統一性、摩擦の排除という点で合理的な組織である。官僚制組織は時計のようにあらかじめ最適にデザインされた構造特性を持っており、クローズド・システムの中で変わることなく維持され、規則的かつ反復的なオペレーションが行われる。

【第2世代の組織論】

やや複雑なシステム、有機体をメタファーにした組織論であり、人間関係論や近代組織論、コンティンジェンシー理論が相当する。

官僚制組織は機械メタファーの組織論であり、精密機械のような構造の組織がどんな状況においても常に成果をもたらすと主張する。しかし1960年代に入ると、組織の置かれた状況が異なれば機能的な組織構造も異なるのではないかと、どんな組織構造が最高の業績をもたらすかは、その組織が置かれた状況ごとに相違してくるのではないかと、との考えのもと、コンティンジェンシー理論が生まれた。コンティンジェンシー理論は、ある組織構造は、ある特定の環境状況においてのみ、ある組織成果をもたらす、ということであり、組織が環境に対して開かれたオープン・システムの特性を内包していることを示している。その環境への対応は、組織の主意性ではなく、環境の側が一方向的に構造を決定している「環境決定論」的側面を持つ。これらのことからコンティンジェンシー理論がメタファーとしたのは、第6レベルのシステム（動物）のうち、主意性を持たない下等動物ではないかとされる。

【第3世代の組織論】

組織における意味づけや解釈、文化という複雑なシステムをメタファーにした社会学的組織論であり、組織認識論や組織シンボリズム論が相当する。

組織環境が組織構造を一方向的に決定するという考えが支配的だった中、Pondy and Mitroff はシステムのハイアラーキー論にもとづいて、有機体をメタファーにした組織論を超えることが必要だと主張し、社会組織より下位レベルのシステムではなく、社会組織そのものの特性である文化をメタファーにした組織論の考えを示した。ここで文化とは、「言語の使用」と「共有された意味の創造」である。組織シンボリズム論は文化メタファ

一の組織論として誕生し、80年代以降広がりを見せていった。

加護野（1988）による組織認識論は、環境適応や組織構造といった現象を組織メンバーによる意味づけ・解釈の視点でとらえ直すものであり、解釈主義社会学と親近的な特性を有する意味論としての組織論の構築を志向したものであった（坂下 2002：33-36）。加護野（1988）は、組織での意味を確定する過程を認識と称し、その特徴として、人間は情報ではなく意味に反応する、人間は情報の受動的な受け手ではなくて能動的な探索者である、社会的な現実是人々の相互作用によって維持される、人々は行為を通じて意味を表現するが、行為は意図された意味の伝達以上の情報を含んでいる、といった事項を挙げている（加護野 1988：81-82）。

組織シンボリズム論の研究分野は、シンボリズムと組織文化である。シンボリズムとは、物理的（ロゴやステータス・シンボル）、行動的（儀礼や儀式）、言語的（言語や物語、神話）シンボルの使用、行使、表現といった、人間が意味をシンボルとして表現し象徴する行為であり、シンボリック行為とも呼ばれる。また、シンボルとは行為者の主観的意味が付与された行為、発話、制作物である。通常、シンボリズムは組織などの社会集団の中において他者との間で行われ、この時に意味やシンボルは共有されていく。このように共有された意味やシンボルの体系が、その社会集団の文化である。組織メンバーがこれらシンボルや文化をどのようにとらえて意味づけるのか、また、シンボルとしての組織という存在をどう認識するのか、という視点に立ったときに、組織を理解する上での論点や方法論がこれまでと異なるものになることが推測できる。

2. 社会科学におけるパラダイム

上述の通りに組織論の多くは特定のものをメタファーにして理論構築を行ってきた。ただしパラダイム無しには特定のメタファーへの注目そのものが起こらないことから、組織研究者の多くは特定のメタファーを選択する際には既に一定の認識論的パラダイムを持っていたと考えられる。その特定のメタファーを用いることで固有の洞察を得ることができるが、重要なことはその洞察の内容は特定のメタファーを指定している認識論的パラダイムによって決定的に規定されるということである。

ここでは社会科学の認識論的パラダイムを類型化した Burrell and Morgan (1979) に注目する。Burrell and Morgan (1979 : 3-13) では、社会科学における諸性質をとらえるにあたって、存在論、認識論、人間論、方法論の4つの視点を示して類型化し、「主観主義社会学」と「客観主義社会学」を識別している。

表 2 社会科学の性質に関する諸仮定を分析するための図式

主観主義社会学		客観主義社会学
唯名論	←存在論→	实在論
反実証主義	←認識論→	実証主義
主意主義	←人間論→	決定論
個性記述主義	←方法論→	法則定立主義

(Burrell and Morgan 1979:6 より作成)

【存在論】 (唯名論－实在論)

研究対象とする社会現象の本質に関するものである。唯名論の立場では、社会的世界は成員の認識を通じて社会的に構成されたものである。一方、实在論の立場では、社会的世界は成員の認識とは独立に、客観的实在として存在する構造である。

【認識論】 (反実証主義－実証主義)

研究者が知識や現実などの社会的世界をどのように認識するのかに関するものである。反実証主義の立場の研究者は、社会的世界はその成員の視点からのみ認識できると考えている。実証主義では、研究者は社会的世界の規則性や因果関係性を、その世界の外側からの観察を通じて認識しようとする。

【人間論】 (主意論－決定論)

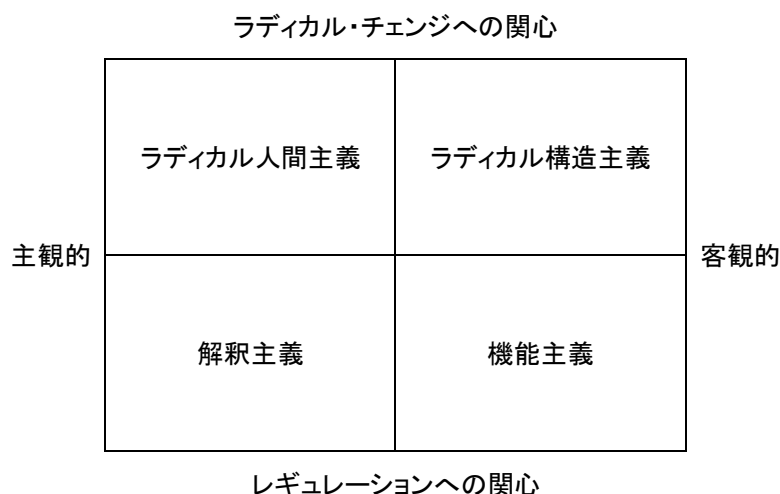
人間と環境との関係に関するものであり、研究者が人についてどう見ているかに関する仮定である。主意論の立場に立つ研究者は、人間は自由意思を持って行動していると仮定している。決定論の立場では、人間の行動は状況や環境によって完全に決定されていると仮定している。

【方法論】（個性記述主義－法則定立主義）

知識の獲得に関することや研究アプローチの違いに関するものである。個性記述主義は、社会的世界の内側に入って意味世界にまで踏み込んだ洞察を得ようとするなど、研究対象から直接知識を得ることによってのみ社会的世界を認識できると仮定している。法則定立主義は、体系的な手法に基づく定量的調査を重視し、定量的データを統計分析してデータに基づいた法則を発見しようとするものである。

さらに、これらの過程と併せて、社会現象のどのような性質に対して関心を持っているかに着目してレギュレーションとラディカル・チェンジの次元を加えた。ここで、レギュレーションとは、社会におけるレギュレーション（規則や規定）に関心をもつもので、社会が一つの实体として秩序だてられていると仮定し、社会秩序の維持に焦点をあてて、なぜ社会が今のままの状態であるのかを説明・理解しようとする。ラディカル・チェンジは、レギュレーションと対照的な立場に立つもので、社会は変動するものととらえて、急進的変動、コンフリクト、構造的矛盾に関心を置き、人間の可能性を制限し、阻害する諸構造からの変容と解放に関心がある。

これにより図1のような4つの次元を有する認識論的パラダイムを整理・類型化できる。



(Burrell and Morgan 1979:28 より作成)

図1 社会科学の認識論パラダイムの4類型

機能主義パラダイムと解釈主義パラダイムは、共にレギュレーションの社会科学であり、社会秩序や統合に主眼を置く点では共通している。機能主義パラダイムは、社会的世界が維持存続する根拠を、それが果たす機能に求め、実在物としての社会的世界はなぜ維持存続するのか、ということを経点とする。解釈主義は、社会的世界は成員の間主観的な意味解釈（＝意味付与、意味構成）を通じて生成すると仮定しており、そのパラダイムの視点は、構成物としての社会的世界はどのように生成するのか、ということである。

一方、ラディカル構造主義パラダイムとラディカル人間主義パラダイムは、ラディカル・チェンジの社会学である。両者は基本的に社会の急進的変動、コンフリクト、構造的矛盾といった点に関心をもつ。ラディカル構造主義パラダイムは、客観主義の視座から社会におけるラディカル・チェンジを理解しようとする立場である。機能主義的アプローチにもとづきながら急進的変動やコンフリクトからの人間の解放などの点に関心を置く。ラディカル人間主義パラダイムは、主観主義の立場から社会のラディカル・チェンジに関心を持つ。社会現象へのアプローチは解釈主義的立場に立ちながら、現状への批判的立場のもとで、人間の知覚や意味解釈の視点を重視して人間の意識を規制する様々な制約からの解放を主たる関心事とする。

このように4つのパラダイムに分類・整理できるが、社会科学においてはレギュレーションの立場に立って機能主義パラダイムに依拠した研究アプローチが多い。組織現象を分析、検証し、説明、理解するにあたっては、社会における秩序や統合といったレギュレーションに関わる事柄が対象とされ、それらが実在論、実証主義、決定論、法則定立主義といった客観主義の視座からの検証、すなわち、組織における現象は客観的な実在物による因果関係にもとづいており、それらを定量的かつ実証的な分析によって明らかにすることで法則や関係性を見出そうとするアプローチが試みられる。しかしながら、自然科学の場合は様々な制約条件を制御した実験室的環境を構築し、その環境のもとで繰り返し分析を試みることが容易なのに対し、人間活動が主たる研究対象となる社会科学の場合は、自然科学と同様の実験環境を整えることが容易ではなく、因果関係を明確にとらえて組織現象の法則性を見出すことが困難な側面がある。このようなことから質的研究、定性的研究と称される解釈主義パラダイムに立脚したアプローチをとる研究も行われている。この立場

は唯名論、反実証主義、主意論、個性記述主義に立脚し、諸現象をダイナミックで構成的なものとしてとらえ、組織メンバーの行為や発せられる言葉、そこで創出される意味づけ過程を対象とした分析をすることによって組織現象の説明・理解を目指す。

第3節 解釈主義に立脚する質的研究

ここでは解釈主義的立場に立つ研究方法論について考察する。この立場では、質的研究や定性的研究アプローチと称される種々の研究手法が採られるが、それらを検証する。そして、本研究が立脚する視座では言葉を対象とする言説分析が主要な分析手法となるため、本研究で採用した計量テキスト分析について述べる。

1. 定性的研究アプローチ

質的研究は、医療や看護、社会学、心理学などの分野において展開され、インタビューやディスカッションによる会話分析（高橋 他 編 1998 : 135-148 ; Flick 1995 : 94-120 ; Parker 2004 : 73-96）、ナラティブ分析（Flick 1995 : 122-130 ; Parker 2004 : 97-120）、参与観察（高橋 他 編 1998 : 87-98 ; Flick 1995 : 176-182）、エスノグラフィー（高橋 他 編 1998 : 106-115 ; Flick 1995 : 184-187 ; Parker 2004 : 51-72）、アクションリサーチ（筒井 編 2010 ; 矢守 2010）、言説分析（佐藤・友枝 編 2006 : 89-121 ; Parker 2004 : 121-145）などの分析手法を用いて課題とする現象にアプローチする。これらの分析から得られたデータをテキストとしてコード化、カテゴリー化の段階を通して処理することによって議論の対象とする具体的事例をとらえようとし、そこに関わる人々の表現や行為を人々が生きている文脈の中に位置づけて理解しようとする視点を中心的な考えとする（Flick 1995 : 18）。

質的研究では、観察による視覚データ、インタビューや文書などによる情報から現象があるがままに観察・記述し、個々の現象を数値や統計学的方法に頼らず解釈する立場がとられる（筒井 編 2010 : 28）。全体的な立場としては社会構成主義に立脚し、主観的・解釈主義的アプローチをとり、一般化を求めるのではなく、研究対象である現象の意味を明らかにすることに重点をおく。

社会構成主義の立場に立つ定性的研究は、研究の対象となる人に関わる事象、現実社会における事象は、それが起こる地域や時間、状況といった個別事例的な特殊な条件の影響を強く受けて構成されるものととらえている（Flick 1995 : 4）。議論の対象となる人々の行為や会話で交わされる言葉、生み出されるテキストといった現象は相互関連的に作り出され、それら互いの関係性を通じて現実が構築される。「すなわち、質的研究で研究される現実とは所与の現実ではなくて、様々な「行為者 actor」によって構築された現実なのである」（Flick 1995 : 35）。社会構成主義では人間関係にネットワークの理解に焦点が合わされ、人々の考えや観念、記憶といったものが言語に媒介されて人々の社会的交流から生まれるとされる（McNamee and Gergen1992 : 22-25）。そして、これら人々の行為は他者との対話などの構成作業によって創造された＜現実＞の中でなされ、他者とともに創り上げた＜現実＞が個々の経験に意味とまとまりを付与するのである（McNamee and Gergen1992 : 66）。

様々な事象が構成される過程において、分析の対象となるテキスト、言説が生み出される。この行為者により構成された＜現実＞を研究対象とするのであれば、意味付与のプロセスをとらえて議論することが重要なポイントとなり、対象を記述するための言語が議論における問いの対象となる（Flick 1995 : 40 ; Parker 2004 : 29）。言説分析は、社会的実在があってそれに対して意味が与えられるのではなく、意味が付与されることによって実在が分節されて存在し始めるという立場に立ち、言説によって対象が作り出されるという中心的主張は社会構成主義と親近性を持っている（佐藤・友枝 編 2006 : 245-246）。Burr は社会的相互作用における言語の構築力（Burr 1995 : 64）について言及し、「言語自体が自分自身と世界の経験を構造化する仕方をもたらすのであり、我々の使う概念は、言語に先立つのではなく、言語によって初めて作られるのだ」と述べ、すなわち「言語が思考を決めるのであり、もしも特定の概念を言語で表現する方法がないならば、その概念はその言語を話す人々によっては用いられようもない」と説く（Burr 1995 : 52）。そして、言説と社会的構成の立場に関して次のように論じる。

我々各人にとっては、数多くの言説がいつも働いて我々とのアイデンティティを構

築し、生み出しているのだ。したがって我々のアイデンティティは人の内部から生まれるのではなく社会的領域から生まれるのであり、そこでは人々が言語とその他の記号の海を泳いでいるのだが、その海は、我々という社会的存在の他ならぬ媒体であるために、我々には見えないのである。この意味で言語、記号、それに言説の領域は、人にとって、魚にとっての水のようである（Burr 1995 : 83）。

我々の意識の全ての対象、我々が考えたり話したりする全ての事柄、それらは全て言語を通じて構築され、言説から作り出される。言語の外には、どんな本質的、独立的存在をも存在しない。存在するのは言説だけなのだ（Burr 1995 : 88）。

質的研究では、科学理論や文化的事象、特異的变化プロセスを対象とする耳慣れない専門用語が他の表象と同様に人々の身近で一般的な存在へと変化するプロセスを探究する Moscovici が説く社会的表象理論の考え方も、社会的・文化的に共有された知識や概念が個人の知覚、経験、行為の仕方にいかなる影響を及ぼすのかという問いを考えるにあたって、定性的研究の分析過程に取り入れられている（Flick 1995 : 32 ; Parker 2004 : 167）。

2. 計量テキスト分析

解釈主義的視座に立脚する研究アプローチにおいては、人々の発する言葉、言説に注目して様々なテキスト形式のデータを分析対象とする。こうした数値化されていない文章情報などの質的データを扱うにあたって、本研究では分析対象である自由記述アンケートの回答について計量テキスト分析（樋口 2014）を用いた分析を試みる。計量テキスト分析とは、インタビュー回答などの文字データ（質的データ）を対象として、コンピュータの適切な利用による計量的分析手法を用いてデータを整理、分析、理解する方法であり、単に自由回答やテキストデータを見ただけでは読み取れない潜在的論理を見出す可能性を有する分析手法である。例えば、分析対象の文章データを読んで、そこに書かれていることを文字通り解釈するのではなく、文を構成する語同士の関連性の強さにもとづいて語が使用される意味構造を文法のように取り出して、対象となるデータの理解のための枠組み

として用いるといった操作を実施し、テキストを読むだけではとらえられない潜在的な概念の抽出などの新たな発見を得ることができる（樋口 2014 : 13-15）。

文章データを対象として、その全体的な内容の傾向や主題をつかむ際には、分析する側の主観や恣意的な判断にもとづく解釈を排除することが望ましい。このような前提のもとで本研究において対象文書のデータを比較検証するにあたっては、テキスト型データを計量的に分析する方法として提案された計量テキスト分析の手法を用いた。これは内容分析の考え方を基礎にしながら自然言語処理のような情報処理技術を取り入れた方法である。実際の分析には計量テキスト分析ツールである **KH Coder** を使用した。**KH Coder** は対象の文書を形態素解析し、共起ネットワークによる分析や対応分析などの手法を用いた種々の検討が可能なソフトウェアである。

テキスト型データの分析にコンピュータを利用するにあたり、その分析アプローチには2つの手法がある（樋口 2004a ; 2014 : 17-29）。一つは、分析者が作成した基準にもとづいて言葉や文書を分類するためにコンピュータを用いるアプローチ、**Dictionary-based** アプローチである。もう一つは、頻繁に同じ文書の中に出現する言葉のグループや共通する言葉を多く含む文書のグループを多変量解析によって自動的に発見・分類するためにコンピュータを用いるアプローチ、**Correlational** アプローチである。これらのアプローチはいずれもコンピュータを利用して言葉や文書を分類し、その結果を計量的に分析するという点では似通っているが、分類の基準を分析者が自ら指定するのか、それとも多変量解析に分類を全面的に任せてしまうのかという点で大きく異なっている。そこで両者の考え方をもとに、互いを補うものとして新たな計量的分析アプローチが提案され、**KH Coder** が作製された。分析に際しては、分析する側の主観ではなく機械的・自動的に **KH Coder** が語句を選択抽出する。例えば、自己組織化マップの作成など、逐一、分析に用いる言葉を選んだり、似通った言葉を同じものとして取り扱うよう処置するといった手作業の操作をまじえずにデータ解析を行い、それによって対象のデータの概要を把握することが可能なのが **KH Coder** による計量テキスト分析アプローチにおける重要なポイントとなる。分析者の恣意的・主観的な価値判断が入り込む可能性のある操作を加えずにデータを整理、分析し、その上で、コーディングルールの作成によって研究対象の問題や理論仮説を操作

化する段階を明確に区別し、かつ接合したものとするのが、この分析アプローチである。計量テキスト分析ではデータの要約・提示する手作業を省くことで、分析者の考えや問題意識を前提とするバイアスを排除でき、分析の客観性・信頼性が向上したといえる。

計量テキスト分析事例としては、次のようなものがある。

(1) 樋口 (2004b ; 2014 : 51-63) ではテキストデータの分析方法の検証において、従来から分析対象として用いられる新聞記事の内容分析を試みた。頻出語の抽出や自己組織化マップの作成、コーディング処理によるコード名の抽出・作成といった分析を行い、新聞記事のテキスト分析・コーディング処理においてコンピュータを利用した場合にも従来の手作業による場合と一致した知見が得られること、ならびに、計量的分析によって人の判断では気づきにくいデータの潜在的論理というべきものを取り出せることを確認できたとしている。

(2) 新聞の全国紙 3 紙を分析対象とした内容分析 (樋口 2011 ; 2014 : 65-77) では、マスメディアにより報道される内容と、ある社会組織の構成メンバー間に社会的現実として共有されている意識との間には関連ないし類似性が生じているという仮説のもと、マスメディアが示す記事の内容分析を通じて、人々が思い描く社会的現実の姿を探索できると考えた。報道内容と社会意識の類似性、関係性を検証するために、クラスター分析やコーディング処理による概念枠組みの作成といった計量的方法による実証的な分析を試み、全国紙 3 紙の新聞報道と人々の社会意識との相関性を確認した。また、矢守 (2001) では、本研究において議論の理論的前提とする Moscovici (1984) の社会的表象理論に依拠して、社会における新奇な事象が人々の日常生活に取り込まれる馴致化過程について、新聞や雑誌に掲載された当該事象に関する記事・報道を対象とした内容分析によって検証している。社会的表象が持つ、新奇な事象が一つの社会的現実として構成されて、それが人々に認識される対象に至るまでのプロセスの重要性を指摘して、社会的表象の成立過程においては、事後的な意味付けと解釈作業による回顧的発話形式が重要な意味を持つことを説いている⁴⁾。

(3) アンケート調査での回答者の自由な言葉で答えてもらう自由記述回答に対して、計量テキスト分析を用いることにより統計処理を通じた分析が可能となる。樋口 (2013 ;

2014:79-91)では、インターネット利用に則した情報化イノベーションの側面について、経済的豊かさ、情報化への親近性の態度、学歴といった変数が、ウェブ利用を規定する要因として影響を及ぼすか否かを分析している。インターネット普及期からの変化を見るために2001年と2004年の調査にもとづき分析が行われた。普及初期の段階(2001年)では経済的要因よりも学歴の方がウェブ利用にかかる重要な規定要因であったが、2004年には学歴の効果が低下し、世帯収入の影響が強くなった。そして、性別による態度の違いがウェブ利用量に影響を与えていることが示された。

本研究においては分析対象である大地の芸術祭総括報告書の自由記述アンケートの回答結果について、以下のような分析の手順でKH Coderを使用したテキスト分析を行う。調査対象の文書をKH Coderに読み込み、自動的に語を取り出すための設定としてKWICコンコーダンス(key words in context、ある語がどのような文脈で使用されているか検索、確認する機能)とテキストの語の前処理を行う。そして、語を抽出した中から、抽出語リストならびに特徴語一覧の作成、同じ文書中によく一緒に出現する語同士を線で結んだ共起ネットワークの図示、文書中の出現パターンが似通った語にはどのようなものがあったのかを探る対応分析を実施する。さらにアンケート回答中の語だけではなくコンセプトに焦点をあてて分析するためにコーディング処理を実施し、それぞれのコードごとのアンケート傾向を観察・分析する。また、分析対象として得られたのはどのような語群を構成しているかという全体像をとらえるために、データ中に数多く出現していた語を用いて、出現パターンの似通った語ほど近くに配置されるような言葉のマップ、自己組織化マップを作成する。この自己組織化マップを作成することによって、語と語の関連を探索することができ、分析対象データの概要を把握することが可能となる。この自己組織化マップの結果からは、どのような語が回答中に数多く見られたのかということを確認できると共に、マップ上で近くに配置されている言葉の組み合わせを見ることで、どのような言葉同士が似通った文脈で使われていたかを読み取ることができる。

自己組織化マップの作成と機能をもとに、語の分析・処理について概説する。

自己組織化マップの作成にあたっては、入力したデータをもとにKH Coderが抽出した頻出語(よく出現する語)をもとに解析が行われる。このマッピング処理では、分析者が

特定の語を選んだり、語を配置したり、クラスター分けをするという分析者の主観が伴う作業を一切せずに語のマッピングが行われている。作成した自己組織化マップは4種類の表示画面に切り替えることができる。

「クラスター」：ノードのクラスター化をした場合に選択でき、Ward 法によりクラスター化され、クラスターごとに色分けされる。

「グレースケール」：クラスター化の有無にかかわらず色分けをしていない

「度数」：多くの語が布置されたノードほど濃い色で表示される。

「U-Matrix」：隣接するノードとの距離が離れていればいるほど、水色、白、ピンクの順で色に変化していく。

例えば、「U-Matrix」上にピンク色のノードで構成される線が作られれば、その線を境に語の出現パターンが異なっていることを読み取れる。いわばこの線はクラスターとクラスターを分かち峡谷そのものと言える。それとは逆に、青いノードが集まっていれば、出現パターンの似たノードが集まってクラスターを形成していることを読み取れる。こうした形でクラスター構造を「U-Matrix」から読み取ることもできるし、Ward 法によるクラスター化の結果を「U-Matrix」と付き合わせることで指定したクラスター数が妥当かどうかを検討することもできる。

自己組織化マップ作成にあたっては、クラスタリングを行った。クラスター分析は、データがもつ情報を手がかりにして、距離の近いデータ同士をまとめてクラスター（群、集落）を構成する統計手法である。ノードのクラスター化に際しては、各ノードがもつベクトルを用いて Ward 法にもとづき分類している。多くの場合、一つのクラスターに分類されるのは隣接したノード群となり、クラスターに飛び地が生じることはない。また、各クラスターの色分けは機械的に行われるもので、それぞれの色に意味はない。そして、クラスター化は語が配置されたノード間の単純な距離からではなく、各ノードが持つベクトルを Ward 法で処理・分類することによってクラスター化されているので、ある色で示された特定のクラスター内に配置された語同士の関係性が強いなどといった事柄を示しているものではない。クラスター化の結果については、Ward 法によるクラスタリングと、U-Matrix 表示の結果とを付き合わせて比較して、クラスタリングの結果とクラスター数

が適切であるかを検討、判断することが望ましい。

クラスター化で用いられた Ward 法は最も広く使われている計算アルゴリズムである。例えば、3 つのデータがある場合、Ward 法ではクラスター内の各個体データからクラスターの重心までの距離 (a, b, c) に注目し、その距離の平方和 ($a^2 + b^2 + c^2$) ができるだけ増えないようにして、次に融合させるクラスターを探す。もし、あるクラスターと別の遠い場所にあるクラスターとを無理やりに融合すれば重心位置は大きく移動し、結果的に個体／重心間距離の平方根も大きく増加してしまう。平方を取っていることで少しの距離差でも大きく拡張されて値が敏感に変動してしまうことになる。当該クラスター以外の全てのクラスターと融合した場合の個体／重心間距離平方和をあらかじめ評価し、それが最も小さいクラスターを融合相手として決定される (石川 他 編 2010)。

自己組織化マップの学習理論について述べる。A と B の 2 つの語があったとして、一方が出てくる文書にはもう一方も出てくる傾向がある。さらに、一方が多く出てくる文書には、もう一方も多く出てくる傾向がある。こうした傾向があるかどうかを「ユークリッド距離」という係数で見ている。こうした出現パターンが似ている傾向がある場合、ユークリッド距離は小さな値になる。逆にこうした傾向がなくて語 A と B がそれぞれバラバラに出現する場合にはユークリッド距離は大きな値になる。自己組織化マップでは、このユークリッド距離が近い語ほど、近い場所に配置するように処理されている。したがって、近くにプロットされたり、同一クラスターに分類された語は、ユークリッド距離が相対的に小さいことが読み取れる。自己組織化マップの場合、直接的に読み取れるのは、このユークリッド距離の大小だけである。このユークリッド距離は、共起ネットワークや特徴語の抽出の際に用いた Jaccard 係数のように共起にもとづく類似性の尺度の一種としてとらえることができる。ただ Jaccard 係数は共起しているかどうかしか見ておらず、語 A と B が同じ文書に出現しているかどうかしか見ていない。それに対してユークリッド距離は、文書の中に多く出現しているかどうかまで見る。このように自己組織化マップでは、共起の程度を測るためにユークリッド距離が使用されているが、この場合、1000 語あたりの出現数に直した後、語ごとの標準化を行っている。出現数が全体に多いか少ないかで類似性を見るのではなく、出現パターン（共起）で類似性を見ようという処理をしている。一

方で共起ネットワークでは共起の度を測るための係数として Jaccard 係数を用いているが、この係数は語があるかないか（1 か 0 か）だけを見る係数であり、標準化はしていない。

KH Coder の自己組織化マップ作成にあたっては、あらかじめ「文書－抽出語」表、「抽出度－文脈ベクトル」表を利用して、計算を行っている（KH Coder ウェブサイト）。

「文書－抽出語」表コマンドを用いると、各文書に、それぞれの語が何度出現していたのかということを集計表の形式で出力できる（表 3）。表中の h1～h5 は分析データのタグ番号、dan は段落番号、id は文書の通し番号、length_c は文書の長さを全角文字数で表したもの、length_w は文書の長さを語数で表したものである。この「文書－抽出語」表は、共起ネットワークや自己組織化マップなどの各種可視化分析で共通に利用されている。

表 3 「文書－抽出語」表コマンドによる出力データ

h1	h2	h3	h4	h5	dan	id	length_c	length_w	芸術	作品	地域	集落	お客様	大地	地元
1	1	1	1	0	0	1	1	137	99	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	2	2	111	69	0	0	0	0	0	1
1	1	1	1	0	0	3	3	29	19	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	4	4	216.5	137	0	1	2	0	0	1
1	1	1	1	0	0	5	5	121	81	1	1	1	0	0	0
1	1	1	1	0	0	6	6	76	47	0	1	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	7	7	67	41	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	8	8	115	77	2	3	2	0	0	0
1	1	1	1	0	0	9	9	86	49	2	0	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	10	10	132	81	0	1	1	0	0	0
1	1	1	1	0	0	11	11	46.5	31	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	12	12	49	31	0	2	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	13	13	52	30	0	0	1	0	0	0
1	1	1	1	0	0	14	14	102	65	0	0	0	0	0	1
1	1	1	1	0	0	15	15	55	37	1	0	0	1	0	0
1	1	1	1	0	0	16	16	81	54	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	17	17	24	17	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	0	0	18	18	135	93	0	0	0	1	0	0
1	1	1	1	0	0	19	19	86	56	0	2	0	1	0	0
1	1	1	1	0	0	20	20	32	21	0	1	1	0	0	0
1	1	1	1	0	0	21	21	26	19	1	0	0	1	0	0
1	1	1	1	0	0	22	22	45	27	0	1	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	1	23	59	38	1	0	0	1	0	0
1	2	1	1	0	0	2	24	22	18	0	0	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	3	25	58	36	0	1	1	0	0	0
1	2	1	1	0	0	4	26	60	42	1	1	0	0	0	2
1	2	1	1	0	0	5	27	56	26	0	0	1	0	0	0
1	2	1	1	0	0	6	28	142	92	0	0	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	7	29	27	20	0	1	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	8	30	46	27	0	1	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	9	31	62	38	0	1	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	10	32	35	23	0	0	1	0	0	0
1	2	1	1	0	0	11	33	12	8	0	1	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	12	34	24	14	0	0	1	0	0	0
1	2	1	1	0	0	13	35	34	22	0	0	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	14	36	68.5	43	0	0	0	1	0	0
1	2	1	1	0	0	15	37	33	22	0	0	0	1	0	0
1	2	1	1	0	0	16	38	75	45	0	0	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	17	39	22	11	0	0	0	0	0	0
1	2	1	1	0	0	18	40	207.5	134	3	1	2	2	0	1

「抽出度－文脈ベクトル」表コマンドは、抽出語のクラスタリングや布置（マッピング）を行うのに特に適した形のデータを作成、出力するためのコマンドである。ここで文脈ベ

クトルとは、自然科学の言語処理の分野においては、語の意味を比較するときにある語の周り（文脈）に出現した語のベクトル（文脈ベクトル）の類似度を計算する。これは「ある単語の意味は、その単語と共に出現している単語群によって特徴づけられる」という分布仮説の考え方にもとづくものであり、単語の意味をベクトルで表現する。文脈ベクトルが似ていれば、似たような意味、似たような状況で使われる語が多いということが言えるからである。例えば、単語の意味を共起語の頻度にもとづくベクトルとして表現する手法が挙げられる。これにより単語の意味的な類似性の計算を、ベクトル間の類似度計算に帰着させることが可能となる（石渡 他 2016）。

表 4 「抽出度－文脈ベクトル」表コマンドによる出力データ

抽出語	CW: 芸術	CW: 作品	CW: 地域	CW: 集落	CW: お客	CW: 大地	CW: 地元	CW: 作家	CW: 効果	CW: 人達	CW: 期間	CW: イベント	CW: 町内	CW: 市内	CW: 場所
芸術(127)	1.067227	0.201681	0.142857	0.084034	0.07563	0.369748	0.02521	0.008403	0.058824	0.042017	0.02521	0.016807	0.042017	0.033613	0.02521
作品(122)	0.216981	1.150943	0.113208	0.084906	0.103774	0.066038	0.028302	0.056604	0.009434	0.028302	0.028302	0.028302	0.056604	0.04717	0.084906
地域(60)	0.298246	0.22807	1.052632	0.070175	0	0.087719	0.052632	0.105263	0.052632	0.052632	0.017544	0.035088	0	0	0
集落(53)	0.25	0.1875	0.083333	1.104167	0	0.104167	0	0.125	0	0.083333	0.020833	0	0.1875	0	0.020833
お客様(46)	0.209302	0.255814	0	0	1.089767	0.069767	0	0	0	0	0.116279	0	0	0	0.069767
大地(45)	1.044444	0.177778	0.133333	0.111111	0.066667	1	0.022222	0.022222	0.022222	0.044444	0	0.022222	0.044444	0	0
地元(34)	0.090909	0.121212	0.090909	0	0	0.030303	1.030303	0.030303	0.030303	0.090909	0.030303	0.030303	0	0	0.030303
作家(24)	0.041667	0.291667	0.25	0.25	0	0.041667	0.041667	1	0	0.041667	0.041667	0	0.041667	0	0.041667
効果(23)	0.304348	0.043478	0.130435	0	0	0.043478	0.043478	0	1	0	0	0	0	0	0
人達(23)	0.285714	0.095238	0.142857	0.190476	0	0.047619	0.142857	0.047619	0	1.095238	0	0	0	0	0
期間(19)	0.157895	0.157895	0.052632	0.052632	0.368421	0	0.052632	0.052632	0	0	1	0	0	0	0
イベント(11)	0.125	0.1875	0.125	0	0	0.0625	0.0625	0	0	0	0	1	0	0	0
市内(15)	0.357143	0.357143	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.071429	0.071429
事業(15)	0.428571	0.142857	0.285714	0.142857	0.142857	0.214286	0	0	0	0.142857	0	0	0.071429	0	0.142857
場所(15)	0.230769	0.538462	0	0.076923	0.230769	0	0.076923	0.076923	0	0	0	0	0	0.076923	1.153846
町内(15)	0.333333	0.4	0	0.6	0	0.133333	0	0.066667	0	0	0	0	1	0	0
バス(13)	0.083333	0.333333	0.083333	0	0.333333	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高齢(12)	0.166667	0.083333	0.083333	0.833333	0	0	0	0.166667	0	0.083333	0	0	0	0	0
方々(12)	0.25	0.083333	0	0.166667	0	0	0.083333	0	0	0.083333	0	0	0	0	0
地区(10)	0.222222	0.555556	0.111111	0.111111	0.111111	0	0.111111	0	0	0	0	0	0	0	0
マップ(10)	0.333333	0.222222	0.111111	0	0	0.111111	0	0	0	0	0	0	0	0.333333	0.111111
住民(10)	0.1	0.2	0.4	0	0	0	0.3	0.1	0.1	0	0	0	0	0	0
ご苦労(10)	0.1	0	0	0	0	0.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
経済(10)	0.3	0	0	0.1	0	0	0	0	0.9	0	0	0	0	0	0
市街地(10)	0.1	0.8	0	0	0.1	0.1	0	0	0	0	0	0.2	0	0	0
アート(10)	0	0.111111	0	0	0	0	0	0	0.222222	0	0	0	0	0.111111	0
開催(39)	0.194444	0.055556	0.027778	0.027778	0.111111	0.083333	0	0	0.027778	0	0.166667	0	0.027778	0	0
継続(34)	0.264706	0	0.117647	0.088235	0	0.058824	0	0	0.088235	0	0	0.029412	0.029412	0.029412	0.058824
お祭り(26)	0.038462	0.153846	0	0.038462	0	0.038462	0.038462	0.076923	0	0	0.038462	0.076923	0	0	0
協力(25)	0.136364	0.136364	0.136364	0.227273	0	0	0.136364	0.136364	0.045455	0.136364	0	0.045455	0	0	0
設置(20)	0.35	0.75	0.35	0.4	0	0.1	0	0	0.05	0.15	0	0	0.25	0	0
案内(19)	0.055556	0.333333	0	0	0.222222	0	0	0	0	0	0	0	0	0.111111	0.055556
参加(19)	0.368421	0.052632	0.210526	0.315789	0	0.052632	0.315789	0.052632	0	0.105263	0	0	0.052632	0.052632	0.052632
関係(18)	0.411765	0.117647	0.117647	0.117647	0	0.117647	0	0.058824	0.058824	0	0	0	0.058824	0	0
交流(17)	0.285714	0.214286	0.357143	0.428571	0	0.142857	0	0.071429	0.071429	0.285714	0	0	0	0	0
説明(16)	0.076923	0.307692	0	0	0.076923	0.076923	0.153846	0	0	0	0.076923	0	0	0	0.076923
駐車(14)	0	0.083333	0.166667	0.25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
意見(13)	0.230769	0.384615	0	0.076923	0.384615	0.076923	0	0	0	0	0	0	0	0	0.153846
観光(13)	0.333333	0.083333	0.25	0	0	0.25	0	0	0	0.083333	0	0.083333	0	0	0
展示(11)	0.181818	0.545455	0.181818	0	0	0	0.090909	0	0	0	0	0.181818	0	0.090909	0.272727

データ中に数多く出現していた言葉を使って、出現パターンの似通った言葉ほど近くに布置されるような言葉のマップ、自己組織化マップを作成するにあたっては、抽出された語の布置とクラスタリングを行うために、それぞれの語について、それらが使われている文脈を表すようなベクトル C を作成した。「抽出度－文脈ベクトル」表で出力されるデー

タ（表 4）は、クラスタリングなどを行う n 個の抽出語それぞれに関して、その語が使われている文脈を表すようなベクトルを作成したものである。

ここで、語 i が用いられる文脈を表すベクトルを \vec{c}_i とすると、出力されるデータは $\vec{c}_1, \vec{c}_2, \dots, \vec{c}_i, \dots, \vec{c}_n$ を行とする n 行の行列となる。このベクトルの作成には、語 $1 \sim$ 語 m までの m 個の抽出語を用いることができる。語 i が出現している文における語 j の平均出現数を e_j とすると、文単位で計算した語 i の「文脈ベクトル」 \vec{b}_i は $(e_1, e_2, \dots, e_j, \dots, e_m)$ で表される。同様に段落単位で計算したものを \vec{d}_i 、 $h_1 \sim h_3$ 単位で計算したものを $\vec{h}_{i1} \sim \vec{h}_{i3}$ とすれば、 \vec{c}_i は次のように表わされる。このとき $\alpha_1 \sim \alpha_5$ は定数であり、自由な値を指定することができる。

$$\vec{c}_i = \alpha_1 \vec{b}_i + \alpha_2 \vec{d}_i + \alpha_3 \vec{h}_{i1} + \alpha_4 \vec{h}_{i2} + \alpha_5 \vec{h}_{i3}$$

以上より、出力されるデータは n 行 \times m 列の行列となり、ここで言う「抽出語が用いられる文脈を表すようなベクトル」とは、抽出語が他にどんな語とともに使われているのかを表すベクトルとなる。

このコマンドを用いずに「文書－抽出語」表の形のデータをそのまま用いても抽出語のクラスタリングや布置は行うことができる。それに対して「文脈ベクトル」を用いる利点として以下の二つが挙げられる。第一に、あまりに多くの語を用いてクラスタリングなどを実施すると、語の視認が難しくなるため、一般的には利用できる語の数を制限して行われる。ここで文脈ベクトルを用いれば、クラスタリングなどを行う n 個とは別に m 個の語を「文脈」の表現に用いることができる。よってクラスタリングを行えるのは頻出していた語（ n 語）であっても、その計算過程では比較的出現数の少ない語（ m 語）の情報も利用できる。一般に出現数が少ない語ほど特殊な語、特徴的な語であることが多いので、そういった語の出現パターン情報を利用できるのは重要な利点となる。第二に、定数 α を設定することで重み付けの設定をすることができる。例えば、分析対象の中である語が用いられる場合を 1 倍（ $\alpha=1$ ）とすれば、同じ段落の中で用いられる場合は 2 倍、同じ文の中では 4 倍という形で、それらの語が強い関連を持っているとみなすという指定が可能となる。

第4節 機能主義パラダイムに依拠する量的研究

1. 定量的研究アプローチ

量的研究は客観的・機能主義的パラダイムのもとに成り立ち、実証的アプローチを採る。数値で表される量的変数を取り扱い、多数の事例における変数間の因果関係、事例間のパターンの関連様式を統計学的方法で明らかにすることを目指し、多くの場合、定量的研究で分析対象となるのは、母集団から無作為にサンプリングされた標本で、統計学的手法を用いた変数間の有意な関係性を検定する分析によって現実の社会での課題を評価する仮説の検証⁵⁾が試みられる（田村 2006：32-40；筒井 編 2010：28）。ここで仮説検証とは、現実の世界でのある事象の結果によって、予測が確証されるかの評価する過程を指す（Stone 1978：12）。

定量的研究における研究手法としては、質問紙調査法、各種インタビューの面接法、行動観察法などがある（高橋、他 編 1998：149-165；Stone 1978：73-92）。これらの方法によりデータ収集を行い、SPSS といった統計分析ソフトウェアを用いた実験データの解析を実施して多くの事例における変数同士の有意な関係性を検証する。

定量的研究プロセスのモデルとして、田村（2006：46-47）は、研究課題の設定、構成概念にもとづく変数の設定、変数データの収集、変数間の関連性を統計的に分析、変数間の関連パターンの意味解釈の各段階を挙げ、Stone（1978：19-40）は、調査問題の明確化、仮説の構築、研究デザインの定式化、変数の観察と関係性の検証、調査の結論の考察の各過程を提示する。これらの研究プロセスを通じて現実社会の現象の観察、説明、予測、検証から成る科学的・客観的方法が構成される。

Stone は、社会科学分野における研究を実施する中で次のような問いに直面すると指摘する（Stone 1978：187）。それは、何が問題となるのか、どのような仮説を検証すべきか、関連する変数をいかに操作化するか、どのような方法で測定値の信頼性と妥当性を評価するか、データ収集のサンプリングをどのような形で実施するか、実験室実験や事例研究などの調査戦略として何を採用するか、そして、どのように倫理的・法律的問題をクリアするか、である。上述の研究プロセスを通じたアプローチによって Stone が指摘したこれらの問いに対峙することが求められる。

2. 実証研究手法

定量的研究は、機能主義的、論理実証主義的な立場に立つ研究アプローチをとる。定量的研究のアプローチでは、構成要素間の規則性や因果関係性を探究することによって、現実世界で起こる事象を説明したり、予測したりしようとする特性をもっている。定量的研究は、このような立場をとり、組織現象を客観的に法則定立的にとらえようとする。定量的研究において、研究課題の多くは変数間の因果関係を推論することによって解決することができる。それは、原因が結果を引き起こすという因果律に依拠するもので、因果関係を明らかにするためには、原因と結果の間に介在する一連の因果メカニズムを明らかにしなければならないと考える。定量的研究の特徴は、多数の分析単位にわたる変数間の関連の一般的パターンを発見したり、検証したりすることにある。検証方法には重回帰分析、因子分析、共分散構造分析などがある⁶⁾。

重回帰分析とは、1つの被説明変数（従属変数）を複数の説明変数（独立変数）から予測・説明したいときに用いる統計手法である。重回帰分析は、複数の変数間の因果関係を推定する方法であり、原因と仮定される事柄が複数ある場合、それらの結果に対する影響力を比較検討するのに適している。2重クロス集計や単回帰分析といった2変数間の分析から分かるのは様々な変数の影響が含まれた粗効果であるのに対して、重回帰分析では他の変数でコントロール後の当該変数の純効果が分かる。重回帰分析では、一つの被説明変数Yに対して複数の説明変数Xを設定し、他のXの効果を一定とした場合の、あるXのYに対する効果を解明する。また、複数のXのうちどれが被説明変数に対して大きな効果を持っているかを明らかにする。重回帰分析の目的は、他の説明変数の効果を一定とした場合の、ある説明変数の被説明変数に対する影響力や規定力といった効果を解明することである。

因子分析とは、測定可能な項目（観測変数という）を使って、直接には測定不可能な概念（潜在変数とも因子ともいう）を推定する分析方法である。因子分析は複数の変数の関係性をもとにした構造を探るために用いられる。例えば、学力テスト結果の因子分析によって文系能力と理系能力という2つの因子が見い出された場合には、これら2つの潜在因

子が、測定変数である各教科のテスト得点に影響を及ぼすことを仮定している（小塩 2011：116-117）。テスト教科のうち、数学の科目を取り上げてみると、数学には理系的な能力が与える影響の方が大きいであろうが、文系的な能力も数学の得点に影響を及ぼすものと想定される。この理系能力と文系能力は、いずれの科目に対しても影響を及ぼす因子として共通因子と呼ばれる。一方で、数学独自の困難さなどに起因する、数学という特定の教科だけに影響を及ぼす因子も想定されるが、このような因子は独自因子と称される。ここで、一般に因子というときには共通因子のことを指し、因子分析は共通因子を創り出すために行われ、我々が観察可能な変数データに関係している複数の潜在的な共通因子を探ることが因子分析の目的となる。因子分析は、（1）抽出する因子の数の決定、（2）因子の抽出方法の決定、（3）因子の軸の回転法の決定、（4）因子がどんな性質を持つかを分析結果から解釈して命名、という流れで進められる⁷⁾。データをうまく解釈するためには、何度も因子分析を行ってみる必要がある。2回目以降の因子分析では、バリマックス回転など直交回転もしくはプロマックス回転など斜交回転といった軸の回転を行う。想定する下位尺度間が相互に独立している場合、つまり、互いに相関を仮定しない場合は直交回転を、想定する下位尺度間に相関を仮定する場合は斜交回転を実施する。何度も試行錯誤しながら因子分析を繰り返し、最終的な因子分析結果を出力する。そして、結果が出たら「因子の解釈」をする。ここでの因子の解釈とは、適切な理由、根拠にもとづき、他者が項目を見て納得できる名前に「因子を命名する」ことである。このような一連のプロセスにより、ある質問項目への回答といった観測された変数が、どのような潜在的因子から影響を受けているかを探っていく。

因子分析は測定不可能な潜在変数を因子として抽出し、重回帰分析は変数間の因果関係を検討する分析方法である。この二つの分析方法を組み合わせれば、潜在変数間の因果関係について検討することが可能になる。つまり、因子分析で得られた因子を新たな変数とし、それらの因果関係を重回帰分析で検討するのである。これらの分析手順を一括して行うのが共分散構造分析である。共分散構造分析で扱うのは、ある変数が別の変数に影響を与えることやある観測変数がある潜在変数から影響を受けること、つまり、因果関係のモデル化を取り扱う。共分散構造分析は、直接観測できない潜在変数を用いて、観

測変数と潜在変数との間の因果関係を自由にモデル化することが可能な解析手法である。共分散構造分析を行うにあたっては、Amosなどの統計ソフトウェアが必要となる。Amosではパス解析によって視覚的に分析することができる。パス解析は、変数の因果関係や相互関係を矢印で結んだパス図により表現される。パス図という言葉が示すように、複数の変数による一連の因果図式を想定して変数間の因果関係の影響力の強さを因果経路ごとに検討される。パス図において原因となる変数が結果となる変数を次々に規定していく様子がモデル化され、それぞれの因果関係にもとづく経路による規定力の違いが分析され、矢印で結ばれた経路ごとの因果的効果が明らかにされる。

第5節 まとめ

社会科学においては機能主義と解釈主義という2つの対象的な認識論的パラダイムが対峙しており、同様に経営学における組織論においても定量的かつ実証的アプローチを含む機能主義的な研究パラダイムと、定性的・質的アプローチを含む解釈主義的な研究パラダイムがあり、これらについて概観した。

古典的管理論や近代組織論、コンティンジェンシー理論に代表される組織論は、客観主義的、論理実証主義的、機能主義的な立場に立つ組織観であった。それは、所与の存在としての組織を前提とするものであり、「人－組織」、「社会－組織」で表される二元論の考え方に立脚した組織論といえる。一方で、社会や環境、意味、知識などの現実客観的なものとして存在するのではなく、人々の相互行為を通じた社会的な構成プロセスによって生み出されるとする考え方がある。この立場に立って現実が社会的に構成されるとすれば、社会体系の一つである組織も同様に社会的に構成されるということができる。この視点で事象の認識や解釈、組織現象の分析に取り組むにあたっては、これまでと異なる研究視座が必要になることから、解釈主義的な思考にもとづくアプローチが有効ととらえられている。このような解釈主義的な思考は、自然科学や社会科学で広く用いられる客観主義的な機能主義的アプローチにとって代わるものではない。実証的に研究しなければ分からないことがあることは自明である。しかし、それらがどのような前提のもとに成り立ち、どのような意味や動機によって営まれているのかということ考察するのが解釈主義的

な思考にもとづくアプローチである。組織をどのような存在としてとらえるのかといった組織観の変化によって客観的な存在としての組織への疑問が生じてくる。そこでは、多様な主観や価値観をもった人々の存在を前提として、人は組織の存在をどのように認識するのか、組織がどう形成されるのか、組織メンバーはどのような取り組みによって相互に関連づけられるのか、という課題が浮かび上がる。このような課題に取り組むにあたっては、社会的現実を構成する様々な意味解釈の過程を議論し、組織メンバーによる行為や言語によって創出された「共有された意味世界」のあり方を検証する考え方にもとづくアプローチの有効性が増している。

これまでの客観的な存在としての組織をいかに合理的かつ効率的に機能させるかといった考え方もとて組織経営に対峙してきた機能主義的なアプローチに対して、主観的な存在としての組織観に立脚し、人が組織や組織内での種々の事象をどのようにとらえ、認識し、理解し、解釈して、自らの意識や考え、行動に結びつけるのかといった視点のもとでは、これまでと異なるアプローチが必要になる。こうした組織自体の存在の見方や、組織で起こる事象のとらえ方といった組織観の変化に伴い、客観主義的性格をもつ機能主義的アプローチでとらえることができない事柄を認識するために、経営学組織論分野における解釈主義的なアプローチの重要性が指摘できる。

客観主義に立脚した機能主義アプローチであっても、主観主義の立場に立った解釈主義アプローチであっても、組織現象をとらえ、理解、説明するにあたっては、ある特定の視点に限定された組織の姿を示すにとどまり、限界を持つことは否めない。本研究で用いる計量テキスト分析についても、自由回答データの計量テキスト分析と通常の選択型質問紙調査の分析との併用という研究アプローチ(樋口 2014: 79)の可能性も提起されており、両者を組み合わせることによって相乗的に知見が広がり、大きな利用可能性を生じうることが指摘できる。諸現象に対する多視点的な実証方法論にもとづき複眼的な分析アプローチを用いることによって検証を行うことが求められる(Flick 1995: 327)。

第1章の注

- 1) 岸田・田中（2009）及び渡辺（2007）の組織モデルの分類は Scott（1998）に依拠するものである。
- 2) Roethlisberger and Dickson（1939）については稲垣（2002）の訳に従った。
- 3) 組織論のメタファーとパラダイムに関する議論は坂下（2002）による。
- 4) 矢守（2009）では、社会構成主義の視点に立ってリアリティの共同構築という考え方を提示し、災害時の行動分析を対象とした検証から、緊急異常事態に接した人々の事象の事前・事後を通して展開される一連の言説のやり取りを伴う回顧的な意味付け・言語化の過程（sense-making プロセス）が人々の意識形成に大きく関与することを議論している。
- 5) 研究アプローチとしては仮説検証型と仮説開発型が挙げられるが、仮説を開発する、理論を構築する方法ということに関しては Hage（1972）に詳しい。Hage は理論構築をするための諸方法として理論概念と理論言明（仮説）の発見、それぞれの定義と連結の特定化手法、概念と定義の秩序づけ、言名と連結の秩序づけの各段階で構成される理論づくりを提唱した。
- 6) これらに関する記述は、村瀬、他 編（2007：161-271）、酒井（2003：264-274）、小塩（2011：104-177；2012：18-20）にもとづく。
- 7) 本研究では、因子の抽出方法は最尤法を、軸の回転法はプロマックス回転を用いた。

第2章 Weick 組織化論の概説と実証的研究アプローチへの展開

本研究での調査対象事例である大地の芸術祭について、複雑系や関係性、創発、自己組織化、変化、相互作用といったキーワードで表されるソーシャル・イノベーション(Westley et al. 2006 : 152-186) 的な地域活性化施策としてとらえ、このような特性を持つ現象を調査・分析するにあたっては、ダイナミックな動態的視座のもと、過程や変化、相互作用に着目した視座で組織現象を読み解き、理解しようとする組織化論を始原とした理論的検証を進めることとした。

本章では理論研究編として、本論文において Weick 組織化論に依拠した議論を進めるにあたって Weick の主著 (Weick 1979 ; 1995) にもとづき組織化論の論点を精査、検討し、特に組織化の重要構成要素であるイナクトメントに焦点を当てた理論深耕を進め、現実の社会現象を対象とした実証研究に向けた課題を確認する。さらに、Weick 組織化論の理論的背景として指摘できる社会構成主義についての論考を実施する。さらに、組織化論の背景として社会構成主義の考え方があることを指摘したが、社会構成主義は個別的な事柄を対象とする個別理論ではなく、従来の主客 2 項対立図式で説明される認識論に抜本的な改定を迫るグランドセオリー的な特性が強いことから、現実の社会現象をとらえるにあたっては、社会構成主義と親近性があり、マクロ的視座を持つ社会的表象理論に着目した。組織化が持つミクロ的な視点からマクロ的・社会的視点への理論展開を図る上で有効な示唆を提示する社会的表象理論についての検証を行い、実証的な研究アプローチへの道筋を探ることとする。Weick 組織化論と社会構成主義、社会的表象理論との間の理論的関連性からミクロからマクロへの展開が図られ、実証的研究へと結びつく可能性が示されるものと思われる。

第1節 Weick の組織観と組織化

組織研究者 Weick が議論の対象とする組織論の特性とは、ダイナミックな動態的視点を伴う組織化について論じることである。従来の組織論が対象とした組織機構や管理システムといった固定的・構造的なものは、組織化プロセスの一断面を切り取ったスナップショットに過ぎないととらえている。Weick にとって組織の本質とは過程であり、変化であ

り、動きのある流れである。それは一定の流れではなく、絶えず速度も変化し、流れの地点も移りゆくイメージとしてとらえることが重要となる。組織現象の観察と理解においては、名詞で表される組織（organization）としてとらえるのではなく、ダイナミズムを伴う動名詞で表される組織化（organizing）の過程としてみなければならない、というのが Weick の主張である。

1. 組織化モデルのプロセスと構成要素

Weick が論じる組織は、名詞としての組織ではなく動名詞の組織化に対して焦点が合わされており、固定的で硬直したニュアンスのある「組織」に代わり、過程志向的な行動に着目した「組織化」過程として組織現象をとらえようとする（Weick 1979）。

組織について語るとき、名詞を沢山使いたくなる。しかし、そうした名詞は記述すべき状況にあらぬ安定的イメージを与えてしまうようだ。組織を理解しようとするなら、名詞を根絶すべきだと言いたい。組織の研究者が名詞の利用を控え、惜しみなく動詞や動名詞を使用するようになれば、過程というものにもっと注意が払われ、それをどう理解しどう管理したらよいか、いっそう明らかにされるであろう（Weick 1979 : 58）。

その背景として、組織とは絶えず何かしらの遂行過程を繰り返して、崩壊するのをどうにか抑えて常に再建を余儀なくされている存在という Weick がもつ組織イメージがある。過程や動き、変化、流れなどは動詞によってしか語ることができない。これら流れや過程を構成するものは、相互に関与する個々人の利害であり活動であり、これら利害や活動は絶えず変化しているという事実によって過程志向的なアプローチが必要となることから、組織化にとって過程や変化にもとづく関係性や相互依存が重要な視座となる。この流れや変化こそ組織の管理者が管理する本質であると考えている（Weick 1979 : 55-58）。変化や流れのなかで人が事象を取り込み、何らかの意味形成を行う場合、それは各個人によって異なることが容易に想像できる（Weick 1979 : 192）。人々の意味付けは多義性を含

むものであるが、この多義性削減のための過程は対人的なものであり、多義的なインプットに対する意味解釈を共同して話し合い、絞り込むことによって互いに合意の得た有意味な状況をつくり上げるのである（Weick 1979 : 184-185）。Weick が説く組織観の特性として、行為が先行して行われ、その行為に伴う意味付け、解釈の過程は後から行われることが挙げられる。行為者の営みの変化や違いを含む事象を取り込み、組織にとって有意味な状況を新たに形成する。Weick の次のような指摘から、これら目的先行性の否定、行為先行性、回顧的意味形成といった特性が示唆される。

まず最初に組織化が行われ、その後すなわち組織化が終了した後に組織化の理由が明らかになるといった印象を受ける。それはまるで、人は行動してから自分のしたこととは何かを結果的に規定することができるというのに似ている。行為が目標に先行するというこうした順序は、組織の営みをより正確に描写するものであろう（Weick 1979 : 25）。

まず最初に、ある構造がいかに関形成されるのか（すなわち、手段）についての共有の考えの収斂があり、次いで、人びとは一連の相互連結行動をくり返す。すなわち、集合構造を形成するのである。彼らの行動の範囲が狭まるのは、集団が形成されてからではなく、集団が形成される前なのである。（中略）人びとは最初手段について収斂するのであって目的についてではない（Weick 1979 : 117）。

行為は思考に先行する。（中略）あなたは最初に何かを行ったり言ったりしなければならぬ。その後、あなたは自分が何を考えていたか、決定したかあるいは行ったかを見出すことができるのであるから（Weick 1979 : 250）。

Weick は、これらの考え方をもとに自然淘汰理論に示される過程に似た組織化過程を提起した¹⁾。組織における変化や過程に注目した Weick が提示した組織化は、意識的な相互連結行動によって多義性を削減するのに妥当と皆が思う文法（Weick 1979 : 4）と定義

される。組織においては、現在行われている相互依存的行為を意味ある結果につながるような連鎖に組み立てることが重要であるとして、組織化とは、行為者に理解できる社会的過程を形成するためにいかに種々の相互連結行動を組み立てるかに関するルールや習慣の体系であり、人々の経験を要約した意味ある構造である因果マップを作り上げるためのルールであるとして、改めて組織化とは文法のようなものであると述べている。この文法とは、一人ではできないことをやらせるレシピ（処方箋）であり、何が行われたかを解釈するレシピである。組織化の実態である文法に安定した要素を供給する素材は、連結行動であり、このサイクルをなしている連結は二重相互作用と呼ばれる（Weick 1979 : 4-6）。

組織化は過程によって行われ、その分析単位としては二重相互作用が用いられる（Weick 1979 : 115）。1人から2人への変化によって社会的行動の基本的単位である2者関係が生じる。この2者関係においては相互依存や互惠的行動といった他者との折り合いの必要性がある状況生まれる。組織化の分析単位である二重相互作用のほとんどは2者関係からスタートする（Weick 1979 : 308）。人々は常に変化を伴う現在進行形の流れのなかに身を置いており、いかなる組織においても主となるのは安定ではなく変化となる。この変化する一連の事象において完結しやすい行動は、他者にとって価値のある行動であり、2者間において双方に利得となる相互関係の構築につながる行動である。こうした二重相互行動による安定した集合が確立する作用が組織化の要素となる（Weick 1979 : 152）。このように Weick が対象とする組織は、組織化の分析単位である二重相互作用などから分かるとおり、ミクロな視点を基盤としている。いわば組織化は小さな組織における事象や状況を対象としたモデルといえる。

組織化モデルはかなり小規模な集団をベースにしている。なぜそうなのかの背景には次のようなことがある：社会心理学の観点からは、組織で働くほとんどの人にとって規模は重要なリアリティーなどではないようだ。大きな組織の従業員にとって、組織とは行為者ではなく環境のようだ（Weick 1979 : 307）。

Weick は、組織が働きかける基本的な素材としてあいまい、不確実、多義的な情報イン

プットを挙げている（Weick 1979 : 8-9）。組織化の定義の中に多義性という言葉が含まれているように、Weick は多義という特性を重視している。多義とは、ある事象が複数の意味を有することであり、組織化を通じたプロセスによって多義性の削減を進めて人々にとって行為するのに十分な程度の確信を確保しようとする。

そこには思いつく多くの可能性や結果がある。組織化によって、この可能性の範囲が狭められ、“思いつく” の数が少なくなる。組織化という活動は、一定レベルの確信を確保することに向けられている。組織は、多義的な情報を、組織が機能し組織にとって不都合でない程度の非多義性へと変換しようとしている（Weick 1979 : 8）。

組織における多義性の処理は淘汰過程に依存しており、インプットされた多義的な情報は、淘汰過程で変換されて有意義になる。多義性は、無秩序で非決定的で混沌としたものではなく、いかようにもとりうる多種多様な変数に種々の関係があてがわれるようなイメージである。淘汰過程において、そうした多義性にいくつかの意味があてがわれ、淘汰される。試される多くの可能な意味が、使えないとか、現在のデータと矛盾するという理由でふるい落とされるということで淘汰なのである。多義的なことを明確にする一つの方法は、文脈の中に置くことである。あいまいな単語が文章の中に置かれると明確になると同様に、多義的な事象も全体状況の中に入れられ、周囲の事柄を考慮すると意味が明らかになり、その多義性が削減される。より多くの事柄を考慮するためには、多義性を観察する時間を長くとり、事象の連鎖を観察すればよいのである（Weick 1979 : 220-236）。

過程というイメージのもとで組織化を定義すると、組織における相互作用という行為を順序よく結びつけるための要素の集合体となる（Weick 1979 : 58）。これらの営みは生物学における自然淘汰理論（進化論）に類似しており、Weick が提示した組織化は、生態学的変化、イナクトメント、淘汰、保持の 4 つの要素から構成される。

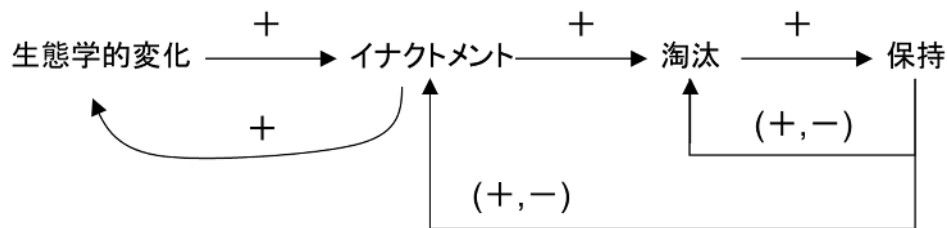


図 1 組織化の過程(Weick 1979:172 より作成)

(1) 生態学的変化 (Weick 1979 : 169)

人が関わる経験の流れの中においては、よく変化とか違いが生ずるが、その変化や違いは組織化において多義性を削減したり、その違いの軽重を問う機会を提供するものとしてとらえられる。通常、人はスムーズに運んでいる事柄には気づかないものであり、注意が呼び起こされるのは変化が生じた時なのである。生態学的変化は、こうした意味形成の素材、いわばこの後のイナクトメント以後の過程で構築されるイナクトしうる環境、意味付けされる素材を提供するプロセスである。

(2) イナクトメント (Weick 1979 : 169-170)

組織化においてイナクトメントは自然淘汰における変異にあたるものであるが、ここで、進化論における変異と呼ばずにイナクトメントと称しているのは、組織メンバーが環境を創造する上で果たしている積極的な役割をこの言葉がとらえているからである。例えば、経験の流れの中に違いが生じると、行為者はより深い注意を払うべく変化を隔離するような行為をするが、この囲い込みという行為がイナクトメントの一つの形態である。このようにイナクトメントは生態学的変化と密接な関係がある。そして、イナクトメントは有機体が外的環境と直接やりとりする唯一の過程であるが、同時にイナクトメントは、その後の淘汰過程で処理される多義的な素材を提供する行為でもある。このようにイナクトメントは環境と接して情報や変化を取り込む性格を有しており、相互行為体系を構築する契機となる行為である。

(3) 淘汰 (Weick 1979 : 170-171)

この淘汰では個人や行動の淘汰というよりも、多義性を削減して有意味な解釈を執り行

う過程である。淘汰は、イナクトされた多義的なディスプレイに多義性を削減しようとして様々な構造をあてがうことで展開され、あてがわれる構造はしばしば相互に結びつけられた変数を含んだ因果マップの形をとる。この場合、因果マップは、ある事柄において意味を成すか成さないかというメリハリをつけるテンプレートのようなものとして位置付けられる。その結果として、例えば特定の因果マップは多義性を増大させるが、ある因果マップは多義性削減においてくり返し有効であるというようにして、多義性削減に有効な因果マップは残り、助けにならないマップは排除されやすいことになり、淘汰過程が形成される。

(4) 保持 (Weick 1979 : 171-172)

保持は、イナクトされた環境と呼ぶ産物の比較的ストレートな貯蔵を意味する。ここで、イナクトされた環境とは保持された内容であり、合点のいく意味形成、多義的だったディスプレイをメリハリのある因果の形に要約したもの、多義性が一体何であるのかについての一つの説明、である。Weick は、この保持された内容を指すのにイナクトされた環境と因果マップという用語を使っているが、それぞれの用語は保持されている内容の若干違った側面をとらえている。イナクトされた環境という用語は、有意味な環境は組織化のアウトプットであってインプットではないことを強調するときに用いられ、環境はパズルのような状況から組織によって創造されたもので、しかもこうした有意味な環境は組織化過程のかなり後の方で出来上がるものであるとしている。また、保持された内容が編集され、因果の関係で結びつけられた変数から出来ているときには因果マップという用語が使われる。そのマップによって人はある状況の中で何が進行しているのかが解釈でき、そしてその人が同じ状況の中で自らを表出でき他の人に理解してもらえるものとなる。

2. 組織化の中心的概念としてのイナクトメント

Weick (1979) によれば、人は経験の流れの中に違いが生じると、より深い注意を払うために経験の一部の流れを囲い込み、変化を隔離するような行為をする。この囲い込みという行為がイナクトメントである。他にも、言うこと、行うこと、意味のあみを張ること、適応すること、変異を生み出すことがイナクトメントにあたる。辞書によるとイナクトメ

ント (enactment) は、法律の制定や立法 (化) という意味をもつ (ランダムハウス英和大辞典、第 2 版、小学館、1994 年)。Weick は、何らかの事象の変化を認識して組織の新たな環境を創り出す行為をとらえてイナクトメントと称した。そして、制定された法律が社会を規制するように、イナクトメントもまた自らが創出した環境に自らが規制されるという性格を持っていることを表している。

組織化の 4 つの構成要素のうち、イナクトメントは以後に意味づけられる素材を生み出す行為であり、組織化における重要な導出的意味形成 (Weick 1979 : 206) の役割を果たす。このことから、イナクトメントは組織化過程における重要な要素であり中心概念であるといえる。組織化における中心概念であるイナクトメントとは、言うこと、行うこと、意味の網を張ること、適応すること、変異を生み出すことといった活動であり、いずれもイナクトメントは経験の流れの一部を囲い込み、構築するのに寄与している (Weick 1979 : 190)。イナクトメントが説く観点は、組織の人々は自らが行っていることの実態を強く意識し、その行為についてより深く考えるべきであるという点にある (Weick 1979 : 213-219)。

Weick は認知心理学者の Neisser が提示した知覚サイクルのモデルを引用して、イナクトメントのメカニズムを説明しており (Weick 1979 : 200-204)、この知覚サイクルの働きは、イナクトメントの働きを知る上でも有効だと考えられる。Neisser (1976) は、情報が一方向に処理される情報処理アプローチに対して、知覚過程は一連の知覚循環を構成しているとする知覚循環モデルを提唱した。このモデルでは、外部からの情報をスキーマ→探索→対象→スキーマ→・・・のような知覚サイクルにあてはめる。情報は、自分が持つスキーマにあてはめられて知覚される。スキーマにあてはまらない情報についても探索によって新たなデータが得られ、利用可能な対象として知覚される。スキーマは諸々の対象の探索を方向づけ、この探索が対象の諸部分をサンプリングし、このサンプリングされた対象がスキーマの修正を行う。そして、そのスキーマが次の探索と対象を方向づけ、それによって再びスキーマが修正される。このように知覚サイクルは途切れなく不断に続くものである。Weick (1979) はイナクトメントの囲い込みという行為は、知覚サイクルの探索によるサンプリングと類似していると述べている。そして、いわゆる「限定された

合理性」(Simon 1976)を有する人間は、自らのスキーマを反証するよりは確認することに用いることから、スキーマはその人の知覚を制御し、知覚活動は自己成就的予言としての特性を示すとされる。また、Neisser の説く知覚サイクルは一人の人間の頭の中での活動をモデル化したものであるが、組織においては、この知覚サイクルの活動が多くの人々の間に分散して行われている点を理解することが必要であるとしている。

組織化は、イナクトメント、淘汰、保持というプロセスを経て進展するが、その中でもイナクトメントは組織化における重要な要素である。それは、イナクトメントが外的環境と直接やりとりをする過程であり、その後の組織化はイナクトメントによって抽出、抜粋されたものを対象として行われるためである。『組織化の社会心理学(第2版)』の記者である遠田は、組織の環境は組織から独立して、もともとそこに確固として存在していたものというより、自らが主体的に築き上げたものであるとして、イナクトメントによって作られた環境を、人の“想像”によって“創造”されたもの、すなわち“想造”された環境と訳している(遠田 1998 ; 遠田 2005)。イナクトメントのイナクト(enact)するとは、受動性を表す react ではなく、行為を伴わない en-think-ment でもない(金井 1999 : 130)。イナクトメントは人々の行為が状況を形成するという観点から、まさに自らの環境を能動的に生み出していくプロセスを意味している。飯野(1979)は、組織は環境という波間にただよう小船のようなものではなく、人々の意志を結合して、ときには環境を変えて積極的に生きていき、個人と自らのために効用を生み出すものである、と述べている。組織化の要素であるイナクトメントは、組織と環境との関係において、有意味な環境を創り出すプロセスにあたる。Weick は、イナクトメントを導出的意味形成と称して、環境に能動的アプローチをして意味を見出す行為であると論じており、このような点からイナクトメントは組織化の重要な特性の一つであるといえる。

Weick は、「組織化とは、意識的な相互連結行動によって多義性を削減するのに妥当と皆が思う文法」であると定義し(Weick 1979 : 4)、生態学的変化、イナクトメント、淘汰、保持という 4 つの要素によって構成されるプロセスであると述べている(Weick 1979 : 172)。Weick の組織化とは、組織を静態としてではなく、動的な組織化のプロセスとしてとらえる。よって重要なのは、組織化の結果として保持された有意味かつ安定

的な性格をもつ知識や行動、組織構造ではなく、環境と接して情報や変化を取り込む性質を有するイナクトメントとなる。Weick が説く組織化論の中心概念であるイナクトメントが持つ意味をとらえるにあたって、改めて Weick の主著『組織化の社会心理学(第 2 版)』(Weick 1979) のなかでイナクトメント概念がどのようなコンテキストで用いられているかを概観し、イナクトメントの特性とその重要性を確認したい。

『組織化の社会心理学(第 2 版)』において、どのような文脈でイナクトメント概念が使われているかを見てみると、次の 7 つの用例を見いだすことができた。

1. 囲い込みや気づきなど、外部環境との接点
2. 環境を創出する側面
3. 既往の環境からの制約を受ける側面
4. 行為や活動的な側面
5. 意味形成
6. イナクトメント発生上の制約
7. 多義的性質

各項目に該当する文言を取り上げてみると以下のようなになる。カッコ内の数字は、Weick (1979) 『組織化の社会心理学(第 2 版)』における掲載頁を示す。

1. 囲い込みや気づきなど、外部環境との接点

- (58) イナクトメントとは経験の特定の部分をさらに注意するために囲い込むこと
- (169) 経験の流れの中に違いが生じると、行為者はより深い注意を払うべく変化を隔離するような行為をする。囲い込みのこの行為はイナクトメントの一形態である。
- (170) イナクトメントは、有機体が外的“環境”と直接やりとりをする唯一の過程である。
- (177) 見知らぬ女性があるパーティーに入ってきて、人々は彼女に気づいたとしよう。この気づきは次の作業のためにその見知らぬ女性を囲い込むイナクトメントである。
- (190) イナクトメントは経験の流れの一部を囲い込み、構築するのに与っている。
- (310) 生態学的変化が組織に直接作用するのはただ 1 ケ所であって、それは組織のイナクトメントである。

2. 環境を創出する側面

- (8) 自らを拘束する環境を自らが創造する際に人が果たす役割
- (169) 組織化にとってのイナクトメントは、自然淘汰における変異にあたる。ではなぜイナクトメントと言うかといえ、組織メンバーが（自らをやがて拘束する）環境を創造する上で果たしている積極的な役割をイナクトメントという言葉がとらえているからである。
- (170) イナクトメントという活動は変異に相当する。というのはイナクトメントは個人や組織にとって見慣れない奇妙なディスプレイを生み出すからである。
- (213) 組織にとって変異に相当するものを敢えてエンアクトメント（＝イナクトメント）と称するのは、管理者が自らを取り巻く多くの“客観的”特徴を構築し、再編成し、抽出しあるいは逆に壊したりするのだということを強調するためである。
- (214) リアリティの最初の植え付けをより強調する言葉こそ実はイナクトメントなのである。

3. 既往の環境からの制約を受ける側面

- (215) イナクトされた環境は、組織化活動のアウトプットで、ある意味古い遅ればせの過ぎ去った刺激である。イナクトされた環境は、因果の形で蓄えられた過去の事象のそれなりの翻訳で、現在のイナクトメントおよび（あるいは）淘汰を拘束する。
- (228) イナクトメント過程の場合、淘汰過程において多義的でないイナクトされた環境への信頼のため、現在の生態学的変化と無関係に以前行ったことをそのまま行うことである。信頼されたイナクトメントは、ステレオタイプやルーティンあるいは標準実施手続ときわめて近いものとなる。
- (236) 保持されている因果マップをイナクトメントにあてがうと、イナクトメントが過去の中に埋め込まれ、現在の中に地と図の関係が弁別されるので多義性が削減される。
- (239) イナクトメントが試行錯誤の行動のときがよくあるが、初期の試行錯誤が盛んに行われている最中に解釈をあてがうことが淘汰過程にはある。イナクトメントの最中にラベルなしでそれが行われるということは、行為間の適合が前の行為を解釈する一つの方法であるということを意味している。

(263) 淘汰活動は、人々、問題それに選択に解をマッチさせる。これらの解は理解を生み出すために多義的イナクトメントにあてがわれるイナクトされた環境の形で保持過程に蓄えられている。

(282) 記憶の断片が淘汰とイナクトメントに結びつけられ、制約として作用しうる。

(283) もし過去にすでにイナクトされ淘汰されたもののみを繰り返しイナクトし淘汰してばかりいるとしたら、それは安定性が柔軟性を削除しているケースだ。

(324) マップはイナクトメントを制約する。つまりマップがテリトリー造りと囲い込みを制約する。このようなイナクトメントが行われているのだからイナクトメントが以前のマップに類似していても当たり前で、やがて組織メンバーの直面するテリトリーの妥当で精確な写しとなるのも当然である。

4. 行為や活動的な側面

(173) イナクトメントは以後に意味づけられる素材を生み出す行為である。

(190) 言うこと、行うこと、意味の網を張ること、適応すること、それに変異を生み出すといった活動がイナクトメントの例であるとすでに説明されている。

(219) イナクトメントの観点の言わんとするところは、組織の人々は自分たちが行っていることの実態についてもっと意識すべきで、それについてもっと考えるべきであるということだ。

(305) あなたが組織的行為と考えるものをイナクトメントのカテゴリーに入れ. . .

(320) イナクトメントのフォルムは他のフォルムに比べて行為者に重責を負わせるものである。

(333) (1) 問題は何か？(生態学的変化)、(2) それに関してあなたは何をしたか？(イナクトメント)、(3) それらの行為は何を意味しているのか？(淘汰)、そして(4) われわれは何を結論すべきか？(保持)。これは立派な組織化である。

(333) タスクとはイナクトメントと生態学的変化とを結ぶもので、生態学的変化はタスクにおいて“要求されるもの”で、イナクトメントはタスクを進行する行動である。したがって“タスクの再定義”は生態学的変化へのイナクトメントの効果を表す。

5. 意味形成

- (173) イナクトメントは以後に意味づけられる素材を生み出す行為である。
- (173) イナクトメントはその後淘汰過程によって意味づけられる出来事を生み出すのである。
- (206) イナクトメントは導出的意味形成といえるようだ。
- (239) イナクトメントと淘汰との区別は難しいことがよくある。それはある種の意味形成が双方でなされるからである。
- (260) 人が事象を理解できるのは、パズルのようなイナクトされたディスプレイに歴史と展望をあてがった後においてである。

6. イナクトメント発生上の制約

- (310) 生態学的変化とイナクトメントの結合パターンも状況や資源あるいは依存の程度関数として変わるだろう。また組織のメンバーは何でもイナクトできるわけではない。種々の制約があり、そもそも組織に加わるときの心理的契約の中にはイナクトメントの自由度が賃金や特権の見返りとして制限されることが含まれているのである。イナクトメントを制約するもののなかで何が最も強いのか、どんな条件の下で制約が最も強くなるかは、特定の組織でくわしく調べる必要があるが、そうした問題はいずれにせよ条件付命題を解くことは明らかだ。
- (324) マップはイナクトメントを制約する。つまりマップがテリトリー造りと囲い込みを制約する。このようなイナクトメントが行われているのだからイナクトメントが以前のマップに類似していても当たり前で、やがて組織メンバーの直面するテリトリーの妥当で精確な写しとなるのも当然である。

7. 多義的性質

- (170) イナクトメント ―それは生態学的変化と結びつくのだが― は単に多義的な素材 ―その後淘汰過程によってとらえられたり退けられたりする― を提供するにすぎない。
- (240) ルースに結びついたイナクトメントの基本的多義性を保存する難しさを指摘することは大事だ。
- (263) 淘汰活動は、人々、問題それに選択に解をマッチさせる。これらの解は理解を生

み出すために多義的イナクトメントにあてがわれるイナクトされた環境の形で保持過程に蓄えられている。

(295) 淘汰されたイナクトメントの唯一の読みが可能な読みを全て尽くしているわけではない。

(321) ぶらぶら行進の適応性との関連は、それがイナクトメントを多様化する一つの方法であるということである。

上記のように Weick はイナクトメントという言葉幅広い意味でとらえていることがわかる。Weick が意味形成や環境創出といった働きを強調してイナクトメントという言葉を用いている一方で、イナクトされた環境や行為者相互のつながりを意味するマップがイナクトメントを拘束する一面も同時に挙げている。このような意味・環境の創出と被拘束性という両面性は、イナクトメントのもつアンビバレントな性質を表しており、このような相反性と多義的性質をイナクトメントは有している。

このようにタイプ分けした項目のうち、検討の対象として注目するのは、“イナクトメント発生時の特性”についてである。これについては、(1) 囲い込みや気づきなど、外部環境との接点、(2) 環境を創出する側面、(4) 行為や活動的な側面、(5) 意味形成の各項目が該当する。同書で Weick が関心とするのは、組織進化の結果ではなく進化の過程であり、何が進化するかではなく、いかに進化が生ずるかを問題としている (Weick 1979 : 158)。そして、組織の分析対象の始まりは、2 者関係をもとに成立する二重相互作用であると述べている。

1 人から 2 人への変化によって社会的行動の基本的単位、すなわち 2 者関係が生じる。2 者関係においては、相互依存、互惠的行動、それに他者との折り合いの必要性がある。われわれの分析単位である二重相互作用のほとんどは 2 者関係からスタートする (Weick 1979 : 308)。

このように Weick の認識としては、組織化の重要な分析単位として 2 者関係を想定しており、大きな集合体であっても、そこに存在するのは二人の間の相互作用であるとの考

えから、組織化モデルはかなり小規模な集団を基本とするものであるといえる。

3. センスメーキングと組織化

Weick (1995) では、組織化過程における意味付け（センスメーキング）に議論の関心をシフトし、組織のセンスメーキングがいかにして進行するのかについて解き明かそうとしている。組織化とは秩序を押しつけ、逸脱を減じ、単純化し、結びつけることであり、人が意味を生み出そうとするときにもそれと同じことが行われていることから、Weick (1995 : 112) では、組織化とセンスメーキングは共通するところが多く、組織とセンスメーキング・プロセスの素地は同じものであると論じている。センスメーキングとは、文字通り意味 (sense) の形成 (making) を表しており、いわば未知を構造化するものといえる。何を見るか、何を感じ取るか、何を意味づけるかが重要であり、それによってその後の意思決定や行動に大きな影響を与えるものである。センスメーキングにおける Weick の関心も、センスメーキングの結果として形成された意味にあるのではなく、どのように構築するのか、なぜ構築するのか、それがどんな作用をするのかといった問題に焦点が当てられている (Weick 1995 : 5) 。いわばセンスメーキングは、その対象である事象を所与のものとして扱ってよいのかどうかという根本的な疑問から始まるもので、やがて意味になるものの構築を暗示しているのであり、対物認知の世界を創造する不断の営みとして記述することができる (Weick 1995 : 18-19) 。

Weick (1995 : 86-112) は、組織がセンスメーキング・プロセスをどのように構造化するか、逆にそのプロセスによってどのように組織が構造化されるかを明らかにすることを志向して議論している。ここではセンスメーキングを論じるための組織と環境とを概念化する方法における認識として Wiley による分析を援用し、センスメーキングに関する考察を行っている。Weick は、個人という分析レベルの上に 3 つのセンスメーキング・レベルがあると主張した Wiley の考え方にもとづいてセンスメーキングについて論じている。Wiley は、主体との関係にもとづいたレベル概念という考え方を導入して、社会学における問題の分析に取り組んだ。そのレベルとは、内主観性、間主観性、集主観性そして超主観性と称する 4 つである (Wiley 1988 : 256-259) 。この Weick (1995) においては、組

組織化は次のように定義されている。

私としては、組織化を間主観性と集主観性の間を行き来する運動と捉えたい。組織化とは、生き生きとしたユニークな間主観的理解と、初期の間主観的構築に参加しなかった人が身につけ、維持し、拡大していく理解とが入り混じったものであると私は考えている（Weick 1995 : 98-99）。

このように Weick (1995) では組織化を間主観性と集主観性の間を行き来する運動と捉えていることから、以下、間主観性と集主観性の2つについて概説する。

間主観的 : 自我が“私”を意味する個人的な思考、感情、意図にもとづく内主観的 (intra-subjective) なことから、2者以上の会話によって思考、感情、意図が統合されて、自我が“われわれ”に移行するとき、間主観的な意味が現れる。Weick は、相互作用や確信、価値観、継続的なコミュニケーション、相互作用している参加者などのフレーズには間主観性が感じられるとし、間主観性にはイノベーションや創造性が潜在している、としている。

集主観的 : 相互作用が社会構造ないし集合意識へと総合され、一段上のレベルに移行すること、いわば相互作用のレベルを超えると自我は背後に退き、間主観性から集主観性への移行が起こる。集主観性の形態では、具体的で個性化された自我ではなく、人々は互いに代替可能で、互いの活動や意味を借用できる。そして、安定、コントロール、共有された理解、集合的などのフレーズは集主観性を意味しているとされる。

上述のとおり Weick は組織化を間主観性と集主観性の間を行き来する運動と考えており、この考えのもと、組織を間主観性と集主観性との間を絶えず行き来するものとしてとらえると組織のセンスメイキングが行われる様子を言い表すことができるとしている。例えば、不確実性を管理しようとする相互作用は、間主観性と集主観性の両者から成り、それが組織のセンスメイキング一般の特徴となっている。そのようなことから組織的センスメイキングについて“ルーティンを相互に結びつける集主観性、解釈を相互に強化する間

主観性、これら 2 種類の形態の間を行き来する運動、を継続的コミュニケーションという手段によって結びつける社会構造”と提示し、そして、センスメイキングシステムとして見たときの組織の目標とは、環境を安定させ、予測可能なものにするために再発的な事象を創り出し同定することであり、センスメイキングとは、特異で移りゆくものに対処していく常に進行中の営みであると述べている (Weick 1995 : 225-226)。Weick はセンスメイキングがもつ能動的プロセスの視点を強調して、受動的で環境を所与として受け入れるイメージと結びつけることを否定する。そして、自らの行為が事象の流れを変えて多様に解釈できる社会的構造物を築き上げていくこと、すなわち組織メンバー自身の活動が適切で有意義な環境をイナクトし、行為を通して組織の有意義な構造と環境を創造すること、創造的活動が組織と環境をデザインすることにセンスメイキング・プロセスの特性が現れるとしている (Weick 1995 : 216-221)。

このようなセンスメイキングに関する議論では、“言語の変質は行動の変質につながる”、“集団を変革するためには集団で話されていること及びその言葉の意味を変革しなければならない”、“意味とは言葉によって生み出されるもので言葉が重要”として、言語と組織特性の間の相互関連という問題を議論することが求められる (Weick 1995 : 143-147)。言葉を用いて現実的な結果をもたらす場や構造を構築することでマクロ的な色彩の強いセンスメイキングが生まれる。現在の営みの意味を与えてくれる言葉を探索することによって未だ不明確な原因に適応することができる。言葉の選択こそ大事なのである (Weick 1995 : 238-242)。センスメイキングを向上させる最良のスタンスは内省することである。個人的経験をとらえるために用いられるのは言葉であり、言うことを知ることによって考えていることがわかる。まずは記述に没頭することから始め、次に浮かび上がってきた連想を逃さぬために書き留めたり観察したり内省したりすることがセンスメイキングに取り組むコツであると論じている (Weick 1995 : 252-261)。

Weick (1995) 以降も組織や人々の行動決定の場面で中心的な役割を果たす概念としてセンスメイキング論が検証され (Colville et al. 1999 ; Sandberg and Tsoukas 2015 ; Weick et al. 2005)、事故や災害、金融危機、ミュージシャンなどの事例を取り上げて議論が行われている (Weick 2010 ; 2012)。

組織論の世界に、所与としての組織を対象として考えるのではなく、組織されつつあるものとして動態的視座に立脚して過程や変化に焦点をあてるという新たな組織観を提示した Weick の組織化論であるが、理念的で具体性が乏しいこと、二人の間の相互作用を分析単位とするミクロな視点、実証研究への展開の困難さという理由から実際の社会現象を対象とした実証面では広がりや欠いてきたという課題を指摘することができる。以降、理論と実証をどのように連結して実証研究に向けた展開を進めるのかという視点のもとで社会構成主義ならびに社会的表象理論に関する理論検証を行った。

第 2 節 組織論における社会構成主義

組織化は 2 者関係にもとづく相互依存性に依拠したプロセスにより進展し、組織現象は組織メンバーの絶え間ない相互行為によって構成され、通常考えられるほど安定的なものではない、というのが Weick の考えである。このような考えをもつ Weick は組織を静態的なものとしてではなく動態的な組織化のプロセスとしてとらえており、名詞としての組織 (organization) を否定し、組織をとらえるにあたっては組織化 (organizing) という視座に立脚することを基礎としている。Weick が持つ組織観は、組織や環境の存在をア・プリオリなものとするのではなく、構成的な存在とする組織観に立ち、行為を通して組織が形づくられるという考え方を示している。Weick (1979) は、組織をスナップショットとして観察される静態的な組織としてではなく、動態的な視点から組織化をとらえて、過程、変化するものとして組織を認識しており、組織化とは、種々の事象について人それぞれが持つ多義的な解釈を相互作用によって収斂していくプロセスであるという考えにもとづいて組織化論を説き、そのプロセスはイナクトメントー淘汰ー保持というプロセスを経て進展するという自然淘汰理論に依拠する考えを提示した。組織と環境との関係においては、客観的に存在する環境に受動的に反応しているのではなく、人々が能動的なアプローチによって自ら環境を創出するという論を展開した。

このような Weick の議論は社会構成主義の考え方によるものと指摘できる。ここでは Gergen ならびに Berger and Luckmann が説く社会構成主義の視座を論考し、組織研究の中での社会構成主義についての検証を行った。

1. 社会構成主義をめぐる議論

Weick の組織化過程は、社会的相互作用によって行われるイナクトメント・淘汰・保持というプロセスからなる。このうちイナクトメントは、組織化過程において外的環境と直接やりとりする唯一の過程で、何らかの事象の変化を認識して組織の新たな環境を創り出す行為のことであり、組織メンバーが環境を創出する上で果たしている積極的な役割を示している。イナクトメントは、組織と環境との関係において、有意味な環境を創り出すプロセスであり、リアリティーを構築するものである（Weick 1995 : 41）。このようにイナクトメントという言葉は、あくまで人や組織は主体的かつ主観的に社会や環境を認識し、創造するということを意味している。ここでは Weick が説く、組織化過程の中心的要素であるイナクトメントによって環境が構成される間主観的な相互作用プロセスが組織にとって非常に重要なものであるという観点から、Weick 組織化論の理論的背景が社会構成主義によるものととらえて、社会構成主義の考えを議論する。

社会構成主義は、哲学や社会学、言語学などの多くの学問領域から影響を受けている学際的な考え方で（Burr 1995 : 2）、社会や環境、意味、知識などの現実とは客観的なものとして存在するのではなく、人々の相互行為を通じた社会的な構成プロセスによって生み出されるとする（Berger and Luckmann 1966）。このような考えは、従来からある見方に対して疑問を投げかけるものであった。例えば伝統的な観点では、「唯一絶対の正しい真理が存在しており、言葉の意味というのは客観的なものである」、「実証によって事実の観察を行い、論理的な言葉によって事実を写しとることができる」とする論理実証主義の立場がとられていた。しかし社会構成主義は「社会は、人々の関係性の中から創り出される」、「ある特定の事実も人々の意味付けの活動を通して生み出される」という立場に立ち、現実とは人間の社会的相互作用を通じて形成されるのであり、事実の意味も主観的に構成されるとするのが社会構成主義の考え方である。

社会構成主義においては、我々を取り巻く現実とは社会的に構成され、創造されたものであり、基本的には、物理的ではなく人々による認識の結果であると考えられる。議論の焦点としては、そのような現実をどう定義するか、すなわち、現実の主観的性質をふまえた人々

の認識の重要性が強調される。

この社会構成主義の基本的な考え方は、社会学の分野では Berger and Luckmann によって、心理学の分野では Gergen によって唱えられた。Berger and Luckmann (1966) は、社会構成主義の視点から世界が人々の社会的慣行によって構成されることを論証し、社会は人間の産物であること、社会は客観的事実であること、そして、人間は社会の産物であることを説いた。また、Coulter (1979 : 164) は『心の社会的構成』において、考える、思考するという概念すらも、人の心的状態における特定事象の現れではなく関係概念であって公的・社会的な現象であると論じている。このように社会構成主義では個人よりも人間関係のネットワークに焦点を合わせている (McNamee and Gergen 1992 : 22)。

社会構成主義の主張は、現実社会的に構成される、という点にある。社会構成主義の関心は社会的な過程であり、人の行為の源を関係性に求め、言説²⁾のプロセスに着目して社会にアプローチする (Gergen 1994b : 16)。

社会構成主義の主張は、現実社会的に構成されること、言葉や対話が世界を生み出すことであり、「社会的に構成された現実」という概念に取り組むことを課題としている (Gergen 1994a : 280-282)。

ここでは、Gergen の著書 (Gergen 1994a ; 1994b ; 1999) をもとにして、社会構成主義の背景と、その基本的な考え方について説明する。

従来の伝統的科学観は、「物—心」、「外界—内界」、「客観—主観」図式で表される二元論を前提としていた。社会構成主義は、このような二元論パラダイムと決別し、新しい科学観にもとづいて社会現象の観察ならびに分析に取り組むものである。二元論パラダイムにおいて自己に価値をおくということは、外界に対して内なる私的意識に価値をおくということを意味している。これは、知覚し考え決定する自己という心理的な世界が存在し、同時に私達の思考の外側に客観的かつ物質的な世界が存在すると考えるものである (Gergen 1999 : 12)。

例えば、伝統的科学観において「理解する」ということの意味は、神秘のベールで隠されている人間の行為の性質についてベールを剥いで把握することである (Gergen 1994a : 141)。

これは、人間の社会的行為を客観的な一つの実在とみなす立場に立っており、それを理解するためには、覆われている多くのベールを剥いで客観的事実を明示する必要があるという考え方が背景にある。この二元論的な世界観は、例えば

心的世界と物的世界との因果関係をどのように説明すればよいのかという問題につきあたる。心理的なものが物質的な変化を生み出したり、逆に物質的なものが心理的な変化を生み出したりするが、こうしたことがなぜ可能なのかという説明は、いまだなされていない（Gergen 1999 : 12-13）。一方で、「理解する」ということは経験したことに意味を割り振ること、というとらえ方がある。これは、神秘のベールに覆われた社会が存在することを前提としない新しい科学観にもとづくものである。このような考えは、限界と行き詰まりを示している伝統的な科学観に立脚する論理実証主義的アプローチに対する不満が背景にある。このようなことから Gergen は社会構成主義に着目しなければならないと説く。

社会構成主義では、論理実証主義のように、知識は個人の頭や心の中にあると考えるのではなく、共同体の中にあると考える。知識が生成されるのは個人の内的プロセスにおいてではなく、コミュニケーションという社会的プロセスによってであると考ええる。人間の理性は、社会的相互作用の中で生成され、社会的な真実があるとすれば、その真実を創り出す人々による共同体が存在するからなのである。したがって、社会構成主義的な立場において知識や真実は客観的な実在物ではなく、人と人との対話などによる社会的相互作用に伴って生成されたものの性質にもとづく共同的創造物とされる（Gergen 1994a : 280-281）。

社会構成主義は、二元論の否定ならびに知識が世界の正確な表象であるという前提の否定という立場に立つ（Gergen 1994b : 323）。そして社会構成主義における世界の構成は観察者の心の中ではなく、関係性において生じるのである。関係性の多くは言語を用いたコミュニケーションによって行われるため、現実や世界は言葉によって構成されることになる。言語自体が自分自身と世界の経験を構造化する仕方をもたらし、人が用いる概念は言語に先立って生まれるのではなく、言語によって初めて作られるのである（Burr 1997 : 52）。社会構成主義において言語は真実を反映するものではなく、社会関係を創出するもののなのである。

社会構成主義の立場では、言語を用いたコミュニケーションなどの社会的相互作用によって、知識や自己、現実、環境が生成され、意味付けられて成立する。すなわち現実や世

界は人々の多様な主観、また人それぞれの認識によって知識や現実の環境が生成するのである。社会構成主義の研究の関心は、対話や言語、関係性が、いかにして人々を取り巻く社会を創り出しているのかという点にある。社会構成主義的想定においては、現実や世界を創り出し、意味を生み出している社会的プロセスの中の言語が強調される。意味の概念については、個人の頭の中での意味付けという観点から定義されることが多いが、相互に関連した他者との意味共有に関する点に問題がある。他者との意味共有という問題は、個人が意味を生み出すという信念にもとづいて考える限り解決することができない（Gergen 1994b : 342）。社会構成主義的な考え方では、意味共有や世界の理解の仕方とは客観的な観察や実在する社会において妥当とされる慣習にもとづくものではなく、人々が互いに関わり合う社会的プロセスの創出によるものであると考える。

社会構成主義は、知識は個人の心の中ではなく、人々の関係性の中で生まれてくるものと考え（Gergen 1999 : 183-184）、社会構成主義では個人よりも関係が、孤立よりも絆が、対立よりも共同が重視される。人々の関係性にもとづく相互作用の過程を通じて言語が生まれ、その言語によって人は自分自身を理解可能な存在にすることができる。このように個人ではなく関係性が社会生活の基本的単位となるのである（Gergen 1994b : 339）。社会構成主義の立場に立てば、関係性は個人に先行し、個人という概念は社会的過程の産物となる。Gergen（1999 : 195）は、あらゆる意味は関係に由来し、自己と他者は共に意味の生成の中に浸っていると述べている。社会構成主義の意義は、関係性の現実を作り、理解可能な言説を生み出し、社会生活に新たな可能性を与える関係の実践を生み出すことにある。

社会構成主義は、上述のとおり言語と関係性を鍵概念として、社会的な共同実践の取り組みを重視している。言語の意味は、言語が関係性のパターンの中で機能するあり方であり、社会的なフレームによって言語の意味を構成することができる（Gergen 1994b : 66）。言葉の意味は、言葉そのものが意味を持つのではなく、人々の関係においていかなる機能を果たしているかによってのみ決定される。共同体における人々の関係が言葉の意味に先行するのである。どの言葉も関係性の一部であり、意味は広範な社会生活に埋め込まれた相互作用のプロセスから生じるとする点が社会構成主義にとって重要である。社会構成主

義研究の関心は言語そのものから言語の社会的実用性へ、つまり特定の目的を持った社会によって、いかに言語が構成されていくのかという問題に移行する³⁾ (Gergen 1999 : 63-64)。

上記の社会構成主義の議論では具体的な関係性、相互作用のプロセスは述べられていなかった。ここでは、社会秩序の形成について、習慣化・類型化・制度化という概念を用いて説明している Berger and Luckmann (1966)⁴⁾ をもとに読み解く。

人の全ての活動は、それが繰り返されると一つのパターンに収斂していく。このパターンは労力の節約ということで再生が可能になり、事実上、その行為の遂行者によって一つの範型として理解されるようになる。これが習慣化である。習慣化された行為が、他者と共有されることによって類型化が生じる。この過程は集団のみならず、2人の人間が新たに相互関係を形成する場合にも現れることを認識しておくことが重要である (Berger and Luckmann 1966 : 82-90)。

それでは、2人の人、AとBとがいて、どのような方法で類型化が生み出されるのか。まずAはBが行動するのを眺める。AはBの行動に何らかの動機や意義を認め、その行為が習慣的に繰り返されるのを見て、その動機を反復的なものとして類型化する。Bがその行動を反復し続ける時、Aはやがて「またやっているな」と自分にいい聞かせることができるようになる。と同時にAは、Bが自分に対して同じ動作を繰り返していると考えられることもできる。両者の相互作用の過程において、類型化は特定の行動パターンによって表現されるようになるのである。類型化によって、AはBによって繰り返される役割を密かに自分のものにして、それを自分自身の役割遂行のためのモデルに仕立て上げる。こうして相互に類型化された行為の集まりが生じることになる。これらの行為はそれぞれの役割の中に習慣化され、あるものは個別に遂行され、またあるものは共同で遂行される。こうした相互の類型化は、それだけではまだ制度化というには足りないが、制度化がすでに核の形において現れている。

さらに Berger and Luckmann (1966 : 90-104) より、AとBの2人の間の相互関係に第三者が加わったケースを考えてみる。ある社会がAとBとの間の相互作用によって形成されて維持されている類型化の段階では、この社会における客観性という特性はまだ弱

く、容易に変化しやすいものにとどまっている。A と B の行為はルーティン化されてはいるものの、いまだ 2 人の意識的な枠組みにおさまっている。この類型化の社会において A と B は、自らが作り上げた世界をその成り立ちからよく知っている。ところが新たな行為者となる第三者がこの社会に入り、この行為を引きづく過程になると、社会の客観性という性質に影響を与えて状況は質的に異なったものとなる。第三者の出現が社会的相互作用の性格を変えるのである。A と B の 2 人の間の共通した行為によって生まれた類型化による形成物は、第三者によって明確な客観性を獲得する。言い換えれば、類型化によって形成された秩序や制度は現実性をもち、明確な事実として行為者らに経験される制度化段階に到達するのである。こうした世界は現実的かつ固定的で、もはや容易には変革できないものとなる。新たにこの社会に加わった第三者にとっては、自然的現象の客観性と社会的構成物の客観性を見分ける能力はなく、A と B の 2 人によって作り上げられたこの世界が、第三者にとっての世界そのものになる。例えば言葉についても、新たに社会に参加した第三者にとっては、事物はそうように名付けられたもの以外の何物でもなく、それ以外には名付けようがない。言葉と同様に社会における秩序や制度なども、第三者にとっては既に存在しているものを与えられただけであり、変革のしようがなく、自明のものとしてそこに存在している。

制度化に伴うこのような客観性の構築は、第三者に与える影響と併せて、社会を作り上げた A と B の両者に対しても社会的現実の客観性を強固にさせる働きをもつ。他者への社会秩序の継承過程というのは、その社会を構成した人々の現実感覚を強化するものであり、その社会における意味付けを事後的に形作るもの、ということができる。すなわち、第三者の出現によってのみ、人は現実的な社会的世界の構築について語ることができるということである。A と B の 2 人によって形成された世界では、その 2 人によって諸々の状況を作り変えることが可能であると共に、2 人は記憶をさかのぼることによって社会的秩序がもつ根源的な意味に到達することができる。ところが第三者が習得した言葉やルールは、伝達・継承によるものであり、彼は記憶によっては元々の意味にたどり着くことは不可能である。それゆえ制度化の段階においては、この社会的状況のもつ意味を、第三者が納得できるように首尾一貫性をもって合理的かつ客観的で包括的な説明をしてやること

が必要になる。この説明によって第三者は、この社会における秩序を獲得し、A と B の 2 人は社会のもつ正当的な意味を事後的に確認することができるのである。

しかし同時に、制度的世界の客観性は、いかに現実的かつ絶対的なものとして現れようと、やはり人によって生み出され、構成された客観性であることに留意しなければならない。制度的世界は客観性という性格をもって現れるが、かといって、それを生み出した人間の活動から切り離された独立した地位を得るものではない。社会は人の産物であり、その社会は客観的な現実である。と同時に、人は社会の産物でもある。創造物は創造者に対して逆に働きかけもするのであり、人とその制度的世界は相互に作用し合うのである。

Berger and Luckmann (1966) にもとづいて A と B の 2 人に第三者が加わった制度化について論述した。この点に関連して、Gergen は言語使用の観点から次のように述べている。

人々は直接観察できる事物を言葉を用いて表現している。互いにさまざまな言葉を用いることによって常にその言葉を使ってもいい条件、その言葉が使えない条件が確立されていく。そのような営みをとおして共同体は言語的な慣習を作り上げていく。つまり他人がその語を適切に使用しているか否か、観察によって容易に決定できるのは言語的慣習ができ上がっているからである (Gergen 1994a : 100)。

これは Gergen による、A と B の 2 人による類型化の過程から、第三者が加わった制度化へと進む段階での言語使用の適切化に関する言及とすることができる。Wittgenstein (1953: 83-84, 命題 83) は言語ゲームにおいて、ルールがあるからゲームなのではなく、ゲームが成り立っているからそこにルールが見いだせると考えた。言い換えればルールがあるから行動が一つになるのではなく、行動が一緒だから、そこには規則があると考えられるのである。そして意味形成の点からみると、意味体系があるから意味が伝わるのではなく、伝わっているから意味体系があるのであり、言葉や行為の意味は、相互のコミュニケーションや関係性の結果として、事後的に、回顧的に形成される。この回顧性という考え方も Weick 組織理論を理解する上で重要な概念となる。

社会あるいは組織の現実とは客観的なものとして存在するのではなく、社会的な構成プロセスの産物である。この社会的相互作用を通じて作り出されたものは、人々にとっての現実として認識される。この場合、人々が安定した相互作用を続けるためには、何らかの現実や行為、意味について、ある一部分的な意味共有が必要となる。社会における現実とは、人々の相互作用によって形成され、意味共有が進展していく。組織とは、社会的に構成された現実についての合意である。その合意の共有度が高まるほど、人々間の相互作用はより円滑化して、組織化過程の進展へとつながっていく。Weick (1995 : 91) は、Bergerらの言葉を引用して、「時が経つにつれて、人はパターン化された仕方で行い、そのパターンをリアリティとして自明視するようになり、そして自らのリアリティを社会的に構築する」と述べているが、この言葉の含意が習慣化・類型化・制度化という考え方で説明された。さらに、組織行動とセンスメイキング（意味形成、物事が分かること）のプロセスは同じものであり、それは「秩序を押しつけ、逸脱を減じ、単純化し、結びつけることである」と述べている (Weick 1995 : 112)。このことが示唆しているように、Weickは現実が社会的に構成するプロセスを組織にとって非常に重要なものと考えている。

我々が社会的現実として観察する組織現象は、基本的に組織メンバー相互の関係性にもとづく行為やコミュニケーションによって生み出される。そうした現象は相互行為が繰り返される中で、当初存在していた多義性が削減されて秩序を形成していく。社会的現実という言葉は、現実が社会的に構成されることを表現しており、いわば人が見ているものは、その人自身が作り出したものなのであり、組織を取り巻く環境は、組織自らが生み出したものなのである (Weick 1979 : 198 ; 1995 : 179-180)。

2. 社会構成主義と組織研究

社会構成主義における組織研究においては、あらかじめ存在しているデータを発見し、収集し、分析するというよりも、調査対象との相互作用や双方向的な実践行為を通して有意義なデータや情報が構築されるという構成主義的な視点に立った研究アプローチが強調され (Prichard, et al., 2004 : 354)、語りや言葉が組織での意味づけ行為のプロセスにおいて重要な役割を果たす。組織化の中心的形態としてのイナクトメントは、言説的行

為の秩序形成や意味づけ活動にも関わる（Weick 2004 : 636-643）。イナクトメントは環境への行為主体の適応を示すために提起された概念で、環境を変化させようとする働きかけであり、自己成就予言の一種であり、行為を通じた経験と環境の現れを示す。社会現象や日常的な組織生活における変化や相互行為、創発活動などを取り上げて、読み解くにあたっては、イナクトメントと言説的行為に焦点を当てることが中心的に位置づけられる。

医学や組織変革、科学技術、教育・学問などの分野を対象とした社会構成主義の実践が Gergen（1999）や Grant, et al.,（2004）では述べられており、組織研究の中での社会構成主義の実践として、流れや関係、行為、言説に焦点をあてて人々の文化や生活に与えた影響などについて探求している。

例えば、社会構成主義は医学分野におけるセラピーに対して新たなアプローチを提示する（Gergen 1999 : 248-260）。なぜ患者は「問題」を抱えているとみなされ、セラピストは「この理解の仕方のほうが優れている」などと主張するのかという疑問を示し、社会構成主義の立場から見ると、科学的かつ合理的にふるまう行為は誤った方向へ向かっており、多くの課題をもたらしていると主張する。例えば、病気というのは社会的構成の可能性の一つに過ぎない。人が病気と見なされることによって治療という実践が現れるのであり、もし病気と定義されなければ従来の治療以外の新たな実践が動き始める。このような社会構成主義に基づく想定から、次のような特徴をもつ新たな治療的アプローチが生まれ始めている。

1. 意味に焦点を当てる（伝統的セラピーでは原因と結果に焦点が当てられるが、そういった想定も数多くあるナラティブの一つに過ぎない）
2. セラピーは共同構成である（専門家としての立場からではなく、無知のスタンスをとって患者ら関係者と協力して共同の意味生成を目指す）
3. 関係に焦点を当てる（一般には個人の心の状態に強い関心が向けられるが、社会構成主義のセラピーでは関係が心にとって代わる）
4. 価値に対して敏感になる（社会構成主義ではいかなる治療的關係も価値中立的ではありえないと認識される）

これら 4 つの基本的な方向性のもと、社会構成主義的セラピーの実践の可能性は多様で

ある。例えば、社会構成主義の立場に立つセラピストにとって、我々がお互いについて理解してもらうための大切な手段であるナラティブという概念は非常に重要である。特に患者が自分の人生を語り直し、人生の辛い出来事を新しく概念化し直すのを可能にするナラティブ・セラピーこそが必要となる。そういったアプローチの中で興味深く、革新的な方法の一つは「問題の外在化」と呼ばれるものである。伝統的な考え方では「私の抑うつ」、「私の無気力」、「私の敵意」という形で問題を個人の内部にあるものとしてとらえる。しかし、その人が、あるいは家族・友人が問題をその人の自己から切り離して考えられるようになることができれば語り直しへの重要な一歩となる。ナラティブが行為を決定する考えるのではなく、ナラティブ自体を一つの行為のあり方として考えることが有効となる。ナラティブに焦点を当てることによって意味の問題に切り込み、治療の現場と研究の間に豊かなやりとりの場を生み出すことで、互いの意識を高めることが可能になる。

Weick (1995) では組織行動をセンスメイキングのプロセスは同じものであり、意味形成や物事が認識できることによって秩序を維持し、例外を正し、単純化し、要素の結合につながると述べている。このことが指し示すように現実を社会的に構成するプロセスは個人や家族だけでなく組織にとっても重要なものであるととらえられ、こうした組織に関する理論的考察は社会構成主義の考えに立脚するものであると Gergen は説く (Gergen 1999 : 260-265)。組織にとって効果的な意味創造を通じた組織変革における社会構成主義的实践を生み出すことに焦点を当てて、意味を形成するプロセスにもっと入り込むことが大切であると主張し、そのために「価値を認める問い」と「未来の探求」というアプローチの重要性を論じる。「価値を認める問い」というアプローチは、芸術における考えをメタファーとする。「たとえ対立(コンフリクト)があったとして、いかなる組織にも「美」を探し出すことはできるだろうか?」、そして「美が見いだされた時に組織メンバーは、それによって新たな未来を開いていくことができるだろうか?」という問いを立てて意味創造につなげていこうとするものである。そのヒントはナラティブの中にある。人々がもつ多様な物語は組織にとっての資源であり、その物語を他者と共有することで将来への展望が実現可能であるといった確信が生まれる。それによって未来への創造的な変化の力を解き放つのである。また「未来への探究」とは、組織とそれを取り巻く共同体の間での、

あるいは共同体に存在する複数のサブカルチャーの間での人々の共通の基盤を探したり、構築したりする、差異を超えた共同実践の一つである。このアプローチの参加者は、単に問題を解決するのではなく、生き生きとした未来像を創り出すことが目標とされ、未来への理想的なシナリオの構築を目指す。

ナラティブや物語はセンスメイキングのプロセスにとって重要であり、言葉により構成されていることから行為者の言説へのアプローチの探求が中心的課題となる（Grant et al. 2004 : 8 ; Reed 2004 : 649-650）。言説分析は社会構成主義パラダイムに依拠し、組織の様々な状況における言語の影響に関心を持つ。社会構成主義の観点からすれば、組織行為者の言説を通じて創造される限りにおいて組織は存在し、変容するのであり、言説が組織における意味を形成しているという明確な社会的現実の構成手段であることを主張し、言語の影響としてもたらされる結果として社会的現実を定義し、探究することになる。社会構成主義的視座に立脚する言説と組織に関する研究では、社会や組織に関わる諸現象を調査・分析する手段として言説が扱われる。

教育分野における伝統は、知識を創造するプロセスに導くのではなく、あらかじめ決まった既存の知識を伝えることに、すなわち知識の創造プロセスではなく知識の中身に主眼を置いてきた（Herated and Gergen 2013 : 4）。社会構成主義は、人々が事実である、合理的であると考えた知識は共同体の関係による産出物であり、したがって共同体の枠組みを越えた事実はありえないと社会構成主義は主張する。この想定に対して社会構成主義は下記のアプローチを提示する（Gergen 1999 : 265-280 ; Grant et al., 2004 : 21）。

1. じっくりと考え、反省すること

伝統的な教育では学生が違う見方をすること、別の考え方をすることは重視されない。しかし社会構成主義はじっくりと考え、反省することこそが価値のあることであり、それによる創造的なやりとりの実践、学生らが未来を切り開いていけるような実践を重視する。

2. 教室での共同実践

伝統的モデルでは、教員は伝達すべき知識を持っており、ダイアログ（対話）よりもモノログ（独話）が重視される。しかし社会構成主義ではモノログを小さくし、唯一の正しい答えを重視しない実践を、さらに教室の枠組みを超えて対話を広げていく道を模

索するアプローチを説く。

3. 多声的な教育学

社会構成主義の立場では学生が複数の声を手にし、多様な表現や物事のとらえ方ができるようになる多声性、複声性を得るためにはどうすればいいかを考える。例えば、同一のテーマを複数の異なる相手に向けて書くということも複声性を生み出す方法の一つである。

Gergen は学問的なコミュニケーションという実践や行為に焦点をあて、社会構成主義の対話にもとづく教育・研究は、学問の世界において新たな分析や問いの形を生み出していると論じる。伝統的な学問におけるコミュニケーションとは、事実を正確に記述することである。社会構成主義の立場から見ると、話すことや書くことはそれ自体一つの実践のあり方である。言語を用いること自体が実践に携わることであり、自己や社会に様々な影響を及ぼすのである。よって、これまで展開されてきた科学的・学問的な記述はそれ自体が実践であると言える。しかし我々の世界についての求められる記述は、ありのままに写し取る地図のようなものではなく、他者と共に物事を行うために用いられるものである。この考えから我々の関心は様々な表現が共同体の中で何を達成するのかという点に移る。この視点から新たな表現スタイルを取り入れた種々の試みが行われている。それは、(1) 客観的な視点に立つことを止めて研究の中で著者が一人の人間としての視点に立って具体的な記述を行う、(2) 個人としての自己という想定を越えて、批判を含めた複数の声や考えをテキストの中に多声的・複声的に盛り込む、などの行為である。

テクノロジーが社会に与えた影響について社会構成主義の立場から考える検証が行われている (Barley 1986 ; Gergen 1999 ; Heath et al., 2004 : 533-565 ; Boczkowski and Orlikowski 2004 : 567-594) 。人々にとって大切なのは、新しい科学技術がいかに生活や関係、秩序、制度を変えていくのか、ということである。この問題を考える上で社会構成主義の考え方を用いることで何かが見えてくるかもしれないと Gergen は指摘する。社会構成主義は新たな行為の可能性を開くような新しい概念を生み出していこうと主張する。大切なのは、関係を生み出し維持していくためのつながりをいかに増やすかなのである。例えば、コンピュータやインターネット技術の発達に伴って、理解可能なものの地平は急

速に拡大した。このようなコミュニケーションの新たな地平は、社会構成主義の研究と関心の対象となるものである。我々の現実や正義についての感覚が、我々を取り巻く関係性に由来するものであるならば、通信技術の発達に伴って登場した新しい関係のあり方が新たな世界を生み出すことは十分にありえるからである。インターネットに代表されるテクノコミュニティは急速な発展・変化を続けており、コンピュータ上の仮想共同体について、またその仮想世界での自己、アイデンティティについての分析からは、ある特定の一つの絶対的な結論が導き出されることはない。しかし、特別な環境のもとではコンピューターテクノロジーが強力な関係を生み出し、新たな道徳や価値観が育つ場、人々の信念に力を与えて行動を起こすことを可能にするような手段が見いだされるかもしれない。

新しい技術が人々や社会に与える影響とともに、それが馴致され、手慣れたものになるあり方は、暗黙的な実践、機器や技術がもたらす意味や妥当性を獲得する手順についての社会的かつ相互行為的特徴に関心を寄せ、技術的作業と言説的行為に関する語りや身体的行為の分析を中心に据えて議論される。仕事や技術的作業においてテクノロジーが果たす重要な役割を検討し、いかに作業や技術、組織についての考えや概念が詳細かつ実践的な関連の研究から構成されるべきかが述べられている (Heath et al. 2004 : 533-565 ; Boczkowski and Orlikowski 2004 : 567-594)。医療現場に新たな機器が導入されたときのように、テクノロジーが変化する際には、これまでの体系が十分に機能しないために組織秩序の不確実性が増大する。この際に発生した変化に対して、新たな意味を付与する行為が試みられる。一方で、人々が相互行為によって新しい意味を形成しようとするときには従前の体系も参照されることから、この両者によって構成される相互作用が組織における意味形成（センスメイキング）の特徴となる。例えば2つの病院へのCTスキャン装置の実装についてもたらされる構造的変化は、新しいスキャン技術を取り扱う放射線科医と技師との相互行為のやり取りとして記述される (Barley 1986)。2つの組織での言説に焦点を当てて、新しい技術の利用に際しての解釈的かつ制度的なプロセス形成が探求された。

組織を動的で不確定で継続的な言説の流れとしてとらえるならば、新しい道を開き続けるための意味づくりで重要なことは、聞くこと、吸収すること、創造すること、協働・連

携することである（Herated and Gergen 2013 : 200-201）。社会構成主義の立場に立つと、我々の周囲を取り囲む世界は人々による言説や相互行為による関係を通じて人々が認識可能な存在となっているのである。社会構成主義は新たな行為の可能性を開くような新しい概念を生み出していくことを主張し、関係を形成し、維持していくための資源をいかに増やすかという観点を強調する（Gergen 1999 : 315）。意味が生まれ、維持され、変容するのは人々の関係性のプロセスにおいてであり、有意味な構成という絶え間ない流れのなかでの言説行為は、人々が共に意味を創るための中心的手段である。

第3節 社会的表象理論

ここまで組織化論の背景として社会構成主義の考え方があることを指摘したが、社会構成主義は個別的な事柄を対象とする個別理論ではなく、従来の主客2項対立図式で説明される認識論に抜本的な改定を迫るグランドセオリー的な特性が強いことから、現実の社会現象をとらえるにあたっては、社会構成主義と親近性のある社会的表象理論の考え方を導入し考察する。

“未曾有の”という定義があてはまる新奇な事象を伴う現代社会の課題への接近視座として、社会構成主義に依拠したマクロ的視座を持つ社会的表象理論に着目した。ここで議論の対象として挙げる社会的表象は一般的に理解される表象とは異なる意味、性質をもち、社会的構成物としての諸現象・概念を扱うにあたって有効な分析視座を提起している。ここでは、社会的表象理論を提唱した Moscovici（1984）の論述などをもとにしてこの理論を概説し、Weick 組織化論との関連性などについて考察する。

1. Moscovici（1984）における社会的表象理論

社会的表象とは、表象という用語を使用しているが、心の内部にイメージされた内的表象の一種ではなく、人々の眼前に現れる構成された環境を指すものである（矢守 2010 : 216-217）。我々が認識する社会的現実とは、Moscovici が社会的表象と称する言語的な相互行為による構成作用にもとづくものとされ、社会的な現実が人々の活動を通じて構成される世界であるという点を認識することが強調される。社会的現実を構成するものとして

言説をとらえることが必要であり、どのようにして言説が現実の社会構成しているのかという点が研究の視座となる（Heracleous 2004 : 278-279）。我々が知覚し経験する世界に出会うことができるのは、表象を通してのみであり、Moscovici は表象によって現実が構成される側面を強調する（Moscovici 1984 : 3-5）。Moscovici によれば、社会的表象は言語の中に蓄積され、複雑な人間的環境のなかで創り出されるものであり、表象の発達を詳細に研究するということは、同時に、異なった集団や世代によって、どのように社会が理解され、経験されるかを探索しているということにもなる（Moscovici 1984 : 63-65）。社会的表象理論とは、この意味を帯びた世界がいかなるプロセスを通して社会的に構成されるのか、また同時に、そうした社会的構成のプロセスがいかなるメカニズムを通して潜在化し、内なる主体である自己と、外なる客体である環境とが、それぞれ独立に自存していると感じられるに至るのかについて説明しようとした理論であり（矢守 2010 : 6）、新奇な社会現象が人々の日常生活に定着するプロセスを探究するもので、社会的表象とは、人の共同的な行為・活動やコミュニケーションを通じて生み出されるものとしてとらえられる。

Moscovici が論ずる社会的表象の目的は、何か馴致されていないものを馴致されたものに変換することであり、この過程は係留と物象化という二つのメカニズムからなる（Moscovici 1984 : 28-42）。第一のメカニズムは、異質な観念を通常のカテゴリーやイメージに帰し、異質なものを既知のコンテキストに位置づける「係留」である。係留とは、何かを分類し、命名することであり、カテゴリーと名前を割り当てるシステムである。分類体系と命名プロセスの関係を明らかにするためには、言語に着目して、言語の論理を詳しく検討、追求することが必要であると Moscovici は指摘する。第二のメカニズムは、抽象的なものをできるだけ具体的なものに変えることであり、観念的な存在を現実の物理的世界に存在するものに変換する「物象化」である。物象化は、馴致されていない観念を現実感で満たして、さらに現実そのものへと変換する。その第一段階は、例えば、何かを例えるときに何らかの視覚的イメージを描いて実体のないものに実体を与えたり、非言語的なものにそれに対応する言葉を結びつけたりするように、不正確な観念や存在の視覚的特性を発見することであり、観念をイメージの形で再生産することである。これに続く第二

段階は、第一段階の論理的帰結とも呼べるもので、イメージ化された対象が完全に我々の世界の中に溶け込んでしまう段階である。そして、言語によって把握されていたものが、現実にあって知覚されるものへと変化する。

表象は、係留と物象化の二つのメカニズムの作用によって表象される実体に結びつけられ、そもそも概念的特性であったものが実体としての現象や環境の特性へと変化する。そして、概念は実体としての現象や環境を指し示すものとなるのである。

社会的表象理論においては表象を現実の原因（刺激）とそれに伴う具体的な結果（反応）とを結ぶ媒介変数（刺激→反応）とは考えない。それは我々が反応可能な刺激とは、係留と物象化という過程を経た再構成された刺激だからである（Moscovici 1984 : 58-62）。これまでの一般的な理解としての表象とは、外部に独立して存在する刺激が主体によってとらえられ、その情報が処理されることによって主体内部にイメージ、スキームといった言葉で表される表象が生じ、その一連の処置の結果として反応が生じるというモデルであった（図 2）。しかし、Moscovici が説く社会的表象とは、刺激とそれが引き出す反応の双方を同時に規定するものであり、社会的表象は人の知覚・行動（刺激・反応）を構成する作用としてとらえるべきであるとして、独立変数（説明変数）であることを強調する。人が反応する刺激は係留と物象化の社会的表象による作用が既に行われている刺激であり、社会的表象の全く及んでいない刺激は、そもそも刺激とはなりえないのである（図 3）。

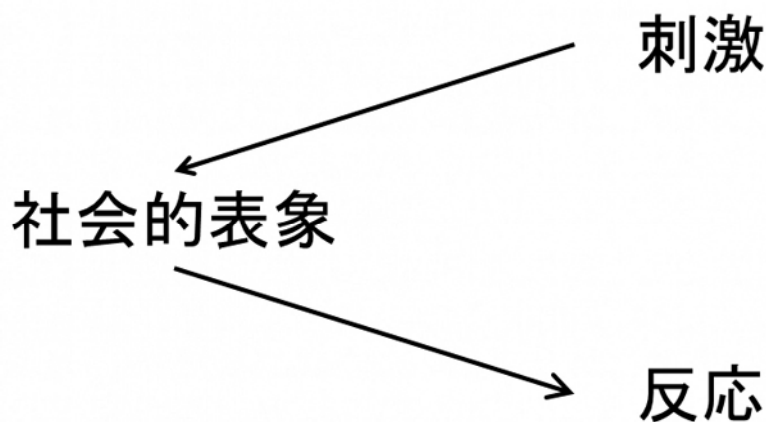


図 2 一般的な理解としての社会的表象 (Moscovici 1984:59 より作成)

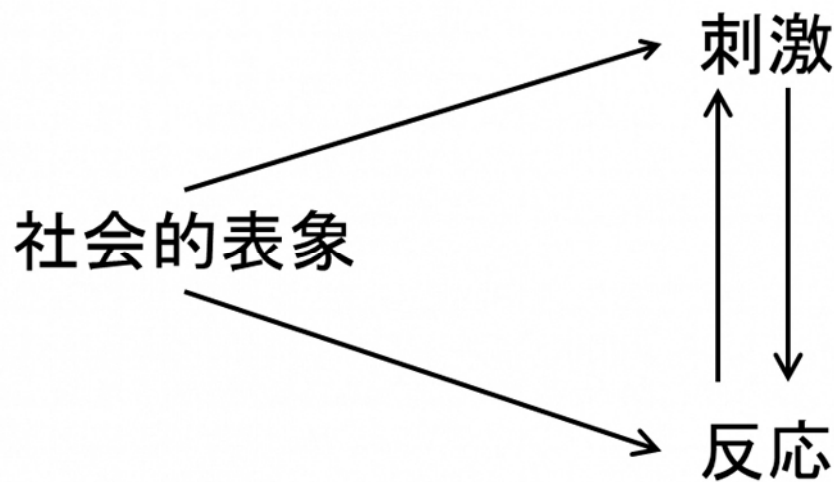


図3 Moscovici が提示した見解(独立変数としての社会的表象)

(Moscovici 1984:60 より作成)

Moscovici は、これまでの社会的表象理論に関する議論をふまえて、社会的表象研究に関する4つの方法論的原理を提示している (Moscovici 1984 : 50-53)。

(1) 社会のなかで日常的に交換されている会話のサンプルから研究の素材を得ること

会話は、その集団にとって未知であるかもしれない話題を扱っている。しかし会話の過程で最初は未知であっても、それらは共通の合意へと向かっていく。会話は社会的表象を形成し、活動させ、社会表象自身の生命を与えていることを通じて、会話の過程の中で生じる相互作用により個人や集団は未知の不可解な対象や観念を馴致していき、それを自分の支配下に収めていく。

(2) 現実を構成する手段として社会的表象を考えること

我々が日常生活で対峙する現象や人々は、決して生(なま)の素材ではなく、既に集合体や制度などによって創られ、形象化されたものである。その対象は何かしら再生産、再構成されたものであり、人工的な産物であるということを認識し、我々はその対象の起源を問わなくてはならない。表象は人々の判断や知覚に必要な準拠枠組を形成し、その準拠枠組にもとづいて事物の再構成が進行する。個人の経験や思考の基礎にあるのも、この準

抛枠組である。このような現実の再構成は社会的なものであり、あらゆる人々に影響を及ぼす性質を持っている。

(3) 社会的表象の性質は、特に危機や大変動の時に顕在化してくること

集団や、集団のイメージが変化を受けるときには社会的表象の性質が顕在化してくる。そのような時には、人は普段以上に語りたいという気持ちに駆られ、イメージや表現は生気を帯びて、行動はより自発的になる。馴致されていないものが増加し、混乱した世界を理解したいという願望によって人々は動機づけられ、社会の再構成も、よりあからさまな形で現れる。社会の緊張やギャップが生じた際には、社会的表象の過程を浮かび上がらせ、社会的表象の重要性が顕著になる。

(4) 表象をつくり上げる人々に目を向けて、会話や人間関係に注目すること

非公式な集まりでの対話でどのような話がされているのか、どんな人間関係が結ばれていくのかによって思考や表現の様式が決まってくる。多くの表象が、この非公式な集まり、アマチュアの会合に向けて話された専門家の知識・知見に由来するのも事実であり、社会を形成する人々に着目することが求められる。

併せて Moscovici は社会的表象理論の全般的な含意について 4 つの点を指摘している (Moscovici 1984 : 63-66)。まず第一に、社会的表象が作用するプロセスは、表象の内容がどのようにして生まれ、どう変化したかを説明できる限りにおいて重要であることから、人々の関係性や我々が生きる世界についての象徴的な側面を研究することが必要となる。第二の含意は、文脈から分離できるような現象を研究する際には、いわゆる論理実証的な実験方法の価値は明らかであるが、人々の言葉と相互関係によって生まれる社会的表象研究の場合には、観察的手法が必要とされる。第三の含意は、社会的表象の構造や多様な領域での社会的表象の進化を注意深く記述することによってのみ、我々は社会的表象を理解することができないことから、記述に関わるのが重要となる。そして第四の含意は、身体や他者との関係などについての我々の表象は、成長に伴い発達して成熟に向かうことから、社会的表象は本質的に歴史的であり、時間的な要因に関わっている。これらの点をふまえて対象とする事象にアプローチし、社会的表象理論にもとづく検証につなげることが重要となる。

2. 社会的表象理論と社会構成主義

社会的表象理論を理解するにあたっては社会構成主義との関係について考える必要がある。それは、社会的表象理論の原理的な再検討を行うためには社会構成主義の立場を徹底することが重要であり、それによって社会的表象理論の真の理解へ向けた道のりが示されるからである（矢守 2000 ; 2010 : 175-210）。

本来、社会的表象理論と社会構成主義とは不可分の関係にあったのだが、社会的表象理論をめぐる議論の際に社会構成主義の主張が盛り込まれなかったために、例えば、社会的表象を何らかの対象についての構造化された心的イメージ、スキーマ、写實的に映された内的なスナップショットとして理解されるなど、Moscovici が当初この理論を提起した意図から離れた意味合いとしてとらえられる誤解や混乱が生じていた（矢守 2000 : 99）。既に述べたとおり、社会的表象理論は表象という言葉を使っているが、心の内部にイメージされたスキーマや写實的なスナップショットではなく、社会的現実を産出する作用として理解することが求められる。しかし、社会的表象理論の真意である現実を構成するという側面は正しく理解されてこなかった（矢守 2010 : 175-177）。それは、例えば認知社会心理学の領域で、外部に存在する事象を主体内部にイメージとして写し取って認知的に処理するという構図として社会的表象が考えられてきたからである。この社会的表象が所与のものとしてあらかじめ存在するという考え方が誤っていると指摘できる。我々の知覚対象としてとらえられる存在自体を創出するのが、構成作用としての社会的表象概念の含意である。社会的表象理論についてはイメージやスキーマといった静態的な理解ではなく、現実の構成という作用プロセスとして動態的に理解、把握することが必要とされる。この構成するという視点を強く主張することが社会的表象理論の理解のために重要であり、そのために社会構成主義がもつ、社会や環境、知識、意味などの現実是人々の相互行為を通じて社会的に構成されるものであり、人の行為の源を関係性に求め、言説のプロセスに着目して社会にアプローチするという考え方（Gergen, 1994b : 16）を組み入れることが必要であると Wagner（1996）は述べている⁵⁾。

Wagner（1996）は社会的表象概念を再構築するために 3 つの問いを提起して議論を行

っている（矢守 2010：189-200）。改めてこれらの点を示すことによって社会表象理論が本来持つべきである社会構成主義という基盤が明確化され、この理論独自の価値を高めることにつながると Wagner は説く。

第 1 の問いは「社会的表象は対象物を表象する（表す）のか」、第 2 の問いは「社会的表象について真偽を確定できるか」、第 3 の問いは「社会的構成は行為か」である。これら 3 つの問いは社会的表象概念の主張を再確認するためになされたもので、答えはいずれも “No” となる。Wagner (1996) では Moscivici の主張を引用しながら、社会的表象とは人々の行動とコミュニケーションのために、人々が集団の中で社会的な対象物(object)を形成することと述べている⁶⁾（矢守 2010：105）。社会的表象理論の主張では、主体の認知に先立つ形で独立した対象物(object)が外部に存在することはない。あくまでも何かが存在する時は、例外なく<object>として構成されるという形であり、それ自体が自存することはない。社会的表象を主客二元論に依拠する従来の認知心理学の領域で理解し、外部に自存する対象と主体内部に表象された心的イメージとして把握している限り、あえて社会的表象という概念を用いる必要はないのである（矢守 2010：181）。また、第 2 の問いについては、ある社会的表象が“真である”あるいは“偽である”と言えるためには、この表象の真偽を決定する基準が外部世界に独立して確保されていなければならない。上述の検討から、社会的表象とは何らかの object に対応して主体内部に写し取られるイメージではなく、<object>を構成する作用であった。このことから、社会的表象が真偽判断の基準となる外部の対象を構成する作用を意味している以上、第 2 の問いを議論すること自体が無意味となる。よって第 1 及び第 2 の問いともに答えは No となる。

Wagner (1996) が示した第 3 の問いに対する答えも No である。それは、社会的構成、いわば社会的表象という作用は、行為(action)ではなく遂行(doing)として見なければならないという考えにもとづいているからである。ここで行為とは、意図(intention)をもった人間の身体的・言語的ふるまいであり、遂行とは意図を欠いたそれである。この用語をめぐる問題となるのは、行為という言葉がいわゆる“刺激－反応モデル”に依拠しているものとしてとらえられるからである。

刺激－反応モデルは、次のように表わすことができる。

「外部の刺激 (object) → 主体 (subject) による刺激の認知・表象

→ その認知・表象にもとづく行動 (反応)」

これは所与としての主体－客体の存在にもとづく二元論に立脚するものであり、このことを社会的表象理論の立場はよしとしない。上記の刺激－反応モデルの図式は、外部に独立して存在する刺激が主体によってとらえられ、その認知された情報が処理されることによって主体内部にイメージ、スキームといった言葉で表される表象が生じ、その一連の情報処理ともいえる処置の結果として反応・行動 (矢守 (2010) が言うところの“行為”) が生じる、というものである。この図式にあたって行為が意図を伴っているというのは、行為に先立って、その行為を導く原因が外部に存在し、それが主体内部に写し取られることによって意図となり、行為が発現されるに至る、ということである。しかしながら社会的表象理論における主体の行動は、そのようには位置づけられない。それは行動を誘発する意図の対象としての外部の刺激の存在が、自存するわけではないからである。

それでは行動はどのように生じるのかというと、言うなればその行動は「単にそうする」という遂行の形式でなされる。意図を欠いた遂行とは、このような「単にそうする」としか表現できない種類の身体の言語的・肉体的遂行のことを指している (矢守 2010: 199)。一方で行動の対象となる外部刺激 (object) の存在については、社会的表象理論においては、相即的な状態 (something in the world) にある中から、この「単にそうする」という行動に伴って共起的に <object> として生成されるものである。この遂行を通じて <object> が生成・確立された後に、その遂行を振り返ると、通常は、あたかも外部の対象に対しての意図をもった行為であるかのように観察・認識されるのである。社会的表象という作用は、その遂行によって <object> を構成させる作用なのである。

主体の心の内部にスキーマなどの何かが存在するとみる事態は、外部に所与の存在として何かがあるということを意味する。心やモノがそれ自体で自存するという主客 2 項対立図式にもとづく既存の常識に対する社会的表象理論の真意とは、あくまでも社会的表象は内部もしくは外部にあると通常考えられている存在を創造する作用であるととらえることである。より正確に定義すれば、社会的表象とは、外部に存在する object でも、それを表象した結果として内部に形成されるものでもなく、<object> (社会的表象という作用

によって構成される限りでのあらゆる対象のこと）を構成する作用であり、かつ、その作用そのものを隠蔽することによって、本来、＜object＞でしかないものを外部に自存する object であるかのように現出させる作用のことである（矢守 2000）。この定義は、社会構成主義の主張を強く導入することによって導出されるものである。この Wagner による議論に依拠して社会構成主義の徹底した導入という立場のもとで社会的表象理論を再考することで、社会的表象とは＜object＞を構成する作用であるという帰結点に達したのである（矢守 2000）。

社会的構成、いわば社会的表象という作用は、行為ではなく遂行として見なければならぬという立場が示された。ここで行為とは、意図をもった人間の身体的かつ言語的ふるまいであり、遂行とは意図を欠いたそれを表す。

ここで“意図”に着目すると、われわれは普段の生活において、ある行動を行った後になってから、あるいはその行動の動機や意図を聞かれてから、はじめて行動の意図に気づくという経験がある。そこから、行為の意図はそれが問われた際に、その場の文脈や状況に合わせて構成されるものとも考えることもできる。ここから、行為の動機や意図は、あらかじめ主体の心の中に存在するのではなく、それらは特定の文化的文脈を背景にして、また人々が交わす会話の中で構成されるということが出来る（矢守・渥美 2011:149-152）。社会構成主義を説く Gergen も動機について次のように述べている（Gergen 1994a : 105-109）。Gergen の考えでは、行為がもつ真実の動機や意図などを判別できる客観的な基準は無く、人間の行動に付与されている意思や動機などの“心の内容”は、実体としては存在しない。我々が行為の背景にあるであろう意図をとらえることができるのは、言語的な実践を通じて物象化されたからこそであり、それによって、あたかも実在するかのように見えるだけなのである。それら“心の内容”は、基本的には人々のコミュニケーションを通じて作り上げられた産物なのである。ここで、Gergen が述べた“言語的な実践を通じた物象化のプロセス”が、社会的表象の作用にあたるものといえる。

第4節 まとめ

ここでは現実の社会的構成プロセスを人と人との間の相互作用から論じた Berger and

Luckmann (1966) の議論をもとに、Weick 組織化論と社会構成主義との関連性に着目して組織化についての論考を試みた。さらに社会構成主義と親近性のある社会的表象理論の考え方を取り入れた検討を実施した。

Weick が組織を語る上で強調するのは、組織進化の結果や何が進化するのかではなく、いかにして進化が生じるのかという過程であり (Weick 1979 : 158)、センスメイキングの結果として形成されたものにあるのではなく、どのように意味が構築されるのか、そしてどんな作用をするのかであり (Weick 1995 : 5)、人々の行為により環境をイナクトし、社会構造と環境を創り上げる (Weick 1995 : 216-221) という視点である。これら Weick がもつ組織研究の視座は、言説研究における言語がどのようにして現象を構成するのかを探究するアプローチ (Alvesson 2004 : 521) や社会的表象理論における表象の内容の生成・変化を強調し、社会的表象によって現実が構成される側面を重要視するアプローチ (Moscovici 1984 : 3-5) と重なる点が指摘できる。社会構成主義を理論的背景とする Weick 組織化論は、

- (1) 目的よりも手段が前にあることの合理性
- (2) 意味は事前的ではなく事後的に現れること
- (3) 各自の遂行的行動が起こった後に行動規範が成立することで、あたかも統制された社会的関係が構築されているようにみえること

を主張する (Weick 1979 : 116-127)。Weick も Gergen と同様に、行動に先立つ“心の内容”は存在せず、行動のもつ意味は回顧的に形成されと考えており、いわば、行動の後にその行動が有意味なものになるよう、事後的に目的や意図を設定する考え方であるといえる。そして、我々が行動を振り返ってみたときに、その事後的に定められた行動の意図によって、あたかも当初から存在する規範によって統制されている行動をとっているかのようにみえるのである。さらに他者との間でこの行動統制のプロセスがなされることによって社会的関係が構築され、組織化が進展していくものと説明できる。

Weick 組織化過程では、イナクトメントから相互連結行動へ、そしてイナクトされた環境の形成へと移行する。これは、個人的行為から相互関係を経て組織的・制度的世界へと進展して、それに伴い多義性が削減されて客観性が確立していくプロセスを表している。

社会構成主義は、現実や環境が社会的相互作用によって生成されると見なすものであり、すなわち、多様な主観や認識の仕方をもった人々の相互作用と社会的関係のプロセスによって、現実や環境は意味付けられ、生み出されると考える。人や組織を取り巻く環境自体が、その人や組織によって構成されるという考え方である。これは、環境をイナクトメントによって創り出されたものとしてとらえることと同義であり、イナクトされた環境とは社会構成主義に依拠する Weick がもつ環境観を表しているといえる。

多くの場合、現実や環境の社会的構成における相互作用は、言語や行為などを伴うコミュニケーションによって行われる。社会構成主義においては、言語と関係性というキーワードが繰り返し登場する。Weick は組織というものを、多義性が削減されて意味共有が図られる組織化のプロセスと認識しており、この組織化という動態的な過程を重視する概念を用いることで組織現象をとらえようとした。組織化は組織メンバーの言葉や行為、関係性の構築によって形作られる。そして、組織化プロセスの進展によって言葉や行為を規定する組織の秩序やルールが生み出され、さらに、その作り出された社会秩序や規定が言語の使用を伴う組織化過程に影響を及ぼすのである。この組織化過程を観察、分析するためには、言葉や行為、関係性に着目することが必要となる。Weick (1985 : 142-143) は、変動する状況における安定性の回復、多義性の削減の方法として、言語、行動、相互作用の3点を示している。そのうちの言語については、安定的な結合を促して実体を構築する、重要な情報の意味を知らせる、意味が生み出されるという点を挙げて、言葉の重要性を説いている。これらのことをふまえて Weick (1995 : 147) は、組織研究においては言語と組織特性の間の相互関連という問題に取り組むことを提起している。

さらに社会的表象理論の考え方に立脚した検討を試みた。Weick 組織化論との関連性についての検討からは、組織化論と社会構成主義ならびに社会的表象理論との間の連結可能性が見い出せた。矢守 (2010 : 208-210) や Moscovici (1984 : 54-57) による報告では社会的表象を扱った実践的研究事例が述べられており、これまでの議論から導出された人々の相互行為や関係性に関すること、言語の意味生成にもとづく言説の視点をふまえ、社会現象へのアプローチの方法として社会的表象理論の立場から接近することの重要性・有効性が示された。言説的なアプローチは、ミクロ (相互作用) – メゾ (制度的) –

マクロ（社会的）レベルの組織研究の視座に立つものであり（Ashcraft 2004 : 455）、Weick 組織化論と社会構成主義、社会的表象理論との間の理論的関連性からミクロからマクロへの展開が図られ、実証的研究への展開可能性が見えてきたといえる。

第2章の注

- 1) Weick 組織化の他に同時期に生物生態学的進化モデルを組織論に取り入れた研究として Hannan and Freeman (1977) が挙げられる。Hannan らは組織と環境を競争や同調などの組織集団内におけるメカニズムを通じて研究しようとするアプローチをとり、生物生態学分野のモデルを直接的に適用し、環境との相互作用から組織を見る視点を提示した（高瀬 2015）。
- 2) Gergen (1994b) には、言説に関する具体的な定義の説明はない。Burr (1995 : 74) は言説を「何らかの仕方ですべて、出来事特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等々を指している」ものと定義している。ここでは言説を、言語や対話、行為を含む、ある一つの出来事のある観点から表現する特定の仕方、とする。
- 3) このような Gergen の考え方は、後述する社会的表象理論が説く考えと近いものがある。
- 4) Hacking (1999 : 56) は、現実に関する社会構成主義の代表的な著作として『現実の社会的構成』（Berger and Luckmann 1966）を挙げ、この本は社会的構成（social construction）という表現をタイトルに入れた最初の書物であると論じ、Gergen (1994b : 87) は、Berger and Luckmann (1966) を社会構成主義のバイブルと称している。
- 5) Wagner (1996) については矢守 (2010) の訳文に従い、検討を行う。
- 6) この“object”を矢守 (2010 : 191-195) は<object>と表し、外部に自存する対象物としての object と区別して用いている。そして社会的表象を、「外部」に存在するモノ（object）でも、それを表象した結果として「内部」に形成されるものでもなく、<object>を構成する作用であると定義している。以下、同様に object と<object>を区別して用いる。

第3章 地域活性化の取り組みと大地の芸術祭

本論文では、序章で本研究における背景と課題を示すとともに、現代社会が抱える課題をふまえた社会現象と人々との関わりをとらえるに際して Weick の組織化概念を始原として実証研究に向けて理論展開を図ることの目的と意義を述べた。続く第1章では、人々による様々な営み・行為から形成される関係性や相互作用から生まれる組織現象を読み解くにあたって、組織現象を理解し、説明する上での基本的なフレームワークを検証し、組織研究の方法論について考察した。そして第2章では、Weick 組織化論について、特に組織化の重要構成概念であるイナクトメントについて深耕した議論を行い、さらに、その理論的前提となる社会構成主義の考え方と、Moscovici が提唱した社会的表象理論に関するレビューを行い、実証的な研究アプローチへの道筋を探った。

第3章以降においては、前章までの理論的先行研究にもとづき、新潟県十日町地域で開催されている大地の芸術祭を調査事例とする実証研究を展開する。本章では、大地の芸術祭という地域活性化の取り組みを研究対象とするにあたって、まず文化芸術活動にもとづく取り組みという視点に立って各地域で行われている地域活性化の事例を調査、概観する。さらに、地域活性化の取り組みをとらえるにあたって、近年提唱されたソーシャル・イノベーションという概念を取り上げ、検証する。そして、本研究で研究事例とする大地の芸術祭について、対象地域である十日町市の概要ならびに対象事例である大地の芸術祭に関して概説し、次章以降での調査分析にあたっての基礎的検討を行うこととする。

第1節 地域活性化とソーシャル・イノベーション

1. 現代社会の課題と地域活性化の取り組み

日本の現状を表す事柄として、人口減少と少子高齢化の問題、多額の国の借金に示される財政問題、医療・看護・介護に関わる問題、働き方改革や雇用などの仕事や労働についての問題といった事柄を挙げることができる。特に人口減少・少子高齢化の進展は、日本の将来に、そして地域経営に大きなインパクトを与える事象としてとらえられており、特に地方においては「自治体の消滅」という衝撃的な言葉で問題の大きさが表現されている。

1920年の第1回国勢調査時の日本の総人口は5596万人であった。人口は増加傾向を続

け、1967年には1億20万人となり、1億人を超えた。そして、2008年をピークに人口減少に転じ、2010年に1億2806万人であった日本の総人口は、2014年10月（推計値）に1億2709万人となり、4年間で約97万人の減少となった。この97万人という数値は、およそ和歌山県全体の人口に相当する。また人口動態統計の年間推計によると、2014年度の人口の自然減（出生数－死亡数）は、マイナス26.8万人であった。長岡市の人口が約28万人であることから、1年間に長岡市に匹敵する人口が減ったことになる。さらに人口の将来予測を見てみると、2050年には9708万人に、今世紀末の2100年には4959万人になる予測が示されており、わずか100年あまりで現在の人口の約40%に、明治時代の水準にまで急減すると推定されている。人口減少とともに高齢化も進展し、人口を構成する年齢構造の推移（参議院調査室 2015）によれば、高齢者を示す65歳以上の人口割合は一貫して上昇しており、1990年には10%を超え、2013年には25%と、日本人の4人に1人は65歳以上の高齢者になった。そして2030年には高齢化率は30%を超えて、2030年には40%に迫る数値が推定されている¹⁾。このような人口の減少と高齢化は、地域の企業活動の低下と互いに影響を及ぼし合いながら地域経済に負の影響を与えてきた。日本銀行によれば、2000年代以降に都道府県別の人口増減率が各種の経済活動関連指数と相関を示していることが報じられている（日本銀行金融機構局 2015）²⁾。

そして人口減少に伴う影響は、経済的な側面だけではなく地方自治体が消滅する可能性についても論じられ、人口減少の衝撃が強い危機感を持って各自治体に受け止められた。これはいわゆる「増田レポート」として日本創生会議の人口減少問題検討分科会が2014年5月に発表したもので、そこでは、2040年に若年女性の減少によって全国の49.8%にあたる896市町村が消滅の危機に直面するという試算結果が示された（増田編 2015）。新潟県内では村上市（若年女性人口変化率－61.1%）や柏崎市（同－51.3%）、新発田市（同－50.5%）など18市町村が消滅可能性都市に該当しており、それらのうち、田上町（同－66.2%）や阿賀町（同－66.9%）など8町村が「このままでは消滅可能性が高い」自治体に当てはまるという結果が示された。

この人口減少と少子高齢化の進展は、日本人の誰もが経験したことの無い新奇な現象であり、この課題に我々は立ち向かわなければならない。

このようなことを背景として、地方の活性化の観点から地方創生が政治的最重要課題の一つとして取り上げられ、2014年12月に「まち・ひと・しごと総合戦略」が閣議決定された。これを受けて各地方自治体は「地方版総合戦略」を策定するなど、動き始めた。地域活性化の方法には大きく分けて以下の3通りがある。

- (1) 地域の内部資源を活用した内発的な産業活性化
- (2) 企業誘致
- (3) 財政依存

このうち、経済活動がグローバルな視点で行われる時代になったことや特定の企業に依存して永続的な地域経済の発展が困難であることを踏まえれば、企業誘致による活性化には限界がある。また日本という国全体の財政状況が悪い中、国の財政に依存するという方策も現実的ではない。ここから、地域が自立して持続可能な発展をなすためには地域に根差した内発的な活性化を進めるしかない（増田 2015）。人口減少や少子高齢化などの課題を抱える地方は、その対策として様々な施策を講じている。

○群馬県南牧村

日本創生会議の「増田レポート」の発表で、2040年の若年女性人口の減少率が全国で最も高かった南牧村は、高齢化率も58.3%と非常に高い。村では高齢者入居施設を整備して住民の雇用を確保することと併せ、空家の改修費用を負担すること、「山村暮らし支援協議会」を組織して村外からの移住を促進することによって住民の若返りを目指している（時事通信社 編 2015：26-29）。

○新潟県新潟市

新潟市では市外への人口流出対策として市内に「新潟暮らし奨励課」を設立し、新潟の暮らしやすさを若者に向けてアピールしている。新潟市の篠田市長が考える新潟市最大の魅力は農村都市という、市内に都市部と農村部が共生する環境である。農業と食品製造業を一体化した6次産業を推進し、さらに今後は、医療や福祉分野と融合した12次産業化の推進を図っていくとされる（時事通信社 編 2015：234-235）。

○福岡県北九州市

北九州市では、産業遺産や稼働中の工場現場などを新たな観光資源としてとらえ、2014

年に市と商工会議所と観光協会のそれぞれの観光開発部門が一か所に集結して業務を開始し、各団体の垣根を越えた産業観光のプロジェクトチームを組んで取り組みを行っている。見学先は大企業だけでなく中小企業も含む 54 施設に拡大している（増田 2015）。

○長野県飯田市

飯田市では、2009 年に周辺の 13 町村と公共施設整備やサービスを分担しながら都市機能を充実させて人口流出を食い止めようとする「定住自立圏」の形成に全国で初めて取り組み、市町村が連携して子育て世代が地元に戻れる地域づくりを進めている（増田 2015）。

このように我が国における地方の活性化は喫緊の課題となっており、様々な施策が推し進められている。地域活性化の方法には、その地域がもつ独自の資源を活用した内発的な産業活性化が有効とされ、各地でその社会的課題の解決に向けた活動が行われている。一つには、地域が有する観光地としての魅力に改めて着目したモデル事例もある。しかしながら、地方の自立と持続可能性を見据えた「持続可能な観光」や「地域に根差した自立型観光まちづくり」といった観点からの取り組みについては十分に研究がなされているとは言いがたい。我が国が抱える人口減少、少子高齢化、地方創生といった社会的課題への対策の観点からも、この点に関する議論・検討の重要性は高いといえる。各地で当該地域の観光資源に再注目し、その価値を再認識、再構築して、新たなまちづくりに活かそうという取り組みが進められている。従来あった“ものづくり”による地域振興の視点から、地域がもつイメージや観光資源によるものへと軸足を移した点が特徴といえる。

このような点をふまえ、近年は地域において文化芸術活動をととした社会課題の解決に向けた取り組み事例が見てとれる。野村総合研究所（2015）では、それらの活動を「経済・人口問題」や「居住問題」、「健康・福祉問題」などに対する種々の取り組みとして整理し、類型化している（表 1）。

表 1 社会課題の解決に貢献した主な文化芸術活動事例(野村総合研究所 2015:7 より作成)

社会課題	解決手法	事例
経済・人口	地域競争の激化における都市・地域の埋没	都市・地域のブランディング ヨコハマトリエンナーレ 静岡県舞台芸術センター (SPAC) りゅーとぴあ(新潟市民文化会館) サイトウ・キネン・フェスティバル松本
		アーカスプロジェクト 国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ 札幌国際短編映画祭 東川町国際写真フェスティバル ゆうばり国際ファンタスティック映画祭 山形ドキュメンタリー映画祭
産業の停滞	観光産業の振興	観光地への新たな魅力の付加 十和田市現代美術館 金沢 21 世紀美術館 別府現代芸術フェスティバル 六甲ミーツ・アート アート・セレブレーション 富士山河口湖音楽祭
		観光地としての魅力の再生 たざわこ芸術村 瀬戸内国際映画祭 大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ 中房総国際芸術祭 富山県利賀の演劇によるまちおこし
		産業（観光以外）の振興 美濃和紙あかりアート展 金山町建築コンクール
		遊休物件の活用 廃校・休校の活用 にしすがも創造舎 京都芸術センター アーツ千代田 3331 アルテピアッツァ美唄 各種芸術祭での活用
人口の減少・少子高齢化	その他の物件の活用	BankART1 929 あいちトリエンナーレ 東山アーテイスツ・ブレイスメント・サービス
		若者の転入の増加 直島町 神山村
中心市街地の衰退	にぎわいの創出	鳥の劇場 八戸ポータルミュージアム「はっち」 天満天神繁昌亭
居住	地域のイメージの悪化	負のイメージを持たれた場所のイメージアップ 舞洲工場 モエレ沼公園 ホスピティル・プロジェクト
	治安の悪化	治安の回復・維持 黄金町バザール 豊島区の文化政策
健康・福祉	過大なストレスの発生	心のケア ARCT JCDN 劇団四季(こころの劇場) アーツプロジェクト
	高齢・医療費の増大	健康の増進 北名古屋歴史民俗資料館 田んぼ de ミュージカル委員会 さいたまゴールド・シアター さくら苑
人権	孤立感の拡大	個々の存在意義・アイデンティティの確認 南三陸きりこプロジェクト 釜ヶ崎芸術大学 可児市文化創造セン
	マイノリティ	社会的包摂 移住者・外国人

の 排 他	撮 影	国 人				
		身 体 障 害 者・ひ き こ も り	ア ル ス・ノ ヴ ァ	音 遊 び の 会	otto&orabu	日 本 セ ン チ ュ リー 交 響 楽 団
教 育	表 現 力・コ ミ ュ ニ ケー シ ョ ン 力 の 不 足	表 現 力・コ ミ ュ ニ ケー シ ョ ン 力 の 育 成	篠 山 チ ル ド レ ン ズ ミ ュ ー ジ ア ム	コ ロ ガ ル パ ビ リ オ ン	芸 術 家 と 子 供 た ち	
全 体 の 問 題 に 係 る も の		コ ミ ュ ニ ティ の 形 成	い わ き 芸 術 文 化 交 流 館 ア リ オ ス	か え っ こ	こ へ び 隊・こ え び 隊	

例えば「経済・人口問題」に関して言えば、「地域間競争の激化における都市・地域の埋没」、「産業の停滞」、「人口の減少・少子高齢化」、「中心市街地の衰退」の4つの問題に分類し、文化芸術活動は、これらの問題に対して「都市・地域のブランディング」、「観光産業の振興（観光地への新たな魅力の付加、観光地としての魅力の新生）」、「産業（観光以外）の振興」、「遊休物件の活用（廃校・休校の活用、その他の物件の活用）」、「若者の転入の増加」、「にぎわいの創出」といった側面において課題解決に貢献できるものとしている。

この資料によれば、本論文で実証研究の対象事例とした「大地の芸術祭」は、観光地としての新たな魅力の創生をとおして観光産業の振興につながるものと位置づけられ、経済面や観光客の来訪、交流人口の増加などへの貢献をとおして、地域が有する社会課題の解決に資する取り組みの一つとしてとらえることができる³⁾。

この「観光地としての魅力の新生」では、元々は観光地として知名度が低かった地域を文化芸術の力によって新しく観光的魅力を創造しようとする活動を取り上げており、大地の芸術祭の他に4つの取り組みが挙げられている。

(1) たざわこ芸術村

秋田県仙北市での劇団わらび座による1974年のわらび劇場の設立に伴う活動が背景にあり、1996年に劇場の他に温浴施設やレストラン、森林工芸館などからなる「たざわこ芸術村」が形成された。劇場による演劇の提供だけではなく、リゾートエリアとしての芸術村には年間延べ25万人の利用客が訪れる一大集客施設となっている。

(2) 瀬戸内国際芸術祭

2010 年に瀬戸内海の 8 つの島・地域を舞台として開催される現代美術や舞台芸術を取り込んだ国際芸術展である。3 年に一度実施され、2013 年の第 2 回には、開催地が 14 の島・地域に拡大し、26 の国・地域から 200 組のアーティストが参加した。来場者数は延べ約 107 万人であり、経済波及効果は約 132 億円であった。

(3) 中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス

千葉県市原市で 2014 年に始まった芸術祭で、以後、3 年に一度実施していく予定である。2014 年の第 1 回には 13 カ国 66 組のアーティストが参加し、52 日間の会期中の来場者数は約 8.7 万人、経済波及効果は約 10.1 億円であった。

(4) 富山県利賀の演劇によるまちおこし

富山県利賀村（現・南砺市）は 1973 年に人口流出を食い止める施策として合掌造りの民家を集めた「利賀村合掌文化村」をつくった。そこを拠点として演劇活動を実施していた演出家の鈴木忠志氏の取り組みを支援するために施設整備を進めて、合掌劇場「利賀山房」や野外劇場などを建設した。利賀は演劇の町として世界的にも知名度が高く、演劇によるまちおこしの先駆的事例となっている。

2. ソーシャル・イノベーション概念

地域活性化の取り組みに関連して、ソーシャル・イノベーションという概念が提起されている。ソーシャル・イノベーションは 2000 年代に入って活発に議論されるようになった新しい考え方で、世の中に存在する社会的課題を認識し、その解決を目的とした社会変革に資する取り組みに関する概念である（大室 2009；趙・李 2016）。ソーシャル・イノベーションは、社会的なニーズや課題に対する新規の解決策を創造し、実行するプロセスとして定義される（渡辺 2009）。ここから分かるようにソーシャル・イノベーションは社会的課題の解決を目指して新たな社会的価値を生み出す創造と実行の過程を表す動態的な概念であり、新たな価値認識と関係性を創出する社会的な取り組みをその視座とするものである。Westley et al. (2006 : 152-186) では、複雑系や関係性、創発、自己組織化、変化、相互作用といった言葉がソーシャル・イノベーションのキーワードとして示さ

れ、その特性が表されている⁴⁾。このような特性をもつソーシャル・イノベーションを理解するにあたっては静態的な枠組みではその創造と実行の過程をとらえることはできないので、動態的な視点が必要となる。したがって、ソーシャル・イノベーションに則した取り組みとしてとらえられる地域活性化の取り組み「大地の芸術祭」を分析対象とするにあたっては、変化や過程、つながりによる創造といったテーマを主題とする組織化論と社会的表象理論にもとづく関係性や相互作用の視座に立ったアプローチが有効な手法として考えられる。

谷本（2009）では、ソーシャル・イノベーションを理解する上でのフレームワークとして、ソーシャル・イノベーションの進展プロセスが示されている（図1）。

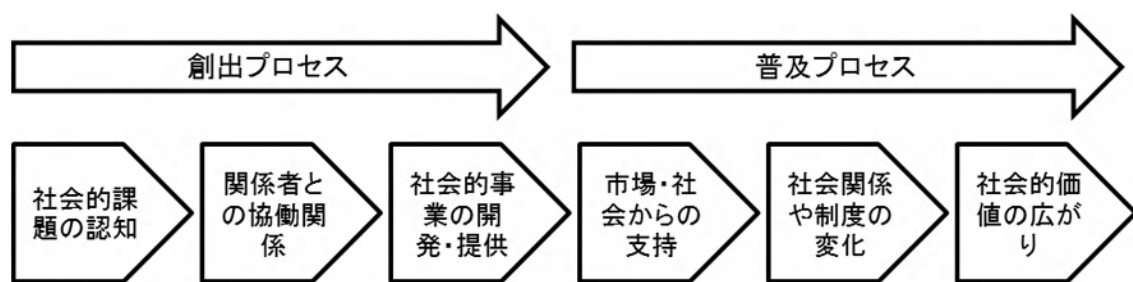


図 1 ソーシャル・イノベーションのプロセス(谷本(2009)より作成)

ソーシャル・イノベーションについて、社会的商品やサービスの開発ならびにそれらを提供する新たな仕組みの創出によって社会的課題の解決が進むこととしてとらえ、図1のような6段階のプロセスを想定し、提示している。創出プロセスにおいては、社会的課題に解決に取り組むための新しい社会的な意義をもつ商品やサービスの開発と提供がステイクホルダーの協働関係によって進められる。その社会的な事業・価値の提供に対して、市場や社会からの支持が得られ、それに伴う関係性や制度が変化する段階を経て、新たな社会的価値の普及プロセスが進展する。

古村ら（2011）及び李（2016）による事例研究では、従来の価値観の転換、社会構造の転換を図ることがソーシャル・イノベーションであり、そのためには、特定の組織や個人の強力なリーダーシップなどにもとづき取り組みが遂行されるのではなく、複数の人々

の協力関係の中で行なわれる多様な関係者同士の相互作用の存在が必要であるとして、共創や協働といった言葉をキーワードとして挙げている。そして、ソーシャル・イノベーション創出の動態的なプロセスを分析するためには、新聞やインターネットなどのメディアによる資料調査、インタビュー調査、非接触調査などのアプローチの有効性を示唆し、質的・定性的調査を実践している。

第2節 調査地域の概要と対象とする事例

1. 調査対象地域の概要（新潟県十日町市）

本研究で調査事例とする大地の芸術祭は十日町市及び隣接する津南町を開催地として2000年（平成12年）から3年に一度行われている世界最大級の国際芸術祭である。この地域は十日町地域または越後妻有地域と称され、十日町市と津南町は地理的条件および地域特性が似ていることから、ここでは十日町市の概要について述べることとする。

十日町市は長野県境の新潟県の南部に位置し、新潟市からは約100km、東京からは約200kmの距離にある。平成17年に旧十日町市と中魚沼郡川西町、中里村、東頸城郡松代町、松之山町と合併して現在の十日町市となった。面積は約590km²あり、このうち山林原野が三分の一を占めている。市の中央部には日本一の大河である信濃川が流れ、中心市街地が位置する十日町盆地をとともに雄大な河岸段丘を形成している。この地域一帯は毎年の平均積雪が2mを越える全国有数の豪雪地帯であり、一年の三分の一以上が降積雪期間となる。交通体系としては、鉄道ではJR飯山線と北越急行ほくほく線がある。道路網については市内に6本の国道が走り、その中でも新潟県と長野県を結ぶ国道117号が中心市街地を南北に通じており、長岡市などと接続している。上越市や南魚沼市と接続している国道253号は関東方面から関越自動車道を経由した市中心部へのアクセスの要となっており、この関越自動車道を経由した東京方面からの所要時間は約3時間である（「十日町市中心市街地活性化基本計画」より）。

平成30年11月現在の十日町市の人口は53,168人である⁵⁾。「統計でみる十日町市」記載の値から、人口推移をみると1950年（昭和25年）の104,318人をピークに人口は減少を続けている。平成22年の年齢別の人口構成をみると、15歳未満が12.4%、15～64

歳が 55.4%、65 歳以上が 32.1%となっている。平成 7 年の値と比較すると 15 歳未満は 3.4 ポイント減少、15～64 歳は 6.3 ポイント減少したのに対し、65 歳以上は 9.6 ポイント増加している。65 歳以上の人口構成比 32.1%という値は、新潟県全体の数値である 26.3%を大きく上回っており、少子高齢化の進行を表している。平成 17 年から平成 27 年までの人口動態をみると、自然動態（出生数と死亡数の差）および社会動態（転入数と転出数の差）ともに、いずれもマイナスであり、両者を合わせた年間の増減は平成 17 年のマイナス 566 人から平成 27 年のマイナス 940 人へと減少幅が大きくなっている。人口の将来予測をみると、5 年ごとに約 3,000 人のペースで人口が減少していく予測となっており、2025 年には 5 万人を、2040 年には 4 万人を割る予測結果が示されている。また高齢化もさらに進み、年齢別の割合を示す予測では、65 歳以上の割合が 2020 年には 39.2%、2040 年には 42.9%になるという予測がなされている（「統計でみる十日町市」より）。

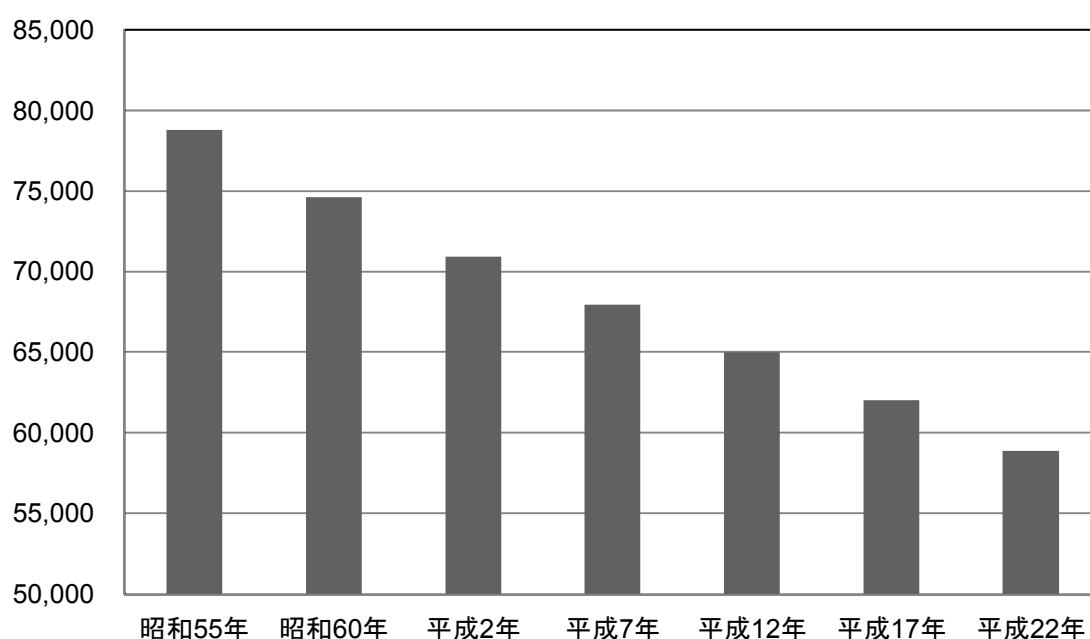


図 2 十日町市の人口推移

表 2 十日町市の人口構成比

(各欄下段のカッコ内の値は「第 126 回新潟県統計年鑑 2015」による新潟県全体の数値)

	平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年	平成 22 年
15 歳未満 人口比(%)	15.8 (16.4)	14.3 (14.8)	13.2 (13.6)	12.4 (12.6)
15～64 歳 人口比(%)	61.7 (65.4)	59.3 (63.9)	57.1 (62.4)	55.4 (61.0)
65 歳以上 人口比(%)	22.5 (18.3)	26.4 (21.3)	29.6 (23.9)	32.1 (26.3)

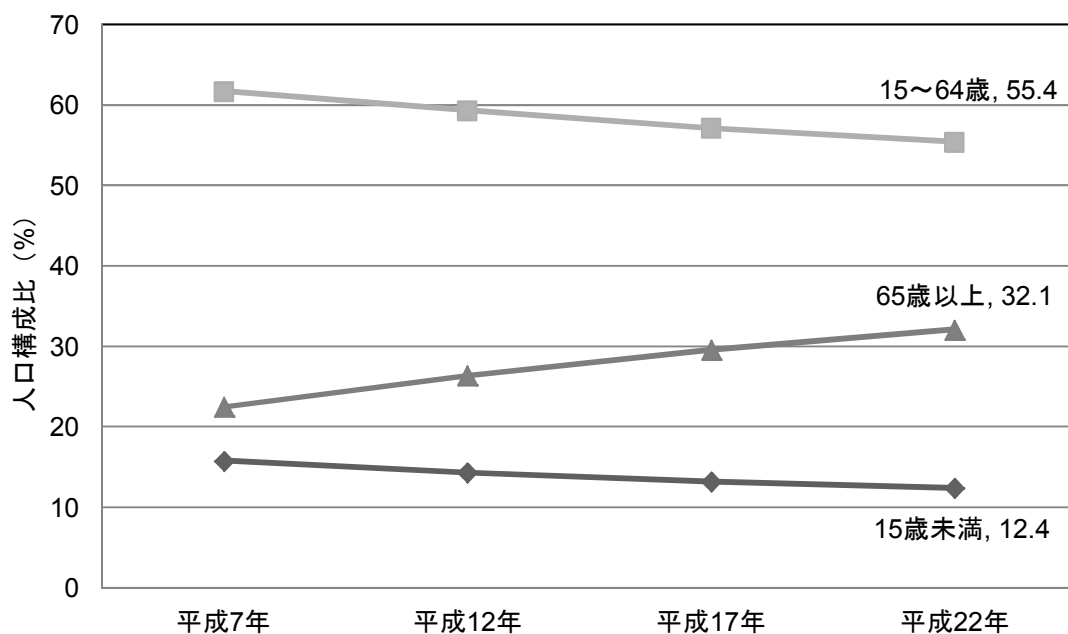


図 3 十日町市の人口構成比の推移

十日町市の人口問題に関しては、日本創生会議の人口減少問題検討分科会が 2014 年 5 月に発表した「増田レポート」と称される報告において、十日町市は 2040 年に若年女性が 50%以上減少する人口が 1 万人以上の市区町村に該当することから消滅の危機に直面するという試算結果が示され、消滅可能性都市の一つに挙げられている(増田編 2015)。

表 3 十日町市の「20～39 歳女性」の将来推計人口と若年女性人口変化率

(日本創成会議のウェブサイトよりデータをダウンロードし、十日町市のデータを抜粋して作成)

	2010 年		2040 年		若年女性人口 変化率
	総人口	20～39 歳 女性人口	総人口	20～39 歳 女性人口	(2010 年→2040 年)
十日町市	58,911	4,873	36,141	2,271	－53.4%

平成 22 年における十日町市の産業構造を区分ごとの就業者数でみると、第 1 次産業が 3,722 人 (12.4%)、第 2 次産業が 9,373 人 (31.3%)、第 3 次産業が 16,515 人 (55.1%) となっている (その他、分類不能 1.2%)。そして、区分ごとの産業規模を市町村内総生産によって比較した。市町村内総生産とは、一年度の間に市町村内の各産業部門の生産活動によって新たに生み出された付加価値を、産業、政府サービス生産者、対家計民間非営利サービス生産者の経済主体別に示したものである。平成 24 年の市町村内総生産を区分ごとにみると、第 1 次産業が 7,077 百万円で構成比 4.01%、第 2 次産業が 41,740 百万円で構成比 23.13%、第 3 次産業が 126,305 百万円で構成比 72.09%であった。十日町市は絹織物産地として有名であり、また魚沼産コシヒカリに代表される米どころでもあるが、統計データからは十日町市は第 3 次産業に従事する人の割合が高く、基幹産業となっていることがわかった。

十日町市では、平成 23 年に隣接する津南町と共同で企業立地促進法に基づく「十日町地域 (十日町市・津南町) 産業活性化基本計画」が策定された。これにより独自の税制優遇制度や助成、融資制度などで雇用の創出および地域産業の育成、新分野への進出、新規産業の支援を行っている。この計画では、農業や製造業の活性化とともに観光産業の振興にも力を入れて取り組むことが挙げられており、そこには「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」の開催と、それに伴う経済波及効果に関する項目もある。この大地の芸術祭を新たな地域ブランドとして位置づけて、この事業の存在を中心として様々な施策に反映することとしている。

2. 調査対象事例（大地の芸術祭）

十日町市は人口減少や過疎化、積雪地帯であるといった地理的特性、旧来の産業（農業、織物産業）の衰退といった課題をもった地域であり、このような背景のもとでアートを中心としたまちづくり、地域再生を掲げて始まったのが「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」である（大和総研 2016）。大地の芸術祭は 2000 年（平成 12 年）に第 1 回が始まり、以後 3 年に一度ずつ、これまでに 7 回開催されている。ここでは大地の芸術祭について、芸術祭開催に至る経緯を含めて概説する。

大地の芸術祭に関する第 1 回から第 6 回までの概要を表 4 に示す（越後妻有大地の芸術祭の里ウェブサイトならびに十日町市ウェブサイト、今までの大地の芸術祭の記録の紹介より）。表のとおり、開催を重ねるごとに作品数、参加集落数、来場者数は増加し、規模を拡大していることがわかる。なお、2018 年 7 月 29 日から 9 月 17 日にかけて開催された第 7 回展については、未だ詳細な開催報告はなされていない。来場者数についてのみアナウンスされ、548,380 人という過去最大の来場者数であったことが報告されている⁶⁾。

表 4 これまでに開催された大地の芸術祭の概要

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回
会期	2000 年 7 月 20 日～ 9 月 10 日	2003 年 7 月 20 日～ 9 月 7 日	2006 年 7 月 23 日～ 9 月 10 日	2009 年 7 月 26 日～ 9 月 13 日	2012 年 7 月 29 日～ 9 月 17 日	2015 年 7 月 26 日～ 9 月 13 日
作品数	153 点	220 点	334 点	365 点	367 点	378 点
参加集落数	28 集落	38 集落	67 集落	92 集落	102 集落	110 集落
参加アーティスト	148 組	157 組	225 組	353 組	310 組	363 組
来場者数	162,800 人	205,100 人	348,997 人	375,311 人	488,848 人	510,690 人
こへび隊登録人数	約 800 人	711 人	930 人	350 人	1,246 人	2,270 人

大地の芸術祭開催のきっかけとなったのが 1994 年に新潟県が創設した「ニューにいがた里創プラン」という施策である。このプランは新潟県内の広域市町村圏を単位として、その広域圏が取り組む事業プロジェクトを支援するものであり、十日町市と津南町により構成される地域（当時は旧十日町市をはじめとする一市三町二村）が第 1 号の認定を受け

た。このプランのもとで十日町地域を現代アートによる取り組みで活性化しようとするコンセプトの「越後妻有アートネックレス構想」が策定された。この構想は「人間は自然に内包される」を理念として、交流人口の増加、地域の情報発信と活性化を目的とするもので、次に示す4つの事業から構成されていた。これらのうち、現在も継続されている事業は大地の芸術祭だけとなっている。

- (1) 越後妻有 8 万人のステキ発見事業 : 地域の特徴や魅力を発見する写真コンテスト
- (2) ステージ事業 : 地域の拠点となる施設の建設整備事業
- (3) 花の道事業 : 広域圏内に花を植えてつなげようという事業
- (4) 大地の芸術祭事業 : 3 年に一度開催されるアートイベント

2000 年に第 1 回の大地の芸術祭が開催されるに至るまでには、アートを中心にすえたソフト面の事業であることや地域活性化への効果が不透明であることなどから地元住民からの理解が得られず、反対の声が多かったという。そのような中で地域住民対象の説明会を数多く実施して理解を広げていき、開催にこぎつけた経緯があった。大地の芸術祭の実施にあたって重要な役割を果たしているのがボランティアのサポート組織である「こへび隊」の存在である。こへび隊は主に首都圏を中心とした学生や社会人からなる芸術祭のサポーターであり、芸術祭の運営や作品制作の手伝い、作品ガイドなどの作業にあたるとともに、住民とコミュニケーションを図りながら地域の中に入り、大地の芸術祭という存在と地域の人々とをつなぐ役割を果たしている。総合ディレクターである北川フラム氏をはじめとする運営側とボランティア組織であるこへび隊の真摯かつ献身的な取り組みによって事業への理解が高まり、地域住民を巻き込んだ活動につながっていると言える（大和総研 2016）。新潟県の里創プランにもとづく「越後妻有アートネックレス構想」の支援補助期間は 10 年であり、それが終了した後の 2008 年には「NPO 法人越後妻有里山協力機構」が設立され、大地の芸術祭の運営やこへび隊の募集・運営活動、拠点施設および作品の管理などに携わっている。大地の芸術祭の舞台となっているこの地域は「大地の芸術祭の里」と称され、芸術祭の開催期間だけでなく、一年を通した観光企画が展開されている。例えば、雪花火や雪アートプロジェクトといった冬に実施されるイベントも行われている。行政機関や住民、地域外からのボランティア、そしてイベントへの参加者などに

よる大地の芸術祭への理解・協力が広がることで、「越後妻有アートネックレス構想」に掲げられていた目的である芸術による地域の再生が図られている。

経済的側面から見ても、当初あった施設建設による投資は減少したものの、大地の芸術祭への消費支出による経済波及効果は堅実なものがある。地元の取り組みの中には、名産品のパッケージを新たにデザインして大地の芸術祭の里の公式ホームページで商品を紹介するなどの試みもあり、売り上げを大きく増やしたものもあった。このように大地の芸術祭開催に伴う取り組みは、前述のとおり、交流人口の増加や地域の認知向上という観点から示される社会的な側面での効果とともに、経済的な波及効果も認められる（大和総研2016）。

十日町市は、大地の芸術祭開催をきっかけとするアートのあるまちづくりを地域資源として観光客の来訪、交流人口の拡大を進めており、地域の集落・町内で地域コミュニティ活動の活発化やまちづくりに対する意識が高まるなど、地域活性化における様々な成果が報告されている。また各メディアを通じた情報発信による地域の認知度向上にも効果を発揮している（「十日町市中心市街地活性化基本計画」より）。

第3節 まとめ

本章では次章以降に実施する実証研究に先立ち、調査対象事例である大地の芸術祭ならびにその中心的開催地である新潟県十日町市について検証を行った。そこからは、長期にわたって継続している人口減少問題、少子高齢化の進展、産業構造の変化、そして、地域活性化に寄与する大地の芸術祭というイベントの存在などの事柄が見てとれた。

統計データからみる十日町市の基幹産業は、かつては米を中心とする農業や着物などの織物産業、また土木建築産業といった第1次・第2次産業が主要であったが、現在は、温泉などの様々な資源に依拠した宿泊・観光を主とする第3次産業が主要な産業となっている。2000年から開催されている大地の芸術祭をきっかけとして始まったアートによるまちづくりの取り組みも進められ、数多くの来訪者らによる交流人口の拡大や当該地域の認知度の向上といった効果を上げ、大地の芸術祭は十日町市にとって重要な観光資源となっている。アートによる地域活性化施策の先駆的な成功事例となった大地の芸術祭は、その

取り組みに多くの人々を巻き込み、人々の思考や行動に影響を与え、地域と人々との関わりを変容させている。

社会的課題の解決を志向する取り組みにおいては、ソーシャル・イノベーションという考え方を提示した。ソーシャル・イノベーションという概念を理解するフレームワークとして、その進展プロセスが示されている。ソーシャル・イノベーションにおいては、社会的意義をもつ取り組みが関係者同士の相互作用のもとでの協働・連携により進展し、新たな仕組みの創出によって従来の価値観や社会構造の転換が図られ、社会的課題の解決が進むととらえられているが、ソーシャル・イノベーションの行為を導き出す作用はどのようなプロセスで形成・進展するのかについては明示されていないことが指摘できる。ソーシャル・イノベーションの視点では、社会的課題の解決を志向した新たな価値・意味創造の実行プロセスをとらえるにあたっては、動態的な枠組みが必要とされており、先行研究事例からは、様々なメディア等の資料調査、インタビュー調査などのアプローチによる分析手法の有効性が提示されている。これら調査分析や関係性・相互作用といった側面については次章以降の実証調査研究により議論を進めていきたい。

大地の芸術祭は、当初の計画案段階を含めると 24 年前から十日町地域との関わりがある。この大地の芸術祭がどのようなかたちで人々の意識や行動に影響を与え、それらの変容を形成したのかという点については、次章以降の実証研究をもって読み解いていきたい。本研究での調査事例である大地の芸術祭における実証的検証は、大地の芸術祭に関する報告書や資料を対象としたテキスト分析ならびにアンケート調査にもとづく定量的分析の手法によって課題にアプローチし、検証を試みる。

第 3 章の注

- 1) これら人口に関するデータは、国立社会保障・人口問題研究所によるもので、参議院調査室（2015）及び増田編（2014）から引用した。
- 2) 「都道府県別の人口増減率と各種指標との関係」として、事業所数（ $R^2=0.75$ ）、利益計上法人数（ $R^2=0.36$ ）、実質民間総生産額（ $R^2=0.26$ ）の 3 つの指標を示している。

- 3) 野村総合研究所（2015）では、大地の芸術祭だけではなく、芸術祭のボランティア組織（こへび隊）が地域コミュニティに形成に寄与していることも事例として報告され、その活動は芸術祭の開催期間だけにとどまらず、地域を超えた強固なコミュニティ形成の媒体としての機能を果たしていることが述べられている。
- 4) Westley et al.（2006：184-186）は、独創的な組織論者としてリーダーシップと組織の両方を深く理解する上で大きな影響を与え、個人間の関係性と集団行動の詳細な点を探究してきたとして Weick の名前を挙げ、変化や柔軟性、創発、相互作用の性質に関する指摘をしている。
- 5) 直近の十日町市の人口は、十日町市住民基本台帳人口による（十日町市ホームページ http://www.city.tokamachi.lg.jp/shisei_machidukuri/F100/F101/1454068621571.html より）。以降の十日町市の人口に関する議論は「統計でみる十日町市」掲載の値にもとづく。
- 6) 第7回展の来場者数については、十日町市観光交流課からリリースされた平成30年9月26日付の報道資料で明らかにされた（大地の芸術祭の里ウェブサイト越後妻有大地の芸術祭の里ウェブサイト http://www.echigo-tsumari.jp/news/2018/09/news_20180927_01 よりリンク）。

第4章 大地の芸術祭を対象としたテキスト分析による事例研究

本章では、過去開催された第1回から第6回までの大地の芸術祭を対象として、十日町市の市報や大地の芸術祭の総括報告書に掲載された記事内容などをもとにテキスト分析を行うことで、大地の芸術祭の意義、開催地域との関わり、地元住民の意識変容といった点についての検討を行うことを目的とする。解釈主義的アプローチでは文章や言葉、会話といった定性的データが分析対象となるが、本章では、Weick が立脚するシンボリック・パースペクティブの視座に則り、大地の芸術祭に関わる資料や報告書、自由記述アンケートの回答内容を対象としたテキスト分析を実施する。テキスト分析を用いた検討により、大地の芸術祭というイベントが地元地域にどのような効果・影響を及ぼしたのか、大地の芸術祭に関わる地元住民の意識や行動がどのように変化したのかについて明らかにすることで、今後の大地の芸術祭と十日町市における検討課題を見い出し、次章のアンケート調査による定量的実証調査へとつなげたいと考える。

テキスト分析の調査対象は、十日町市の広報誌である「市報とおかまち」（第1節）、そして、大地の芸術祭の各開催回終了後に刊行されている「総括報告書」である。総括報告書は、本文部分を第2節で、関係者などのアンケート結果が記載されている資料編を第3節で分析・検証した。さらに、大地の芸術祭に関わる地元住民の意識変容を調べるために、第3回以降の報告書に記載されている作品設置集落・町内の代表者ならびに地元商業者を対象とした自由記述アンケート結果を抜粋し、調査・分析した（第4節）。

ソーシャル・イノベーションという動態的な概念で表される地域活性化の取り組みを読み解くにあたっては、言語やテキストといった定性的資料にもとづく調査・分析が有効とされる¹⁾。そして、本研究において議論のフレームワークとしている社会構成主義を理論的前提とする Weick 組織化論、社会的表象理論にもとづく考察を展開するにあたっては、言説という概念で表される言葉やテキストを題材とする様々な記事、資料、メディア文献などを対象とするテキスト分析によるアプローチは有意義性を持つものとして示されており²⁾、本研究における調査事例である大地の芸術祭に関する各資料にもとづくテキスト分析を通して本研究の理論的背景に依拠した実証的研究への展開事例に結節する知見の導出を目指す。

第1節 「市報とおかまち」における大地の芸術祭

1. テキストの前処理と分析手法

本節において分析対象としたのは、十日町市の広報誌「市報とおかまち」である³⁾。これは十日町市内の各家庭に配布され、十日町市に関する各種イベント情報などが掲載されている。

大地の芸術祭は1994年度（平成6年度）に新潟県が提唱した「第5次新潟県長期総合計画」の中に織り込まれた振興策にもとづき、十日町地域広域市町村圏において十日町地域ニューにいがた里創（りそう）プランが策定されたことに端を発するものである。十日町市の広報誌「市報とおかまち」では、里創プラン策定から大地の芸術祭というアートイベント開催に至る過程、芸術祭に関わる様々な取り組みや地元住民らの活動などの変遷について述べられていることから、里創プランが制定された1995年（平成7年）から2018年（平成30年）6月までの市報とおかまちの中の大地の芸術祭に関連する記事を抜粋して計量テキスト分析による解析を実施し、記事内容を通して大地の芸術祭が十日町市にとって、また、地元住民にとってどのような存在であったのかについて検証を試みた。

まず、「市報とおかまち」の記事の中から大地の芸術祭（計画段階の里創プランに関する事項も含む）に関する記事内容を抽出し、テキストファイルとして入力した。それらを各月ごとの記載ページ量に換算して、各月ごとにデータをMicrosoft excelに入力してグラフ化し、1995年から2018年までの市報とおかまちにおける大地の芸術祭に関する記事掲載量の変化・推移を可視化した。その結果をもとに全調査対象期間を4つの期間に分けて、各期間ごとのテキスト分析を実施した。

テキスト分析には、計量テキスト分析ツール「KH Coder」⁴⁾を用いた。ここで用いた分析手法は、（1）文書全体を対象とした抽出語（多く出現していた語）リストの作成、（2）4つの調査対象期間ごとの自己組織化マップの作成、そして、（3）4つの調査対象期間ごとの特徴語の抽出という分析作業を行った。KH Coderによる作業にあたっては、語句表現の揺れの統一、語句の登録、使用しない語の指定を行った上で分析を実施する⁵⁾。妥当な結果となるように、「語の取捨選択」－「前処理」－「抽出語リストの作成」－「特

徴語の抽出」の実行プロセスを繰り返し行い、一連の前処理設定を実施した。

2. 市報とおかまちにおける大地の芸術祭関連記事の推移

1995 年から 2018 年までの市報とおかまちにおける大地の芸術祭の関連記事について、各月ごとに芸術祭関連記事の掲載量をページ換算して取りまとめた⁶⁾。その結果をグラフ(図 1) に示す。

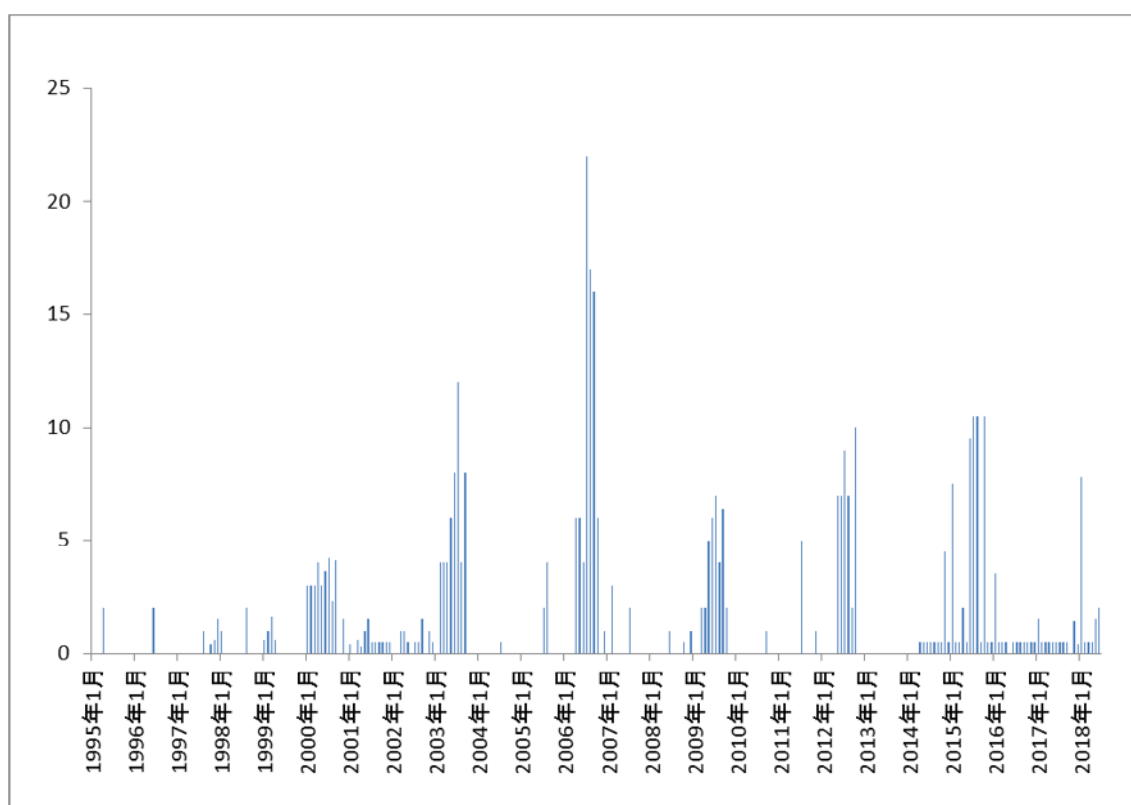


図 1 市報とおかまちにおける大地の芸術祭関連記事の推移(1995 年～2018 年)

記事の量は大地の芸術祭が開催された年(2000 年、2003 年、2006 年、2009 年、2012 年、2015 年)に多くなり、グラフ上にピークが現れており、特に 2006 年の記事量が多くなっている。また 2014 年以降は毎月、大地の芸術祭に関わる記事が市報に掲載されていることが見てとれる。

以下、本節では調査対象期間を以下の 4 つの時期に分けて分析を試みることにする。

- (1) 1995 年～2000 年
- (2) 2001 年～2006 年
- (3) 2007 年～2012 年
- (4) 2013 年～2018 年

4 つに分けたそれぞれの時期は、下記のように意味づけられる。

- (1) 1995 年～2000 年：里創プランから大地の芸術祭というアートイベント開催が計画され初回の芸術祭が実施された時期
- (2) 2001 年～2006 年：10 年間の県の事業としての里創プランが終了し、これまでの総括と今後の展開が模索された時期
- (3) 2007 年～2012 年：芸術祭の実施・運営に関わる NPO 法人の設立など、新たな体制のもとイベント開催がなされた時期
- (4) 2013 年～2018 年：通年イベントの開催や外国人来訪者の増加といった新規課題に向き合う時期

なお、2013 年は芸術祭関連記事の掲載は無かった。また、2014 年以降に毎号記事が掲載されているが、これは、こへび隊や地元サポーターの照会や活動に関することなどの連載が開始されたためである。

KH Coder による分析にあたり、適切に分析作業が進むよう、語句の登録、使用しない語の指定を行った。ここで登録した語句ならびに不使用指定の語は以下のとおりである。

・登録した語句

こへび隊、こへび、農舞台、大地の芸術祭、北川フラム、アートトリエンナーレ、キナーレ、トリエンナーレ、協働、PR、ベリー、キョロロ、JISAPO、NPO、T シャツ、名ヶ山、JR、バスタク、10DAYS、(笑)、サポーター、誘客、Facebook、Roooots、ミオン、へび、にいがたサポーターズ、セブン・イレブン、リピーター、リデザイン、ラジコン、里創、雪花火、越後妻有

・不使用指定の語

月、午後、午前、年、円

3. 計量テキスト分析による検証

文書全体の抽出語リストの結果は表1のとおりである。最も多く登場する言葉が「作品」の1537回、次いで「地域」1125回、「大地の芸術祭」877回、「人」868回、「芸術」742回の順である。それ以降の語句は500回未満の出現回数であった。

次に、4つに分けた各期間の自己組織化マップの結果（図2）ならびに特徴語抽出結果（表2～5）を示す。

表2～5の特徴語リストは、各年において、分析対象データ全体に比して特に高い確率で出現している言葉の上位10個を抽出した結果を示している。右欄の数字は、Jaccardの類似性測度である。

1995年～2000年の期間を対象とした自己組織化マップでは、「里創プラン」、「アート・地域整備」、「県・十日町・市町村」、「事業計画・進展」、「大地の芸術祭・作家・こへび隊・作品展開」といった言葉を含む各クラスターに分類された。この期間の特徴語分析の結果からも、事業、地域、大地の芸術祭、妻有、整備といった語句が抽出されており、テキスト分析の結果からは、里創プランや大地の芸術祭を通じて地域活性化を志向した公共事業推進的な意味合いが強く現れた。

2001年～2006年の期間は、過去3回にわたり大地の芸術祭が開催され、県の事業として推進されてきた里創プランが終了することから、芸術祭の位置づけと関わりについて改めて考えを巡らす期間となった。自己組織化マップのクラスターからは「鑑賞・パスポート・販売」、「大地の芸術祭・期間・作品・紹介」、「越後妻有・企画・プロジェクト・イベント・ワークショップ・募集・開催」といった芸術祭の誘客施策に関する言葉、そして、「制作・展示・設置・交流活動」、「作家・ボランティア・住民・協働・協力・地元・芸術・楽しむ」といったアート作品を通じた人々の交流、作家やボランティア、地域住民との協力連携の推進といった新たな関係性構築に関連する言葉が現れ、住民の間に芸術祭が一定の評価を得てきていることを示唆している。協働⁷⁾という言葉は2002年の特徴語にも表れており、この時期の芸術祭を表す代表的なテキストといえる。

2007年～2012年の間の自己組織化マップからは、新たなアート作品への取り組みを示す「小学校・デザイン」という言葉、2012年にリニューアルされて魅力を増したキナー

レや松代地区の中心施設である農舞台という言葉を含むクラスターが現れて里山アートを主題とする大地の芸術祭の訴求点が明示されている。そして、「展示・コース・子ども」、「ワークショップ・協力・鑑賞・パスポート」というクラスターからは子供たちや地域の人々を巻き込んだ芸術祭関連の活動の推進が見てとれる。また、「世界・展開・プロジェクト・交流・開催・イベント」といった言葉からは、十日町地域にとどまらず、世界からの視点を意識して海外に向けてアピールを行い、世界的価値を高めていこうとする、広く世界に目を向けた取り組みの進展も示唆されている。

2013年～2018年の期間では、識者と市長との対談やこへび隊・地元サポーターの活動報告といった内容が定期的に掲載されている。市長と対談した増田寛也氏（地方の人口減少に焦点をあてて消滅可能性都市の概念を提言）や高島宏平氏（大地の芸術祭オフィシャルサポーター・リーダー、「オイシックスドット大地株式会社」代表取締役社長）の名前も出てきており、そこで述べられた地域が抱える種々の課題を示した「国・都市・地域・集落・人口・移住・プロジェクト・展開」といった言葉が現れている。その他、「協力・支援・大地の芸術祭」、「作家・地元・皆さん・交流・関わる・盛り上げる・芸術」、「楽しい・活動・参加」といった語群を有するクラスターが現れ、アートを通して地元住民らの交流活動が盛んに行われていることが類推され、大地の芸術祭が十日町市にとって欠かせざる存在となったことが認識される。

表 1 「市報とおかまち」の大地の芸術祭関連語の抽出語リスト(頻出 150 語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
作品	1537	プラン	138	市民	88
地域	1125	持つ	137	発表	88
大地の芸術祭	877	住民	136	必要	88
人	868	アートトリエンナーレ	135	里山	88
芸術	742	期間	135	施設	87
参加	497	使う	134	新潟	87
越後妻有	461	自分	130	前	87
地元	443	地区	127	運営	86
十日町	429	文化	126	大地	86
アート	423	訪れる	126	お客	84
集落	421	夏	125	テーマ	84
思う	405	今	124	市	84
開催	376	子ども	124	小学校	84
作家	363	来訪	124	総合	84
こへび隊	361	ほか	121	津南	84
皆さん	330	中心	119	それぞれ	82
活動	325	美術館	119	新た	82
行う	314	情報	118	発見	82
制作	311	一つ	115	良い	82
今回	259	会場	115	力	82
サポーター	255	ボランティア	110	風景	81
作る	254	募集	108	都市	80
事業	251	現代	107	農舞台	80
イベント	232	案内	105	美術	80
展開	221	向ける	105	コース	79
交流	220	写真	105	委員	79
自然	203	知る	105	空間	79
妻有	200	来る	105	振興	79
世界	199	ツアー	104	関わる	78
魅力	197	雪	103	思い	77
場所	189	回	101	環境	76
ワークショップ	188	東京	101	人々	76
プロジェクト	173	作業	100	キナーレ	75
鑑賞	172	ステージ	98	市内	75
設置	169	新しい	98	利用	75
見る	168	整備	98	協働	74
日本	168	里創	98	現在	74
市長	159	進める	97	通信	74
考える	155	土	97	光	73
紹介	155	さまざま	96	人口	73
アーティスト	154	花	96	構想	72
多く	153	平成	95	今年	71
家	152	市町村	92	体験	71
楽しむ	149	多い	92	時間	70
会期	146	販売	92	松代	70
展示	145	予定	92	川西	69
感じる	144	ガイド	91	言う	68
協力	142	たくさん	89	十日町	68
パスポート	140	発信	89	声	68
企画	140	楽しい	88	エリア	67

表 2 「市報とおかまち」1995 年～2000 年の特徴語リスト

1995年(平成7年)		1996年(平成8年)		1997年(平成9年)		1998年(平成10年)	
織り込む	.200	共同	.192	構想	.184	真野	.323
目前	.200	妻有郷	.182	妻有郷	.173	平山	.216
見据える	.200	構想	.157	整備	.150	分かる	.154
制定	.200	県	.143	事業	.132	発見	.111
策定	.182	整備	.133	地域	.124	北川	.111
抜粋	.167	ネックレス	.133	プラン	.117	ステキ	.109
職員	.167	香り	.130	交流	.108	事業	.097
特性	.167	目標	.130	行う	.107	フラム	.097
設定	.167	市町村	.130	里創	.107	名前	.094
進む	.167	共通	.125	文化	.104	予算	.094
1999年(平成11年)		2000年(平成12年)					
事業	.190	作品	.317				
里創	.122	大地の芸術祭	.312				
整備	.119	参加	.137				
花	.117	越後妻有	.134				
プラン	.113	アーティスト	.113				
アート	.104	芸術	.106				
ステキ	.102	人	.103				
地域	.097	皆さん	.096				
アーティスト	.094	ワークショップ	.093				
発見	.091	紹介	.089				

表 3 「市報とおかまち」2001 年～2006 年の特徴語リスト

2001年(平成13年)		2002年(平成14年)		2003年(平成15年)		2004年(平成16年)	
プラン	.144	行う	.100	作品	.233	日程	.200
大地の芸術祭	.127	プラン	.082	十日町	.160	てい談	.182
里創	.113	イベント	.069	場所	.145	県知事	.143
公募	.091	作品	.064	大地の芸術祭	.130	克彦	.143
会議	.090	花びら	.063	展開	.094	平山	.133
行う	.079	大地の芸術祭	.061	参加	.090	日比野	.133
通信	.077	通信	.059	作家	.088	10DAYS	.125
検討	.076	プレイベント	.058	ステージ	.087	発表	.120
夙	.073	集落	.057	作る	.079	里山	.111
開催	.072	協働	.056	制作	.078	決まる	.111
2005年(平成17年)		2006年(平成18年)					
10DAYS	.174	地域	.209				
エリア	.150	芸術	.197				
来年	.140	人	.181				
松代	.098	思う	.106				
繭	.098	集落	.094				
ワークショップ	.089	アート	.087				
向ける	.081	開催	.080				
修	.079	今回	.073				
蓬平	.077	皆さん	.062				
プロジェクト	.071	こへび隊	.056				

表 4 「市報とおかまち」2007 年～2012 年の特徴語リスト

2007年(平成19年)		2008年(平成20年)		2009年(平成21年)		2010年(平成22年)	
地域	.108	田んぼ	.211	作品	.196	大橋	.333
思う	.105	都市	.149	芸術	.145	悼	.222
年寄り	.100	農村	.143	大地の芸術祭	.126	こへび隊	.182
作る	.091	東田尻	.135	制作	.117	専攻	.182
人	.083	平成	.125	地域	.112	頑張る	.167
進める	.079	白羽毛	.118	作家	.103	活動	.143
世界	.079	オーナー	.118	集落	.098	ボランティア	.143
資産	.078	発表	.096	日本	.096	学生	.125
価値	.076	クロスカントリー	.088	皆さん	.083	元気	.111
活動	.073	農作業	.086	今回	.083	以来	.111
2011年(平成23年)		2012年(平成24年)					
アート	.078	越後妻有	.080				
プロジェクト	.074	イベント	.040				
越後妻有	.071	里山	.038				
大地の芸術祭	.070	紹介	.038				
予定	.068	お客	.034				
ツアー	.062	キナーレ	.034				
企画	.058	現代	.033				
発表	.055	美術館	.032				
参加	.052	魅力	.032				
アーティスト	.050	パスポート	.031				

表 5 「市報とおかまち」2013 年～2018 年の特徴語リスト

2013年(平成25年)		2014年(平成26年)		2015年(平成27年)		2016年(平成28年)	
無い	1.000	こへび隊	.153	作品	.098	小田切	.143
		地域	.149	十日町	.071	地元	.115
		越後妻有	.121	集落	.039	サポーター	.109
		人	.119	場所	.039	地域	.102
		思う	.110	増田	.037	市長	.101
		魅力	.109	所在地	.036	人	.099
		活動	.103	コース	.036	十日町	.087
		大地の芸術祭	.103	パスポート	.036	活動	.084
		サポーター	.091	案内	.028	思う	.083
		アート	.088	お客	.024	農山村	.079
2017年(平成29年)		2018年(平成30年)					
地元	.147	高島	.153				
サポーター	.128	大地の芸術祭	.124				
こへび隊	.090	越後妻有	.112				
活動	.088	市長	.093				
JISAPO	.082	サポーター	.082				
芸術	.064	オフィシャル	.065				
参加	.064	活動	.060				
盛り上げる	.063	作品	.060				
大地の芸術祭	.062	芸術	.058				
日誌	.058	アート	.054				

第2節 総括報告書（本文）のテキスト分析

1. テキストの前処理と分析手法

本節において分析対象としたのは、第1回～6回の大地の芸術祭総括報告書の本文部分である。総括報告書は、大地の芸術祭の各回展の閉幕後に実行委員会から発行されており、今回の分析には「十日町市ウェブサイト：今までの大地の芸術祭の記録の紹介」からダウンロードした資料ならびに十日町市より提供いただいた文書ファイルをもとにした。なお、総括報告書中の「資料編」については、作家名や作品名、芸術祭の実施経費に関わる諸表の掲載が多いために分析対象からは除いた。資料編のアンケート自由回答結果については次節で分析を試みることとする。

KH Coder によるテキスト分析を実施した。第1回～6回の報告書を一つのテキスト形式のファイルにまとめ、その文書全体を対象にして、抽出語（多く出現していた語）一覧、共起ネットワークの作成、特徴語の抽出、対応分析を行った。

第1回～6回をとおして総括報告書を分析するにあたって、報告書を構成する各章の名称を統一して分析した。具体的には下記のとおりである。

今回分析の統一名称	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
はじめに	（章名なし）	はじめに	・本書の位置づけ ・第3回展を総括するにあたり	はじめに	はじめに	はじめに
I 事業全体の評価	I. 期待された開催公開に対する総括	I. 期待された開催効果に対する総括	I 期待された開催効果に対する総括	I 事業全体の評価	I 事業全体の評価	I 事業全体の評価
II 個々の取り組みの検証	II. 主要な取り組みに対する総括	II. 主要な取り組みに対する総括	II 主要な取組に対する総括 III “越後妻有アートトリエンナーレ”10年間を振り返って	II 個々の取り組みの検証	II 個々の取り組みの検証	II 個々の取組みの検証
III 次回に向けて	III. 今後への展望	III. 第3回に向けた取り組み	IV 次回に向けて	III 次回に向けて	III 次回に向けて	III 次回に向けて

KH Coder による分析にあたり、適切に分析作業が進むよう、語句の登録、使用しない語の指定を行った。ここで登録した語句ならびに不使用指定の語は以下のとおりである。

- ・登録した語句

越後妻有、大地の芸術祭、芸術祭、農舞台、こへび、こへび隊、里山協働機構、実行委員、
おおへび、リピーター、中山間地、相半ば、トリムコーポレーション、もよう、感謝の意、
主な、オンリーワン、透明性、アートネックレス、ニューにいがた、里創プラン

・不使用指定の語

年、月、今回、株、ほか、会、隊、祝、術、よう、域

2. 総括報告書（本文）全体をとおした分析・検証

総括報告書全体をとおして多く出現していた語を抽出した結果を表 6 に示す。報告書全体からは、「作品」「制作」「アート」「芸術祭」「鑑賞」といった芸術・アートに関する言葉、事業活動・イベント運営に関する言葉、そして経済活動などにもとづく地域活性に関する言葉が多く現れていることが見てとれる。これら抽出語をもとにして語同士のつながりを共起ネットワーク（図 3）を作成して観察すると、強いつながりをもつ言葉の組み合わせとしては、次のようなものが見てとれる。共起ネットワークは、同じ段落によく現れる（共起する）語同士を線で結んだネットワークで、特定の語と関連が強い語のネットワークを描いたものである。ここでは強い共起関係ほど太い線で描き、出現回数の多い語ほど大きな円で描いている。

「交流」－「住民」－「参加」

「地域」－「住民」

「PR」－「イベント」

「情報」－「発信」

「補助」－「助成」－「企業」－「団体」

「パスポート」－「販売」

「施設」－「宿泊」

「ツアー」－「バス」－「利用」

この結果からは、大地の芸術祭が掲げる命題として住民主体での地域活性化のための交流を図り、外部に向けては、このイベントの PR のための情報発信を行い、パスポート販売や宿泊施設、ツアーバス利用などの面で充実を図り、来訪者の満足度高めることが肝要

である旨の内容が述べられていることが分かる。

共起ネットワークから強いつながりが認められる「情報発信と観光」については、KWIC
コンコーダンス（key words in context、ある語がどのような文脈で使用されているか検
索、確認する機能）で関連する語句が登場する場面を検証してみると、第1回～3回まで
は口コミという言葉が情報発信に関して多く出現する。来訪者による口コミ（インターネ
ットでのブログなども含む）効果が大地の芸術祭の認知向上、魅力の発信において影響を
及ぼしていたことが分かる。この口コミという言葉は第4回以降の報告書では使用されて
いない。代わって、ホームページ（HP）という言葉が第2回から、インターネットが第3
回から、そして、Twitter や Facebook、SNS という言葉が第5回から現れるようになっ
た。インターネットを舞台とする SNS ツールの変遷とともに、情報発信のあり方が変化
してきたことが見てとれる。今後は Twitter と併せ、Instagram が主たる情報発信ツ
ールになるのではないかと推察される。

表 6 大地の芸術祭総括報告書(本文)における抽出語リスト(頻出 150 語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
作品	711	検討	103	アーティスト	59
地域	612	企画	97	場所	59
来訪	390	宿泊	97	評価	59
必要	389	バス	95	域内	58
芸術祭	360	中心	94	増える	58
大地の芸術祭	314	こへび	92	配布	57
イベント	261	継続	91	準備	56
会期	257	連携	90	全体	56
事業	257	補助	89	内容	56
情報	257	企業	88	里山協働機構	56
課題	235	活用	87	美術館	55
住民	225	事務	87	駅	53
設置	214	展開	87	見る	53
行う	207	助成	84	思う	53
前回	197	協力	83	全国	53
参加	189	客	82	組織	53
越後妻有	183	掲載	80	駐車	53
開催	182	時間	79	求める	52
今後	182	アンケート	78	重要	52
観光	176	活性	78	総合	52
販売	176	エリア	77	広告	51
成果	174	協賛	77	設定	51
案内	171	大きい	77	提供	50
集落	171	ガイド	76	充実	49
十日町	164	管理	76	各種	48
施設	162	県内	76	進める	48
地元	159	次回	76	人	48
交流	155	支援	75	東京	48
効果	150	サポーター	74	十分	47
新潟	147	主催	74	関わる	46
パスポート	139	確保	73	売上	46
運営	135	コース	71	スタッフ	45
多い	134	経済	71	マップ	45
団体	134	プロジェクト	70	不足	45
鑑賞	133	結果	70	様々	45
利用	132	受ける	70	システム	44
多く	127	図る	69	行政	44
制作	122	津南	69	受入	44
発信	121	看板	68	集客	44
アート	114	海外	65	メディア	43
体制	114	運行	64	可能	43
交通	111	向ける	64	機能	43
増加	110	整備	64	少ない	43
対応	107	声	62	問題	43
活動	106	得る	62	ギャラリー	42
考える	106	広報	61	ワークショップ	42
関係	105	含める	60	委託	42
実施	105	振興	60	意見	42
ツアー	104	新た	60	作家	42
実行委員	104	来場	60	持つ	42

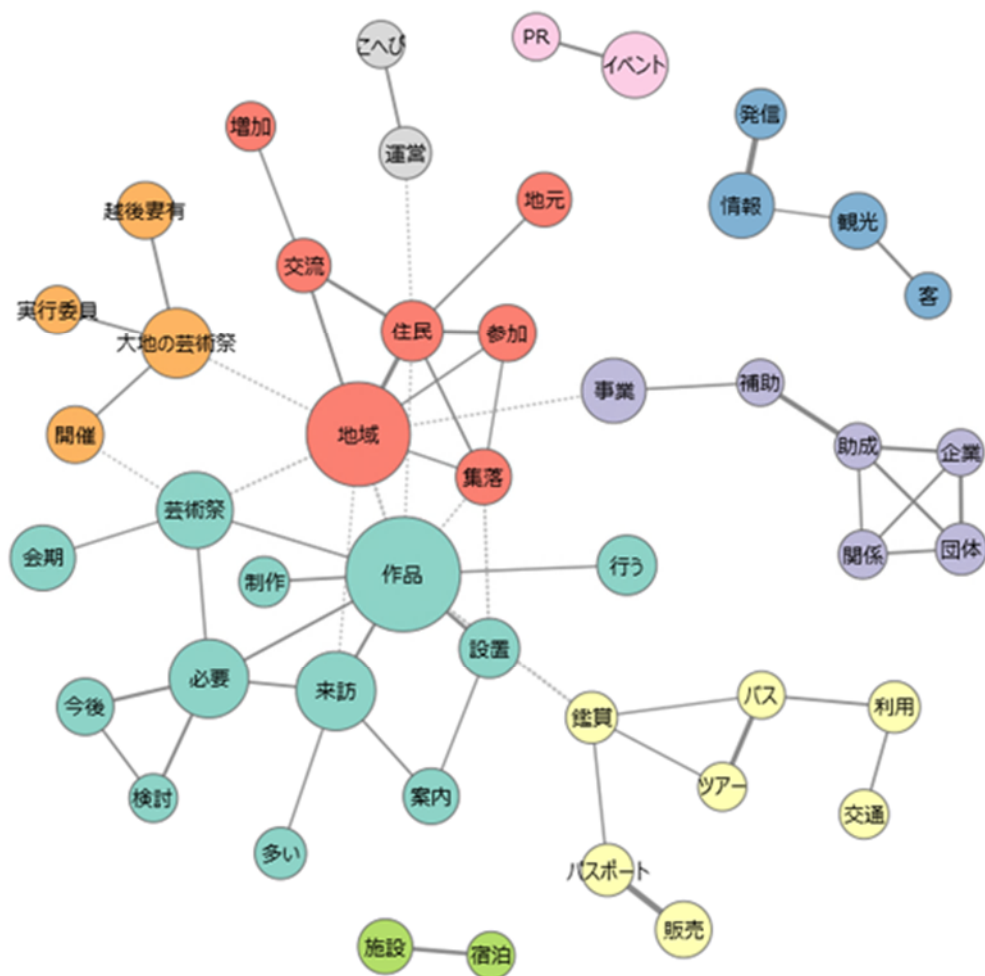


図3 大地の芸術祭総括報告書(本文)における共起ネットワーク

3. 総括報告書(本文)の各開催回ごとの分析・検証

表7に示した開催回ごとの特徴語を見てみると、第1回が2000年に始まって以降の報告書内で使用されている特徴的な言葉の変化が見てとれる。

表 7 各開催回ごとの特徴語一覧

第1回大地の芸術祭総括報告書		第2回大地の芸術祭総括報告書		第3回大地の芸術祭総括報告書	
事業	.125	芸術祭	.110	今後	.157
地域	.107	来訪	.097	来訪	.132
必要	.095	地域	.097	地域	.127
交流	.094	必要	.093	必要	.113
参加	.084	効果	.092	住民	.107
イベント	.078	作品	.083	作品	.103
アート	.070	住民	.082	芸術祭	.093
大地の芸術祭	.068	対応	.081	会期	.092
住民	.068	考える	.080	設置	.089
効果	.059	参加	.080	検討	.077
第4回大地の芸術祭総括報告書		第5回大地の芸術祭総括報告書		第6回大地の芸術祭総括報告書	
芸術祭	.154	課題	.111	大地の芸術祭	.103
来訪	.096	大地の芸術祭	.094	前回	.096
成果	.095	成果	.083	情報	.076
課題	.092	情報	.071	成果	.069
大地の芸術祭	.090	前回	.068	主催	.061
行う	.083	越後妻有	.067	越後妻有	.060
今後	.064	イベント	.066	観光	.057
十日町	.063	団体	.063	発信	.057
新潟	.059	行う	.061	施設	.056
開催	.055	運営	.058	十日町	.054

大地の芸術祭は、新潟県が策定した地域活性化策「ニューにいがた里創プラン」にもとづき計画された「越後妻有アートネックレス整備構想」の一事業としてスタートした。新潟県と、十日町市をはじめとする 6 市町村との連携による広域事業としての性格をもつ大地の芸術祭は、現代アートを用いて、交流人口の増加といった地方の活性化を目指したもののだが、先駆的事例であるがゆえに地域住民の理解を得ることの困難性が指摘され、報告書においても、芸術祭の必要性や地域への効果、住民が主体となって参画することなどについて言及した内容となっていることがうかがえる。

「里創プラン」は 10 年間にわたる長期プロジェクトであり、それが終了して県の財政的支援が得られなくなった第 4 回以降は、改めて事業として成果が問われるイベントとなり、財政面も含めて芸術祭に関わる十日町地域の自立性が求められる状況での開催となった。第 4 回～6 回の報告書における特徴語のリストからは、今後の継続的開催に向けて事業運営をいかに行うのか、十日町・越後妻有の観光や情報発信をどうするのか、といった観点で内容が構成され、当地域における大地の芸術祭が果たすべき役割、求められる期待にどのようにして応えていくのかということが問われる内容となっている。

これら各開催回を対象とする対応分析を行った結果を図4に示す。ここでは、原点(0,0)付近に特徴のない語が集まり、原点から離れている語ほど特徴的な語といえる。第1回の報告書は、中心から大きく外れた左上部分に位置し、他のものと比べて特徴的な内容となっていることがうかがえる。大地の芸術祭という過去に先例のない、地方の里山を舞台とする国際的なアートイベントという新しい事業がスタートして、その実施運営に関わり、アーティストやボランティアなど地域外の人々との交流、ふれあいがあつたことなど、地元住民や地域コミュニティに様々な影響があつたのではないかとうかがえる。

第2回と第3回は図の左下部分に位置し、地域や住民とこへび隊、来訪者との関わり、芸術祭の開催や今後の継続についてどのように考えるのか、また、芸術祭が地元住民に認知されるにつれ、その会期や開催期間（トリエンナーレでいいのかどうか）に関する言及もなされるようになったことが見受けられる。

第4回～6回は中心部からやや右側にそれぞれ位置している。前述のとおり、第4回からは新潟県の財政支援が終わり、大地の芸術祭を実施する地元自治体の、より主体的な関わりが求められるようになった。十日町・越後妻有地域を舞台として開催される大地の芸術祭をどのようにして展開していくのか、実行委員などイベントの運営主体の体制はどうするのか、地元地域の情報発信、来訪者に対する観光案内や宿泊、ツアーなどの交通手段といったサービス提供、そして、事業への協力企業に関わる助成・補助の課題などについて言及した内容が語られていることが見てとれる。

当節の最後に、第1回から第6回の総括報告書の各章（「はじめに」、「I 事業全体の評価」、「II 個々の取り組みの検証」、「III 次回に向けて」）ごとの特徴語を抽出した結果を表8に示し、検証を行う。

表8に示した特徴語一覧では、特に「事業全体の評価」の項目に着目した。第1回の報告書では次のように読み解くことができる。大地の芸術祭はアートと地方の活性化とを結び付けた先駆的な取り組み事例であり、地元住民にとっては不安ととまどいがあった。そのような状況下、住民らによる越後妻有地域で展開される現代芸術・アートに関する注目と言及があり、芸術祭というイベント自体のPRも含めNHKなどのメディアで取り上げられることを受けて、この芸術祭の持つ社会的な意義をとらえようとした。第2回では、

経済効果などの芸術祭が持つ地域への波及効果が認められるとともに、大地の芸術祭という取り組みの中で情報発信がなされ、地域の認知度向上につながり、地域の魅力を伝える上で若者へのアピール効果があることが述べられている。さらに第3回では、経済波及効果の増大を見据え、民間活力による投資を期待している。

第4回以降の「事業全体の評価」の項目を見ると、それぞれ特徴的な語として、第4回では「実行委員会」、第5回では「里山協働機構」、第6回では「サポーター」という言葉が挙げられている。新潟県の財政支援を受けていた第3回までと異なり、十日町市が主体的に事業に関わって芸術祭の運営を進めていることから、事業主体に関して言及していることがうかがえる。「運営」や「事業」、「助成」といった言葉も第5回、6回には特徴語として示されており、また、行政職員の関与の強化といったことも指摘され、今後に向けていかにして安定した事業運営を図っていくかという点を課題としてとらえていることが分かる。また、第5回、6回の「個々の取り組みの検証」の項目では「情報」、「発信」という言葉も観察され、SNS ツールの普及などを受けて、外部に向けた情報発信の推進が求められていることが分かる。

第4回以降の「次回に向けて」の項目では、第4回の大地的芸術祭は、里創プラン、アートネックレス整備構想の終了に伴い、今後の開催をどうするのかという課題のもとで実施されたが、ここでは継続開催を希望する声を挙げて紹介し、事業運営の財源、組織体制の構築などの点について触れるとともに、今後の継続的な開催に向けては長期的なプラン策定のもとで進めていくことが求められるとしている。そして第5回では、横浜や瀬戸内でも芸術祭が開催されていることをとらえ、他の芸術祭に負けないように大地の芸術祭で展開されるアートの質を高めていくことが重要であるとして、国際的なブランド価値の確立を目指すとしている。第6回では、地域に根差した活動を進展する上で重要なフェーズに入ったことを指摘して、芸術と地域振興とを結び付けた取り組みの先駆けとして果たす役割を改めて考え、2020年に向けた流れもふまえて大地の芸術祭を中心に据えた越後妻有ブランドの向上、定住人口増加や経済波及効果の拡大へとつながる活動の推進を表明している。

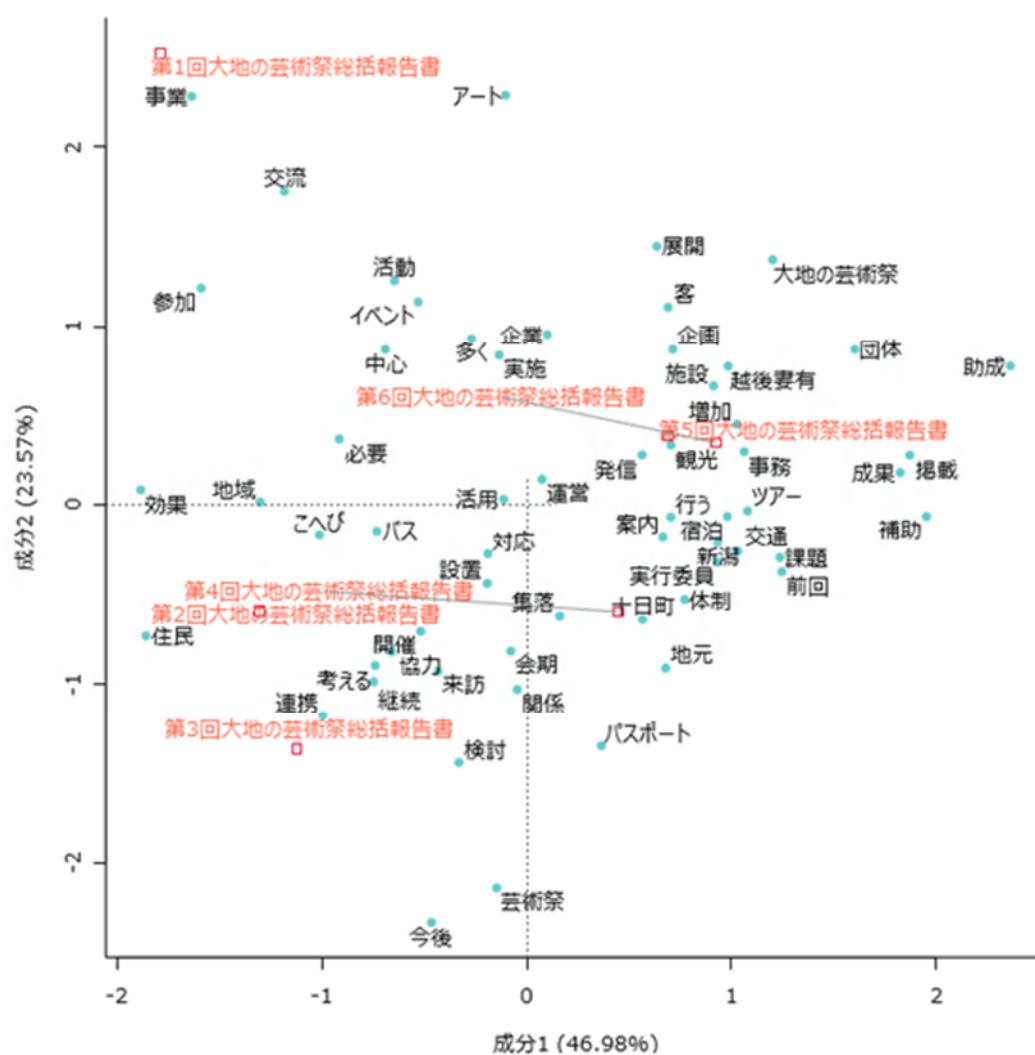


図4 各開催回を対象とした対応分析

表 8 各開催回の各章ごとの特徴語一覧

1stはじめに		1st I 事業全体の評価		1st II 個々の取り組みの検証		1st III 次回に向けて	
開幕	.500	特集	.083	必要	.126	列記	.250
本年	.250	事業	.082	市町村	.084	優位	.200
中山間地	.200	交流	.081	広域	.082	世紀	.200
掲げる	.200	アート	.074	参加	.079	浮き彫り	.200
浴びる	.167	NHK	.066	事業	.078	提起	.200
見込む	.167	地域	.061	バス	.075	推し進める	.200
総括	.125	大きい	.055	理解	.074	狙い	.167
渡る	.111	越後妻有	.050	取り組む	.073	時代	.167
方策	.111	イベント	.050	広い	.072	先取り	.167
活かす	.077	芸術	.050	共通	.070	全く	.167
2ndはじめに		2nd I 事業全体の評価		2nd II 個々の取り組みの検証		2nd III 次回に向けて	
伏線	.143	取り組み	.071	対応	.096	自立	.177
見つめる	.125	来訪	.071	考える	.096	知名度	.091
指針	.125	効果	.068	必要	.094	橋む	.083
供する	.125	集落	.062	運営	.077	機軸	.083
相半ば	.125	経済	.060	市町村	.076	移る	.083
言及	.111	活用	.056	管理	.071	甘んずる	.083
提唱	.111	波及	.056	芸術祭	.068	注ぐ	.083
斬新	.111	地域	.054	検討	.063	体質	.083
本書	.111	若者	.053	参加	.062	下地	.083
客観	.111	有効	.048	効果	.058	底上げ	.083
3rdはじめに		3rd I 事業全体の評価		3rd II 個々の取り組みの検証		3rd IV 次回に向けて	
所期	.154	経済	.086	今後	.115	進め方	.250
おおへび	.154	波及	.063	必要	.110	公費	.222
災害	.143	効果	.060	来訪	.103	考察	.200
一つ	.136	評価	.060	設置	.094	活力	.154
総括	.125	組合	.056	作品	.090	民間	.133
振り返る	.118	今後	.054	地域	.090	方向	.133
示す	.111	来訪	.052	住民	.088	スライド	.125
方向	.111	民間	.050	検討	.088	脱却	.125
検証	.100	投資	.050	エリア	.083	適否	.125
続く	.100	押し上げる	.049	会期	.077	観覧	.125
4thはじめに		4th I 事業全体の評価		4th II 個々の取り組みの検証		4th III 次回に向けて	
報告	.158	実行委員	.082	芸術祭	.126	策定	.200
移す	.143	成果	.080	作品	.099	ニューにいがた	.154
同社	.143	支援	.068	来訪	.096	極めて	.154
打ち出す	.125	地域	.066	課題	.081	アートネックレス	.154
トリムコーポレーション	.125	芸術祭	.066	成果	.068	述べる	.154
相対	.125	担う	.063	行う	.068	構想	.133
認証	.125	地元	.057	利用	.061	長期	.125
設立	.125	増える	.056	案内	.060	相当	.118
会計	.125	大地の芸術祭	.054	十日町	.054	里創プラン	.105
アートのリエンナーレ	.111	補助	.052	掲載	.053	回答	.103
5thはじめに		5th I 事業全体の評価		5th II 個々の取り組みの検証		5th III 次回に向けて	
節目	.200	運営	.088	課題	.101	質	.125
報告	.177	助成	.071	イベント	.077	実践	.118
豪雨	.167	行政	.071	成果	.069	質感	.100
有史	.167	補助	.067	案内	.068	姿勢	.100
皆様	.143	里山協働機構	.067	越後妻有	.068	引き出せる	.100
豪雨	.143	事務	.065	会期	.067	道筋	.100
要素	.143	実行委員	.064	団体	.063	開会	.100
アートのリエンナーレ	.125	地域	.064	情報	.062	内包	.100
数値	.125	関わる	.061	前回	.055	想定	.095
営み	.125	増加	.058	施設	.051	確立	.095
6thはじめに		6th I 事業全体の評価		6th II 個々の取り組みの検証		6th III 次回に向けて	
報告	.177	前回	.105	大地の芸術祭	.085	フェーズ	.143
有史	.167	サポーター	.075	主催	.079	先駆け	.143
皆様	.143	助成	.073	イベント	.071	据える	.143
文明	.143	受ける	.069	前回	.066	交代	.143
要素	.143	体制	.068	施設	.062	定住	.143
アートのリエンナーレ	.125	行政	.066	案内	.058	表明	.125
数値	.125	情報	.064	交通	.056	損益	.125
営み	.125	増加	.060	十日町	.053	開会	.125
感謝の意	.125	補助	.058	発信	.051	強める	.125
技術	.100	運営	.057	団体	.048	パラリンピック	.125

第3節 総括報告書（資料編：アンケート結果）のテキスト分析

1. テキストの前処理と分析手法

第3回～6回の大地の芸術祭総括報告書には、報告書本文と併せて資料編が掲載されている。資料編には、会期中のほくほく線十日町駅の乗降人員数、アーティストと作品名を記した全作品一覧、各種ツアー内容、新聞などのメディアに掲載された記事内容の一覧、各種アンケート結果などのデータが記載されている。これらのうち、各種アンケート結果の中での自由回答項目に焦点をあて、KH Coderによるテキスト分析を実施した。第3回～6回の報告書：資料編の自由回答アンケート結果をテキスト形式の一つのファイルにまとめ、その文書全体を対象にして、抽出語（多く出現していた語）一覧、共起ネットワークの作成、特徴語の抽出、対応分析を行い、内容を検証した。各回の報告書：資料編におけるアンケート対象と項目（自由回答項目のみ）は以下のとおりである。それぞれ、「開催回ごと」、「各開催回におけるアンケート対象」、「各開催のアンケート対象における回答項目」の3つの階層に分けた。特徴語の抽出においては、これら各階層ごとの分析を試みた。

開催回	アンケート対象	回答項目
第3回 (2006年)	実行委員	芸術祭の継続について(地域活性化に対する意見含む)
	作品設置集落・町内	芸術祭への意見要望(作品設置への意見含む)
第4回 (2009年)	実行委員	芸術祭の継続について(地域活性化に対する意見含む)
	作品設置集落・町内	芸術祭への意見要望(作品設置への意見含む)
	地元商業者	芸術祭への意見感想
第5回 (2012年)	実行委員	芸術祭の継続について(地域活性化に対する意見含む)
	作品設置集落・町内	芸術祭への意見要望(作品設置への意見含む)
	地元商業者	芸術祭への意見感想
	公式バスツアー利用者	芸術祭の改善点(料金について含む)
		芸術祭の要望企画
	一般来場者	芸術祭の改善点(料金について含む)
		芸術祭の要望企画
第6回 (2015年)	実行委員	芸術祭の継続について(地域活性化に対する意見含む)
		インバウンド対応について
	作品設置集落・町内	芸術祭への意見要望(作品設置への意見含む)
		芸術祭への意見感想
	地元商業者	インバウンド対応について
		芸術祭の改善点(料金について含む)
	公式バスツアー利用者	芸術祭の要望企画
		芸術祭の改善点(料金について含む)
	一般来場者	芸術祭の改善点(料金について含む)
		芸術祭の要望企画

KH Coder による分析にあたり、適切に分析作業が進むよう、語句の登録、使用しない語の指定を行った。ここで登録した語句ならびに不使用指定の語は以下のとおりである。

・登録した語句

こへび、こへび隊、芸術祭、大地の芸術祭、リピーター、スマホ、コスパ、PR、キナーレ、コラボ、アプリ、JR、キョロロ、トリエンナーレ、フジロック、アートフロント

・不使用指定の語

市、人、雑、思う、今、前、外、円、月、年、貸し

2. 対象資料全体をとおした分析・検証

総括報告書全体をとおして多く出現していた語を抽出した結果を表 9 に示す。報告書全体からは、「作品」「芸術祭」「アート」「作家」「展示」といった“芸術・アート”に関する言葉、「地域」「イベント」「参加」「開催」「継続」など“事業・イベント活動”に関する言葉、そして「ツアー」「パスポート」「バス」「鑑賞」「ガイドブック」「情報」など“来訪者による芸術祭への意見要望”に関する言葉が多く現れていることが見てとれる。これら抽出語をもとにして語同士のつながりを共起ネットワーク（図 5）の作成により観察すると、強いつながりをもつ言葉の組み合わせとしては、次のようなものが認められた。

「開催」－「期間」

「時間」－「鑑賞」

「交通」－「高い」

「ホームページ」－「情報」

「協力」－「集落」－「大変」

「案内」－「看板」

表 9 大地の芸術祭総括報告書(資料編:アンケート結果)における抽出語リスト(頻出 150 語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
作品	289	対応	30	高齢	17
地域	125	マップ	29	市民	17
ツアー	111	今後	29	充実	17
多い	100	今回	28	設定	17
パスポート	87	展示	28	宣伝	17
地元	79	交流	27	他	17
良い	74	駐車	27	長い	17
芸術祭	71	住民	26	方々	17
バス	69	知る	26	来場	17
集落	69	利用	26	委員	16
分かる	67	ワークショッ	25	飲食	16
来る	63	看板	25	運営	16
見る	60	作る	25	英語	16
時間	59	欲しい	25	管理	16
イベント	58	少し	24	関わる	16
少ない	55	雪	24	行く	16
案内	54	特に	24	声	16
芸術	51	パンフレット	23	地区	16
場所	51	観光	23	文化	16
お客様	50	関係	23	有る	16
大地の芸術祭	50	使う	23	パス	15
もう少し	49	次回	23	安い	15
鑑賞	47	店	23	一般	15
高い	45	販売	23	実行	15
参加	45	食事	22	車	15
開催	44	意見	21	出る	15
コース	43	外国	21	聞く	15
アート	42	経済	21	PR	14
感じる	42	事業	21	一部	14
継続	42	自然	21	改善	14
設置	42	地図	21	活性	14
十日町	41	入る	21	言う	14
必要	41	料金	21	行う	14
協力	39	悪い	20	続ける	14
大変	39	市内	20	町	14
ガイドブック	38	施設	20	無料	14
情報	38	全体	20	お金	13
ホームページ	37	ガイド	19	キナーレ	13
効果	37	希望	19	スタッフ	13
作家	37	無い	19	トイレ	13
考える	36	スタンプ	18	街	13
増やす	35	海外	18	困る	13
宿泊	33	企画	18	子ども	13
お願い	32	客	18	十日町	13
交通	32	祭り	18	宿	13
出来る	32	増える	18	不便	13
説明	32	町内	18	舞台	13
期間	30	入れる	18	エリア	12
人達	30	理解	18	システム	12
体験	30	こへび	17	載せる	12

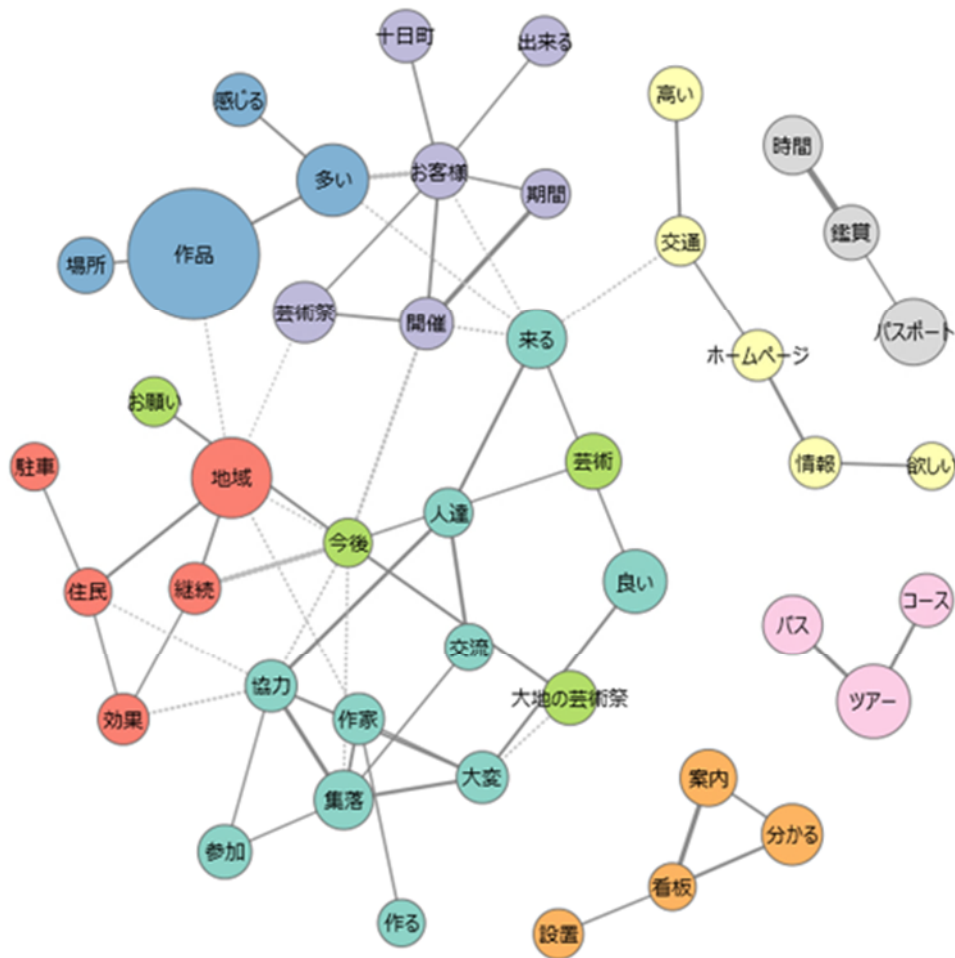


図 5 大地の芸術祭総括報告書(資料編:アンケート結果)における共起ネットワーク

強いつながりが認められる語同士について、それぞれKWIC コンコーダンス(key words in context、ある語がどのような文脈で使用されているか検索、確認する機能)で関連する語句が登場する文脈を検証すると、「開催」－「期間」については地元商業者とバスツアー利用者から、開催期間の延長を望む声が挙げられていた。「時間」－「鑑賞」については、地元商業者は経済波及効果の側面から、一般来場者は作品鑑賞の観点から、作品展示時間をもっと長くしてほしい旨の要望が出されていた。一般来場者からは施設の開館・閉館時間の情報を適切に提供してほしいという要望があった。情報については、一般来場者から、ホームページに交通情報や宿泊情報を掲載し、それらをリンクさせて必要な情報

が得られるような仕組みを構築してほしいという意見があった。「案内」－「看板」については、地元商業者、バスツアー利用者、一般来場者から、案内看板が分かりづらいという指摘が挙がっていた。また、作品設置集落・町内からは、看板があるにもかかわらず違法駐車が多かったため、住民に迷惑をかけてしまった、との意見があった。

3. 各開催回ごとの分析・検証

ここまでアンケート自由回答結果の全体を対象に議論してきたが、続いて、各開催回ごとの回答内容の傾向を見ていきたい。開催回ごとの対応分析（図 6）ならびに特徴語一覧（表 10）を以下に示す。

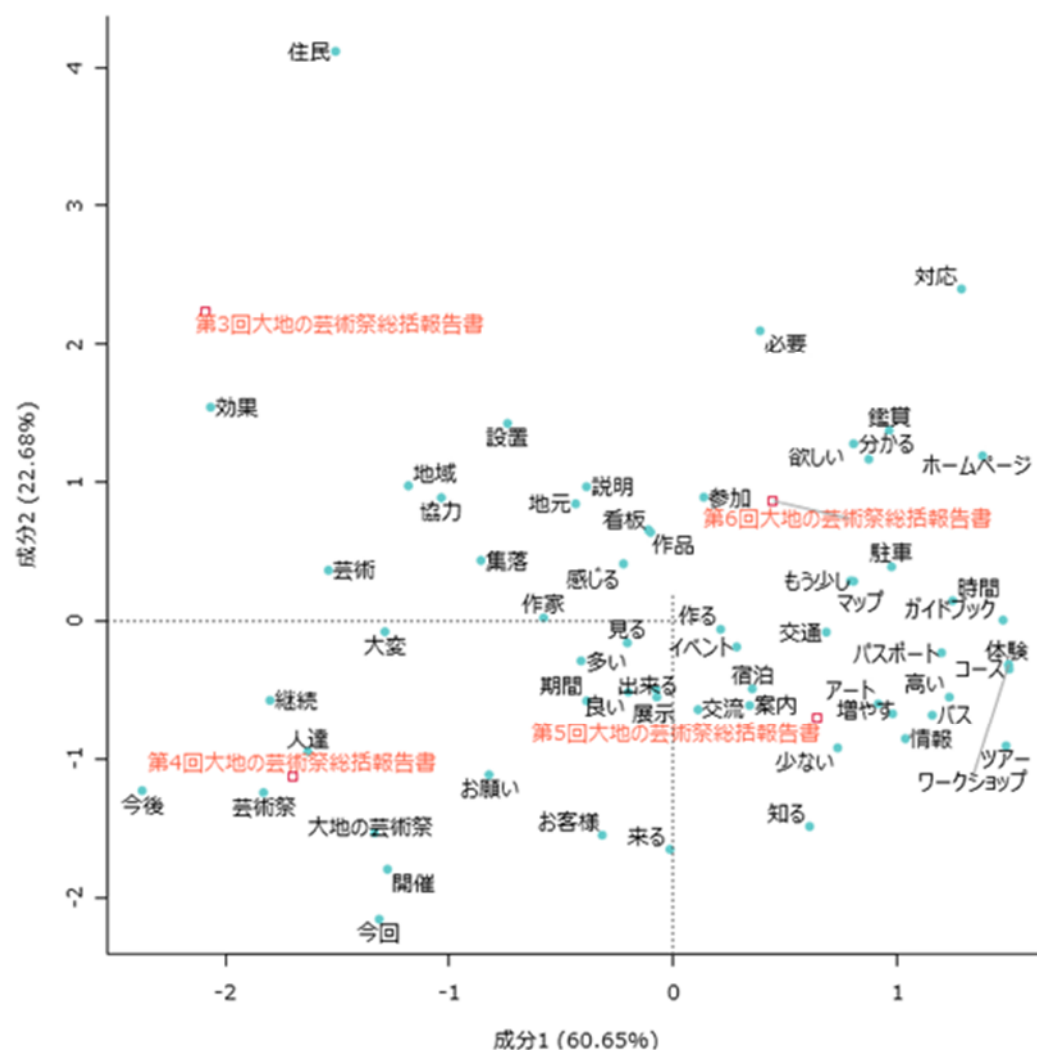


図 6 大地の芸術祭総括報告書(資料編: アンケート結果)各開催回ごとの対応分析

表 10 大地の芸術祭総括報告書(資料編: アンケート結果)各開催回ごとの特徴語一覧

第3回大地の芸術祭総括報告書	第4回大地の芸術祭総括報告書	第5回大地の芸術祭総括報告書	第6回大地の芸術祭総括報告書
地域 .114	多い .110	ツアー .101	作品 .148
効果 .073	芸術祭 .106	パスポート .061	分かる .066
住民 .071	大地の芸術祭 .092	バス .060	パスポート .060
費用 .069	地域 .088	良い .045	多い .059
芸術 .067	作品 .085	少ない .040	鑑賞 .049
運営 .064	今後 .079	時間 .040	時間 .044
地元 .064	開催 .075	高い .037	地元 .044
作品 .064	芸術 .073	コース .036	ホームページ .042
作家 .064	来る .073	アート .030	対応 .041
継続 .061	継続 .070	ガイドブック .030	必要 .040

図 6 の対応分析からは、第 3 回は左上に位置しており、そこに近い語句として、住民、効果、地域、協力、芸術、設置、地元、集落、作家、大変といった言葉がある。これらは実行委員と作品設置集落・町内代表者によるアンケート自由回答に含まれる言葉であるが、地元地域や集落、住民と芸術祭との関わり、イベントや作家との協力について、芸術祭が及ぼす効果や影響、負担も含めて事業運営への意見が挙げられている。第 4 回は左下に位置しており、その近辺には、芸術祭、今後、継続、開催、お客様といった言葉が配置されている。大地の芸術祭は、新潟県策定の「ニューにいがた里創プラン」にもとづき計画された地域活性化策「越後妻有アートネックレス整備構想」の中の事業として始まったが、10 年間にわたる長期プロジェクトであった「里創プラン」が終わって県の財政的支援が得られなくなるなど、第 4 回以降は、財政面や事業運営体制を含め芸術祭のあり方が問われる回展となった。このことから第 3 回から 4 回にかけては芸術祭の継続開催に関わる言及が多くなされた。これは表 2 に示した開催回ごとの特徴語一覧の結果にも表れており、今後、開催、継続といった語が特徴的な言葉として抽出された。そして、第 4 回からは実行委員と作品設置集落・町内代表者に加え、地元商業者がアンケート対象に加わった。そのことから芸術祭に来訪するお客様という語が現れた。

第 5 回、6 回のアンケートでは、実行委員、作品設置集落・町内代表者、地元商業者と共に、公式バスツアー利用者と一般来場者がアンケート対象として加わった。対応分析の図を見ると、(0,0) 中心点から、やや右下に第 5 回が、やや右上に第 6 回が位置しているが、それらの周囲には宿泊、展示、案内、情報、ツアー、ガイドブック、パスポート、マップ、ホームページ、鑑賞、作品、看板などの芸術祭来訪者に関わる語が多く見られた。同様の語が第 5 回及び第 6 回における特徴語としても挙げられている。

さらに、各開催回におけるアンケート対象ごとに行った対応分析（図 7）と特徴語一覧（表 11）の結果を以下に示す。図 7 の対応分析からは、それぞれアンケート対象ごとにまとまって位置していることが見てとれる。実行委員は中心からやや左の位置に、作品設置集落・町内代表者は左下に、地元商業者は左上に、そして、公式バスツアー利用者と一般来場者は右側の位置にあり、それぞれのカテゴリーに関連した言葉が近辺に配置されていることが分かる。表 11 に示した各開催回におけるアンケート対象ごとの特徴語一覧か

らは、各回ごとの特徴語の変遷が見てとれる。実行委員は、第3回展では地域住民主導という命題のもと、北川フラム氏が代表を務めるアートフロントとの関係を含めて、事業運営の体制をどのように作り上げていくのかという点について問うており、安定的な事業運営のあり方については、里山協働機構との連携や行政職員の関わりの強化が検討、実施され、さらに直近の第6回展では増加した外国人への対応について言及している。表10の各回ごとの特徴語一覧においても第6回の欄に「対応」の語が現れているが、これはインバンド対応を意味しているものであった。KWICで「対応」が使われている文脈を調べてみると、“外国人の対応”、“ハラルへの対応”、“多様な言語、文化への対応”、“英語で対応”といった、海外からの来訪者への対応についての意見が述べられていた。さらに細かく回答項目ごとに見てみると、表12に示した各開催回・アンケート対象における回答項目ごとの特徴語一覧に示したとおり、第6回の実行委員と地元商業者に対するアンケートでは、インバウンドについての質問項目があり、それに対する回答が掲載されている。インバウンドに関する自由回答結果にもとづく特徴語の抽出結果を見てみると、外国人への対応や英語を含めた多言語への対応が課題として挙げられていることが分かる。具体的には、英語などで表記した商品メニューの作成、英語での会話対応、通訳ボランティアの育成といった方策が示されている。バスツアー利用者や一般来場者の回答にもとづく特徴語からは、ホームページを含めたインターネット環境からの情報提供、パスポートやマップ、ガイドなど展示作品を巡るツアーについての情報に関わることが挙げられ、これらは解決すべき問題としての意見要望であり、今後の芸術祭開催を見据えて、多言語化や外国人対応が求められるところである。

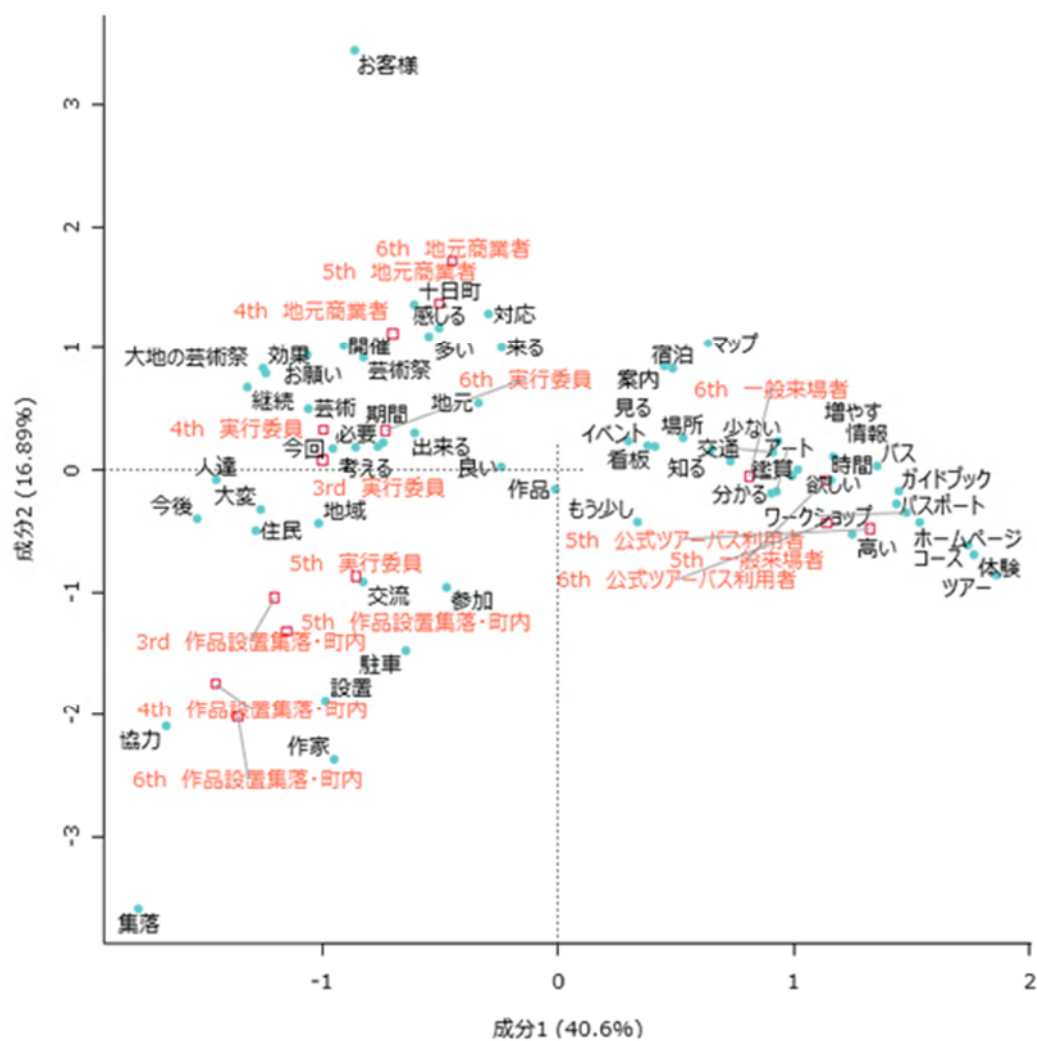


図 7 大地の芸術祭総括報告書(資料編:アンケート結果)各開催回のアンケート対象ごとの対応分析

表 11 大地の芸術祭総括報告書(資料編:アンケート結果)各開催回のアンケート対象ごとの特徴語

一覧

3rd 実行委員		3rd 作品設置県民・町内							
地域	.078	作家	.118						
運営	.074	町内	.100						
主導	.088	費用	.097						
アートフロント	.087	相談	.088						
委員	.084	中し上げる	.080						
体制	.080	親しい	.080						
活性	.058	理解	.077						
効果	.054	県民	.075						
芸術	.049	多数	.074						
地元	.049	希望	.073						
4th 実行委員		4th 作品設置県民・町内		4th 地元民衆					
親近	.333	県民	.139	芸術祭	.102				
沈む	.333	今後	.123	大地の芸術祭	.088				
床目	.333	作家	.081	多い	.088				
日常	.333	負担	.071	開催	.080				
始める	.333	因る	.087	お客様	.079				
恒有	.333	地域	.084	芸術	.077				
創出	.333	協力	.083	来る	.077				
一時	.333	理解	.081	今回	.071				
名ばかり	.333	多い	.059	大変	.087				
成産	.333	事業	.059	相談	.088				
5th 実行委員		5th 作品設置県民・町内		5th 地元民衆		5th 公式ツアーバス利用者		5th 一般来場者	
主体	.143	県民	.171	お客様	.155	ツアー	.180	バスポート	.091
行政	.130	駐在	.097	相談	.105	コース	.090	バス	.087
割合	.118	地域	.089	来る	.087	バス	.043	高い	.081
方向	.095	大変	.078	多い	.083	少ない	.041	情報	.054
県中	.080	こへび	.087	お断り	.078	体験	.038	ワークショップ	.041
負担	.080	作家	.088	集い	.078	時間	.035	イベント	.040
予算	.077	開催	.080	十日町	.074	アート	.035	時間	.040
自然	.059	大地の芸術祭	.080	開催	.073	増やす	.029	ガイドブック	.038
能開	.059	今回	.058	大地の芸術祭	.072	スランブ	.025	鑑賞	.037
何より	.059	運営	.058	芸術祭	.070	来る	.023	もう少し	.032
6th 実行委員		6th 作品設置県民・町内		6th 地元民衆		6th 公式ツアーバス利用者		6th 一般来場者	
必要	.133	協力	.147	お客様	.145	ツアー	.092	作品	.120
外国	.122	県民	.138	対応	.122	作品	.088	バスポート	.073
関わる	.085	参加	.091	多い	.108	バスポート	.080	時間	.073
対応	.083	因る	.074	英語	.094	分かる	.058	鑑賞	.071
海外	.081	出る	.073	外国	.087	もう少し	.049	場所	.067
住民	.078	高齢	.070	海外	.075	ホームページ	.048	分かる	.059
地域	.073	大変	.068	店	.073	交通	.041	ホームページ	.052
地元	.067	復興	.061	作成	.068	バス	.041	案内	.050
考える	.068	野菜	.061	方々	.060	ガイド	.038	イベント	.049
事業	.065	期間	.058	感じる	.059	ガイドブック	.034	マップ	.048

との特徴語一覧

138

第4節 自由回答アンケート結果をとおして見る大地の芸術祭と地元住民との関わり

1. テキストの前処理と分析手法

第3節のとおり、大地の芸術祭の終了後に作成されている総括報告書には、第3回目以降には関係者を対象とするアンケート結果が掲載されている。このアンケートを通して大地の芸術祭に関わる人々の経時的な意識変容を見るために、継続的にアンケートが実施されている作品設置集落・町内の代表者と地元商業者を対象としたアンケートの自由記述回答結果の詳細な分析を実施した。

第3回目以降のアンケート結果には、芸術作品が設置された集落・町内の代表者を対象として「大地の芸術祭に関わった集落・町内として、大地の芸術祭の運営のあり方や今後の方向性などに対し、ご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください」という自由回答のアンケートが、また第4回目以降には、地元商業者（十日町市・津南町の宿泊施設、飲食店、ガソリンスタンド、コンビニ経営者）を対象とする「大地の芸術祭に対するご意見・ご感想がありましたら、下の欄にご記入ください」という自由回答のアンケートが実施され、その回答が記載されている。分析検討の対象としたのは、これら（1）芸術作品が設置された集落・町内の代表者への自由回答アンケートならびに（2）地元商業者（十日町市・津南町の宿泊施設、飲食店、ガソリンスタンド、コンビニ経営者）への自由回答アンケートの結果の合計 365 件である。これらのアンケートの自由回答の内容をテキストデータとして入力して、テキスト分析を行うことにより回答選択型のアンケートでは見えてこない大地の芸術祭に対する潜在的な見解や課題を見いだすことを目指した。アンケート項目と各回における回答件数は以下のとおりである。

（1）芸術作品が設置された集落・町内の代表者へのアンケート

「大地の芸術祭に関わった集落・町内として、大地の芸術祭の運営のあり方や今後の方向性などに対し、ご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください」

第3回（平成18年）：回答 22 件

第4回（平成21年）：回答 35 件

第5回（平成24年）：回答 41 件

第6回（平成27年）：回答 32 件

(2) 地元商業者（十日町市・津南町の宿泊施設、飲食店、ガソリンスタンド、コンビニ経営者）へのアンケート

「大地の芸術祭に対するご意見・ご感想がありましたら、下の欄にご記入ください」

第4回（平成21年）：回答124件

第5回（平成24年）：回答79件

第6回（平成27年）：回答32件

まず、入力したアンケート回答結果のテキストを、処理せずにそのまま分析にかけて、対象となる全ての自由回答アンケートの中の語を調査した。全ての語を調査した後に改めて KWIC コンコーダンスとテキストの語の前処理を行い、抽出語リストの作成、共起ネットワークの図示、特徴語一覧の作成、対応分析を実施した。さらに語だけではなくコンセプトに焦点をあてて分析するための「芸術・アート」など6つの項目のコーディング処理を実施し、それぞれのコードを集計し、開催回ごとのアンケート傾向を観察した。

KWIC コンコーダンスとテキストの前処理は次のように行った。分析対象の全ての自由回答アンケートの中で多く出現した語を調査したところ、「思う」が出現回数156回と最も多い結果になった。この「思う」がどのような文脈でもとのテキスト中で使われているかを確認するために KWIC コンコーダンスを実施した結果からは、～と思う、～に思われる、といった用例が多いことがわかった。品詞別で見ると動詞で最も出現回数が多いのが「思う」であったが、形容詞では「多い」が最も多く、65回の出現回数であった。「多い」に関しても、同様に KWIC コンコーダンスを実施した。その結果からは、多い、多く、多かった、などのかたちで使われていることがわかったが、良い意味と悪い意味の両方の記述が見て取れた。例えば、良い意味では「地域の活性に多いに継がった」、「若いパワーを多いにもらった」、「笑顔も多い」など、逆に悪い意味では「違法駐車が多く」、「無関心の人が多かった」、「不満の声が多かった」などの用例で用いられていた。これら「思う」と「多い」は、この言葉自体が直接的に特定の意味を表すものではなく、良・悪双方の文脈で用いられていることから、分析に際しては使用しない語として指定することにした。

以上のような前処理を行い、KH Coder による分析に際して適切に分析作業が進むよう、

語句の登録、使用しない語の指定を行った。ここで登録した語句ならびに不使用指定の語は以下のとおりである。

- ・登録した語句

こへび、こへび隊、農舞台、リピーター

- ・不使用指定の語

思う、多い

2. 共起性の検討と対応分析

作品設置集落・町内の代表者ならびに地元商業者の自由記述回答アンケート結果をとおして多く出現していた語を抽出した結果を表 13 に示す。

この結果からは「芸術」（出現回数 127 回）が最も多く、その他に「作品」（122 回）や「大地」（45 回）、「開催」（39 回）、「作家」（24 回）といった芸術祭というイベントに関する言葉、また、「お客様」（46 回）や「事業」（15 回）、「観光」（13 回）、「宿泊」（11 回）などの商業・観光に関する言葉、そして、「協力」（25 回）や「交流」（17 回）、「こへび」（11 回）、「ボランティア」（6 回）といった語があることがわかる。この結果をもとに共起ネットワークを作成すると図 8 のようになる。

表 13 作品設置集落・町内の代表者ならびに地元商業者の自由記述回答アンケート結果における

抽出語リスト(頻出 150 語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
芸術	127	意見	13	終了	8
作品	122	観光	13	雪	8
人	75	客	13	前	8
地域	60	高齢	12	問題	8
集落	53	十日町	12	理解	8
お客様	46	町	12	お金	7
大地	45	聞く	12	パスポート	7
良い	41	方々	12	悪い	7
開催	39	こへび	11	影響	7
来る	39	宿泊	11	回	7
継続	34	少し	11	楽しい	7
地元	34	続ける	11	看板	7
大変	31	他	11	関わる	7
お願い	26	展示	11	元気	7
今後	26	入る	11	行う	7
協力	25	ご苦労	10	市民	7
見る	25	アート	10	持つ	7
十日町	25	マップ	10	商店	7
作家	24	希望	10	松代	7
効果	23	経済	10	人々	7
人達	23	言う	10	全体	7
今回	22	困る	10	知る	7
市	22	使う	10	当店	7
感じる	21	市街地	10	売上	7
考える	20	住民	10	販売	7
次回	20	出る	10	負担	7
出来る	20	地区	10	文化	7
設置	20	長い	10	毎年	7
もう少し	19	有る	10	迷惑	7
案内	19	利用	10	来場	7
期間	19	パンフレット	9	話	7
参加	19	一部	9	ボランティア	6
関係	18	会場	9	一番	6
交流	17	管理	9	課題	6
少ない	17	月	9	楽しむ	6
店	17	交通	9	活性	6
イベント	16	今	9	喜ぶ	6
説明	16	時間	9	個人	6
無い	16	自然	9	行く	6
市内	15	車	9	施設	6
事業	15	増える	9	自分	6
場所	15	増やす	9	初めて	6
町内	15	地図	9	紹介	6
必要	15	力	9	情報	6
声	14	飲食	8	食堂	6
駐車	14	街	8	制作	6
特に	14	感謝	8	多く	6
年	14	企画	8	隊	6
分かる	14	期待	8	大きい	6
バス	13	作る	8	津南	6

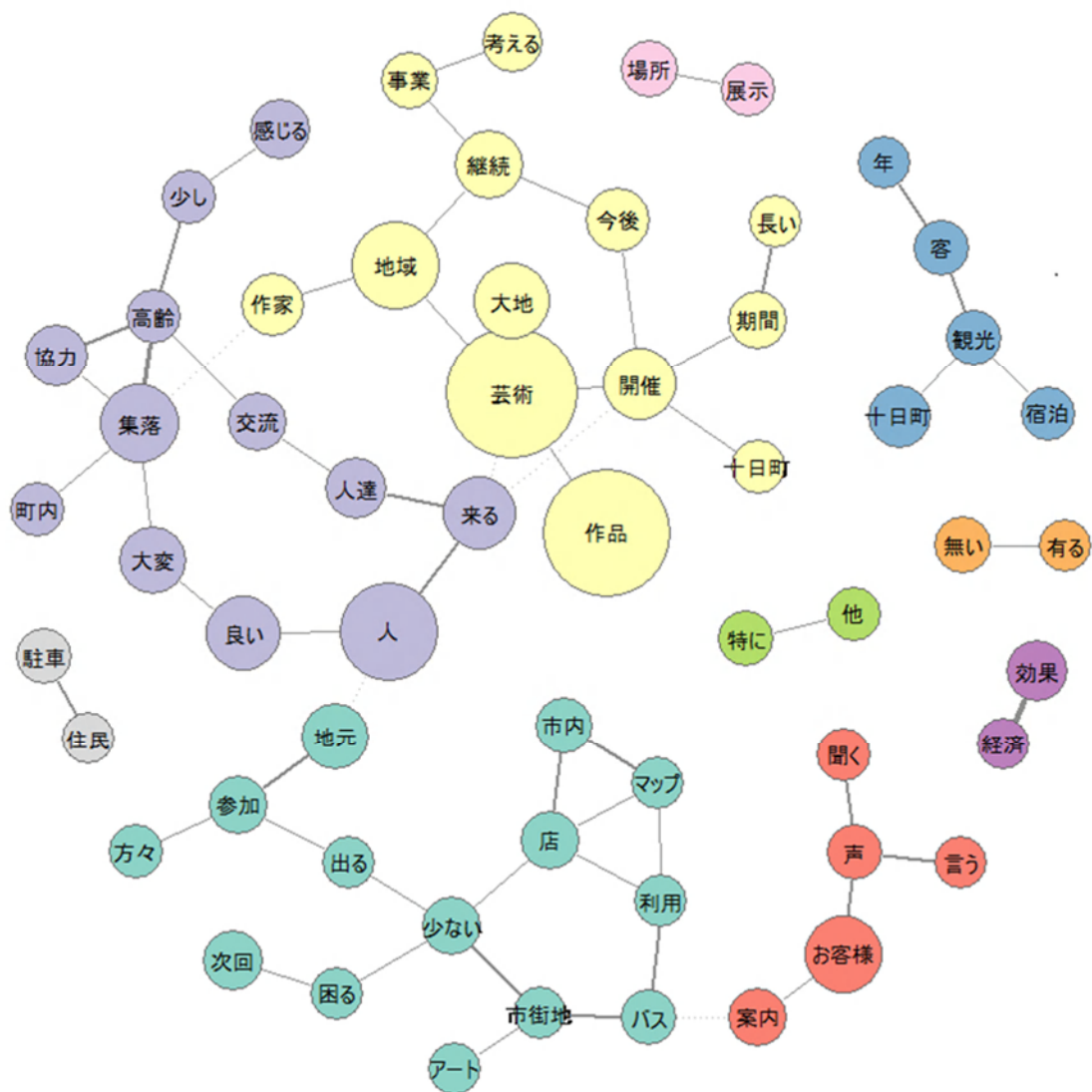


図 8 作品設置集落・町内の代表者ならびに地元商業者の自由記述回答アンケート結果における共起ネットワーク

この図を見ると、大きく 4 つの領域に分けることができる。まず中央上部の場所－展示ならびに作品－芸術－地域などのネットワークで構成される領域が大地の芸術祭というイベントに関するものを、次いで客－観光や経済－効果、案内－お客様－声などで構成される右側の領域が地元商業者に関することを表している。3 番目が左側にある駐車－住民、集落－高齢などで構成される領域が地元住民（作品設置集落の代表者）の声を表しており、

最後の4番目は、下側に位置する店ー市内ーマップ、少ないー市街地ーバスなどで構成される部分が当該地域における協力体制や事業運営に関することを表している、といえる。そして共起関係に着目すると、経済ー効果、集落ー高齢ー協力、人達ー来るー人、駐車ー住民、参加ー地元、少ないー市街地ーバス、店ー市内ーマップといった語同士の結びつきが強いことがわかった。

続いて、各開催回における作品設置集落・町内及び地元商業者における特徴的な語を抽出した結果を表14に示す。各カテゴリーにおける特徴語の上位10語ずつがリストアップされ、右欄の数値はどの程度特徴的かを示すJaccard係数である。項目の最初の数値は開催回を示す（例えば、3-作品設置集落、町内であれば、第3回を意味する）。

表 14 作品設置集落・町内の代表者ならびに地元商業者の自由記述回答アンケート結果における特徴語一覧

3-作品設置集落、町内		4-作品設置集落、町内		5-作品設置集落、町内		6-作品設置集落、町内	
作家	.162	集落	.170	集落	.154	協力	.149
費用	.125	今後	.130	地域	.139	集落	.138
理解	.111	地域	.105	駐車	.133	参加	.119
住民	.107	作家	.098	芸術	.105	出る	.105
町内	.107	負担	.081	大変	.094	高齢	.103
希望	.103	協力	.076	もう少し	.091	野菜	.094
継続	.100	理解	.075	前	.091	スタッフ	.091
集落	.098	人	.071	作家	.088	大変	.089
作品	.093	困る	.071	作品	.087	作品	.084
申し上げる	.091	設置	.067	住民	.087	管理	.079
		4-地元商業者		5-地元商業者		6-地元商業者	
		芸術	.222	お客様	.160	お客様	.150
		大地	.095	人	.126	店	.122
		来る	.090	継続	.109	分かる	.098
		開催	.083	来る	.108	良い	.082
		今回	.075	十日町	.086	マップ	.079
		市	.074	お願い	.083	増える	.079
		地元	.070	イベント	.081	増やす	.079
		大変	.070	無い	.081	一部	.079
		案内	.068	開催	.077	バス	.075
		効果	.066	出来る	.076	作品	.074

作品設置集落・町内を対処としたアンケート結果の特徴語からは、賑わいや希望（第3回）といった活性化への期待を抱かせるものがある一方で、負担や困る（第4回）といった芸術祭へのマイナスな感情を表したものや、来訪者の駐車場の問題を指摘する声（第5回）、住民の高齢化に伴う管理運営への影響を指摘する言葉（第6回）が見てとれる。地

元商業者における特徴語を見ると、第4回では芸術祭という事業開催への関心が特徴的に示されたものの、以後の第5回、第6回では「お客様」という言葉が示すとおり、経済的側面からイベントへの来訪者を強く意識していることがわかる。

この特徴語リスト抽出の結果を対応分析によって図示すると、以下のようになる(図9)。今回の自由回答アンケート全体を対象とした分析からは、地元商業者の回答は開催回による違いは小さいものの、作品設置集落・町内を対象とした回答は各回ごとに傾向がばらけていた。商業者のほうは観光や宿泊などの経済効果の側面でこのイベントを続けることのメリットを感じていることがうかがえる一方で、作品設置集落・町内を対象とした回答からは、芸術祭の開催を重ねるにしたがって回答内容に変化が見られた。第3回では地域の交流や町内での作家の活動、作品の設置といった芸術祭の事業全般に関する言葉が示されているが、第4回になると「大変」(対応分析の中央部分)、「負担」、「困る」(特徴語)といった負のイメージを示す語が現れてきた。第5回では、芸術祭の規模拡大に伴う来訪者の増加による駐車場の問題が発生したり、ボランティア組織であるこへび隊に関することが示された。そして第6回では「高齢」という言葉が特徴語として現れ、第1回の開催から年数が経過して、芸術祭のホスト役となる地域住民の高齢化が進展して協力体制の構築に苦慮している現状がうかがえる。

行うことが可能になる。

今回の分析では、「芸術・アート」、「商業・経済」、「事業」、「協力連携」、「活性化」、「負担・困惑」という 6 つのコードを設定した。各々のコードを付与する条件としては、下記に示した言葉を含む段落が当該コードに言及していたものと見なして集計した。

「芸術・アート」

芸術 or 作品 or 作家 or 設置 or アート or 企画 or 制作 or 展示 or 農舞台

「商業・経済」

お客様 or 店 or 観光 or 客 or 宿泊 or 経済 or 飲食 or お金 or 商店 or 当店 or 売上 or 販売 or 来場

「事業」

開催 or 案内 or イベント or 事業 or マップ or パンフレット or 地図 or パスポート or 看板

「協力連携」

協力 or 関係 or 交流 or こへび or 感謝 or 関わる or ボランティア

「活性化」

良い or 継続 or 効果 or 続ける or 希望 or 増える or 増やす or 期待 or 楽しい or 楽しむ or 活性 or 喜ぶ

「負担・困惑」

高齢 or 困る or 悪い or 残念 or 負担 or 迷惑 or ダメ or だめ or 気の毒 or 疑問 or 多忙 or 冷ややか

このコーディングルールに則りコーディング処理を実施した結果を以下の図 10 及び図 11 に示す。横軸に開催回（開催年）、縦軸にパーセントを示している。縦軸は、検索対象の段落中に複数のコードが存在する場合があるために合計は 100 を越える。この結果から、開催回ごとのコード集計を通して「大地の芸術祭」への関わりの観点の変化が見て取れる。

まず、作品設置集落・町内の代表者へのアンケート結果にもとづくコーディング処理の

結果（図 10）を見てみると、当初（第 3 回）では「芸術・アート」と「活性化」に関する事柄が多く挙げられていたが、開催回が進むにつれて、これらの項目は低下していった。また、この芸術祭という事業そのものや、芸術祭がもたらす経済的側面については、回を通じて低い傾向にある。そして、関係や交流、感謝といった言葉で表される「協力連携」の視点は 30～40%の割合で示されており、一定の関心があることがわかる。一方で、芸術祭への負のイメージを意味する「負担・困惑」概念については、第 4 回で上昇した。個別にどのような文章中にこの「負担・困惑」を表すコードが付与されているのか見てみると、次のようになる。

- ・整備費の負担が大変
- ・自分の生活が多忙で地域おこしに関わる気力もない
- ・集落の人に期待されても困る
- ・反対派は冷ややかに見ている
- ・高齢化が進み．．．

この「負担・困惑」に関することは第 5 回で減少したものの、第 6 回では再び上昇した。これは高齢化というキーワードが重要となる。高齢という語が何回出てきたかを見ると、第 3 回では 1 回、第 4 回と 5 回ではそれぞれ 2 回、そして第 6 回では 4 回出現した。前述の対応分析のところでも述べたように、回展を重ねるにしたがって地域住民の高齢化が進み、事業の協力を得るという点で地区の代表者の方々が苦心している様子が見て取れる。

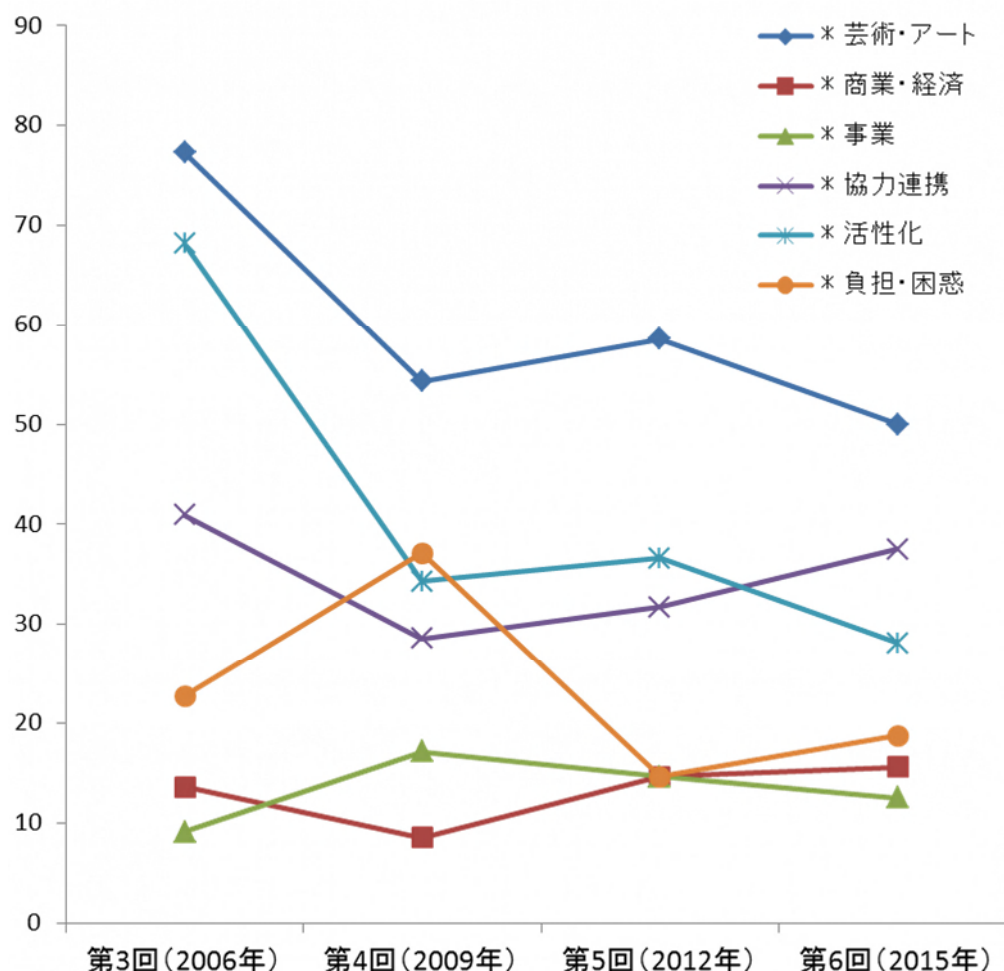


図 10 コーディング処理による分析(作品設置集落・町内の代表者)

続いて、地元事業者対象のアンケートにもとづくコーディング結果(図 11)を見ると、「協力連携」と「負担・困惑」は低いレベルにある。一方で「商業・経済」と「活性化」が開催回を重ねるごとに割合が高まっている。このうち「活性化」に着目すると、作品設置集落・町内の代表者のアンケート結果の分析では低下する傾向にあるのに対して、事業者対象のアンケートでは「活性化」を示す事柄が上昇している。ここで、それぞれのどのような文脈中に「活性化」を示すコードが付与されているのかについて見てみると、作品設置集落・町内の代表者のほうは地元地域への貢献を目的に事業の継続をうたっているのに対して、事業者の場合は、芸術祭開催に伴う来訪者の増加による経済効果の側面を表しているという結果となり、両者の芸術祭に対するスタンスの違いが浮き彫りになった。

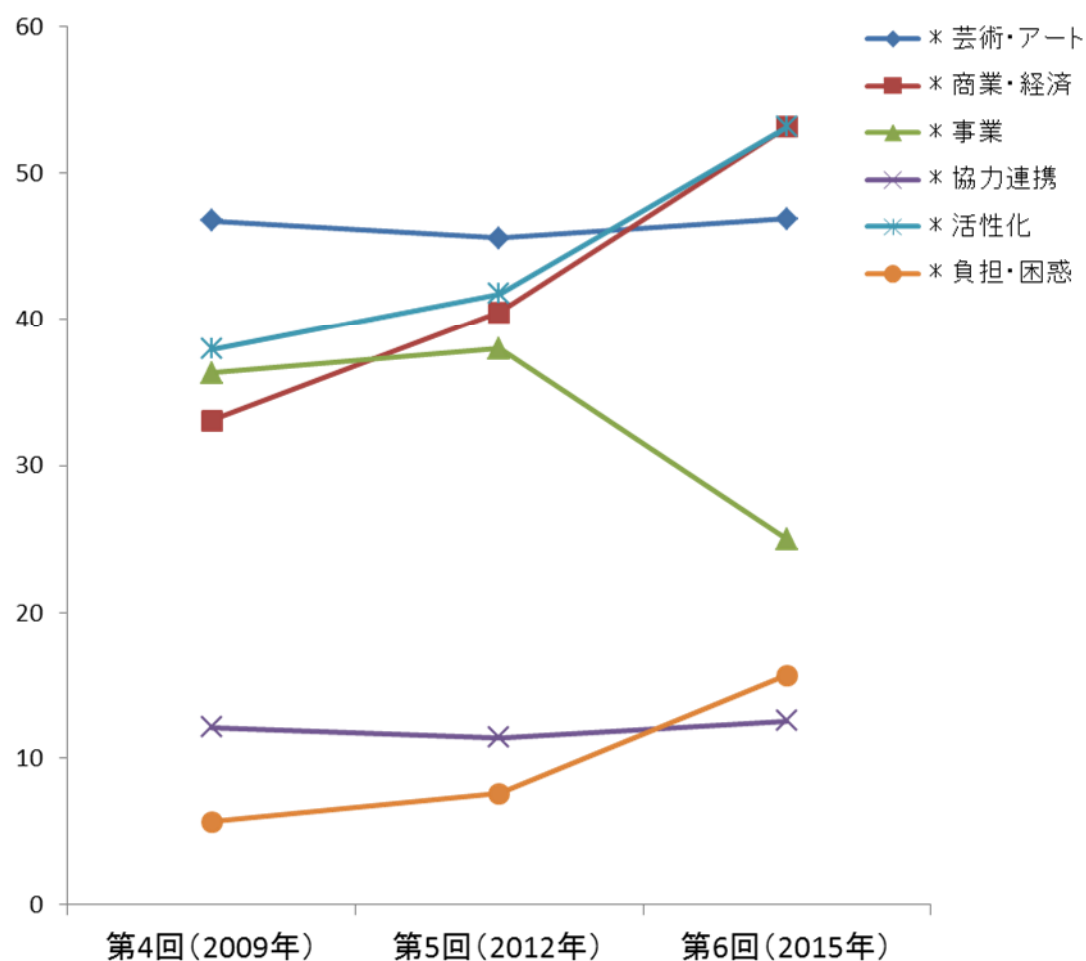


図 11 コーディング処理による分析(地元商業者)

そして、コード化した結果をもとに対応分析を実施すると図 12 のような結果となった。地元商業者は「活性化」や「商業・経済」、「事業」概念により構成される領域に集まっており、開催回による傾向の違いは見られなかった。一方で作品設置集落・町内の代表者の回答からは、「芸術・アート」、「活性化」という中心位置から離れ、地元住民との間の協力連携に関する事柄や事業開催に伴う負担といった観点について言及した内容となっていることがうかがえる。

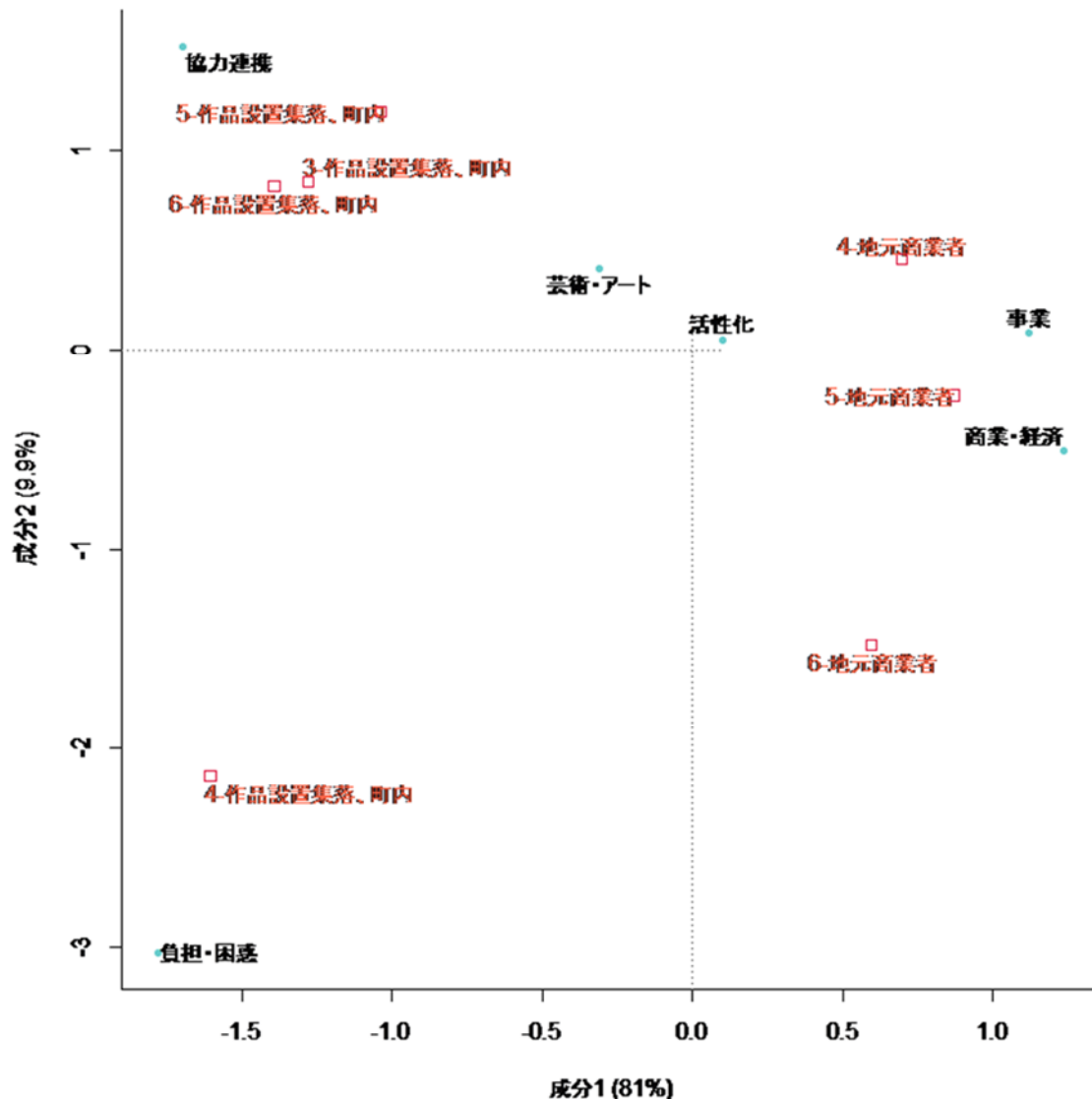


図 12 コード化した結果にもとづく対応分析

第5節 まとめ

十日町市の広報誌である市報とおかまち掲載の記事内容の変遷を見ていくことで、地元十日町市ならびにその住民らと大地の芸術祭との関係性構築の推移をたどることができた。事業開催が決まった時期は、従来の公共事業に代わる位置づけとして意味づけられており、現代アートに対する不理解も多かった。大地の芸術祭を含む里創プランのスタート当初においては、日本全体の経済状況が苦しい中、公共事業の採択が厳しい状況下で里創プランは十日町市を含む広域圏の事業として最も重要な事業である、と地元紙⁸⁾で述べら

れている。総合ディレクターである北川フラム氏自身も大地の芸術祭について次のように語っている。

これは、手法としては公共事業の全面切り替えなんです。これまでの公共事業なら、行政が計画を立案し、予算をつけたら、あとは業者さんがやるだけ。でもこのプロジェクトでは、まず地元アーティストが入って、これまでの公共事業の10分の1程度の予算の中でワークショップをやり、地域のデザインをするという作業を行います。住民参加で進めるので、手間がかかる。（中略）みんなで木道をつくったり、コテージをつくったりと、10年間ずっと続く協働作業が本当の目的なんです（北川 2013：261）。

大地の芸術祭の開催を重ねる度に、協働という言葉に代表されるように、地元住民と地域外のボランティアの人々とのつながり強化が進むなど、関係性構築が進んでいることが見てとれた。

総括報告書の分析からは、事業の開始当初は前例のない取り組みであっただけに現代アートと地域再生との関係づけが適切に構築されず、地元住民には不安と困惑の姿勢が見られた。組織化の視点からは、事象をイナクトし、行為者同士の相互作用の進展によって意味や価値観の共有化が図られて、一定の規定や思考枠組み、構造が形成されていくが、芸術祭が始まった当初の段階では、それらのプロセスが機能せず、芸術祭が包含する多様な特性が削減されず、人々の間に行為の共有や関係性が形づくられることは少なかったといえる。その後、大きな影響力を持つテレビなどのメディアに芸術祭が取り上げられて広く社会に認知されるようになり、この事業が持つ社会的な意味が住民らの間に構築されていたものと考えられる。報告書では、地元地域への経済波及効果や情報発信による認知度の向上、NPOによる事業運営の展開などもあり、今後の継続的な開催に向けた長期的なプラン策定についても言及され、芸術と地域活性化とを結びつけた先駆的事例としての役割もふまえ、未来志向のもとで今後の活動に向けた推進方針が示されている。

大地の芸術祭はアートを媒体とした地元住民主体の地域活性化の方策として始まり、

様々な人々を巻き込みながら、そのイベント活動が続けられてきた。2000年に第1回が始まって以降、財政的な問題、運営体制、経済的波及効果、地域住民との関わりと意識変容などの課題が問われてきたが、昨今、最大の課題は増加した海外からの来場者への対応といえる。主要産業としての観光の役割が期待される中、またアートによる地方創生の先駆的事例として注目を集める中、総括報告書でも掲げられていたとおり、2020年の東京五輪を通じたインバウンド・ツーリストの増加をふまえたさらなる進展が期待される。

地元住民の意識については、総括報告書の第3回目以降に記載されている地元住民への回答選択型アンケートの結果から、集落に作品が設置されることを60～70%の割合で希望しており、80%前後の高い割合で作品設置に協力する動きがあったことが報告されている。そして、大地の芸術祭の継続開催を希望するかという質問には、継続開催してほしいと回答した人の割合が第3回では約50%、第4回が70%、第5回が90%、第6回が約95%と開催を重ねるごとに高まっており、大地の芸術祭への地元住民の理解の広がりを見せている。大地の芸術祭に対して肯定的な意見が述べられている一方で、自由記述アンケート回答の結果からは、事業実施にあたって地元住民が負担を感じており、不安や困惑の声も聞こえてきた。また、地元地域の宿泊施設や飲食店などの事業者らの意識を見ると、負担や困惑感は低いレベルにあり、活性化と経済波及効果を感じている傾向が回を重ねるごとに高まっていることが明らかになった。

2018年夏に実施した大地の芸術祭におけるアンケート調査で一緒に調査にあたった人は、知り合いの飲食店店主の声として、あまり芸術祭開催に伴うメリットを感じていないということを話してくれた。その飲食店は十日町駅近くにある、いわゆる、まちなかの店とのことだが、近くに芸術祭の作品展示がなく、観光客の来訪もほとんどないために営業上の利点はないという話であった。この話を聞く限り、大地の芸術祭は里山を舞台としたイベントであり、中心市街地の振興といった点に課題があるのではないと思われる。本研究においては、大地の芸術祭に対する地元住民の声、印象といったヒアリングデータの収集はこれから行う予定であり、まだ無い。この点については本研究のテキスト分析における欠陥であると指摘できる。今後実施するヒアリング調査においては、大地の芸術祭に対する人々の意識を詳細に調べるにあたって、商業店舗の所在地と芸術祭の影響、地区別

の商業者の方々の意識といった視点からも検証が必要と考えられる。

本研究でテキスト分析の対象とした「市報とおかまち」と「大地の芸術祭 総括報告書」は、それぞれ市が発行する広報資料として、大地の芸術祭実行委員会という公的立場の組織が発行する報告書として、その内容については一定の客観性と妥当性を有しているものと考えている。しかしながら、20年以上の長い期間にわたる資料であり、その間に作成・編集に携わる人も代わり、編集方針なども変化している可能性はぬぐいきれない。それに伴い、研究資料として採用するに際して、編集の恣意性の問題や編集方針の一貫性などの点を担保できない可能性も示唆される。この点については研究者側としては関知できず、担保できないことであり、二次情報源としての限界であることを指摘しておく。

Moscovici が説く社会的表象理論の立場からは、人々の意識や行動は、常に社会的に存在する表象概念によって影響を受け、変化していくものととらえられる (Moscovici 1984)。当初、新奇で異質な観念であった事柄が馴致化されて人々になじみのある周知の存在として意味づけられるにしたがって人々が持つイメージと思考プロセスに新たな関係性を生じさせ、行動変容につながったものと考えられる。社会的表象は現代社会において特徴的な概念で、新聞などのメディアに取り上げられるなどの過程を通じて社会的に伝播し、人々の意識の中に定着していく (矢守 2001 ; 八ツ塚 2007 ; 2008 ; 2014)。大地の芸術祭自体も、当初示されていた前例のない新奇事象への不安や困惑といった見解が、テレビなどの様々なメディア露出による認知度向上、インターネット世界における情報提供や発信、来訪者の増加による交流人口の拡大といった様々な現象の進展に伴い、徐々に人々の意識変容が進んでいったものと推察される。

大地の芸術祭開催と社会的な事柄との関係を概観すると、2000 年から 2008 年（第 1 回～第 3 回）にかけては芸術祭がスタートし、アートによる地域活性化の可能性が唱えられた一方で、社会的には、9.11 アメリカ同時多発テロ、中越地震や中越沖地震の発生、人口減少社会の進展が示された。2008 年から 2012 年（第 4 回～第 5 回）にかけての時期はリーマンショックや年越し派遣村、東日本大震災とメルトダウン・原発事故などがあり、人々の連帯や絆といった人を思う気持ちが強調され、連携・協力といった概念が社会的表象として挙げられる。そして、2012 年以降はアベノミクスや東京オリンピックの開催決

定、地方創生政策の提言といった経済的再生の側面を強調した地域活性化が唱えられ、人々の意識においても経済活性化や地方創生といった未来志向の新たな価値創造の観点が影響を与えたものと思われる⁹⁾。

大地の芸術祭に関わるテキスト分析の結果を社会的表象理論の視座のもと、社会的・マクロ的な事象と人々の意識や行動の変容とを関連付けて議論し、検証した。社会的表象の存在が人々の行動や意識にどのような影響を及ぼし、それらが示す因果関係はどのようなプロセスを構築しているのかといった、組織化イナクトメントのミクロ的視点にもとづく課題については、次章での定量的実証調査において検討することとしたい。

第4章の注

- 1) 古村ら（2011）及び李（2016）による事例研究による。
- 2) 外部表象の視点からの論考におけるテキスト分析の展開については、内藤・涌田（2016：12-41）による。
- 3) 十日町市は2005年4月に隣接する川西町、中里村、松代町、松之山町と合併し、現在の市域を構成している。本研究では、2005年3月以前については旧十日町市発行の「市報とおかまち」を対象としてテキスト分析を行っている。
- 4) 計量テキスト分析ツール「KH Coder」の使用については、樋口（2014）、KH Coder ウェブサイトを参照した。
- 5) 語句表現の統一については、英数字の全角半角の統一や、各資料における表記ゆれの統一（例えば、「取組み」などは「取り組み」に統一）を実施した。語句の登録については、機械的・自動的に抽出されない語（例えば、越後妻有、こへび隊、里創など）を指定し、適切にテキストの前処理と分析が可能な状態に設定した。同様に、使用しない語の指定についても、資料の項目によっては、年月時間を表す語が多い箇所や金額に関する記述が多い箇所などが不必要に分析に影響を与えるため、年、月、午前、午後、円といった言葉を使用しない語として指定し、処理・分析した。
- 6) ここでは、例えば秋プログラムや雪花火イベントといった「大地の芸術祭の里」関連の、芸術祭以外の通年企画に関する記事は含まない。

- 7) 今回の調査において協働という言葉は、市報とおかまちでは 1999 年 3 月お知らせ版に初めて出現する。一方、北川フラム氏は協働について「私の知る限り「協働」という言葉は「こへび隊」による造語で、いまでは公用語にもなっています」と述べている（「理想の詩」秋号、2018 年 9 月発行、理想科学工業）が、協働という言葉の語源の詳細については不明である。
- 8) 十日町新聞 1998 年（平成 10 年）5 月 5 日号 1 面より
- 9) 社会的表象と大地の芸術祭に関する議論展開に関しては、河合忠彦先生から有意義な指摘、意見をいただいた。

第5章 大地の芸術祭でのインバウンド・ツーリストを対象とした実証調査

今後、将来に向けては、2020年の東京五輪開催にあたって多くの外国人観光客が日本を訪れることが予想される。前章のテキスト分析の結果からは、インバウンド需要を取り込むために、商品メニューやインターネットのホームページをはじめとする多言語化対応が求められるなど、海外から来訪する外国人への対応が課題として挙げられており、大地の芸術祭の今後の方向性としては、アートと地域振興を結びつけた活性化施策の先駆けとして、日本国内はもとより、国際的なブランド価値の向上を進め、2020年に向けたさらなる地域活性化の取り組みの推進が重要な課題となる。

これらのことを受けて本章ではインバウンド・ツーリズムに焦点をあてて、社会に存在し、人々に影響を与えているイメージやコンセプトがツーリストの行動や満足感にどのような影響を及ぼしているのかについて検証する。社会的表象から構成されるイメージやコンセプトは、人々の思考や営みに影響を与えていると考えられることから、このメカニズム解明のための理論仮説モデルを構築した上で構成概念に対して解析を行い、データ適合的かつ理論的にも妥当性を有する実証モデルを導出し、コトの世界における関係性プロセス検証のための社会的表象理論適用の有効性を提示する。実証に際しては、国際的な芸術祭として世界的に注目されている大地の芸術祭に来訪・参加した外国人観光客を対象としたアンケート調査を実施し、その解析結果からの考察を試みる。

第1節 調査研究の背景

1. インバウンド・ツーリズムと地域振興

先に述べたテキスト分析の結果のとおり、今後の大地の芸術祭においてはインバウンドへの対応が課題として浮かび上がってきた。地域振興の側面からも拡大するインバウンドを取り込み、観光産業を活性化することが重要となる。

訪日外国人旅行者数と日本人海外旅行者数を示した観光庁のデータ（観光庁ウェブサイト）によれば、2015年の訪日外国人旅行者（インバウンド）は1974万人となり、出国日本人数（1621万人）を上回った。翌2016年にはインバウンドは2404万人を示し、2011年以降、5年連続で増加している。訪日だけでなく、全世界で国境を越えて観光する人は

一日 300 万人以上おり、毎年およそ 12 億人が海外旅行をしている。このような状況のもとで国連は、観光を経済と社会、環境における持続可能な開発に寄与するものと位置づけ、2017 年を「開発のための持続可能な観光の国際年」を定めて、観光のもつ可能性と役割を改めて提示した（国際連合広報センターウェブサイト）。これをとらえてアートディレクターの北川フラム氏は「違う土地にいて、違う人に会え、という話なんです。違う人がよそにいて、違う価値観がある — それを知ることがいまいちばん大切なんじゃないかと、国連が全力で打ちだしている。これは本当にすごいことです。」と述べている（Forbes JAPAN ウェブサイト）。

北川氏が総合ディレクターを務める「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は 2000 年に初めて開催されたアートイベントで、新潟県の十日町地域の里山を舞台として行われる現代アートに焦点をあてた 3 年に一度実施される芸術祭であり、アートによる地域活性化の先駆的事例として知られる。北川氏はアートを地域づくりや人々の交流のための触媒として多様性の表現形態と意味づけ、地域住民とアーティスト、イベントへの来訪者を関係づけるシンボリック的存在として表現している（Forbes JAPAN ウェブサイト）。十日町市の関口市長は 20 年余り続く芸術祭を未だ一部の人のものとしてとらえており、さらに地域同士、人々の間の交流を深めていく可能性を説いている（Forbes JAPAN 2018 年 6 月号）。

現代アートを含む文化芸術は観光地の魅力や産業の付加価値などを産出する源であり、様々な産業分野への経済波及効果を生み出すものであるとして、文化芸術資源を活用した経済活性化が提起されている（日本経済再生本部ウェブサイト a）。文化庁によれば、文化産業の経済規模（文化 GDP）は、日本では総 GDP の 1.2% を占めるにとどまり、諸外国の 3~4% の値と比べて低いことから、日本の多様な文化芸術資源を考えれば伸びしろのある分野として示されている。文化 GDP 拡大への取り組みの方向性として、インバウンドの増加と地域の活力の創出が掲げられている。そのための方策として国際的な芸術祭の開催があり、大地の芸術祭も文化を中核とした経済活性化事例の一つとして挙げられている。クール・ジャパンを越えた概念としてクール・リージョンという言葉で示されるように、海外から特定の地域が着目される事例もあり（日本経済再生本部ウェブサイト b）、

文化芸術という特色を伴った地域活性化の取り組みが改めて注目される。

大地の芸術祭の開催に伴う波及効果としては、社会的側面と経済的側面がある（新潟県 2006）。社会的波及効果には、住民のまちづくり意識の高揚、情報の創造と発信機能の強化、地域の知名度・イメージの向上、地域内交流・国際交流の促進、地域文化水準の向上などがある。経済的波及効果には、建設投資によるものと消費支出によるものがあるが、芸術祭の場合には既に建設投資による経済効果は期待できず、消費支出によるものが主となる。今後の地域活性化のためにインバウンドの吸引効果が期待され、現代アートを展開する大地の芸術祭は社会的・経済的波及効果を増加させるためのインバウンド需要の取り込みに欠かせないイベントといえる。芸術祭の関係者も増加するインバウンドへの対応、受入体制の整備に関する事柄を重要な課題として認識しており（大地の芸術祭実行委員会 2016；渡辺 2017）、インバウンドに関わるデータ収集と分析は地域にとって有意義なものになることが期待される。

2. コトの世界への転換と社会的表象

着実に進行する人口減少や少子高齢化、過疎化の進展など、これまでに経験したことのない社会現象に対峙するにあたっては、規模の経済性にもとづきグローバル経済圏で競争する世界の視座に立つのではなく、非製造業、中堅・中小企業が中心であり、不完全競争下で分散的な産業・競争構造の中で密度の経済性を追求する世界の視座のもとで取り組みを展開することが有効である。富山（2014）が指摘する G の世界と L の世界の対比によれば、G の世界はグローバル経済圏として基本的にモノを扱っており、規模の経済性を効かせてグローバルマーケットで競争する世界である。一方、L の世界はローカル経済圏として、本質的にコトの価値（観るコト、運ぶコト、泊まるコトなど）を基本的に対面で提供するサービスが中心となるもので、日本の GDP ならびに従業員ともに 60～70%超がこのローカル経済圏で協創する L の世界に入る。本研究で議論の対象とするべき L の世界は、地域間コミュニティの関係性重視のコトの世界であるといえる。

関係性においては、そもそも所与の存在としてモノがあり、そのモノ同士を結びつけるのが関係性なのではなく、モノの存在とは、モノ同士の関係性の結節点として現れてくる

ものであると廣松（1982）は提起する。このような立場のもと、事象をとらえるにあたって、コトの世界における関係性という視点に着目して議論を進める。廣松（1982：vi-vii）が説くコトの世界とは、事件や事象を表すのではなく、それらの物象化によって初めて時空間的な event が現れ、また、その構造的契機の物象化によってモノが現れてくる世界である。モノが実体として自存して、その後に第二次的に関係性が成立してくるのではなく、関係性の規定こそが先に存在して初めて実体が現れてくると考えるのである。決して「人が関係そのことを物化して表象し、関係というものが先か、実体というものが先かという仕方で、実体の第一次性に対する同意的対立として受取る」（廣松 1982：vii）のではないのである。関係性の世界からのアプローチでは、物の性質や実体と考えられているものを、関係性規定の結節にほかならないと考えるのである。

モノの存在が実体として現れ、人々に現実のものとして認知されるに至る物象化の過程を説明する考えとして Moscovici が提起した社会的表象理論の視座にもとづき議論する。Moscovici（2001：50-51）によると、物象化のメカニズムは以下の2段階からなる。第一段階では、不正確な観念や存在の画像的特質を発見し、ある概念をあるイメージに再生産する（表象的核形成パターン）。さまざま観念が連合して視覚的に再生産され、このパターンに組み込まれて現実化していく。そして、イメージと現実との差異が小さくなるに従って現実化は進む。さらに現実化が進むと、概念のイメージは記号であることをやめ、現実の複製、つまり言葉の真実の意味の似姿となる。そしてこのプロセスが進行するにつれて、概念や実在は、抽象性や恣意性を失い、ほとんど物理的で独立的な存在者としての特性を獲得するに至る。第二段階では、イメージは完全に吸収され、想像が知覚へと代わる。この段階では、イメージは思考の要素から実体の構成要素へとなる。つまり、表象と表象される実体の隔たりは埋められ、概念の複製としての特性が、現象や環境の特性へと変わり、概念が指示する実体そのものになる。社会的表象はコトの世界の産物であり、関係性から構成されてくるのである。

第2節 実証調査の実施概要

1. 本調査の目的と方法論

1-1 社会的表象概念の規定の困難性

はじめに、本研究で議論する社会的表象について、その社会的表象なる概念規定の困難性に関して指摘する。社会的表象理論にもとづく検証がなされ、新聞記事の内容分析といった手法によって実証が試みられているが（矢守 2010；八ツ塚 2007, 2014）、社会的表象という概念の規定は確立されているとは言えず、研究者によって多様に解釈されて研究の俎上に載せているのが現状であろう。社会的表象概念規定上の困難さには以下の点が挙げられる。まず、社会的表象概念の規定にあたって十分な実証研究成果が示されていないこと、第二に、社会的表象概念は、人々にとって所与のものとして存在する環境のようなものであり、それが馴致される過程は、事後的・回顧的な意味形成プロセスを経て意味解釈がなされるセンスメイキングプロセスとして認識できることから、その社会的表象の存在をとらえた段階では既に馴染みのある当たり前の存在として知覚される特性であることなどの点が指摘される。これらの点をふまえ、本来は科学的方法論に則り、理論から演繹的に仮説の操作化がなされるところではあるが、本研究においては、操作化が困難な社会的表象という概念を持ち込んで議論・検証を試みることから、イレギュラーなかたちではあるが、実証調査における因子をそれに当てはめて事実発見的・仮説発見的に社会的表象、イメージ、コンセプトとして意味づけられるような操作化につなげている。社会的表象が具体的にとらえられない。同様にイメージ、コンセプトも何なのかわからない。このような状況の中で事実発見的に操作化し、概念を規定している。このようなかたちは一般的ではないので、研究上の限界として指摘しなければならない。

1-2 目的

本研究は実証科学の方法論を採用せず、実証的な視点から議論するためにモデルを設定し、社会的表象の作用構造の分析枠組みを導出したいと考えている。そして、分析フレームワークならびに社会的表象などの構成概念の間に形成される関係性について検討することにした。

本調査では、今後、十日町市がインバウンド・ツーリズムを推進し、十日町市に来訪す

る旅行者へのサービス向上をより改善していき、十日町市への訪問需要を創出するための課題を探ることを目的に、大地の芸術祭開催中に十日町市を訪れる訪日外国人の属性、旅行動向や意向などを調査する。さらに、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催をふまえ、東京など首都圏を中心に訪れる五輪観光客に向けた十日町市へのインバウンド強化における課題探索を目指す。具体的には、社会的表象を特定化することを通して、これにより影響を受けている人々が保有しているイメージと概念を分析することによって様々な関係性が具現化してくるプロセスを明確にすることを目的とし、社会に存在し人々に影響を与えているイメージやコンセプトが、旅行者にどのような行動や満足感を与えているかを探究する。

なお本調査内容は、十日町市と新潟大学との共同研究事業における平松庸一先生との共同研究成果にもとづくものである。

1-3 方法論

本章では社会的表象の作用構造メカニズムを検証するため、設定した理論モデルに対して質問紙調査法を適用して定量的な実証調査を試みる。広く社会的に存在する社会的表象概念が人々の行動に及ぼす結果との間に、社会的表象から構成されるイメージとコンセプトの概念を挿入し、これらの概念間の相関関係を分析する。モデルは、目的変数である人々の行動結果と、説明変数である社会的表象との中間に、知覚イメージと概念コンセプトの2つの媒介変数を組み込んだものである。実証の手順は次のとおりである。

- (1) 理論モデルの構成概念に対する操作化を実施し、観測変数を設計する。
- (2) 各観測変数に対して因子分析を行い、信頼性かつ妥当性のある因子を抽出する。
- (3) 抽出された因子にもとづき、構造方程式モデルを作成する。
- (4) 共分散構造分析を繰り返し行い、適合度指標などにもとづきデータ適合的な実証モデルを導出する。

1-4 理論モデルの導出

社会的表象理論は、新奇で馴染みのない現象が人々の間に知られていき、馴れ親しんだ存在となる過程を論じた理論であり、既に広く周知のものとなった社会現象やその現象を表す言葉が社会的表象として位置づけられる。現在の日本が持つイメージとして、少子高

齢化の進展といった社会的課題の顕在化、東日本大震災に伴う地震被害や原発事故、五輪の開催、観光振興に伴うおもてなし等の事柄が認識できることから、これらを社会的表象概念として特定化する。さらに、当地を訪れた人が感じるイメージについては、観光地や居住地としての魅力、食文化、街としての成長力や安心安全といった項目により測定できると思われるので、これらを知覚イメージ概念として特定化する。そして社会的表象による影響を受けた人は意味抽出と秩序化の過程をつかさどる思考フレームワークを形成し、意味づけと秩序化パターンによって抽象的な概念は具体化され、物理的な実体としての特性を獲得する。具体的かつ物理的な事象を認識するに際して、ある種の目的を持って事象にアプローチする必要性が見てとれることから、具体的な旅行の目的に関する項目をもって概念コンセプトとして特定化する。最後に、行為の結果として旅行に訪れた満足感が得られると考えられるので、日本への訪問、十日町市への訪問、そして大地の芸術祭への来訪という行為に満足したかどうかといった項目でとらえることが可能であろう。よってこれらを行為の結果概念として特定化する。

以上のことから、社会的表象、知覚イメージ、概念コンセプト、行為の結果の4つの構成概念からなる理論仮説モデル（図1）を構築した。

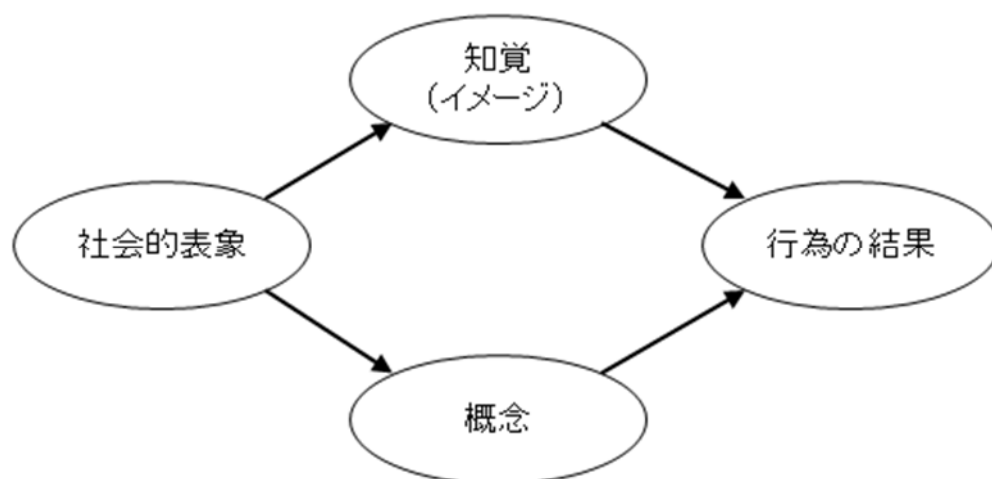


図1 理論仮説モデル

理論モデルから導出される仮説は次のとおりである。

理論仮説1：「社会的表象の影響が増すほど知覚イメージは高まる」

理論仮説 2：「社会的表象の影響が増すほど概念コンセプトは高まる」

理論仮説 3：「知覚イメージが高まるほど行為の結果は促進される」

理論仮説 4：「概念コンセプトが高まるほど行為の結果は促進される」

2. 構成概念の操作化

2-1 社会的表象概念の操作化

ここでは社会的表象の作用構造の分析フレームワークを検証するにあたり、社会的表象概念を構成する事柄として現代の日本が有する社会的イメージを表す事象を適用し、社会的表象概念の操作化を試みた。日本から浮かぶイメージのもとで 9 個の質問項目が作成された。尺度は 5 点リッカート・スケールを採用する。

【概念】社会的表象

【カテゴリー】日本から浮かぶイメージ

【サブカテゴリー】日本から地震をイメージする

日本から風水害をイメージする

日本から原子力発電事故をイメージする

日本から少子化社会をイメージする

日本から超高齢社会をイメージする

日本から超現代社会をイメージする

日本から雪をイメージする

日本からおもてなしをイメージする

日本からオリンピック・パラリンピックをイメージする

2-2 知覚イメージ概念の操作化

現代日本の事象から受ける知覚イメージ概念については、来訪した人が抱く当地への印象を概念操作化に適用した。新潟から浮かぶイメージのもとで 8 個の質問項目が作成された。尺度は 5 点リッカート・スケールを採用する。

【概念】知覚イメージ

【次元】新潟から浮かぶイメージ

【インディケータ】住環境

観光地

ショッピング

労働

食魅力

成長力

安全・安心

豪雪

2-3 コンセプト概念の操作化

概念コンセプトの操作化については、具体的で実態を持った存在としての事象にアプローチするにあたり、ある種の目的を持って事象をとらえようとし、その後の目的達成度合いと合わせて概念コンセプトを形成する項目として適用した。十日町市への旅行の目的と満足度合いの次元のもとで 14 個の質問項目が作成された。尺度は 5 点リッカート・スケールを採用する。

【概念】概念コンセプト

【次元】十日町市への旅行の目的と満足度合い

【インディケータ】日本食目的

日本食満足

まち歩き目的

まち歩き満足

歴史体験目的

歴史体験満足

日常生活目的

日常生活満足

知人訪問目的

知人訪問満足

アウトドア目的

アウトドア満足

雪体験目的

雪体験満足

2-4 行為の結果概念の操作化

Moscovici (1984) が提起したモデルでは、社会的表象が直接的に反応、すなわち行為に影響を及ぼす構造が示されていたが、本研究では、社会的表象により影響を受けた知覚イメージとコンセプト双方の関係性により行為の発現につながるという考えのもと、社会的表象と行為との間に知覚イメージと概念コンセプトの2つの媒介変数を想定するモデルとした。行為の結果として旅行全般の満足度合いが影響すると思われるので、行為結果の概念操作化には、日本への訪問、十日町市への訪問、大地の芸術祭に対する満足度を示す各項目からなる基準を採用した。旅行の満足度の次元のもとで3個の質問項目が作成された。尺度は5点リッカート・スケールを採用する。

【概念】行為の結果

【次元】旅行の満足度

【インディケータ】日本満足

十日町満足

芸術祭満足

3. 質問紙調査の概要

今回の調査は、第7回大地の芸術祭期間中に十日町市を訪れた外国人旅行者を対象として、紙ベースの調査票を用いたアンケート調査を実施する。

○調査期間：第7回大地の芸術祭開催期間（2018年8月7日（火）～9月17日（月祝））

○調査場所：十日町駅、まつだい駅、クロステン（道の駅）

○対象言語：英語、中国語（繁体字、簡体字）、韓国語の3か国語4種類

本アンケートにおける調査項目は以下のとおりである。

（1）属性

性別、年齢、国籍・地域など

(2) 旅行動向

来日回数、十日町市への来訪回数、滞在予定期間、宿泊地、宿泊施設、旅行手配方法、日本への入出空港、旅行経路、移動手段

(3) 意向など

十日町訪問のポイントと情報源、日本滞在中に役立った情報源、日本でのショッピング場所、十日町市や大地の芸術祭への満足度、鉄道駅・道の駅・宿泊施設への希望や改善点

(4) 十日町市訪問理由

大地の芸術祭の作品鑑賞、日本食、まち歩き、歴史や伝統文化の体験、温泉、自然体験など

(5) 旅行者の日本、新潟県への感じ方など

「日本」へのイメージ：地震、風水害、原子力発電事故、少子化社会、超高齢社会、おもてなしなど

「新潟」へのイメージ：住んでみたい、観光地、ショッピング、働きたい、食文化が魅力的、安全・安心、豪雪地帯など

「十日町市」で困ったこと：コミュニケーション、決済等の支払い、交通手段、情報の入手など

本研究で解析ソフトはMicrosoft社のExcel2010、IBM社のSPSS Statistics20、Amos20を使用した。本報告では、回収サンプルのうち8月末までに回収した285件のサンプルを対象とした。

第3節 実証調査結果

1. 基本統計量の結果

基本属性は次のとおりである(表1)。回答者は男性が31.9%、女性が68.1%であった。年齢は、10代が6.3%、20代が41.4%、30代が24.2%、40代が15.8%、50代が8.4%、60代が2.5%、70代以上が1.4%であった。回答者の国籍・地域は、中国が最も多く49.8%、次いで台湾が30.9%となっており、その他、韓国などを含めるとアジア系の来訪者が83.9%を占める結果となった。

表 1 回答者の基本属性

項目		度数	パーセント
性別	男性	91	31.9
	女性	194	68.1
	合計	285	100.0
年齢	10 代	18	6.3
	20 代	118	41.4
	30 代	69	24.2
	40 代	45	15.8
	50 代	24	8.4
	60 代	7	2.5
	70 代以上	4	1.4
	合計	285	100.0
回答者の国籍・地域	中国	142	49.8
	台湾	88	30.9
	イタリア	9	3.2
	オーストラリア	8	2.8
	フランス	8	2.8
	米国	7	2.5
	韓国	6	2.1
	デンマーク	4	1.4
	英国	3	1.1
	シンガポール	2	0.7
	オランダ	1	0.4
	カナダ	1	0.4
	スペイン	1	0.4
	ドイツ	1	0.4
	ニュージーランド	1	0.4
	ベルギー	1	0.4
	マラウイ	1	0.4
	マレーシア	1	0.4
	合計	285	100

旅行者の満足度、日本から浮かぶイメージ、新潟から浮かぶイメージ、十日町市への旅行で困ったこと、十日町市への旅行の目的と満足度合いの各項目の基本統計量を表 2 に示す。

2. 因子分析の結果

(1) 社会的表象導出のためのイメージと目標指向性項目に対する因子分析

社会的表象導出のためのイメージと目標指向性の項目を統合して因子分析を実施した。

当該因子分析対象項目は、海外からのツーリストが日本に対して浮かぶイメージ(9項目)、新潟に対して浮かぶイメージ(8項目)、そして十日町市への旅行目的(11項目)の計28項目を対象とした。当該28項目に関して、日本に対して3項目、新潟に対して1項目、十日町市への旅行目的に対して3項目の計7項目、いずれも天井効果が認められた。しかし、検討の結果これらを除外せずすべてを対象に因子分析を実行することとした。

当分析の対象は7因子想定28項目から構成されており、因子分析の結果から7因子が抽出されたが、因子6、因子7はいずれも因子負荷0.4以上の観測変数が1項目であることから因子として除外し、以下の分析は5因子を対象として実施した(表3)。

当該因子の命名については以下のとおりである。

因子1は、ビジネスと観光地と安心性の項目と関連する内容と解釈できる。よって、当該因子を「商業観光地イメージ」と命名した。

因子2は、メルtdownを中心とした自然災害、人災両面からくる内容に関連している。よって、当該因子を「社会的表象メルtdown」と命名した。

因子3は、人間の営みや文化と関連している。よって、当該因子を「十日町市文化探訪志向」と命名した。

因子4は、知人との再会や自然体験、雪体験等々愉快的内容に関連している。よって、当該因子を「十日町市愉快体験志向」と命名した。

因子5は、少子高齢や来るべき到来する社会等の内容に関連している。よって、当該因子を「社会的表象少子高齢社会」と命名した。

表 2 基本統計量

			度数	平均値	標準偏差	歪度	尖度	フロアー 効果	天井 効果
旅行の 満足度	日本満足	日本訪問全体に満足していますか	282	4.7	0.488	-0.88	-0.77	4.17	5.15
	十日町満足	十日町市訪問に満足していますか	275	4.5	0.600	-1.05	1.14	3.92	5.12
	芸術祭満足	大地の芸術祭に満足していますか	267	4.5	0.655	-1.21	1.97	3.80	5.11
日本から イメージ	地震	日本から地震を強くイメージする	268	3.9	1.096	-1.19	0.97	2.84	5.03
	風水害	日本から風水害を強くイメージする	258	3.5	1.091	-0.63	-0.20	2.36	4.54
	メルトダウン	日本から原子力発電事故を強くイメージする	260	3.7	1.225	-0.89	-0.09	2.51	4.96
	少子化	日本から少子化社会を強くイメージする	262	3.7	1.153	-0.88	0.10	2.51	4.81
	超高齢	日本から超高齢社会を強くイメージする	271	4.1	0.977	-1.28	1.64	3.09	5.04
	超現代	日本から超現代社会を強くイメージする	263	4.0	0.957	-0.92	0.71	3.04	4.96
	雪	日本から雪を強くイメージする	262	3.7	1.118	-0.77	0.04	2.59	4.82
	おもてなし	日本からおもてなしを強くイメージする	277	4.3	0.803	-1.19	1.46	3.53	5.14
	五輪	日本からオリンピック・パラリンピックを強くイメージする	262	3.5	1.053	-0.67	0.17	2.47	4.58
新潟から イメージ	住環境	新潟に住んでみたい	270	3.6	0.938	-0.35	-0.09	2.62	4.50
	観光地	新潟は観光地として素晴らしい	276	4.1	0.859	-0.98	1.10	3.23	4.95
	ショッピング	新潟でショッピングしてみたい	264	3.1	0.914	-0.07	0.45	2.15	3.98
	労働	新潟で働きたい	262	2.8	0.949	-0.27	0.22	1.88	3.78
	食魅力	新潟の食文化が魅力的である	271	3.9	0.931	-0.84	0.71	2.95	4.81
	成長力	新潟の成長力を感じる	265	3.6	0.943	-0.52	0.30	2.63	4.51
	安全・安心	新潟は安全・安心を感じる	275	4.2	0.843	-0.91	0.66	3.34	5.03
	豪雪	新潟は豪雪地帯である	265	3.7	1.112	-0.64	-0.13	2.56	4.78
	コミュニケーション	意思疎通（コミュニケーション）で困った	271	2.7	1.108	0.06	-0.87	1.60	3.82
十日町市 への旅行で 困ったこと	支払い	支払い（電子決済等）で困った	267	2.6	1.100	0.31	-0.51	1.46	3.66
	交通手段	交通手段で困った	273	3.0	1.296	-0.07	-1.16	1.69	4.28
	有益情報	有益情報の入手で困った	257	2.3	1.004	0.41	-0.50	1.28	3.29
十日町市 への旅行の 目的と満足 度合い	大地芸術祭目的	大地の芸術祭の作品を鑑賞するため	274	4.7	0.572	-2.01	4.12	4.13	5.27
	大地芸術祭満足	大地の芸術祭の作品を鑑賞する目的が達成された	246	4.3	0.690	-0.79	0.61	3.62	4.999
	日本食目的	日本食を食べるため	264	4.1	0.777	-0.71	0.54	3.35	4.90
	日本食満足	日本食を食べる目的が達成された	243	4.3	0.731	-0.56	-0.71	3.55	5.02
	まち歩き目的	まち歩きをするため	262	3.8	0.909	-0.56	0.31	2.88	4.70
	まち歩き満足	まち歩きをする目的が達成された	239	3.9	0.858	-0.55	0.30	3.09	4.81
	歴史体験目的	歴史・伝統文化の体験をするため	263	4.1	0.746	-0.46	-0.40	3.39	4.89
	歴史体験満足	歴史・伝統文化の体験する目的が達成された	240	4.2	0.737	-0.45	-0.44	3.42	4.90
	日常生活目的	十日町市の日常生活体験をするため	262	3.8	0.852	-0.21	-0.48	2.95	4.65
	日常生活満足	十日町市の日常生活体験する目的が達成された	239	3.9	0.854	-0.21	-0.63	3.05	4.75
	温泉目的	温泉に入浴するため	261	3.4	1.086	-0.21	-0.44	2.31	4.48
	温泉満足	温泉に入浴する目的が達成された	231	3.5	1.091	-0.26	-0.44	2.44	4.62
	自然体験目的	農山村体験・自然体験ツアーをするため	265	3.9	0.963	-0.90	0.83	2.95	4.88
	自然体験満足	農山村体験・自然体験ツアーをする目的が達成された	231	4.0	0.930	-0.94	0.92	3.10	4.96
	イベント目的	イベント・お祭りの体験をするため	261	3.8	0.949	-0.53	0.13	2.82	4.72
	イベント満足	イベント・お祭りの体験する目的が達成された	228	3.8	0.899	-0.33	-0.14	2.88	4.68
	知人訪問目的	親族・知人を訪問をするため	252	2.4	1.248	0.48	-0.68	1.13	3.63
	知人訪問満足	親族・知人を訪問する目的が達成された	220	2.6	1.290	0.26	-0.82	1.32	3.90
	アウトドア目的	アウトドアスポーツをするため	256	2.8	1.158	0.00	-0.60	1.66	3.98
	アウトドア満足	アウトドアスポーツする目的が達成された	221	3.0	1.168	-0.16	-0.47	1.84	4.18
	雪体験目的	「雪」に関連する内容を体験するため	248	2.4	1.178	0.32	-0.55	1.25	3.61
	雪体験満足	「雪」に関連する内容を体験する目的が達成された	215	2.6	1.187	0.17	-0.50	1.41	3.79

クロンバッハの α 信頼性係数は以下のとおりである。

因子 1 の因子負荷 0.4 以上項目（ショッピング、労働、成長力、住環境、食魅力、観光地、安全・安心）に対する $\text{Alpha}=.832$

因子 2 の因子負荷 0.4 以上項目（地震、メルtdown、風水害）に対する $\text{Alpha}=.844$

因子 3 の因子負荷 0.4 以上項目（歴史体験目的、日本食目的、日常生活目的、まち歩き目的）に対する $\text{Alpha}=.740$

因子 4 の因子負荷 0.4 以上項目（知人訪問目的、アウトドア目的、雪体験目的）に対する $\text{Alpha}=.806$

因子 5 の因子負荷 0.4 以上項目（超高齢、超現代、少子化、おもてなし）に対する $\text{Alpha}=.667$

なお、上記信頼性係数 α において因子 5 以外はいずれも $\alpha > .70$ であり十分な信頼性を確保している。因子 5 は $.07 > \alpha > .65$ でありグレイゾーンであるが、許容範囲と判断して、以下の分析において採用するものとした。上記因子 1、因子 2、因子 3、因子 4、因子 5 に対するクロンバッハの α 信頼性係数の算出に際して、ある項目が削除された場合の α (α if item deleted) が 0.1 以上の上昇変動をきたす項目は存在しなかった。

尺度の得点に関しては、Bartlett 法による因子スコアを算出しこれを適用した。

(2) 満足度に対する因子分析

旅行者に対して今回の日本ならびに十日町市への旅行に対する満足に関連する項目を統合して因子分析を実施した。今回の旅行全体に対する満足 3 項目とツーリストが当初の目的に対して行動に移した後の満足度 11 項目、さらに十日町市で困った内容（満足の逆転内容）4 項目の計 18 項目を対象に因子分析を実行した。当該 18 項目に関して、今回の旅行に対する満足に関する 3 項目、大地の芸術祭と日本食に対する 2 項目の計 5 項目に対して、いずれも天井効果が出現した。しかし、検討の結果これらを除外せずすべてを対象に因子分析を実行することとした（表 4）。

当分析の対象は 5 因子想定 18 項目から構成されており、因子分析の結果、5 因子が抽出され、当該因子の命名を行った。

因子 1 は、十日町市の文化と関連する観光の内容と解釈できる。よって、当該因子を「文

化探訪満喫」と命名した。

因子 2 は、今回の日本旅行に対する総合的な満足に関連している。よって、当該因子を「総合的旅行の成功」と命名した。

因子 3 は、今回の旅行の愉快さに関連している。よって、当該因子を「十日町市愉快性」と命名した。

因子 4 は、十日町市旅行での困った内容に関連している。よって、当該因子を「十日町市ツーリスト不便性」と命名した。

クロンバッハの α 信頼性係数は以下のとおりである。

因子 1 の因子負荷 0.4 以上項目（まち歩き満足、日常生活満足、歴史体験満足、日本食満足）に対する $\text{Alpha}=.774$

因子 2 の因子負荷 0.4 以上項目（十日町満足、芸術祭満足、日本満足）に対する $\text{Alpha}=.823$

因子 3 の因子負荷 0.4 以上項目（雪体験満足、アウトドア満足、知人訪問満足）に対する $\text{Alpha}=.782$

因子 4 の因子負荷 0.4 以上項目（交通手段、有益情報、支払い、コミュニケーション）に対する $\text{Alpha}=.691$

因子 5 の因子負荷 0.4 以上項目（自然体験満足、大地芸術祭満足）に対する $\text{Alpha}=.519$

上記信頼性係数 α において因子 4、5 以外はいずれも $\alpha > .70$ であり十分な信頼性を確保している。因子 4 は $.07 > \alpha > .65$ でありグレイゾーンであるが、許容範囲と判断して、以下の分析において採用するものとした。因子 5 は、因子負荷 0.4 以上の観測変数が 1 項目であるが、大地芸術祭満足の因子負荷は 0.383 であるものの共通性が 0.40 であり、総合的に判断して自然体験満足と大地芸術祭満足の 2 項目からなる因子として採用することにした。しかし、クロンバッハの α が許容範囲の 0.65 未満であったため以下の分析から除外することとした。上記因子 1、因子 2、因子 3、因子 4 に対するクロンバッハの α 信頼性係数の算出に際して、ある項目が削除された場合の α (α if item deleted) が 0.1 以上の上昇変動をきたす項目は存在しなかった。

尺度の得点に関しては、Bartlett 法による因子スコアを算出しこれを適用した。

表 3 社会的表象導出のためのイメージと目標指向性項目に対する因子分析(プロマックス回転)

ラベル	質問項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6	因子 7	交通性
ショッピング	新潟でショッピングしてみたい	0.768	-0.047	-0.019	0.025	0.051	-0.107	-0.106	0.55
労働	新潟で働きたい	0.735	0.093	-0.154	0.140	-0.014	-0.059	-0.083	0.49
成長力	新潟の成長力を感じる	0.692	-0.077	-0.110	-0.057	0.109	0.088	0.109	0.50
住環境	新潟に住んでみたい	0.648	0.148	-0.078	-0.030	-0.171	-0.061	0.202	0.45
食魅力	新潟の食文化が魅力的である	0.568	-0.051	0.247	-0.044	0.062	0.029	-0.050	0.49
観光地	新潟は観光地としてすばらしい	0.560	-0.062	0.264	-0.072	-0.007	0.103	-0.103	0.51
安全・安心	新潟の安全・安心を感じる	0.451	-0.063	0.225	-0.041	0.004	0.109	-0.037	0.37
地震	日本から地震を強くイメージする	-0.121	0.916	0.161	-0.036	0.038	-0.016	-0.115	0.80
メルトダウン	日本から原子力発電事故を強くイメージする	0.038	0.829	-0.063	-0.047	-0.049	0.019	0.031	0.69
風水害	日本から風水害を強くイメージする	0.041	0.765	0.121	-0.030	-0.029	-0.014	0.042	0.55
歴史体験目的	十日町市の歴史・伝統文化の体験	-0.060	0.004	0.717	0.058	0.181	0.000	0.022	0.52
日本食目的	十日町市で日本食を食べる	0.002	0.040	0.640	-0.032	-0.040	-0.115	0.051	0.41
日常生活目的	十日町市の日常生活体験	-0.120	0.047	0.612	0.145	0.055	0.097	0.120	0.46
まち歩き目的	十日町市のまち歩き	0.133	0.084	0.600	-0.066	0.025	-0.083	-0.016	0.39
知人訪問目的	十日町市の親族・知人を訪問する	-0.077	-0.003	0.160	0.800	0.038	0.042	-0.143	0.63
アウトドア目的	十日町市のアウトドアスポーツ	0.010	-0.046	-0.056	0.705	0.013	-0.053	0.208	0.63
雪体験目的	十日町市の「雪」に関連する内容を体験するため	0.060	-0.081	0.007	0.685	-0.001	0.053	0.004	0.52
超高齢	日本から超高齢社会を強くイメージする	-0.066	-0.037	-0.031	0.015	0.938	-0.048	0.028	0.85
超現代	日本から超現代社会を強くイメージする	-0.027	-0.003	0.312	-0.093	0.543	-0.067	-0.023	0.31
少子化	日本から少子化社会を強くイメージする	0.152	0.230	-0.248	0.077	0.524	-0.092	0.000	0.54
おもてなし	日本からおもてなしを強くイメージする	0.071	-0.022	0.191	0.021	0.407	0.054	-0.063	0.20
豪雪	新潟は豪雪地帯である	-0.011	0.019	-0.070	0.023	-0.068	0.981	-0.042	0.92
自然体験目的	十日町市の農山村体験・自然体験ツアー	-0.036	-0.006	0.137	0.025	-0.013	-0.032	0.966	1.00
大地芸術祭目的	十日町市で大地の芸術祭の作品を鑑賞するため	0.037	-0.061	0.152	-0.356	0.092	0.125	0.218	0.16
イベント目的	十日町市でイベント・お祭りの体験	0.188	-0.016	0.298	0.165	-0.009	-0.089	0.121	0.30
雪	日本から雪を強くイメージする	0.027	0.167	-0.124	-0.016	0.170	0.283	0.096	0.26
五輪	日本からオリンピック・パラリンピックを強くイメージする	0.035	0.293	-0.097	0.074	0.268	0.202	0.046	0.37
温泉目的	温泉に入浴する	0.155	0.089	0.264	0.334	-0.152	0.061	0.035	0.36
抽出後の負荷量平方和		2.52	2.61	2.97	2.50	1.05	1.31	1.29	
分散の%		8.99	9.33	10.59	8.93	3.74	4.69	4.61	
累積%		8.99	18.32	28.91	37.84	41.58	46.27	50.88	
因子間相関	第1因子	1							
	第2因子	-0.075	1						
	第3因子	0.434	-0.234	1					
	第4因子	0.293	-0.064	0.289	1				
	第5因子	0.027	0.519	-0.115	0.007	1			
	第6因子	0.205	0.156	0.117	0.056	0.227	1		
	第7因子	0.242	0.260	0.239	0.381	0.311	0.132	1	

(注1) 共通性は因子抽出後の数値である。

(注2) 網掛け部分は、因子パターンが0.40以上のものである。

(注3) Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.788であった。

(注4) 因子抽出法は最尤法、回転はKaiser の正規化を伴うプロマックス法を採用。

(注5) 欠損値はリストごとに除外した。

表 4 満足度に対する因子分析(プロマックス回転)

ラベル	質問項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	共通性
まち歩き満足	まち歩きをする目的が達成された	0.721	-0.010	0.024	0.081	-0.119	0.45
日常生活満足	十日町市の日常生活体験する目的が達成された	0.650	-0.082	0.054	0.000	0.271	0.62
歴史体験満足	歴史・伝統文化の体験する目的が達成された	0.583	0.083	-0.061	0.035	0.225	0.50
日本食満足	日本食を食べる目的が達成された	0.570	0.166	-0.077	-0.110	-0.076	0.43
十日町満足	十日町市訪問に満足していますか	0.122	0.870	-0.032	0.065	0.000	0.80
芸術祭満足	大地の芸術祭に満足していますか	-0.065	0.799	0.023	0.033	0.216	0.73
日本満足	日本訪問全体に満足していますか	0.040	0.723	0.088	-0.106	-0.278	0.58
雪体験満足	「雪」に関連する内容を体験する目的が達成された	-0.053	0.101	0.804	0.032	-0.073	0.60
アウトドア満足	アウトドアスポーツする目的が達成された	-0.174	-0.046	0.714	-0.062	0.227	0.61
知人訪問満足	親族・知人を訪問する目的が達成された	0.196	-0.029	0.688	0.062	-0.081	0.54
交通手段	交通手段で困った	-0.200	0.119	-0.041	0.714	0.102	0.54
有益情報	有益情報の入手で困った	0.053	-0.034	-0.023	0.613	-0.097	0.39
支払い	支払い（電子決済等）で困った	0.019	0.009	0.080	0.605	-0.004	0.37
コミュニケーション	意思疎通（コミュニケーション）で困った	0.215	-0.161	-0.019	0.434	-0.064	0.25
自然体験満足	農山村体験・自然体験ツアーする目的が達成された	0.118	-0.033	0.057	-0.005	0.627	0.49
大地芸術祭満足	大地の芸術祭の作品を鑑賞する目的が達成された	0.001	0.390	-0.066	-0.076	0.383	0.40
イベント満足	イベント・お祭りの体験する目的が達成された	0.373	0.009	0.108	-0.006	0.270	0.36
温泉満足	温泉に入浴する目的が達成された	0.188	0.002	0.320	-0.045	0.051	0.21
	抽出後の負荷量平方和	4.13	2.09	1.09	1.00	0.54	
	分散の%	22.93	11.61	6.03	5.57	3.01	
	累積%	22.93	34.54	40.57	46.13	49.14	
因子間相関	第1因子	1					
	第2因子	0.380	1				
	第3因子	0.327	0.115	1			
	第4因子	-0.267	-0.433	0.020	1		
	第5因子	0.370	0.294	0.433	-0.056	1	

(注1) 共通性は因子抽出後の数値である。

(注2) 網掛け部分は、因子パターンが0.40以上のものである。

(注3) Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.781であった。

(注4) 因子抽出法は最尤法、回転はKaiser の正規化を伴うプロマックス法を採用。

(注5) 欠損値はリストごとに除外した。

なお、導出された因子間の相関係数（Pearson）は表 5 に示す。ここでは因子分析の結果、算出された因子スコア（Bartlett 法）を使用して 2 変数間の相関を求めている。

表 5 因子間の相関係数(Pearson)

	社会的表象 メルトダウン	社会的表象 少子高齢社会	商業観光地 イメージ	十日町市 文化探訪志向	十日町市 愉快体験志向	総合的旅行 の成功	文化探訪満喫	十日町市 愉快性	十日町市ツ－ リスト不便性
社会的表象 メルトダウン	1								
社会的表象 少子高齢社会	.459**	1							
商業観光地 イメージ	-.059	.028	1						
十日町市 文化探訪志向	-.217**	-.100	.358**	1					
十日町市 愉快体験志向	-.044	.002	.246**	.221**	1				
総合的旅行 の成功	-.132	.065	.191*	.359**	.017	1			
文化探訪満喫	-.150	-.032	.321**	.835**	.257**	.310**	1		
十日町市 愉快性	-.050	.073	.246**	.169*	.818**	.096	.265**	1	
十日町市ツ－ リスト不便性	.110	-.052	.002	-.224**	.086	-.355**	-.201**	.016	1

**、相関係数は 1% 水準で有意（両側）である。
*、相関係数は 5% 水準で有意（両側）である。
（注）欠損値が存在するため、N=172、N=189、N=211 の 3 パターンあった。

3. 構造方程式モデリング

3-1 構造方程式モデルに使用する潜在変数と観測変数

構造方程式モデルを構築するために、因子分析結果にもとづき社会的表象、知覚イメージ、概念コンセプト、行為の結果に関する潜在変数の確定ならびに観測変数の選定作業を実施した。その結果を表 6 に示す。

表 6 共分散構造分析に使用する観測変数

潜在変数		観測変数
社会的表象	日本から浮かぶイメージ	日本から地震を強くイメージする
		日本から風水害を強くイメージする
		日本から原子力発電事故を強くイメージする
		日本から少子化社会を強くイメージする
		日本から超高齢社会を強くイメージする
		日本から超現代社会を強くイメージする
		日本からおもてなしを強くイメージする
知覚イメージ	新潟から浮かぶイメージ	新潟に住んでみたい
		新潟は観光地としてすばらしい
		新潟でショッピングしてみたい
		新潟で働きたい
		新潟の食文化が魅力的である
		新潟の成長力を感じる
		新潟は安全・安心を感じる
概念コンセプト (思考フレームワーク)	十日町市への旅行の目的と満足度合い	日本食を食べるため
		日本食を食べる目的が達成された
		まち歩きをするため
		まち歩きをする目的が達成された
		歴史・伝統文化の体験をするため
		歴史・伝統文化の体験する目的が達成された
		十日町市の日常生活体験をするため
		十日町市の日常生活体験する目的が達成された
		親族・知人を訪問をするため
		親族・知人を訪問する目的が達成された
		アウトドアスポーツをするため
		アウトドアスポーツする目的が達成された
		「雪」に関連する内容を体験するため
		「雪」に関連する内容を体験する目的が達成された
行為の結果	旅行の満足度	日本訪問全体に満足していますか
		十日町市訪問に満足していますか
		大地の芸術祭に満足していますか

3-2 構造方程式モデルの構築

ここでは前項の因子分析によって抽出した因子をもとに、社会的表象によって観光客に影響を受けるイメージやコンセプトが、どのような旅行満足感を与えているか表現するモデル構築を構造方程式モデリングにより行った。対象サンプル数は 175 であった。社会的

表象導出のためのイメージと目標指向性の項目を統合して因子分析を実施した結果から導出された因子を使用し、共分散構造分析を実施した。

初期モデル（図 2）では文化探訪満喫に設定した $\zeta 4$ の分散がマイナスとなった。よって、モデルの修正を試みた結果、文化探訪満喫を除外して第 2 モデルを作成した。

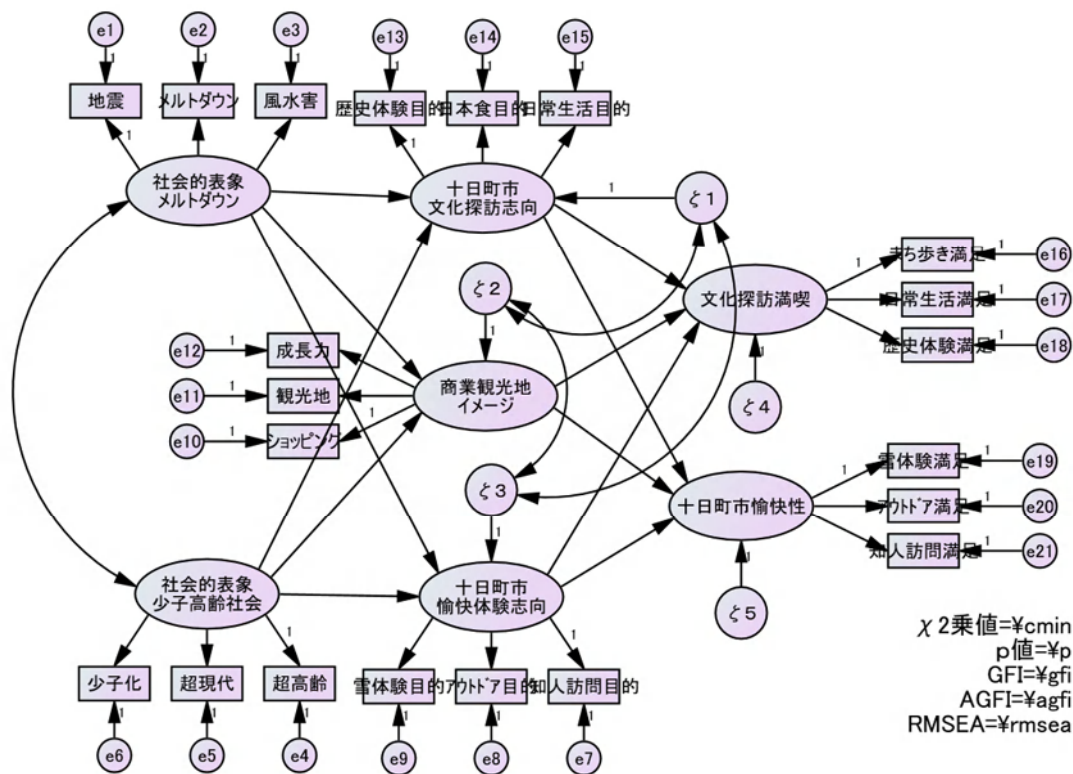


図 2 構造方程式モデリングによる導出モデル(初期モデル)

第 2 モデル（図 3）では、 p 値=0.012、GFI=0.910、RMSEA=0.042 と、許容範囲の数値を導出することが出来た。よって、この第 2 モデルを基本モデルとして考える。この基本モデルにおいて、社会的表象少子高齢社会→十日町市文化探訪志向、社会的表象少子高齢社会→商業観光地イメージ、十日町市愉快体験志向→総合的旅行の成功の 3 つのパス係数から判断して、これら 3 本のパスを削除した結果、修正モデルとして第 3 モデルが導出された。

第3モデル(図4)ではWald検定統計量から、社会的表象メルトダウン→十日町市文化探訪志向、社会的表象少子高齢社会→十日町市愉快体験志向、商業観光地イメージ→総合的旅行の成功の3本のパス以外は全て10%水準で有意を示した。修正指数を確認したところ、当該モデルの初期設計の概念を侵すことなく有意味な修正の価値のある存在が認められなかった。よって、第3モデルをもって最終導出モデルとする。

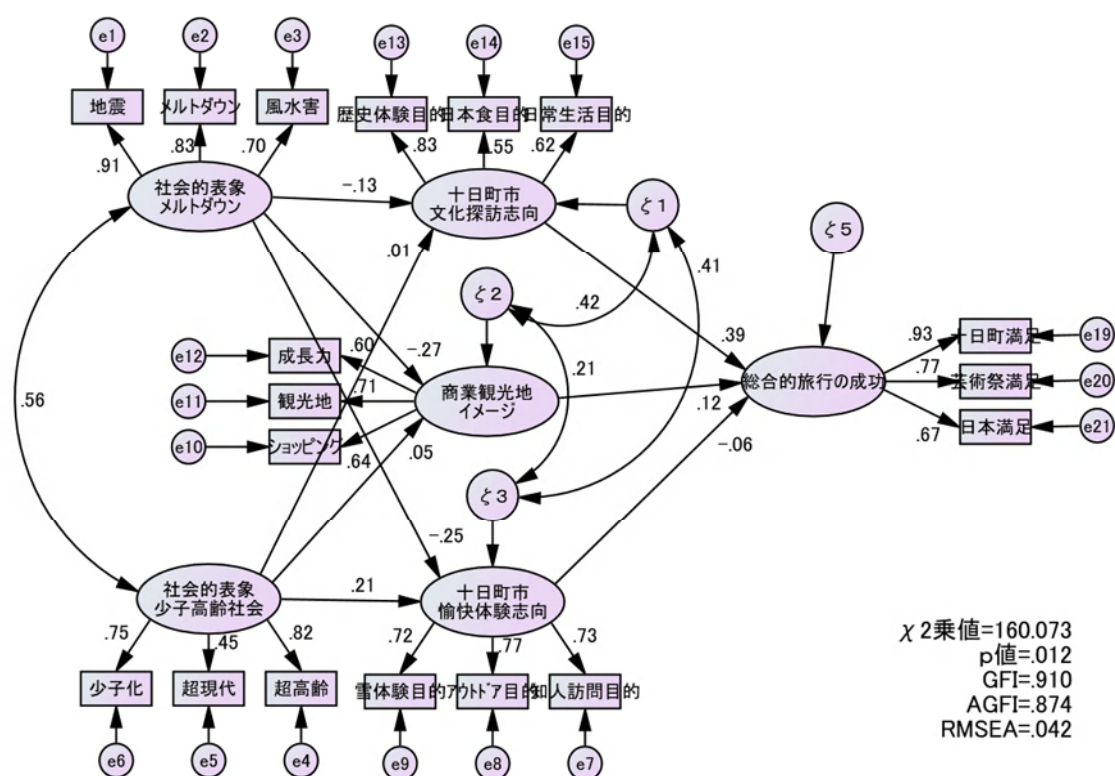


図3 構造方程式モデリングによる導出モデル(第2モデル:基本モデル)

3-3 導出モデルの解釈

共分散構造分析の場合は、p値が0.05より大きいというのが一つの統計的処理をする場合の判断基準である。そしてGFI、AGFIの値は1に近いほど、RMSEAは0に近いほどデータの当てはまりが良く、説得力のあるモデルとして評価される。第3モデルから得られた各値は、p値が0.018、GFIが0.909、AGFIが0.876、RMSEAが0.040であった。p値は0.05以上になっていないが、GFIが0.9以上、RMSEAが0.6未満であり、適合度

指標からは許容範囲のため、仮説検証におけるパスの解釈が許されるものと判断し、図 4 に示した第 3 モデルをもとに議論を行うこととする。

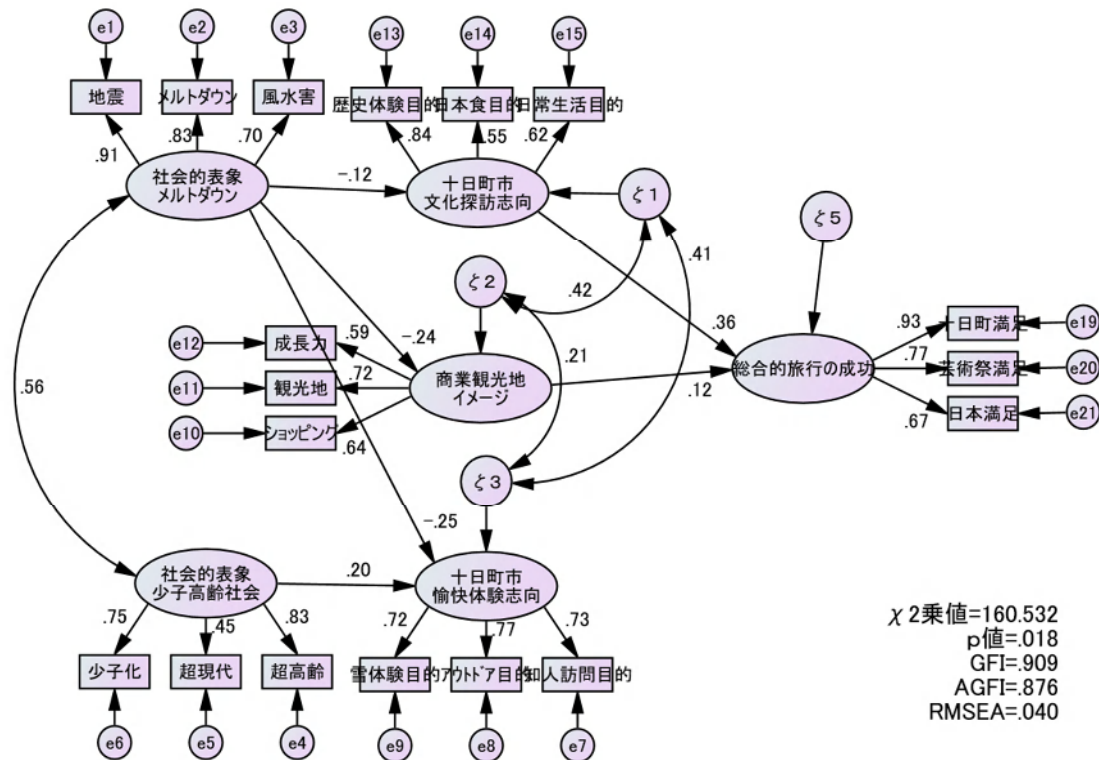


図 4 構造方程式モデリングによる導出モデル(第 3 モデル:最終導出モデル)

以下において、最終導出モデルである第 3 モデルについて考察を行う。

(1) 最終導出モデルには、社会的表象に対する潜在変数として社会的表象メルトダウンと社会的表象少子高齢社会の 2 つが残った。メルトダウンのほうは地震や風水害、原発事故に関する項目からなり、少子高齢社会は少子化、高齢化、現代社会、おもてなしの各項目から構成される概念であった。前者は大きな事故・災害といった不安要素に関わる因子であり、後者は社会問題であるとともに現代日本人に関わる因子であると解釈され、当モデルの社会的表象概念は 2 つの異なる次元から構成されていることが認められた。両者の間には有意なパスの存在が認められ（パス係数：.56）、2 つの社会的表象概念は互いに影響を及ぼし合う関係性を有していることが認められた。

(2) 知覚イメージは、商業観光地イメージの一つの変数だけであり、社会的表象メルトダウン（パス係数：－.24）から影響を受けている。

(3) 概念コンセプト・思考フレームワークは、十日町市文化探訪志向と十日町市愉快体験志向の 2 つの変数が最終モデルに残った。このうち十日町文化探訪志向には社会的表象概念からはモデル適合的な有意なパスの存在は認められなかった。この十日町市文化探訪志向は総合的旅行の成功との間に有意なパスの存在が認められた（パス係数：.36）一方の十日町市愉快体験思考には社会的表象メルトダウンから影響を受けていることが認められた（パス係数：－.25）。

(4) 商業観光地イメージ（知覚イメージ概念）と十日町市愉快体験志向（思考フレームワーク）、そして商業観光地イメージ（知覚イメージ概念）と十日町市文化探訪志向（思考フレームワーク）は、ともに外生変数と間で有意なパスの存在が認められ（ $\zeta 1 \longleftrightarrow \zeta 2$ パス係数：.42, $\zeta 2 \longleftrightarrow \zeta 3$ パス係数：.21）、知覚イメージと思考フレームワークならびに 2 つの思考フレームは、それぞれ互いに影響を及ぼし合いながら関係性を有していることが認められた。

3-4 理論仮説の検証

仮説検証は最終導出モデルにより行われた。仮説検証の結果（表 7）、理論仮説 1 の社会的表象メルトダウンから商業観光地イメージへのパス、理論仮説 2 の社会的表象メルトダウンから十日町市愉快体験志向へのパス、理論仮説 4 の十日町市文化探訪志向から総合的旅行の成功へのパスが存在する仮説が確認できた。理論仮説 3 の知覚イメージ（商業観光地イメージ）から行為の結果（総合的旅行の成功）へのパスに関しては棄却された。そして最終導出モデルからは両方向のパスがそれぞれ、2 つの社会的表象概念の間に、知覚

表 7 仮説の検証結果

理論仮説	パス	パス係数	標準誤差	推定統計量	確率	判定
理論仮説1	社会的表象メルトダウン → 商業観光地イメージ	-0.24	0.056	-2.451	0.014	採択
理論仮説2	社会的表象メルトダウン → 十日町市文化探訪志向	-0.12	0.059	-1.294	0.196	棄却
理論仮説2	社会的表象少子高齢社会 → 十日町市愉快体験志向	0.20	0.132	1.701	0.089	棄却
理論仮説2	社会的表象メルトダウン → 十日町市愉快体験志向	-0.25	0.108	-2.119	0.034	採択
理論仮説3	商業観光地イメージ → 総合的旅行の成功	0.12	0.1	1.096	0.273	棄却
理論仮説4	十日町市文化探訪志向 → 総合的旅行の成功	0.36	0.087	3.344	p<0.01	採択
—	社会的表象メルトダウン ↔ 社会的表象少子高齢社会	0.56	0.087	5.314	p<0.01	採択
—	$\zeta 1 \longleftrightarrow \zeta 2$	0.42	0.042	3.506	p<0.01	採択
—	$\zeta 3 \longleftrightarrow \zeta 2$	0.21	0.054	1.933	0.053	採択
—	$\zeta 3 \longleftrightarrow \zeta 1$	0.41	0.063	3.729	p<0.01	採択

イメージと思考フレームワークとの間に、思考フレーム同士の間が存在していることが認められた。これを受けて理論仮説を修正し、仮説の検証結果にもとづく修正版の理論仮説モデルを構築した（図 5）。

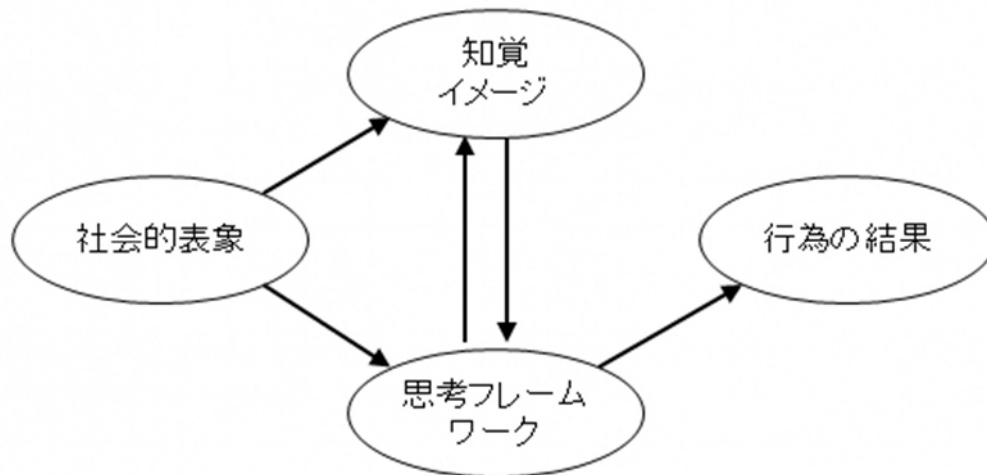


図 5 実証結果にもとづく修正版理論仮説モデル

3-5 仮説検証の限界

今回の分析は、欠損値を含むサンプルを除いたことから、対象サンプル数 175 件で共分散構造解析のモデルを導出し、仮説の検証を行ってきた。しかしながら、不十分なサンプル数の問題やアンケート回答者のサンプル属性の限界も指摘される。本研究で実施したアンケート調査の回答者について、純粹に海外から来た観光客なのか、それとも現在日本に在住している人なのかは判別できず、回答結果は一様に外国人として取りまとめて分析を行った。アンケート調査項目にある地震や原発事故、おもてなしといった社会的表象への認識は、旅行者と日本居住者とでは異なることが推測されることから、この点については、今回のアンケートにおけるサンプル属性の限界として指摘しておかなければならない。統計的に有意を示した仮説についても、概念同士の明確な因果関係を示しているのではなく、外生変数の間で有意なパスの存在が認められたことによる相互のつながりに依拠した相関関係にもとづき議論している状況からも研究の限界を指摘しておく。

4. 実証結果の考察

4-1 仮説の検証結果にもとづく考察

以下に仮説の検証結果に沿って考察を行うことにする。

(1) 社会的表象メルトダウンから商業観光地イメージへのパスに関して（理論仮説 1）

社会的表象メルトダウン概念からは有意な 2 本のパスが確認でき、そのうちの 1 本が商業観光地イメージへのパスである（パス係数： -0.24 ）。社会的表象メルトダウンは、地震や風水害による自然災害と原子力発電所の事故に関する 3 つの質問項目からなる概念で、それが観光やショッピングを目的とした地域としての魅力、生活や労働、将来への成長力への志向、豊かな食文化といった新潟から浮かぶイメージに影響を与えていることが認められた。検証結果から、現代日本が有する大規模な自然災害や事故に起因して人が抱く不安要素に関わる因子の影響が小さいほど、新潟に対する観光地やショッピングする場所としての魅力、食文化への好印象、居住地や労働環境としての印象といった知覚イメージが高まるといった相関関係があると解釈できる。

(2) 社会的表象メルトダウンから十日町市愉快体験志向へのパスに関して（理論仮説 2）

社会的表象概念メルトダウン概念からの十日町市愉快体験志向への有意なパスの存在が確認され（パス係数： -0.25 ）、当概念はイメージとコンセプトの双方に影響を及ぼしていることが認められた。十日町市愉快体験志向は、家族や知人に会うため、アウトドアスポーツ体験のため、雪に関連した内容の体験のためといった目的を持った十日町市への旅行・往訪志向により規定されている概念である。検証結果から、社会的に大きな影響を与えた災害や事故といった社会的表象に関わる影響が小さいほど、十日町市への体験的旅行志向に関わる思考枠組みの形成が促進されると解釈できる。

ただし、社会的表象メルトダウン概念からの 2 本のパス双方に言えることであるが、海外から日本に来た外国人観光客が、日本における細かな地理的・行政的關係性を把握しているかどうかは疑問が残る。例えば、我々日本人であれば当たり前で認識している国一県一市町村という関係について、外国人観光客が正しくとらえているかどうかは不明であり、質問項目中にある新潟や十日町という地名に対して外国人観光客が抱く地理的イメージや行政上の関係性の認識が正しいものかどうかはわからない点を指摘しておく必要はあ

ろう。

(3) 商業観光地イメージと十日町市愉快体験志向の影響による十日町市文化探訪志向の形成について

実証結果から、それぞれ外生変数 ξ を経て商業観光地イメージと十日町市愉快体験志向 ($\xi 2 \leftarrow \rightarrow \xi 3$ パス係数: .21)、商業観光地イメージと十日町市文化探訪志向 ($\xi 1 \leftarrow \rightarrow \xi 2$ パス係数: .42) 有意なパスの存在が認められ、社会的表象からの影響を受けた知覚イメージと思考フレームワークはお互いに影響を及ぼし合いながら、新たな概念(十日町市文化探訪志向)を形成していると解釈できる。このことから商業観光地イメージと十日町市愉快体験志向は、両者間での相関関係のもとでダイナミックに影響し合いながら十日町市文化探訪志向を形成すると解釈できる。形成された十日町市文化探訪志向は、十日町市で日本食を食べる、まち歩きをする、歴史や伝統文化に関わる体験をする、日常生活体験をするという内容の4つの質問項目からなる十日町市への旅行目的を反映した概念である。広く新潟全般に関わるイメージ(商業観光地イメージ)と十日町市での自然体験や知人との再会に関わる意味抽出(十日町市愉快体験志向)との関係性によって、十日町市に住む人々の生活に関わる文化的営みの体験を志向する概念が生み出されたといえる。

(4) 十日町市文化探訪志向から総合的旅行の成功へのパスに関して(理論仮説4)

検証結果から、十日町市文化探訪志向からの有意なパスは総合的旅行の成功へと結ばれている(パス係数: .36)。総合的な旅行の成功は、日本への旅行全般、十日町市への訪問、そして大地の芸術祭への満足度を問う3つの質問項目からなる概念で、日本における旅行の総合的な満足意識から規定される。十日町市における人々の営み・文化と関連する概念である十日町市文化探訪志向が、日本での旅行に対する総合的な満足度合いを意味する総合的旅行の成功概念を形成すると解釈できる。

4-2 導出知見

アンケート調査結果を対象に因子分析、共分散構造解析を実施して、構造方程式モデリングによるデータ適合的な導出モデルを作成できた。今回、社会的表象は我々の知覚イメージと思考フレームワークを形成し、影響を与え、行為に駆り立て、満足感を与えるという理論仮説モデルを構築し、それに対する実証を試みた。この最終導出モデルで示された

実証結果において、次のようなことが言える。メルトダウンと少子高齢社会の2つの社会的表象概念は有意傾向があるかたちで相互に影響を及ぼして商業観光地イメージと十日町市愉快体験志向コンセプトを形成する。この形成されたイメージとコンセプトは相互に影響を及ぼしてコンセプト十日町市文化探訪志向を形成し、これがツーリストに行動を起こさせて、結果的に旅行への満足感を生み出し、トータルな旅行の成功へと帰結させるという実証結果を示すことができた。得られた結果から、社会的表象という存在は、明確な因果関係ではないが、ある種の相関を持って知覚イメージと思考フレームワークに影響を与え、我々を取り巻く社会現象のもとでそれらは相互に関係づけられ、その結果として、人々を行為に駆り立てて旅行の満足感に結びつくというモデルが導出できた（図5）。これにより、今回実施した大地の芸術祭のサンプルを使って、これまで提示されてこなかった社会的表象理論の定量的実証結果に関する実証ができたのではないかというのが一つの結論である。

今回の結果を導出知見としてまとめると、本研究は **Moscovici** が提唱する社会的表象理論に依拠している。**Moscovici** によれば、社会的表象とは、現実の原因と、その具体的な結果とを結ぶ媒介変数、つまり刺激があつて、それが表象と反応を起こすというプロセスで表される、一般的に考えられている社会心理学的なものではないと主張する。**Moscovici** は、表象が刺激に影響を与え、表象が反応を起こさせ、結果的に表象がすべてをコントロールするというモデルを提唱している。それは、人々が反応可能な刺激は、物象化と再構成がなされた限りでの刺激だからである。本研究の実証結果から **Moscovici** のモデルの一部を実証することに成功した。つまり、我々の行為は、社会的表象によって影響を受けたイメージが、我々の意味抽出と秩序づけとの間に相関を有し、これらの関係性の結果、行為へと結実するというのが今回の知見である。社会的表象が行為につながる。すなわち、イメージ、コンセプトから正の相関を持って行動につながるというダイナミズムを有する関係性のプロセスがあることが示された。マクロ的な概念である社会的表象が及ぼす作用と、ミクロ的な組織化のイナクトメントの一つの形としての社会現象の知覚とそれに伴う行動の発現との間に関わりがあることが見てとれた、ということが考察できる。

ここでは、モノからコトへの価値転換にもとづく関係性アプローチの考察を行い、関係

性構築プロセスにおける社会的表象理論適用の有効性を示唆した。種々の現象をとらえるにあたって、最初に関係性というのが浮かび上がってきて、モノというのはその結節点として現れてくる。例えば、組織と組織があつて、組織という存在が限定されなければ組織間がないのではなく、そもそも関係性が浮かび上がってきて、その結果として組織が見えてくるというアプローチをここでは採用したい。地域社会における関係性重視のコトの世界では、モノを見るのではなく関係性を見るという視座が必要と考えて社会的表象概念を適用して議論を展開した。

社会的表象とは、例えば、活断層（矢守 2001）、ボランティアやNPO（八ツ塚 2007；2008）、いじめ（八ツ塚 2014）といった言葉、定義、概念を受け取った際に、どのような思考枠組みで考え、どういう行為をとらされるのかを議論する際に適用される。我々は社会的表象に影響を受けており、テレビや新聞、インターネットなどのメディアから及ぼされるいろいろなイメージで頭が支配され、コントロールされ、行動させられている一面がある。今回の実証研究では、人々は社会的表象によってコントロールされているというモデルの一部を実証した。

モノから価値を生み出す社会から、コトと関係性から価値や意味を生み出すかたちに転換してきている。本章ではこの考えを社会的表象という概念を用いて実証的に検証を試みた結果、社会的表象の有効性が共分散構造解析による分析結果から読み取れた。

第4節 まとめ

2020 年に向けて拡大するインバウンド需要をふまえ、地域観光の振興面から外国人対象のアンケート調査を実施し、外国人旅行者の意向や満足に及ぼす影響について社会的表象概念を導入して検証した。今回 2018 年の芸術祭では、特に中国人観光客が多かった。この状況をとらえて十日町市職員の方は「以前は外国語対応といっても英語だけ考えておけばよかったが、そうはいかなくなった」と述べており¹⁾、多言語化対応が喫緊の課題といえる。このような状況下で外国人向けのアンケート調査を行い、知見を得たことは大きな意義があると思われる。

大地の芸術祭は 20 年余りの長い期間にわたって開催されてきて地域に根ざした存在と

なり、他の地域からも注目される成功事例となった。今後は海外からの観光客が増加し、ツーリストの視点によって新たな魅力、感動、つながりが生み出されることが予測され、それに伴って地元の人々の新たな関係性の構築、相互作用の産出が考えられる。今後も継続的に大地の芸術祭を発展させていくためには、状況変化に即して芸術祭に関わる人々の意識がどのようなメカニズムにより変化を生じたのかを知ることは大きな意義がある。ここでは、大地の芸術祭を舞台とした人々の意識・行動が社会的表象の影響を受けていることを明らかにすることを目的として実証調査を展開し、社会的表象理論をめぐるダイナミックな関係性プロセスに関する検証を定量的実証調査によって議論した。

社会的表象理論は、特定の新奇な事象や概念が人々の意識に潜在的な力たちで影響を与えて考え方や行動を変容させ、新たな社会的現実を構成する働きを述べたもので、人々を取り巻く生活環境の構成作用というダイナミックな側面を命題とする。社会的表象は人の刺激・反応の構成作用としての存在であり、人々の知覚に影響を与え、そのイメージが事象の意味と秩序形成との間に相関を持つという関係性の結果、行為へとつながる作用をつかさどる。

Weick 組織化の相互作用が何によってドライブするのか、何が駆動因として機能してイナクトメントが起こり、組織化が進展し、秩序だった人々の行為が起こるのかは明確に示されていない。本研究では、社会的表象というマクロ的・社会的な概念を引用し、社会的表象が人々の意識、イメージ、意味抽出、秩序形成との間の相関を形成する要因となり、その関係性の結果として、ミクロ的な組織化過程におけるイナクトメントの一つの形態としての知覚と行為の発現に結びつくという知見を導き出した。

広く社会一般にあって支配的な存在として人々の思考や行動に影響を及ぼす社会的表象という概念があり、本研究では、地方創生策の一つとしてとらえられる大地の芸術祭を事例とした議論を試みたが、マクロ的な社会的表象とミクロ的な人々の意識・行動変容との関わりを明らかにすることは組織現象のプロセス検証の側面からみても興味深いものがある。社会的表象理論においては、社会的表象の作用構造を操作して人々の意識・行動に変化をうながして思考の枠組みや行動の変化につなげることも可能ではないかと考えられ、戦略的視点に立脚した新たな価値観、フレームワークに関わる議論の展開を図る上

でも有用な視座を提起する可能性も示唆できる。

社会的表象という人々のイメージ、思考フレームワークをつかさどる根幹の部分のいかにコントロールできるか、そして、社会的表象という存在をいかに正しくとらえるか、いかに正しくイナクトするのかということによって刺激と反応が違ってくる。この点が経営学的、組織論的に重要なポイントとなるであろう。

新しい関係性が生じてつながりが形成される視点に着目すれば、新結合、いわゆるイノベーションとしての見方も提起できる（Schumpeter 1934）。このイノベーション概念は経営学や組織論などの分野においても展開されるようになり、現代では、社会問題の解決に資する新たな価値を生み出す取り組みをソーシャル・イノベーションと称し、地域活性化の活動においてもイノベーション概念が取り入れられ、議論されている（大室 2009；趙・李 2016；渡辺 2009）。今回の知見を活用するにあたっては、例えば、ソーシャル・イノベーションを実現するためには、少子高齢化や過疎化といった課題をふまえてソーシャル・イノベーションの社会的表象を形成することが可能だと思われる（図 6）。将来に対して明るい未来を展望しているか、不安でいっぱいなのか、はたして社会はどのような方向に進んでいくのか。人々によるこれらの意識が新たな社会的表象を形成する。我々にとって重要なのは、例えばマスコミなどが発するイメージによってどのような社会的表象が形成されていくのかといった点である。最初は未知なる新奇な概念であった事柄が現実化して普遍化した存在となって刺激と反応に影響を与え、我々の意識や社会活動などに影響を及ぼす。その際、まっさらな白紙の上に絵が描かれるのではなく、我々が今まで背負ってきた何らかのイメージと思考フレームワークによって社会的表象が構成され、それが人々に知覚され、意識や行動に影響を与える存在となる。社会的なニーズや課題解決策を創造・実行し、新たな社会的価値と関係性を生み出す取り組みであるソーシャル・イノベーション活動に対して、社会的表象理論の活用を通じた関係性マネジメントの視座から新たな価値創造の可能性を拓くことの有用性は大きいと判断できる。

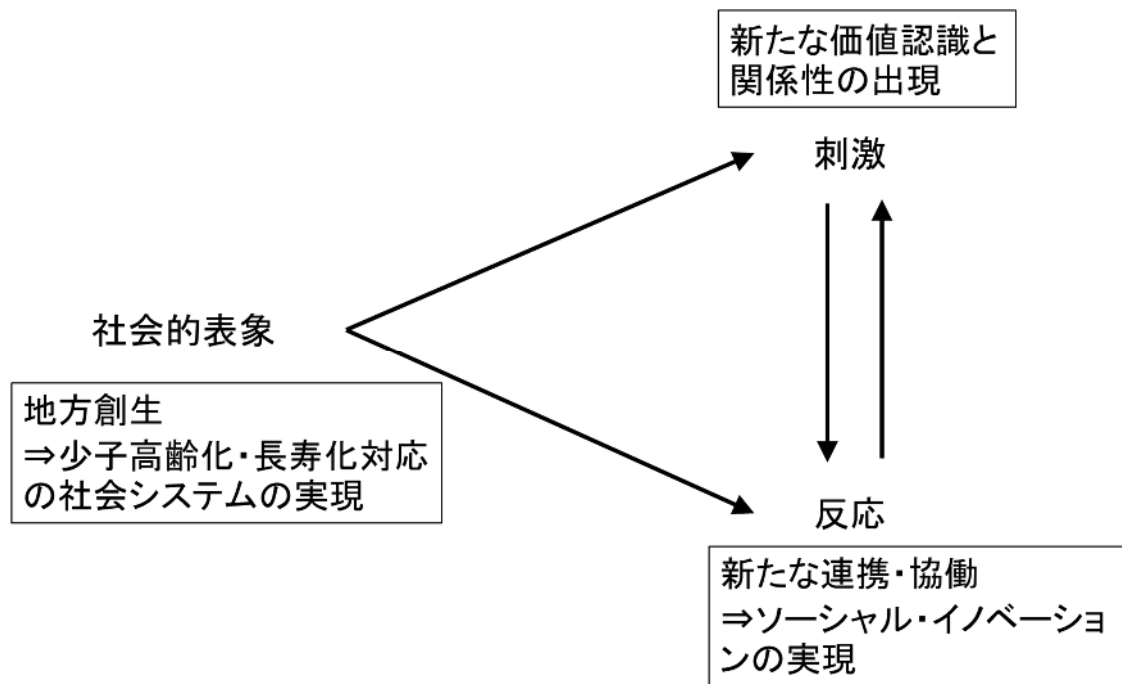


図6 導出知見にもとづくソーシャル・イノベーションへの展開

多様な見方から関係性概念にもとづく展開を図り、ソーシャル・イノベーションに代表される社会現象をとらえる可能性を示し、実証することができた。これからの経営学、組織論の領域において、関係性や意味の世界を作り上げ、地方創生の視点や人々のつながりを中心としたコトの世界への価値転換に重点を置いた議論を展開していくことが必要である、というのが今後の課題ではないかと指摘できる。

第5章の注

- 1) アンケート調査を実施していた十日町駅総合観光案内所における十日町市職員との対話による。

終章

本章では、これまでの各章の検討内容をふまえて結論をまとめるとともに、本論文の独自性や期待される効果、今後の課題、論文の問題点と研究上の限界などについて言及する。第1節では、まとめとして、前章までの結果をもとに本研究を通じて明らかになった点などについて述べる。第2節では、本研究での検討結果を受けた今後の課題、論文の問題点と研究上の限界について指摘する。

第1節 まとめ

ここではまとめとして本論文における各章の内容を概観し、本研究により得られた知見について述べる。

序章では、本研究に取り組むにあたって背景となる課題と問題意識を示すとともに、研究の目的と意義などについて述べた。本論文で議論の中心とするのは、様々な社会課題の進展と人々を取り囲む環境の変化といったものをいかにとらえるか、知覚するかという点であり、そして、その社会現象の存在が人々の思考やふるまいにどのような影響を与えるのかという点である。現在の日本は人口減少が進展し、少子高齢化社会に突入している状況にある。その状況下で「増田レポート」と呼ばれる自治体の消滅可能性について言及した報告が発表され、大きな衝撃を与えた（増田編 2014）。これを受けて多くの自治体において様々な対策が講じられているが、このような地方活性化の方策は、社会構造の変革をうながすソーシャル・イノベーションとしてとらえることができる。ソーシャル・イノベーションのような社会的課題のような新たな創造と実行のプロセスを伴って解決を目指す取り組みをとらえて理解するには、動態的な視座が必要となる。本研究で実証研究の対象としたのは新潟県十日町地域で開催される「大地の芸術祭」であるが、そこでの創造と実行の過程、変化のプロセスをとらえるにあたって依拠したのが、Weick が説く組織化論である。この組織化論に関する理論的深耕を進め、社会構成主義および社会的表象理論に及ぶ理論的展開を図り、実証研究へとつながる可能性を指摘した。

第1章では、既往の組織理論について、組織モデルの類型に関する検証から組織化論の立脚する立場を確認し、組織論における研究方法についてレビューした。Burrell and

Morgan (1979) で示された図式などをもとに、社会科学で展開される研究方法論を確認し、組織現象を理解し、説明する上でのフレームワークを検証し、組織研究における方法論について考察を行った。そして次章以降に実施する実証研究をふまえ、トライアングレーションという概念にもとづき多様な側面を有する大地の芸術祭にアプローチするにあたって、質的データである文章や言葉を対象としたテキスト分析と量的データである数値として表わされるアンケート回答結果に対する因子分析、共分散構造分析を実施することから、解釈主義に立脚する定性的研究アプローチと機能主義に依拠する定量的研究アプローチについて確認を行った。

第2章では理論研究として、Weick 組織化論、社会構成主義、社会的表象理論についてのレビューを行い、実証的な研究アプローチへの道筋を探った。組織化概念の論考から、組織や環境は行為者の働きによって創り出されるとする構成的な組織観のもと、組織を動態的なプロセスとしてとらえることが必要であると確認するに至った。さらに、人と人の間の相互作用から社会的構成プロセスを論じる視座から、組織化論と社会構成主義との関連性に着目して議論を試みた。社会構成主義は、現実や環境が社会的な相互作用によって生成されるとする。すなわち、多様な主観や認識を持った人々の相互作用と社会的関係のプロセスによって現実や環境は意味づけられ、生み出されるとするもので、人や組織を取り巻く環境は、その人や組織自身によって構成されるという考え方である。これは、組織化において、環境をイナクトメントによって創り出されたものとしてとらえることと同義である。そして、組織化論と社会構成主義、ならびに社会的表象理論との間の検証からは、社会的表象理論への連結可能性が見い出せた。矢守 (2010) や Moscovici (1984) では社会的表象を扱った実践的研究事例が述べられており、これまでの議論から導出された相互行為や関係性に関すること、言葉による意味形成にもとづく視点をふまえ、社会現象へのアプローチの方法として社会的表象理論の立場から接近することの有効性・重要性が示された。言説的アプローチは、ミクロ (相互作用) - メゾ (制度的) - マクロ (社会的) レベルの組織研究の視座に立脚するもので (Ashcraft 2004 : 455)、社会構成主義に依拠する組織化論と社会的表象理論との理論的関連性からミクロ-マクロの関係性が提示され、実証研究への道筋を示した。

第3章は、これまでの理論研究をふまえて実証的研究に進むにあたって、各地の地域活性化の取り組み事例を整理し、これら社会的活動を理解する上で必要なソーシャル・イノベーション概念に関して論じるとともに、本研究での対象事例である大地の芸術祭ならびに開催地である十日町市に関する調査を実施した結果を報告した。産業・経済構造の変化や人口減少、少子高齢化といった社会課題を背景とする地域活性化の取り組みは、社会的ニーズや課題への対策・解決策を創造し、実行するプロセスと定義されるソーシャル・イノベーションととしてとらえられる。このソーシャル・イノベーション的な取り組みにおいてアートによる地域活性化の先駆的事例とされるのが新潟県十日町地域で3年に一度開催される大地の芸術祭である。十日町市も人口減少と少子高齢化が進展し、地域の活性化を目指して2000年から大地の芸術祭が開催されている。開催に伴う来訪者は回を重ねるごとに増加し、2018年夏に開催された第7回展では、国内外からこれまでに最高の548380人の方々が訪れ、多くの人に注目されて交流人口の拡大に寄与している国際的な芸術祭となっていることを確認した。

第4章では、過去行われた大地の芸術祭を対象としてKH Coderによる計量テキスト分析を実施して、大地の芸術祭の意義、開催地との関わり、関係者の意識の変化といった点について検討した。調査対象は、十日町市の広報誌である「市報とおかまち」に掲載された大地の芸術祭の関連記事ならびに大地の芸術祭終了後に発行されている総括報告書の掲載事項である。事業計画が示された当初は現代アートに対する戸惑いや不安が示されていたが、テキスト分析の結果からは公共事業的な意味合いをもつ語句が抽出され、経済的側面を強調していたことが示唆された。開催を重ねるにしたがって、ボランティアの方々をはじめとする関係者の協働・連携に関わる言葉が現れてきて、開催地において新たなつながりや関係性が生み出されていることがうかがえた。アートを通じて地元住民らの交流活動が活発に行われていることが確認され、20年余りの時間経過をふまえ、大地の芸術祭が十日町市の活性化にとって重要な役割を果たしていることが認められた。アートを媒介とした地域活性化策として誕生した大地の芸術祭は、地域住民の高齢化進展に伴う負担感の増大や事業運営の課題などを指摘されながらも地元の住民とともに取り組みを進め、様々な人々を巻き込みながら事業が続けられてきた。自由記述回答のアンケート結果から

は、大地の芸術祭に対する地元商業者の「活性化」、「商業・経済」に関わる意識が高まっていることが見てとれた。これらテキスト分析の結果について、社会的表象理論に即したマクロ的事象との関連について検証し、経済再生の側面や地方創生といった社会的な未来志向の価値観の現れが影響を与えたのではないかと推察した。社会的表象と人々の意識・行動との関係性については、第 5 章における定量的実証調査の結果をもって分析・検証した。

第 5 章では、大地の芸術祭におけるインバウンド・ツーリストを対象とした定量的実証調査を実施し、理論モデルをもとに社会的表象が人々の思考や行為に及ぼす影響に関する検討を行った。今後の大地の芸術祭においては海外から訪れる旅行者への対応が求められ、インバウンド需要を取り込むことが十日町における観光産業活性化のために重要となる。これを受けて、2018 年夏に開催された第 7 回大地の芸術祭に来場した外国人観光客を対象とした紙ベースの調査票を用いたアンケート調査を実施した。理論仮説モデルを構築した上で、社会的表象を特定化することを通じて人々が影響を受けているイメージと概念を分析することによる様々な関係性プロセスの明確化を目指し、旅行者の行動と満足感に及ぼす影響について探求した。共分散構造解析の結果から、データ適合的な実証モデルが構築され、社会的表象は人々のイメージをコントロールし、そのイメージはある種の相関を持って思考枠組みに影響を与えるかたちになり、その思考枠組みが人々を行動に駆り立てるという実証結果を示すことができた。これにより、社会的表象という存在はイメージとコンセプトを形成し、それらが人々を取り巻く社会における諸現象の意味抽出と秩序を関係・相関づけて、その結果として行為につながるというモデルが導出できた。この大地の芸術祭のデータを用いて得られた社会的表象理論の定量的実証結果は、Moscovici が提起したモデルの一部を実証することに成功したと結論づけられる。

以上のように本研究では、「未曾有の」「新奇な」「これまでになかった」と形容できる、変化に満ちた現代社会における現象をとらえて理解するにあたり、変化や過程、相互作用をキーワードとする Weick が説く組織化論に着目して議論を進め、社会構成主義との関連を指摘し、社会的表象理論への展開を図り、実証研究へとつなげていった。

Weick や Moscovici に関する論考から、組織というものを不安定な存在でダイナミック

な変化を伴う継続的な構成作用の流れとしてとらえるならば、本論文で解き明かした、不安定な社会状況のもと、人々と事象との関わりにもとづく相互作用の進展に伴う、意味を見いだし、秩序だった構造化へと向かう行為の現れは、一つの組織現象として認めることができる。人々の関係性に依拠したミクロな相互作用で表される Weick 組織化の考え方と、Moscovici により提示された社会的表象が人々の刺激・反応に影響を与えるというモデルは、既往の研究において、現実の社会における実証研究の対象としては議論、検討されてきてこなかった。組織現象をとらえるには種々の研究アプローチがあるが、本研究では社会構成主義の立場にもとづき関係性を中心命題として調査事例に取り組み、言葉の重要性に着目したテキスト分析と、アンケート調査票を用いた定量的実証分析により調査・分析を実施した結果、マクロ的な社会的表象とミクロ的な人々の行動とが相関を持って関係づけられることが実証結果として導き出された。

本研究における学術的貢献について 2 点挙げることができる。第一に、経営組織論に新たな視座を提起した Weick 組織化論に依拠した議論を進め、ミクロ的視座に立つ組織化論の課題を補完し、実証的な研究アプローチを展開したことである。先行研究レビューにおいて調査した結果、組織化論に依拠した実証研究は、多義性の削減という視点に着目し、企業の管理者を対象とした意識調査の分析から情報通信メディアの属性空間の提示と情報伝達力を指し示す概念としてのメディア・リッチネスの測定を試みた 1 件のみであった（岸・佐藤・陳 1995）。この論文では、組織における多義性削減への対応としてどのようなコミュニケーションメディアが選択され、利用されているかなどの点について調査が行われ、組織の情報処理研究に関連付けた検討がなされており、組織化のプロセスやイナクトメントなどの組織化構成要素については議論されていない。すなわち Weick が組織化において重要視している過程や変化、関係性、相互作用に関する検証は行われていない。近年においても組織化（Weick 1979）やセンスメイキング（Weick 1995）といった Weick が説く組織論は経営組織の領域でレビューされ、議論されている。Rousseau (2011) は、ミクロとマクロの組織研究における低いレベルのミクロ的反応から高レベルのマクロ的な集団現象を形成する過程をとらえて、Weick (1995) が説くセンスメイキング理論研究の特徴として認識していると述べている。Shepherd and Suddaby (2017) は、重要な組

織理論構築プロセスの全体像を提示するにあたり、マネジメント理論構築に関する系統的レビューの中に Weick (1995) を挙げ、理論の構築と統合の重要性、困難性を指摘する。Suddaby and Foster (2017) は、組織変革の研究に歴史的視点を導入し、組織変革を理論化することの意味を議論している。暗黙的な歴史的意識が我々の現在と未来に関する理解にどのような影響を与えるのかについての認識を示すことを意図して、その中での組織の意味づけや解釈体系などの点について Weick の議論をレビューしている。Ucbasaran et al., (2013) では、起業家のキャリア、特に事業の失敗の影響とそのプロセスに焦点を当てて議論している。失敗を通じた学習と意味づくりの過程という視点をもとに、事業の失敗を理解し、失敗から学ぶ方法の説明をレビューし、検証している。これらの議論においてセンスメイキングの考え方が取り入れられている。Good et al., (2016) は自分の身体や精神と向き合い、その状態に注意を向ける心理的過程を表す概念であるマインドフルネスを取り上げ、組織研究の領域におけるマインドフルネスに関わる統合的フレームワークを検討することで、人々の認知や感情、行動に対する影響や、職場での業績、人間関係、幸福などに及ぼす影響の特定化を目指している。ここでは、現実の意味解釈の形成やセンスメイキングといった事柄に Weick 組織論にもとづく議論が試みられている。このように幅広い研究領域における多くの研究者に影響を与え、レビューされている Weick の組織論であるが、いずれも理論研究にとどまっており、現実社会での現象の分析に適用した実証研究への展開事例は見ることができない。本研究では、動態的概念として認識されるソーシャル・イノベーション的施策としてとらえられる大地の芸術祭を調査対象とした実証研究に取り組むにあたって、組織化の中心的構成概念であるイナクトメントに焦点を当てて議論を試みた。そして組織化論の理論的背景として社会構成主義の存在をあることを明らかにし、さらにマクロ的視座を持つ社会的表象理論とのつながりを指摘した。このミクロとマクロの橋渡しの作用により、実証研究に向けた課題であった組織化のミクロ的視座の立場を補完し、実証的な研究アプローチへの道筋を見いだした。これまで経営組織論の分野で多くの研究者に大きな影響を与え、新たな理論的視座を提起してきた Weick 組織化論は、一方で、理念的で具体性に欠けること、組織現象の分析の基盤として二人の間の相互作用というミクロな視点を対象とすること、実証面へのアプローチが不明確である

ことといった理由から、実証研究への展開がなされてこなかった。本研究において組織化論を始原とする実証的な研究アプローチへとつながる展開が示されたことは学術的貢献の一つとして挙げることができる。

学術的貢献の第二に、大地の芸術祭を事例とする実証研究の結果から、社会的表象と人々のイメージ、思考枠組み、行動とが相関を持って関係づけられたことにより、これまで実証されなかった **Moscovici** が提起した社会的表象理論のモデルの一部の実証に成功したことである。**Moscovici** が説く社会的表象理論は、新奇、未曾有といった言葉で表現される人々にとって新しい馴染みされていない概念が、いかにして馴染みのある馴染まれた存在として認識されるのかについて論じた理論であり、どのようなプロセスを通して意味ある世界が社会的に構成されるのかについて説明をしようとするものである。社会的表象とは、現代社会に特有のものであり、個人や集団にとって所与の「環境」として認識される存在である。今や当たり前の存在として人々が認識しているボランティアや NPO、活断層といった概念も社会的表象であり、矢守（2010）や八ツ塚（2007）は、これら社会的表象がどのような過程で形成されたのか、人々にとって馴染みのある存在となったのかについての検証を新聞記事などのメディア素材を利用して行っている。**Moscovici**（1984）が社会的表象研究として挙げている事例は、精神障害者の調査を通じた社会的表象の変化に関する研究や、集団心理療法について、心理療法における集団が、その集団自身の構造や機能に関わる表象をどのように創り出すのかという点に関する研究である。**Moscovici** は社会的表象の形成プロセスについて論じていることと併せ、社会的表象が人に及ぼす影響について言及し、理論モデルを提起している。それは人の刺激・反応（知覚・行動）を構成する作用としての社会的表象の働きを示すもので、独立変数としての社会的表象の立場を強調している。本実証研究では、この **Moscovici** が提起した社会的表象モデルに依拠して理論モデルを構築し、社会的表象という存在が人々のイメージとコンセプトに影響を及ぼし、その関係性の結果として行動の発現につながるという知見を導出した。**Moscovici** が示した社会的表象モデルは今まで実証されておらず、今回の実証研究によって初めて実証に成功した。また実証研究の結果から、社会的表象と人々のイメージ、思考フレームワーク、行動とが関係づけられたということは、マクロ的な社会的表象の作用が、

組織化過程のイナクトメントの一つの形としてのミクロ的な人々の知覚と行動の発現につながったという関係性を明示しており、ミクロとマクロとの結びつきの作用構造を表しているといえることができる。組織化のイナクトメントは事象や変化を囲い込み、知覚する行為を意味する概念であるが、マクロ的な存在である社会的表象という事象をイナクトし、囲い込まれた社会的表象概念により形成されるイメージとコンセプトが互いに影響し合って個人の行為につながるというマクロとミクロとの間のダイナミックな橋渡し構造、動的相互規定関係（杉万 1992）を意味しているものととらえることが可能である。これにより組織化の重要構成要素であるイナクトメントの実体に社会的表象の視点から迫ることができたと結論づけられる。

最後に、期待される効果を述べる。

社会における変化事象をとらえるにあたって本論文で検証した組織化論と社会的表象理論にもとづく分析手法の有効性は、今回対象事例として取り上げた地域活性化といった課題に対してだけでなく、その他の社会的課題に関することや、社会現象に伴う人々の相互作用の解明といった点にも応用が可能であり、幅広い展開が期待できる。また、社会現象を対象とするだけでなく、一般の企業におけるマネジメントについても今回の知見は適用が可能であろう。例えば、企業理念・経営理念と組織との関わりが挙げられる（平松 2013 及び平松 2015）。経営理念は「組織の理念的目的と経営のやり方と人々の行動についての基本的考え方」（伊丹・加護野 2003：347）という定義が示されており、このような経営理念がいかにして組織と組織メンバーに浸透していくのかという浸透メカニズムに関することや理念浸透に伴う影響について検討したものなどを研究課題とするものが報告されているが¹⁾、この経営理念の浸透に関する課題についても本研究において得られた視座と研究アプローチが援用できると思われる。

第2節 今後の課題

本研究の結果を受けて、さらなる検討が必要となる課題、論文の問題点と研究上の限界も明らかになった。今後の課題として以下の3つを指摘する。

まず第一に、経時的な調査の必要性である。本論文で依拠した Weick (1979) が説く組

織化論は、変化や過程とそれに伴う相互作用を議論の対象とするダイナミズムな視座を命題とするものである。そして、Moscovici (1984) が提唱した社会的表象とは、身体や他者との関係などに関するもので、本質的に歴史的かつ時間的な要因に関わっている概念である。これらのことから、時間的経過をふまえた経時的な分析が求められることから、継続的に研究対象の調査を重ねていくことが必要と考えられる。

二点目は研究方法についてである。今後は調査対象に関わる人々の声を、ヒアリングやインタビューなどの聞き取り調査を実施することで直接的に収集し、調査分析を進めることが重要であるとする。これにより、対話や自由記述回答によるテキスト・言葉で表される定性的データと、アンケート調査票により得られる定量的データの双方から構成される、より厚みのあるデータを調査対象とする分析アプローチを図ることができると認識している。

第三点は調査対象事例についてである。本論文では地域活性化事例である大地の芸術祭を調査対象として研究分析を行った。社会課題を抱える多くの地域がそれぞれ独自の取り組みを推し進めている。組織論に依拠した理論的な検証を縦軸として論じながら、横軸として、今回得られた知見をもとに他地域の事例を研究対象として、その活動に貢献していくという展開を図ることも、今後進めていくべき課題として挙げられる。

そして、明らかになった論文の問題点と研究上の限界について 3 点を指摘する。まず、第 4 章で分析対象とした市報とおかまち、大地の芸術祭総括報告書は 20 年以上の長期間にわたる資料であり、その間に作成・編集に携わる人も代わり、編集方針等も変化している可能性がある。両者ともに市や実行委員会という組織が発行する資料であり、一定の客観性と妥当性はあるものと考えているが、編集者の恣意性や編集方針の一貫性などの点で担保できない可能性もある。これらの点について研究調査する立場としては関知できず、担保できないことふまえ、二次情報源としての調査対象資料の限界であることを指摘する。第二に、第 5 章のアンケート調査について、回答者が海外からの観光客なのか、それとも、例えば留学生のような日本に居住する人なのかによって、質問項目にある社会的表象に関する認識が異なることが考えられる。アンケート依頼時において、そして回答結果をまとめる段階において両者を判別することはできないことから、この点については、今回のア

ンケート調査におけるサンプル属性の限界として指摘しておかなければならない。第三に、本研究の質問紙調査における構成概念の操作化プロセスは、社会的表象概念の規定化の困難さに起因するため、一般的な実証科学の方法論のもとづく理論から演繹的に仮説の操作化を行う方法を採用しなかった点を研究上の限界として指摘しなければならない。本研究では操作化が困難な社会的表象という概念を対象とした検証を試みたことから、実証調査における因子を当てはめて事実発見的・仮説発見的なカタチで社会的表象、イメージ、コンセプトとして意味づけられるような操作化につなげている。このような手法で事実発見的に操作化し、概念を規定するカタチは一般的ではないので、この点を研究上の限界として挙げる。

本研究の遂行に際しては経営学・組織論の分野に立脚しながらも多様な研究領域を包含する論考を行ってきた。今後の研究推進にあたっては、さらに学問的な理論展開を図りつつ、併せて新たな実証的分析手法を取り入れながら進める必要があるものと認識しており、多角的な側面から継続的な探究をしていきたいと考える。

終章の注

- 1) 経営理念の浸透プロセスに関しては、例えば小森谷（2011）や柴田（2013）、理念浸透に伴う影響に関しては松葉（2008）などの報告がある。

引用文献

- Ashcraft, K.L. (2004) Gender, discourse and organization : framing a shifting relationship, in Grant, D., Hardy, C., Osrick, C. and Putnam, L. (ed.) (2004) The SAGE handbook of organizational discourse, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』, 第 12 章「ジェンダー、ディスコース、そして組織 : 転換する関係性のフレーミング」, pp.435-471, 同文館出版)
- Barnard, C.I. (1938) The functions of the executive, Harvard University Press (山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳 (1968), 『新訳 経営者の役割』, ダイヤモンド社)
- Barley, S. (1986) “Technology as an occasion for structuring : Evidence from observations of CT scanners and the social order of radiology departments”, Administrative Science Quarterly, 31, pp.78-108
- Berger, P.L. and Luckmann, T. (1966) The social construction of reality, Doubleday and Co. (山口節郎訳 (2003), 『現実の社会的構成』, 新曜社)
- Boczkowski, P.J. and Orlikowski, W.J. (2004) Organizational discourse and new media : a practice perspective, in Grant, D., Hardy, C., Osrick, C. and Putnam, L. (ed.) (2004) The SAGE handbook of organizational discourse, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』, 第 16 章「組織ディスコースとニューメディア : 実践パースペクティブ」, pp.533-565, 同文館出版)
- Boulding, K. (1956) General systems theory : the skelton of science, Management science, vol.2, pp197-208
- Burr, V. (1995) An introduction to social constructionism, Routledge. (田中一彦訳 (1997), 『社会的構築主義への招待』, 川島書店)
- Burrell, G. and Morgan, G. (1979) Sociological paradigms and organizational analysis, London : Heinemann (鎌田伸一・金井一頼・野中郁次郎訳 (1986), 『組織理論のパラダイム』, 千倉書房)
- Colville, I.D., Waterman, R.H. and Weick, K.E. (1999) Organizing and the Search for Excellence: Making Sense of the Times in Theory and Practice, Organization, 6 (1) ,

pp.129-148

- Coulter, J. (1979) *The social construction of mind : studies in ethnomethodology and linguistic philosophy*, Macmillan press. (西阪仰訳 (1994) 『心の社会的構成』, 新曜社)
- Flick, U. (1995) *Qualitative forschung*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH (小田博志・山本則子・春日 常・宮地尚子訳 (2002) 『質的研究入門 ―＜人間の科学＞のための方法論』, 春秋社)
- Gergen, K.J. (1994a) *Toward transformation in social knowledge*, 2nd edition, Sage (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀監訳 (2004) , 『もう一つの社会心理学』, ナカニシヤ出版)
- Gergen, K.J. (1994b) *Realities and relationships; soundings in social construction*, Harvard university press (永田素彦・深尾誠訳 (2004) , 『社会構成主義の理論と実践』, ナカニシヤ出版)
- Gergen, K.J. (1999) *An invitation to social construction*, Sage (東村知子訳 (2004) , 『あなたへの社会構成主義』, ナカニシヤ出版)
- Gergen, K.J. and Gergen, M. (2004) *Social construction : Entering the dialogue*, Taos Institute Publications (伊藤 守 監訳 (2018) 『現実はいつも対話から生まれる』, デイスクヴァー・トゥエンティワン)
- Good, D.J., Lyddy, C.J., Glomb, T.M., Bono, J.E., Brown, K.W., Duffy, M.K., Baer, R.A., Brewer, J.A. and Lazar, S.W. (2016) *Contemplating mindfulness at work : an integrative review*, *Journal of Management*, vol.42, No.1, pp.114-142
- Grant, D., Hardy, C., Oswick, C. and Putnam, L. (ed.) (2004) *The SAGE handbook of organizational discourse*, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』, 同文館出版)
- Hage, J. (1972) *Techniques and problems of theory construction in sociology* (1st edition) , John Wiley & Sons (小松陽一・野中郁次郎 訳 (1978) 『理論構築の方法』, 白桃書房)
- Hatch, M. J. and Cunliffe, A. L. (2014) *Organization theory : modern, symbolic, and*

- postmodern perspectives, Third Edition, Oxford University Press (大月博司・日野健太・山口善昭訳 (2017) 『Hatch 組織論－3つのパースペクティブー』, 同文館出版)
- Hacking, I. (1999) The social construction of what?, Harvard university press (出口康夫・久米 暁訳 (2006), 『何が社会的に構成されるのか』, 岩波書店)
- Hannan, M.T. and Freeman, J. (1977) The population ecology of organizations, American Journal of Sociology, vol.82, Issue 5, pp.929–964
- Heath, C., Luff, P. and Knoblauch, H. (2004) Tools, technologies and organizational interaction : the emergence of “workspace studies”, in Grant, D., Hardy, C., Osrick, C. and Putnam, L. (ed.) (2004) The SAGE handbook of organizational discourse, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』, 第 15 章「道具、技術と組織の相互行為 : 「作業現場研究」の出現」, pp.533-565, 同文館出版)
- Heracleous, L.T. (2004) Interpretivist approaches to organizational discourse, in Grant, D., Hardy, C., Osrick, C. and Putnam, L. (ED.) (2004) The SAGE handbook of organizational discourse, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』, 第 7 章「組織的ディスコースへの解釈主義的アプローチ」, pp.275-301, 同文館出版)
- Herated, L. and Gergen, K.J. (2013) Relational leading : practices for dialogically based collaboration, Taos Institute Publications (伊藤 守 監訳 (2015) 『ダイアログ・マネジメント 対話が生み出す強い組織』, ディスカヴァー・トゥエンティワン)
- Hollenbeck, J.R., and Wright, P.M. (2017) Harking, sharking, and tharking : making the case for post hoc analysis of scientific data, Journal of Management, Vol.43, No.1, pp.5-18
- Lawrence, P.R. and Lorsch, J.W. (1967) Organization and environment: Managing differentiation and integration, Harvard University Press (吉田博訳 (1977) 『組織の条件適応理論』, 産業能率短期大学出版部)
- March, J. and Simon, H. (1958) Organizations, John Wikey & Sons Inc. (土屋守章訳 (1977) 『オーガニゼーションズ』, ダイヤモンド社)

- Mayo, E. (1933) *The human problems of an industrial civilization*, Macmillan (村本栄一訳 (1967) 『新訳 産業文明における人間問題 ―ホーソン実験とその展開』, 日本能率協会)
- McNamee, S. and Gergen, K.J. (1992) *Therapy as social construction*, Sage (野口祐二・野村直樹訳 (1997), 『ナラティヴ・セラピー ―社会構成主義の実践―』, 金剛出版)
- Moscovici, S. (1984) *The phenomenon of social representations*, (In) Farr & Moscovici (eds.), *Social Representations* (pp.3-69), Cambridge Univ. Press (ハツ塚一郎訳 (2003) 「社会的表象の現象」, 京都大学大学院人間・環境学研究科杉万俊夫研究室ウェブサイト: 理論的研究, 海外の研究の紹介, http://www.group-dynamics.org/sugiman/research/others/2003%20moscovici_yatsuzuka.pdf) (2015 年 5 月ダウンロード)
- Moscovici, S. (2001) *The phenomenon of social representations*. (In) G.Duveen & S.Moscovici (eds.), *Social representaions : Exploraions Social Psychology*, NewYork : New York Univ.Press
- Parker, I. (2004) *Qualitative psychology*, Open University Press (ハツ塚一郎訳 (2008) 『ラディカル質的心理学』, ナカニシヤ出版)
- Prichard, C., Jones, D. and Stablein, R. (2004) *Doing research in organizational discourse : the importance of researcher context*, in Grant, D., Hardy, C., Oswick, C. and Putnam, L. (ed.) (2004) *The SAGE handbook of organizational discourse*, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』, 第 9 章「組織ディスコースを研究すること : 研究者コンテキストの重要性」, pp.335-374, 同文館出版)
- Reed, M. (2004) *Getting real about organizational discourse*, in Grant, D., Hardy, C., Oswick, C. and Putnam, L. (ed.) (2004) *The SAGE handbook of organizational discourse*, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組織ディスコース研究』, 補論「会話へのバイアス : 組織において言説的に行為すること」, pp.635-647, 同文館出版)

- Roethlisberger, F.J. and Dickson, W.J. (1939) Management and the worker : an account of a research program conducted by the Western Electric Company, Hawthorne Works, Chicago, Harvard University Press
- Roethlisberger, F.J. (1941) Management and morale, Harvard University Press (野田一夫, 川村欣也訳 (1965) 『経営と勤労意欲 改訂版』, ダイヤモンド社)
- Rousseau, D.M., (2011) Reinforcing the micro/macro bridge : organizational thinking and pluralistic vehicles, Journal of Management, Vol.37, No.2, pp.429-442
- Sandberg, J. and Tsoukas, H. (2015) Making sense of the sensemaking perspective: Its constituents, limitations, and opportunities for further development, Journal of Organizational Behavior, 36, pp.S6-S32
- Schumpeter, J.A. (1934) The theory of economic development : an inquiry into profits, capital, credit, interest, and the business cycle, Harvard University Press (塩野谷裕一・中山伊知郎・東畑精一訳 (1977) 『経済発展の理論 : 企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究』, 岩波書店)
- Schutz, A. (1932) Der sinnhafte aufbau der sozialen welt, 2nd ed., Springer-Verlag, Wien, (1932, 1960) , Suhrkamp, Frankfurt a M., (1974) (佐藤嘉一訳 (1982) , 『社会的世界の意味構成』, 木鐸社)
- Schutz, A. (1970) On phenomenology and social relations, (edited by H.R.Wagner) , The University of Chicago Press (森川眞規雄・浜日出夫訳 (1980) , 『現象学的社会学』, 紀伊國屋書店)
- Scott, W.R. (1998) Organizations : rational, natural, and open systems, 4th ed., Prentice-Hall
- Shepherd, D.A. and Suddaby, R. (2017) Theory building : a review and integration, Journal of Management, Vol.43, No.1, pp.59-85
- Stone, E. (1978) Research methods in organizational behavior (5th edition) , Goodyear Publishing (鎌田伸一・野中郁次郎 訳 (1980) 『組織行動の調査方法』, 白桃書房)
- Suddaby, R. and Foster, W.M., (2017) History and organizational change, Journal of

- Management, Vol.43, No.1, pp19-38
- Taylor, F.W. (1947) The principles of scientific management, Harper & Row (上野陽一郎訳編 (1969) 『科学的管理法』, 産業能率短期大学出版部)
- Ucbasaran, D., Shepherd, D.A., Lockett, A. and Lyon, S.J. (2013) Life after business failure: the process and consequences of business failure for entrepreneurs, Journal of Management, Vol.39, No.1, pp.163-202
- Von Bertalanffy, L. (1968) General systems theory : foundations, development, applications, George Braziller (長野 敬・太田邦昌訳 (1973) , 『一般システム理論 — その基礎・発展・応用—』, みすず書房)
- Wagner, W. (1996) Queries about social representation and construction, Journal for the Theory of Social Behaviour, vol.26, pp.95-120
- Weick, K. E. (1969) The social psychology of organizing, Addison-Wesley (金児暁嗣訳 (1980) , 『組織化の心理学』, 誠信書房)
- Weick, K. E. (1979) The social psychology of organizing, 2nd ed., Addison-Wesley (遠田雄志訳 (1997) , 『組織化の社会心理学 (第2版)』, 文眞堂)
- Weick, K.E. (1985) Sources of order in underorganized systems : Themes in recent organizational theory, in Lincoln, Y.S. (ed.) Organizational theory and inquiry : The paradigm revolution, pp.106-136, Sage (寺本義也・神田良・小林一・岸真理子訳 (1990) , 『組織理論のパラダイム革命』, 第4章「不完全な組織化システムにおける秩序の源泉 : 最近の組織理論の主要研究テーマ」, pp.115-153, 白桃書房)
- Weick, K. E. (1995) Sensemaking in organizations, Sage (遠田雄志・西本直人訳 (2001) , 『センスメーカーイング イン オーガニゼーションズ』, 文眞堂)
- Weick, K.E. (1998) Improvisation as a mindset for organizational analysis, Organization Science, Vol.9, No.5, pp.543-555
- Weick, K.E. (2004) A bias for conversation : acting discursively in organizations, in Grant, D., Hardy, C., Oswick, C. and Putnam, L. (ed.) (2004) The SAGE handbook of organizational discourse, Sage (高橋正泰・清宮 徹 監訳 (2012) 『ハンドブック 組

- 織ディスコース研究』，補論「会話へのバイアス：組織において言説的に行為すること」，pp.635-647，同文館出版）
- Weick, K.E., Sutcliffe, K.M. and Obstfeld, D. (2005) Organizing and the Process of Sensemaking, *Organization Science*, 16 (4) , pp. 409-421
- Weick, K.E. (2010) Reflections on Enacted Sensemaking in the Bhopal Disaster, *Journal of Management Studies*, 47, pp.537-550
- Weick, K.E. (2012) Organized sensemaking: A commentary on processes of interpretive work, *Human Relations*, 65 (1) , pp.141-153
- Westley, F., Zimmerman, B., Patton, M. (2006) Getting to maybe : how the world is changed, Random House (東出顕子 訳 (2008) 「誰が世界を変えるのか ソーシャルイノベーションはここから始まる」，英治出版)
- Wiley, N. (1988) The micro-macro problem in social theory, *Sociological Theory*, 6, pp.254-261
- Wittgenstein, L. (1953) *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell (藤本隆志訳 (1976) ，『哲学探究』，ウィトゲンシュタイン全集 8, 大修館書店)
- Yamauchi, Y. (2015) Reflexive organizing for knowledge sharing : An ethnomethodological study of service technicians, *Journal of Management Studies*, 52 (6) , pp.742-765
- 大地の芸術祭実行委員会 (2016) 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2015 総括報告書」
- 第 126 回新潟県統計年鑑 2015 (第 2 章 人口・世帯) ；
- <http://www.pref.niigata.lg.jp/tokei/1356836728325.html> (2017 年 1 月ダウンロード)
- 大和総研 (2016) 「日本の各都道府県における地域の資金循環及び流出入についての調査研究報告書」，pp.46-63，内閣府ウェブサイト中長期の経済財政政策に係る各種報告書等より (2016 年 11 月ダウンロード)
- www5.cao.go.jp/keizai2/keizai-syakai/report/chiikishikinjunkan_report.pdf

- 越後妻有大地の芸術祭の里ウェブサイト;<http://www.echigo-tsumari.jp/> (2017 年 1 月確認)
- 福島真治 (2015) 「企業経営・学校経営研究における理念とその浸透に関する諸研究のレビュー」, 東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢, 35 号, pp.119-148
- Forbes JAPAN 2018 年 6 月号, 地域アートの原点「大地の芸術祭」が取り戻した越後の誇り, No.47, pp.38-39
- Forbes JAPAN ウェブサイト: 世界はいま「美術と観光」を求めている | 北川フラム, <https://forbesjapan.com/articles/detail/20922> (2018 年 5 月ダウンロード)
- 樋口耕一 (2004a) 「テキスト型データの計量的分析 - 2 つのアプローチの峻別と統合 -」, 理論と方法, 19 (1), pp101-115
- 樋口耕一 (2004b) 「計算機による新聞記事の計量的分析 - 『毎日新聞』にみる「サラリーマン」を題材に -」, 理論と方法, 19 (2), pp161-176
- 樋口耕一 (2011) 「現代における全国紙の内容分析の有効性 - 社会意識の探索はどこまで可能か -」, 行動計量学, 38 (1), pp1-12
- 樋口耕一 (2013) 「情報化イノベーションの採用と富の有無 - ウェブの普及過程における規定構造の変化から -」, ソシオロジ, 58 (1), pp39-55
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』, ナカニシヤ出版
- 平松庸一 (2013) 「テキストとしての経営理念と志向性」, 日本経営学会第 87 回大会, 経営学論集第 84 集, (36) -1-3
- 平松庸一 (2015) 「経営理念という社会的表象」, 日本経営品質学会 2015 年度秋期研究発表大会
- 平松庸一 (2015) 「社会的表象と構成する作用」, 『戦略経営ジャーナル』, vol.4, No.1, pp.61-72
- 廣松 渉 (1982) 『存在と意味』, 岩波書店
- 稲垣保弘 (2002) 『組織の解釈学』, 白桃書房
- 伊丹敬之・加護野忠男 (2003) 『ゼミナール経営学入門第 3 版』, 日本経済新聞社
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎 誠 編 (2010) 『言語研究のための統計入門』, くろしお出版
- 石渡祥之佑・鍛冶伸裕・吉永直樹・豊田正史・喜連川 優 (2016) 「文脈語間の対訳関係を

- 用いた単語の意味ベクトルの翻訳」, 人工知能学会論文誌, 31 (6), pp.1-10
- 時事通信社 編 (2015) 『人口急減と自治体消滅』, 時事通信出版局
- 観光庁ウェブサイト: 出入国者数, http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/in_out.html
(2018年5月ダウンロード)
- 加護野忠男 (1988) 『組織認識論 —企業における創造と革新の研究—』, 千倉書房
- 唐沢 民 (2007) 「文化政策による地域の人的資源の形成の過程」, 『同志社政策科学研究』,
9巻, 1号, pp.133-142
- 勝村(松本)文子・吉川郷主・西前 出・小林慎太郎 (2008) 「芸術を用いた地域づくりに
おける住民意識に関する要因の分析」, 『環境情報科学論文集』, Vol.22, pp.457-462
- KH Coder ウェブサイト, KH Coder Index Page ; <http://khc.sourceforge.net/> (2016年12
月ダウンロード)
- 岸真理子・佐藤 和・陳 妙玲 (1995) 「ニューメディアの属性空間とメディア・リッチネス」,
『法政大学産業情報センター紀要』, 第4巻, pp.15-26
- 岸田民樹・田中政光 (2009) 『経営学説史』, 有斐閣
- 北川フラム (2013) 『アートの地殻変動』, 美術出版社
- 小林令明 (2005) 「アートを活用した過疎地活性化に関する研究(2)」, 『北星学園大学短期大学部北星論集』, 第3号, pp.11-27
- 国際連合広報センターウェブサイト: 2017年は「開発のための持続可能な観光の国際年」,
http://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/23163/ (2018年5月ダウンロード)
- 小森谷浩志 (2011) 「経営理念の策定から浸透プロセスに対する一考察 —「再意味化」を
鍵として—」, 『日本経営診断学会論集』, 11, pp.69-75
- 古村公久・大室悦賀・大平修司・土肥将敦・谷本寛治 (2011) 「社会的企業とステイクホル
ダーによるソーシャル・イノベーションの創出 —NPO 法人スペースふうのリユース食器事
業を事例として—」, 『社会・経済システム』, 第32号, pp.117-132
- 李 妍焱 (2016) 「ソーシャル・イノベーションの条件 —南三陸町における復興事業を事例
に—」, 『駒澤社会学研究』, 48号, pp.89-121

- 増田寛也 編著 (2014) 『地方消滅』, 中央公論新社
- 増田貴司 (2015) 「地方創生の行方を考える」, 『TBR 産業経済の論点』, 東レ経営研究所 No.15-7, pp.1-9,
[https://cs2.toray.co.jp/news/tbr/newsrrs01.nsf/0/FD61074619DC9C13492583220017F740/\\$FILE/eco_g041.pdf](https://cs2.toray.co.jp/news/tbr/newsrrs01.nsf/0/FD61074619DC9C13492583220017F740/$FILE/eco_g041.pdf) (2017 年 4 月ダウンロード)
- 松葉博雄 (2008) 「経営理念の浸透が顧客と従業員の満足へ及ぼす効果 ―事例企業調査研究から―」, 『経営行動科学』, 第 21 巻第 2 号, pp.89-103
- 村瀬洋一・高田 洋・廣瀬毅士 編 (2007) 『SPSS による多変量解析』, オーム社
- 内藤 勲・涌田幸宏 編 (2016) 『表象の組織論』, 中央経済社
- 日本経済再生本部ウェブサイト a: 第 44 回産業競争力会議実行実現点検会合, 資料 10,
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/jjkaigou/dai44/siryou10.pdf> (2018 年 5 月ダウンロード)
- 日本経済再生本部ウェブサイト b: 第 44 回産業競争力会議実行実現点検会合, 議事要旨,
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/jjkaigou/dai44/gijiyousi.pdf> (2018 年 5 月ダウンロード)
- 日本銀行金融機構局 (2015) 「人口減少に立ち向かう地域金融」, 『金融システムレポート 別冊 2015 年 5 月』 (日本銀行ウェブサイト 日本銀行レポート・調査論文―金融システムレポートより, <https://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/data/fsrb150529.pdf>, 2017 年 4 月ダウンロード)
- 新潟県 (2006) 地域経済・産業分析レポート'06, 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2006 の開催にかかる経済波及効果」, pp.151-179
- 西原和久 (1998) 『意味の社会学』, 弘文堂
- 野村総合研究所 (2015) 「社会課題の解決に貢献する文化芸術活動の事例に関する調査研究報告書」, 平成 26 年度文化庁委託事業,
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/bunka_gyosei/pdf/h26katsudo_jirei.pdf, 2017 年 4 月ダウンロード)
- 大室悦賀 (2009) 「ソーシャル・イノベーション理論の系譜」, 『京都マネジメント・レビ

- ュー』，第15号，pp.13-40
- 小塩真司（2011）『SPSSとAmosによる心理・調査データ解析[第2版]』，東京図書
- 小塩真司（2012）『研究事例で学ぶSPSSとAmosによる心理・調査データ解析[第2版]』，
東京図書
- 「理想の詩」秋号，2018年9月発行，理想科学工業，pp.1-9
- 酒井 隆（2003）『図解 アンケート調査と統計解析がわかる本』，日本能率協会マネジメントセンター
- 坂下昭宣（2002）『組織シンボリズム論 ―論点と方法―』，白桃書房
- 参議院調査室（2015）「人口減少による消滅可能性都市の衝撃」，『経済のプリズム』，
No.140，pp.1-50（参議院調査室作成資料ウェブサイトより，
http://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/keizai_prism/backnumber/h27pdf/201514002.pdf，2017年4月ダウンロード）
- 佐藤俊樹・友枝俊雄 編（2006）『言説分析の可能性』，東信堂
- 柴田仁夫（2013）「経営理念の浸透に関する先行研究の一考察」，『経済科学論究』，第10号，pp.27-38
- 杉万俊夫（1992）「ミクロマクロ・ダイナミックス ―「かや」のイメージに基づく構想―」，『実験社会心理学研究』，第32巻，第2号，pp.101-105
- 鷲見英司（2012）「越後妻有大地の芸術祭とソーシャル・キャピタルに関する調査研究」，
『新潟大学経済論集』，第93号，pp.171-226
- 趙 瑋琳・李 妍焱（2016）「ソーシャル・イノベーションの仕組みづくりと企業の役割への模索」，『富士通総研経済研究所 研究レポート』，No.427，pp.1-23
- 高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一 編（1998）『人間科学研究法ハンドブック』，ナカニシヤ出版
- 高瀬武典（2015）「組織進化とエコロジカル・パースペクティブ ―「組織エコロジー」のエコロジー―」，『組織科学』，vol.49，No.2，pp.4-14
- 竹田青嗣（1989）『現象学入門』，日本放送出版協会
- 田村正紀（2006）『リサーチ・デザイン ―経営知識創造の基本技術』，白桃書房

- 田中 遵・荒木晋作・高橋佳祐・日高單也 (2009) 「芸術の導入による空き家再生の有効性と今後のあり方」, 『デザイン学研究』, Vol.56, No.4, pp.1-10
- 谷本寛治 (2009) 「ソーシャル・ビジネスとソーシャル・イノベーション」, 一橋ビジネスレビュー, 第 57 巻第 1 号, pp.26-41
- 「十日町市中心市街地活性化基本計画(平成 28 年 3 月 15 日第 4 回変更版)」, pp.1-21, 2016
- 「統計でみる十日町市」平成 27 年度版, 2016
- 「十日町地域(十日町市・津南町)産業活性化基本計画」;
- www.pref.niigata.lg.jp/HTML_Article/649/659/tokamachi.pdf (2017 年 1 月ダウンロード)
- 十日町市ウェブサイト, 今までの大地の芸術祭の記録の紹介;
- <http://www.city.tokamachi.lg.jp/kanko/K001/K005/1454068600343.html> (2018 年 12 月確認)
- 富山和彦 (2014) 『なぜローカル経済から日本は甦るのか』, PHP 新書
- 筒井真優美 編 (2010) 『研究と実践をつなぐアクションリサーチ入門』, ライフサポート社
- 上野山達哉・櫻田涼子 (2016) 「自然災害によるワーク・キャリアの再体制化とイナクトメント」, 『福島大学経済学会商学論集』, 第 84 巻第 3 号, pp.37-52
- 渡辺正範 (2017) 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」, 『国際文化研修 2017 冬』, vol.94, pp.28-29
- 渡辺 深 (2007) 『組織社会学』, ミネルヴァ書房
- 渡辺 孝 (2009) 「ソーシャル・イノベーションとは何か」, 『一橋ビジネスレビュー』, 第 57 巻第 1 号, pp.14-25
- 山口節郎 (1982) 『社会と意味』, 勁草書房
- 矢守克也 (2000) 「社会的表象理論と社会構成主義 ―W.Wagner の見解をめぐって―」, 『実験社会心理学研究』, 第 40 巻, 第 2 号, pp.95-114
- 矢守克也 (2001) 「社会的表象としての「活断層」 ―内容分析法による検討―」, 『実験社会心理学研究』, 第 41 巻第 1 号, pp.1-15
- 矢守克也 (2009) 「再論 ―正常化の偏見」, 『実験社会心理学研究』, 第 48 巻第 2 号,

pp.137-149

矢守克也 (2010) 『アクションリサーチ 実践する人間科学』, 新曜社

矢守克也・渥美公秀 編著 (2011) 『防災・減災の人間科学』, 新曜社

八ッ塚一郎 (2007) 「「ボランティア」と「NPO」の社会的構成プロセスに関する新聞記事分析研究 ―「助詞分析」の試み―」, 『実験社会心理学研究』, vol.46, No.2, pp.103-119

八ッ塚一郎 (2008) 「阪神大震災を契機とする記録ボランティア活動の勃興と変遷 ―社会変動の観点からみたその意義と可能性についての考察」, 『実験社会心理学研究』, vol.47, No.2, pp.146-159

八ッ塚一郎 (2014) 「新聞記事言説による「いじめ」の社会的な構成と解離：助詞分析による検討」, 『社会心理学研究』, vol.29, No.3, pp.170-179

山内 裕・平本 毅 (2015) 「組織化における主体と客体の相互反映性」, 『組織学会大会論文集』, 4 (2) , pp69-80

付録

以下に「付録」として、今回の分析対象とした大地の芸術祭「総括報告書」記載の自由記述アンケートの回答結果の内容を示す。

大地の芸術祭「総括報告書」記載の自由記述アンケートの回答結果の内容

第3回（平成18年）大地の芸術祭「総括報告書」

（2）作品設置集落・町内に対するアンケート

対象：作品設置集落・町内代表者（総代・区長、嘱託員など）69名、回収53枚

問8. 今回の大地の芸術祭に関わった集落・町内として、大地の芸術祭の運営のあり方や今後の方向性などに対し、ご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください。

（回答22件）

期間中の賑わいは何だったのか。今はどこを見ても人がいない。全体的に見ればプラスになったのはごく一握りの人で大多数の人には迷惑になっても歓迎しないのではないか。費用もかなりのものと聞いている。経済効果がどれ位のものか調査して公表したら、それが一番の判断材料になると思いますが。
会場の管理がもう少し手軽にできるようにして、担当者の負担をなるべく軽減し、誰でも気軽に交代できるようにしてもらいたい。展示・公開に併せて、地元の農産物なども、少し販売できるような企画をする必要を感じた。次回の課題にしたい。
今後は津南町単独の運営で継続していくか、または中止する。
第3回をもって県の支援は打ち切りになるそうですが、何らかの形で諸官庁からの支援も継続してもらいたいです。当然、地元住民は地域の持つ力、他力本願でなく（自力、自律）でしていますが、まだ二回目の経験ですので・・・そして菊池歩さんから再度来て頂き、一緒になって作品活動を中平住民は求めています。そして、十日町地域広域事務組合の皆に、長年、携わっていただき、縁の下力になってもらったのを心より感謝申し上げます。ご苦労様でした。
第3回目にして初めて地域として関わってみて、芸術祭に対する関心が高まったと思います。（一部の人は今迄にも関わってたけれど・・・）今後もどんな事でもいいから（会場、作品、イベント、手伝い）関わって行きたいと思います。ぜひ第4回の開催を希望しています。
こへびの学生はがんばったと思う。しかし、請け負った会社のこへびに対するフォローが疑問に思う。作品を作った作家の中に後片付けなどの悪い人もいた（良い人もいたが）
町内としても喜んでます。ただお願いすることがあるとすれば、最終日もしくは後に作家の方が町内の代表の方にも一言あってほしかった。
第3回芸術祭にして初めての作品設置が、一気に6作品できた戸惑いもあったが、多くの来訪者に地域に賑わいが生まれた。作品設置により環境が豊かになった。高齢者多住地域として制作、設置への協力は消極的であるが、芸術祭継続には望む所がある。
全国の大学芸術学部系に場所を提供して競争（コンクール）させれば毎回、継続的に芸術祭が実行されると考える。大学生ならばボランティアで一生懸命夏休み中を動いてくれると考える。
作品の盗作問題で公開が中断してしまったことは、地域のイメージダウンにもなってしまった。信用できる作家を紹介していただきたかった。看板を置いたにもかかわらず、違法駐車が多く、大変な迷惑をかけてしまった方がいた。土曜、日曜は誘導の人を公開時間に置いた方が良かったのでは。
1回に30億円も出費がある様ですが、もっと他に、たとえば病院（医療）などにまわしてもらいたい。
作品制作者（関係者）から町内に連絡がなかったように思われる。連絡があれば作品制作にも協力できるかも。
作家が来日できなくなり、結果的に未完成で終わってしまい、協力していただいた集落の人達に申し訳なかった。

大変なにぎわいであり、来場者も多数であったと思われるが、地元は何ら利益がなく、全てがボランティアと言うような形であり、町・市としてもその辺をもっと理解して何らかの援助があっても良かったのではないかと思います。
真の芸術たるに堪解いたしておりますが、今後の方向性としては町内・集落内の実用性に向けた対策を考慮してほしい。
市予算は相当計上されているが、作家は費用面で相当難儀をしている様に見える。税金を使うのだから、もっと透明性のある説明が住民に知らされなければ理解が得られないと思う。
特にありませんが、継続を希望する（山間地に）。
1. 作家や学生（25 人／回×約 2 週間）受入施設の問題。集落センターに泊まらざるを得なかった。学生の食事の面倒を見てもらいたい旨の依頼があったが断りました。2. 費用対効果を検証する必要があります。3 年間で約 80 億の経費（住民には使途が見えない。他目的に使用した場合の効果など）
作品はできるだけ恒久作品にした方が良くと思う。通年を通して見て廻れる体制にしてほしい。当集落に迷って来た人々が多かったので次回には道案内に気を配った方が良くと思う。大変良かったと思います。
地域内の人達が理解し、共感できるような作品の設置を希望します。
集落の人も参加して一緒に芸術を作るのも良いと思います。
外部との交流、人間関係が深まったこと、感謝申し上げます。後世にのこる作品を願えればと思います。

第4回（平成21年）大地の芸術祭「総括報告書」

（2）作品設置集落・町内に対するアンケート

対象：新作品の設置・継続作品の展開があった集落・町内の代表者80人、回答64人

問8. 今回の大地の芸術祭に関わった集落・町内として、大地の芸術祭の運営のあり方や今後の方向性などに対し、ご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください。

（回答35件）

今回のような「おもてなし事業」の継続をお願いしたい。芸術家、集落ともに「お金があればなー」ということもありますので！
とに角、人が来る事は活気が出て良い事です。
出来れば十日町の住人がもっと関心を持ってもらいたかったです。（作品の無い地域は無関心の人が多かった様に感じられました。）
大地の芸術祭という割には、屋内の作品が多い。廃校や木材、旧民家を利用している分、「大地」と言えるかもしれないけど・・・。
一部の作家かもしれないけれど、もう少し地域の集まりに顔を出してコミュニケーションをとってもらえればありがたい。
次回もぜひ開催をお願いしたいと思います。でも私の部落の今後の管理をお願いします。空家の場合、一番困るのは冬の雪の問題です。雪囲いや雪掘り等の問題、誰が責任者なのか、経費はどうなるのか心配です。長く続けるにはそれなりの経ヒの計上がなければ、部落の人達もなかなか問題になるところであります。
空家に展開された作品の集積した所を設置したら良いと思う。
消えて行く作品がもったいない物が多く、財産として（特に人気の物に限定）残したらどうでしょうか？
大いに希望し、大いに協力する動きがあったが、町中に作品が無く、不満の声が多かったが、おもてなしでコミュニティが図られたと思っている。
お金の問題（地域として市・県補助がほしい。作家のみの事ではだめ。）
作品の良し悪しがあり。
後片付け等しない（作家、こへび隊等）地域まかせ
基本的には魚沼の自然の山河はそのままが良い。変な色彩は似合わない。
1. 作家とのコミュニケーションがよくとれたと思います。2. 集落の2割の負担は大変です。3. 事務局との話し合いがまずかった。（説明不足です。）
今後、継続するにわ集落に経済的にはプラス免がなかったら、だめだ。
農舞台の関係者は都会の出身者が殆んどのためか、話術は上手いが誠意が少しだけ欠けていたと思われる。多忙らしかったので止めを得なかったかも知れないですが。
受付に関する申し送りがギクシャクしていた。
「大地の芸術祭」の主旨には賛同し、作品の設置によって、芸術に対する理解と興味も増し、また外部の人達（特に芸術家）との交流も深まり、地域に賑わいも見られたが、集落の人達は、自分の生活が多忙で、地域興いの事業を立ち上げるゆとりも気力もなく、折角の交流人口の増加（約5,000人の見学者）を活かすことができなかった。今後継続する場所は、集落独自の発想や工夫が必要だと痛感している。笛吹けど踊らず・・・に終わらせたくない。
あまり集落の人きたいしてもらってもこまる。
旧仙田小学校が3月末で閉校となり、地区民が気持ちの切り替え（小学校の思い出）が出来ない時に開催とはいかがなものか。
高令化した、過疎の小集落にこれ以上負担をかけないでほしい。
ボランティア謝礼金（日当）の額をもう少し上げてもらいたい。
こへび隊の人数が少なかった。
町内では、大地の芸術祭に賛成派と反対派がいます。賛成派はたいへん盛り上がっているのですが、そうでない人は冷ややかに見まもっています。したがって芸術祭で人間関係が深まったというより、亀裂が生じている状態です。反対派は静かにしていますので、案外多いのかもしれませんが。町内としては、芸術祭が来ない方が平和であったのかもしれませんが。

集落としては集落草刈作業の懇親慰労会に飛び入り参加してもらった程度。支所担当者から頼まれた 2 軒が個人的に協力。高齢化が進み、今後も集落として取り組むことは困難に思われる。
コーディネーターの方（？）と制作者の人との話がかなり食い違っていて、地域としても協力してきましたが、日程の変更が多く振り回された感もありました。
真田小学校を美術館として、今後どのように長く活かしていくか、作家と地域でビジョンを共通理解していくことが、大事なことかと思えます。
一般の皆様方にも分かる様な大衆向きの作品を展示して頂きたい。
地域、集落では、平日などでは、仕事をしている人がほとんどで、駐車場の管理をする人がいないのでどこでも、駐停車する人がいて、集落などの人が通れなくなってこまった事が、たびたびあったので今後気をつけてほしい。
芸実際の運営について、集落や町内会等におしつけるやり方は、好ましくない。自然体で望（？）むようにしてほしい。今回集落として、看板等の設置に協力できて良かったと思う。
大地の芸術祭は、今後も続けていってもらいたい。
「おもてなし」をやっている所では、どこでも土産が買えるようになっていればいい（ストラップ、T シャツ、地元名産等）
次回芸術祭では「ゆるキャラ」を制作してはどうか？
37.5 万人で満足せず 50 万人、100 万人目標にがんばってもらいたい。
整備の名の元に集落からの負担徴収を止めてもらいたい。小原区では、年間予算を組んで集落運営を行っているので計画外の工事費などの負担を請求されても区の理解を得られません。悪い言い方をすれば業者は勝手に整備とし、その代金を区に請求するなど区としてはたいへん迷惑な事業であったとの意見が多くありました。

(3) 地元商業者対象アンケート

対象：十日町市・津南町内の宿泊施設・飲食店・ガソリンスタンド・コンビニエンスストア経営者 445 人、有効回答 226 人

問 4. 大地の芸術祭に対するご意見・ご感想がありましたら、下の欄にご記入ください。

(回答 124 件)

市街地の商店（？）はカヤの外。中心地での作品を増やすことと、駅でのバス誘導も片寄らないように・・・。
新しい企画を入れて更なるレベルアップを！
パンフレットがあれば、あらかじめ配布してほしい。（ガソリンスタンドです。今回、給油時、作品の場所を問われる事が多々ありました。）
私共の店では、今迄も大地の芸術祭はあまり関係ありません。でも、開催に反対するつもりはありません。
芸術祭のパンフレットとか地図を置いてほしい。（お客様用に）
期間が短いためまわりきれなかった。
ごくろうさます。妻有地域を全国に発信するのは、大地の芸術祭より他に無いと思う。若い人達（学生含む）が長期にかかわらず来る祭りはこの外に無い。（一般食堂）
私どもの地域は芸術作品はありませんでしたので、商売の売上は伸びませんでした。作品展示にあった地域の活性に多いに繋がった事でしよう！！おつかれ様でした。次回開催を待っています。
パンフレットも多くありましたので、お客様にいろいろ説明することが出来ました。有難うございました。
他県の人達に十日町に来てもらうのは、いい事だと思う。
在来 TV 局【マスコミ】の活用。
不景気といわれる今の世の中、遊び心のある事、面白い事いわば文化と芸術はおのずと人が集まり、経済効果が出ることを実感しました。大地の芸術祭という雄大なイベントはテーマは、人と人が出会う、人の和を広げる、この地を知ってもらうことだと思う。そして自分自身をみがくことが人が集まると私は思う。

パンフレットが無く、説明するのが大変でした。前もって部数があれば良かったかなと思います。大変御苦労様でした。
里山アートだからしかたないが、市の中心地に目玉になるアート作品がないのが残念。
この不況の中での芸術祭は大変よいことと思う。
市としての利息がある様なら、続けられたいと思います。
やはり交通の悪さが最大の問題であると思う。カーナビでさがせる様に何か目印の電話番号等がほしいとの意見が多く有りました。特に山間地に行く時、ほとんどの方がカーナビ等で移動しているので次回の課題として下さい。特に今回はお金を使わない様にしていた様に思います！！
地域外の方とこれほど交流する機会は他にありません。さらなる推進を切望致します。 大地の芸術祭開催は大変良かったが、十日町市は自然豊かであるのにもかかわらず、作品が景観を損ねてしまう。大失敗と言う声も、たくさん観光客の方から耳にしました。（こうなっちゃうと十日町も駄目だね、とも言われています。）自然の物だけを使った作品作りにしていかなければ、いずれ大きな観光地の様にすたれて行ってしまうのではないのでしょうか？観光にたずさわる者としてお客様に来て頂き、ありがたいのですが、難しい課題と言えそうです。
観光で来市する人をふえるイベントの継続をお願いします。
今回の大地の芸術祭のお客様の意見は、旧市街地に作品が少なく移動手段に困った人が多くみられました！！十日町市の広さを知らない。
パスポート代金が市内との差が大きい、とびっくりされていました。
町の活性化に繋がると思います。十日町の人達の人情味、温かさ、来市された方々が又来たいと口々にしてお帰りになった事、芸術祭に地元の人々の協力もあちこちで見かけました。この芸術祭が十日町を代表する祭の一部になっていると思います。ぜひ次回が又開催される事を願います。
昼間の飲食業関係その他の商店には効果があった様に思われるので、継続開催にしてほしいですね。十日町全体の為にも・・・。
店は中条です。中条には極端に作品が少なく、芸術祭効果はほとんどありませんでした。作品の展示場所を市内均等にしてほしいです。
裏通りで営業しておりますが、大地の芸術祭の客 今回は一人も来ませんでした。まいりました！
行事をするのは大変な事ですが、芸術のことは良くわかりません。
芸術祭の賛否両論ありますが、続けることが一番。予算がないから、やめるとか、考えるのはやめてほしい。この地域に人が入ることはいいことではないですか。続けることで知名度は上がります。
看板表示をもっと解りやすくしたほうがいい。
長い間ご苦労様でした。皆々様に宜しくお伝え下さい。
パスポートは旅館に置いても購入者が無に近い。
※案内する為の情報がもっとないと、案内できない。
無料の簡単な地図があればいいと思った。
4回目と言う事もあったり高速道路 1000 円もあり、大変忙しい思いをさせて頂き、ありがたかったです。お客様とのふれあいもとても楽しかったです。ぜひ、5 回目の開催も実現してほしいです。パートさん 10 名も同意見です。
若い人達がくることにより、若いパワーを多にもらった。とにかく、人から来てもらうということは、地元が元気になる一番の早道だと思う。作家さんとふれあったりとっても楽しかった。地元を少しでも多くの人に知ってもらっただけでもよかったと思っている。また、よろしくお願いします。
案内看板（矢印）が小さくて見づらい。
案内看板（矢印）が簡略しすぎて、わかりづらい。
各作品の周辺の拡大した案内地図があれば良いと思う。
皆様の努力で四回目が無事終了しました。有難うございました。多大な準備等々あると思いますが地域が活気づくという事実は本当に嬉しい限りです。是非とも継続をお願いしたいし又出来る限りのお手伝いはしたいと思います。
もっと地元の人が積極的に参加して、見学客を楽しませてもいいのではないかな？特に私どもの地域では。自分では足の弱さで行けませんでした。町のためには大変好い事と思います。
旧中里地区の案内等の看板が分かりづらいという県外のお客様が多かった。
大変良かったです。有りがとうございました。
土、日曜日に見に来る人がけっこういました。
こへびの人達とか芸術祭の前から、食べに来たりしました。こへびさん達が、けっこうまわりの人達に店があることを言うてくださったみたいで、学生さんとか、手伝って下さっている人達が食べに来てくれました。

店に芸術祭の写真をかざっておいたら、たくさんの人達が見ていました。(本にして2～3冊、300～400枚くらい)
関口市長が公約した、どのように入込客を迎えることが、完ぺきに達成されました。しかし、行政職員はぜんぜん「チエ」を出していない。ダメだ。
十日町駅の観光協会の人達がすばらしかった。
4 回目ということと、市長が変わったことにより、メディアの使い方がよかったもの思う。(テレビ、雑誌等)
地元の人は無料でお願いしたいです。
作品のあった所は、売上がかなり良かったようです。市内全体に作品ができるといいですね。
ごめんなさい。個人的に芸術・文化に「キョウミ」がないので……。それと上記で答えた様に自分の商売に変化がないので……。
別の予算に力を入れてほしい。福祉や介護、恒久的な景気回復の対策(単発的なものでなくて……)。職員の削減など……。
シャトルバスの平日運行をお願いしたい。(本数が少なくても良いから)
期間の変更など早期に連絡して欲しい。
4 回目という事で、とてもスムーズに行った様な気がします。長野県、山形県の方々が多くなり、とても嬉しく思いました。
芸術作品がある場所と無い場所で大きく違いがあると思います。
回を重ねることによって定着して来たことが大きい。2 次交通の企画が今回利用しやすいようになって良かった。エージェントとの協賛が功を奏したと思う。
もっと詳しい案内がほしかったです。
作品の展示場所を説明するのが大変。(あまりにも場所が飛びすぎる)
十作品位を、一つの場所で展示してほしい。(たとえば GP 津南とかベルナティオのふきんで)会期以外にも見られる様に。
国際的な人々が来るのには少々おどろき。
町が元気なようでとてもよかった。
市街地はどうかかわからないが、バスの利用が好評で利用客がのびている分、素通りされてしまう感もあった。この芸術祭そのものが、初めての人には、エリアが点在している事もあり、仕方のないことと思うが……。
物品が、場所によってかなり値段の違いがあった。統一できないものなのかどうか……一考を!
街中で集客の出来る催事 展示物にも工夫がなされたらどうであったかな?と思える。
今回 4 回目ですが、3 回目から売上の増加は大いにありました。ぜひ継続してほしいと考えます。
チラシ等の地図が分かりづらかったと思います。
広域すぎる。皆んな回れない。
十日町が元気になってとてもよい事。
県外の車が多く来て頂きました。うれしいことですね。これからも、県内外の宣伝をお願い致します。
10 月に入ってから廻った所、トイレの汚れがひどかった。とても入る気にはならない程だ。
地元の作品紹介パンフレットだけでなく、他の地区の作品紹介パンフレットもほしかった。
地元住民の協力体制をもっと一般の人にわかりやすくみせた方がより効果的ではないかと思う。
市内の案内地図をもうちょっと大きめに印刷してほしい。
当店は裏通りにある為、外来者の来店はありませんでしたが、町の中が賑わっているだけでも、活気があって、とても良い事だと思います。市内に落ちるお金も大きいと思っていますので、ぜひ続けていってほしいと思っています。旧市街地に作品が多くあるのもっといいのですが。
今回は、各作品がある場所などでも「おもてなし事業」をしてる所があったため、お客様からは、「いろんな場所で、もてなされ(茶・おしんこなど用意してもらったなど)」と言う意見・感想を言ってるお客様の声が印象的だった。
他県の方々がおみえになり、新しい風がふいているようでした。感覚が少しづつ違うのだなあと思えて、楽しく仕事ことができました。
パスポートが欲しい方は少なかったのでは、売れませんでした。案内等の地図が欲しい方がいたので、困りました。
利害関係者、芸術祭関係者だけが感心がり、市民の色々な人に聞いても全く感心がないとの意見。税金を使うならもっと他に何か考えられないかとの意見が多数でした。
まだまだ発展途上な部分があるので、今後も継続して「十日町＝芸術」のような発展を期待します。また、弱力ながら協力させていただきたいと思っています。

<p>芸術の事は良くわかりませんが、今年度の秋の開催はPRがとてもへたです。10月中旬になってポスターを配っているようではダメです。テレビを見ていて感じますのは、村上市はすごくPR（祭りの）がうまいです。十日町ももっともっと大きくPRすべきです。地域の人々の協力に感謝して、今後の開催につなげて下さい。皆んなが利益に走ってはいけません。来市する人達が楽しく、又、来て見たいと思わせ、リピーターを作るような仕掛けを作って下さい。</p>
<p>ふだん出会えない方々と出会えた事がうれしかった。</p>
<p>上郷 宮野原にも芸術を願います。</p>
<p>8月～9月頃から、カメラを手に持った若者が目につくようになりました。お客様にどちらからですか？青森、岩手、その他色々、食事をしてくれました。ほんとうに有難うございました。大地の芸術祭の役員ごろうさまでした。</p>
<p>特に店の売上、来客には影響がなかったようです。交通費や宿泊代にお金がかかるので、スナックに飲みに来る方は少ないと思いますが、宿泊施設やコンビニの利用率は高いと思いますし知名度アップの効果はすばらしいと思います。</p>
<p>地元の方にも、Tシャツを着せて、町全体でイベント感をもっとだしてみてもどうでしょうか？</p>
<p>おみやげの種類をふやしてほしい。（販売する物も含む）</p>
<p>今年一番のオススメスポットを分かりやすくしてほしい。</p>
<p>当店では売り上げには、際立った影響はありませんでした。夏休みに子供が帰って来ると、パスポートを買って、家族で回るのが楽しみでした。市の財政に余裕が有るのなら続けられよい。福祉、教育にシワ寄せが行くようなら終了にしなければならない。</p>
<p>景気低迷が続いているので増減はわからない。前回の芸術祭との違いを問われるのであれば、答えようもあると思います。（芸術祭を見にいらっしゃったお客様はふえたように思います。）</p>
<p>十日町の宣伝及び活性化には、必要だと思います。街中には作品が無く、松代の方に来場者が多いと聞きました。</p>
<p>期間中町の中心は、静かでした。でも食堂かんけいは忙しいようでした。</p>
<p>当店では今回の芸術祭の効果はあまりなかった様に思います。次回を期待致します。</p>
<p>皆さんとても喜んで楽しんでいました。</p>
<p>ガソリンスタンドについては、売上げは上がるが、道等の説明にも時間を要する事が多く地図も前回の残りを使用した、今回は無いため無くなりしだいに口頭の説明になった。</p>
<p>LPガス等は請求先が個々なのに、明細を2、3ヶ所に出さなくてはならず、手間が多かった。担当者の危険物への認識の無い人もいたので考えてほしい！</p>
<p>いろいろあると思いますが地域が元気になる一つの方法かもしれません。</p>
<p>地域によって全く効果有りません。地域全体になるよう事業を考えてもらいたい。</p>
<p>会期の延長は（7月20日～9月30日）では、十日町・津南町だけではない（宿泊）湯沢町の宿泊業者からも要望があり、メリットがあった。継続してほしいむね伝えてほしい。（津南町の宿泊営業より）</p>
<p>同じ時期に合宿が入っていたため、ほとんど受け入れ出来なかった。</p>
<p>山間地での作品が多いので町の中（クロス10）とかで絵画展とか、なにかイベントを、やったらと思う。</p>
<p>減少は芸術祭に関係なく不景気のせいだと思います。開催をするについて市町村の税金割当等を使わなくても開催出来るのであれば続けてください！！御苦勞様です！！</p>
<p>毎回、知名度が上がり人数も増加し、地元としては本当にありがたいと思います。今後、開催期間をもう少し長くするとか、雪げしきの中の芸術もすばらしいかと思ひます。また山菜の時期なども喜ばれるかと思ひます。</p>
<p>交流人口を増やして十日町に経済効果を持たせると思ひるので是非、継続してほしいです。</p>
<p>業種によってメリットが有るのではないか。市は大地の芸術祭によって税収があるのか。話を聞いて見たい。</p>
<p>期間中は、合宿があり芸術祭のお客様のご予約は承れませんでした。二ツ屋に作品があった事も影響し、問い合わせ数は増加しました。お部屋に空きが出た日があり、当日予約で芸術祭のお客様が宿泊して下さり、芸術祭によって妻有が賑わっていると感じました。“観光客の数”という見方で注目度、成功、盛り上がりをとらえるのが外側からだとすると、最初は、どう芸術祭に関わればいいのか分からないという雰囲気もありましたが、回を重ねる毎に参加する地域、団体、個人も増え、内側からの盛り上がり広がってきて、地域が活気づいているように思ひます。期間中は地域が元気になって人の笑顔も多いと感じていました。</p>
<p>私の店では売上につながる客は一人も来なかったみたいです。今後もまだ継続開催をするのであれば市税の無駄使いと見てすぐにやめるべきと思う。</p>
<p>大地の芸術祭を事業と書いて有るが、何が、どこが事業なのかバカな市民に分かるように説明してほしいと思います。人間平和で平等に生活できるようになってから大地の芸術祭でも考えて下さい。</p>

<p>芸術作品を観るに、これが芸術と思えない（性にすれば）様な作品も多々有る気がしてなりません。</p>
<p>旧市内で飲食店をしておりますが、今回の芸術祭がいままでと違うのは、一人でも訪れている、という事です。しかも広島や大阪など遠方からも・・・とてもありがたいので、気持ちを通う（わせる）接待が、不可欠と思ひ積極的に話しかけました。その際、芸術祭に関する質問などに的確な答えが見つからず、こまった事がありました。次回からは、事前に作品を鑑賞すべく、店主（又は接客のチーフ）の為のバスツアーなどがあればありがたいです。又、市街地に作品が少ない様だったが、機能的な作品（ミオンのトイレ作品のような、案内板 etc）を用意してほしい。まちなか（街中アート）も是非・・・</p>
<p>今年は県外ナンバーの車が目につき芸術祭自体は良いと思うが、地元においても何がどこにあるか良くわからない。道を聞かれてもわからない。全体のマップの他に地域ごとに近くにどんなものがありセールスポイントは何かということをまとめたものを作ってくばってほしい。開催前に配っているものもあると思うが開催中にも1度くらいは配ってほしい。</p>
<p>今年は事情があり大地の芸術祭の時休業することが多く売上に結びつきませんでした。でも人が多く訪れやっと定着したと感じましたので、私共が集客情報を発信すれば売り上げは増すことが出来ると思ひました。</p>
<p>県外からのお客様が大変多く「大地の芸術祭」への感心の高さを感じました。又、松代・松の山地区の方々の芸術祭への参加度で並々ならぬ意気込みを感じました。「十日町おにぎり軍団」等の各「情報マップ」及び各交通機関の「ロードマップ」の充実で「大地の芸術祭」をより見やすく行きやすくさせてくれました。次回の芸術祭には十日町市内及び市民の芸術祭へのさらなる感心、参加があがるようになると市の活性化につながると思うので、ぜひ継続してほしい。郊外型の芸術祭に思えるのが淋しい。</p>
<p>人の交流する事業は大切です。できるだけ旧十日町市内各地にも魅力のある作品をふやしていつて年々素晴らしいイベントになっていると思います。これからもどうぞ続けて下さいますように。</p>
<p>推進室の皆様、いつもご苦勞様です。この芸術祭が、雪まつりと並ぶ十日町の大イベントとなっていく事を深く希望しております。今後共、よろしくお願いいたします。</p>
<p>町の中にもう1～2ヶ作品があつたらと思います。</p>
<p>これまでの反省点を改善し、今後に活かして行けたら、より良い“大地の芸術祭”になるのではないのでしょうか？地元や市に“お金が落ちるシステム”の構築を期待します。</p>
<p>これからも協力できる事は協力したいと思いますので頑張ってください。</p>
<p>年々、大地の芸術祭効果があり、おどろいております。おとずれる方、ほとんどの人が喜んでいらっしゃるの運営等、大変と思いますが、ぜひ今後も継続開催してほしいと願っております。</p>
<p>松代・松之山に芸術がかたより過ぎてはいないか？全地域に満遍なく芸術を配置して、本当の意味での妻有郡をアピールしてほしい。</p>
<p>長い期間の為、天候に左右されましたけどお客様が来店くださってよかったと思います。市外から来たお客様にはパンフレット等をもって、色々聞いたりして特に女性グループ等が多かった様です。</p>
<p>大地の芸術祭終了して、松代のブナ林に行きましたら木の上から目がいくつもぶらさがっていたりブナの木がボンドだらけでかわいそうだったり道にはペンキの石がちらばっていたりで林や森がかわいそうです。大地の芸術祭は里山が元気になるかも知れませんが自然破壊だと思います。林や森の中にプラスチックや鉄やその他不思議なものがあってはならないのですがきちんと元どおりにしてあげてください。林や森は人間だけのものではありませんから・・・勘違いしないでほしいです。</p>

第5回（平成24年）大地の芸術祭「総括報告書」

（2）作品設置集落・町内に対するアンケート

対象者：新規作品や既存作品を含めた全作品の設置 102 集落・町内の代表者、回答 75 人

問 8. 大地の芸術祭に関わった集落・町内として、大地の芸術祭の運営のあり方や今後の方向性などに対し、ご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください。

（以下、主な意見、回答 41 件）

旧十日町の山間部落で衰退している所があったのが淋しく感じた。
過疎と高齢化が進み淋しくなって来た集落で作品づくりをとおして作家との交流が生まれたり、若者との交流が出来て良かった。廃校の活用は大変ありがたい。
何がどのように行われるのか、半年位前から知らせてもらえれば地域としても準備ができる。2 ヶ月 3 ヶ月前では全ての面で協力への体制が整わない。
駐車場不足で地域住民に大きな迷惑がかかっている。芸術展示の前にすべき事があるのではないかな。「芸術祭をやっているのだから協力しなさい」的に話を持ってこられても協力できない。仕事もあり、それぞれの生活もある。まとめる担当になった者は大変な目にあう。
集落としては、もう設置してあるので、それを整備して施設周辺の整備をお願いしたい。
私どもの集落では、大地の芸術祭の作品設置を希望しております。新規に設置できますようお願いいたします。
継続する事で文化発信の地になって、地域振興に役立つ。
玉石が混じっているので作品選択にもう少し工夫の余地がある。
自然エネルギーを使った技術と芸術の融合も検討して下さい。
風車を修理するか買い替えが必要。
作家が地域住民とあまりなじまず、何をやりたいのかわからなかった。
来訪客の人数、金額のつけ方をもっと簡単にしてもらえないか？
作品はもちろんですが駐車場の案内も親切に。
芸術祭の参加会場の一つとしては地元民が直接係われる内容ではなかったが近隣の農家からトマトや西瓜の差し入れが時々あり人々の関心が高かったと思います。
作家、作品を地域で決めたい。1 年位前から作品のプレゼンを受け、地域で受け入れ作家、作品を選ぶようにできないか？
ふるまいおにぎりを米販売等と組み合わせ、回数等も自由にする。（今年は 3 日が上限）→おにぎりにより来客者を増やし、地域の物販を促進する。
こへびの地域にある程度決まった人をふりわけろ。→地域との関係が深くなり、大地の芸術祭以外でも交流が期待できる。
いつも大地の芸術祭があると多くの人に来て下さりありがたいです。地元の人達がもっと参加できるような企画があると良いと思います。始めの頃、ふうせん持ってパレード良かったなと思います。大変だったでしょうけど。
アートに対して市民は理解と納得をしていると思う。今回は観客が市街地に降りてきたと思う。これを経済効果に結びつけるのが今後の課題だと思う。
中手には水を流して雪を消す。まきを燃やして雪を落す。カマボコ型のハウスやコンクリートハウスなど雪掘りをしないなど手作りのものが多い。これもアートなのではないか？
3 年前秋田公立美術工芸短期大学の芝山先生が仁田地区に作品を制作した縁で上小阿仁村の小沢田集落とは伝統の「万灯火」を仁田で実施するなど交流を続けてきた。今回は上小阿仁村が飛び地開催となったことから上小阿仁村の皆さんが約 70 人仁田に来て、伝統芸能、万灯火を実演した。また仁田からは上小阿仁村に 10 人程で訪問し、仁田の「天神ばやし」を披露し交流を深めた。これも大地の芸術祭の成果であると思う。
作家、こへび隊が集落とコミュニケーションの関係をもう少し多く作ってほしい。
問 6 のカ（問 6「作品が設置されて良くなかったと感じているのは、どんなことですか」、カ「芸術祭来訪客のマイカーやツアーバスが混雑し、地域住民の交通に支障をきたした」→2012 年 0%、2009 年 40.0%）の様にデメリットも大きな問題となっている。次回においては旧峠小学校の体育館の所に駐車場

として、アスファルト舗装をしてもらい、駐車場の確保を願いたいと思う。
車の駐車場の関係で、集落内で反対意見があり大変困りました。次回開催時には駐車場整備等も考えて行きたく思っております。
作家さんが2名入られ、それぞれ作品づくりがあったため、田んぼ、畑、山菜とりなど重なり大変であったがみんながんばって協力した。今回は1名の作家さんでお願いします。
こへび隊、管理人、主催者等普通のTシャツかユニホームが欲しい。芸術祭カラーの黄色をアレンジしたのがよい！
賛否は何事もつきものですが、着実に大地の芸術祭は根づいてきていると思います。大変ですがたゆまぬ努力の中から集落、地域のつながりが育っているなど感謝しています。
問7でイと回答したこと（問7「あなたの集落・町内としては、大地の芸術祭を継続開催してほしいと考えていますか？それとも今回で事業を終了してほしいと考えていますか。」、イ「どちらかといえば継続開催してほしい」）について。今回の開催はこへび隊が少なく、私たちが受付を少し担当させていただきました。高齢世帯の多い集落なので、今回以上の対応は難しいと感じております。
部落の人達ともう少し話をして、部落の輪の中に入った方がよい。
当部落には不要である。
経済効果をもう少し考えても良いと思いますが、芸術に対してはまだまだ理解しにくい様子。
集落、町内のボランティア活動が多すぎる。
夏場の暑い時期であり、当家は駐車場の近くにあり、大勢の車で賑わいうるさくてとても昼寝するどころではありません。体の体調が崩れる要素となります。別のところにちゃんとした駐車場を作り住民には迷惑をかけないようにしてもらいたいです。
開催初日に駐車場の表示がわかりづらくて、道路への駐車が多発したため、臨時で2時間程度、誘導係をしたのですが、来てくれた方々が帰るときに手をふってくれたり「よかった」と声をかけてくれたのがうれしかったです。来場者へのもてなしの心は大事にしないといけないと思います。
雪に対する管理の仕方をもっと考えた方がよい。
出来ればもう少し芸術性の高い作品があった方がよいのでは。
市街地の作品の質と量のUP。
期間の延長
継続することで地域の活性化になると思います。
大きな会合や打ち合わせ等が、十日町地域で行われていたので交通の便で送迎をしてもらいたい。
大いに関わってみないと本当の良さがわからないのかもしれませんが、年齢の高い人が多い集落のためか、比較的冷ややかな目で見ている様な気がします。開催期間中の境内の草取りは一生懸命です。

(3) 地元商業者対象アンケート

対象者：十日町・津南町内の宿泊施設・飲食店・ガソリンスタンド・コンビニエンスストア経営者 436 人、有効回答 161 人

問 4. 大地の芸術祭に対するご意見・ご感想がありましたら、下の欄にご記入ください。

(以下、主な意見、回答 79 件)

第5回まで続いて回をまずごとにお客様の数が多くなっている感じがおり、十日町市の知名度がこれから先もどんどん増え、色々なところに影響を及ぼしてくれることを望みます。
通年鑑賞作品を出来るだけ残してほしい。
十日町の一つの大切なイベントなので毎年行ってほしい。
楽しみにしている人がたくさんいるので次も開催してほしい。景色の良いところにある作品は車で行きやすいし行った甲斐がある。子どもとの良い経験ができ、地元の良い所を再発見できたように思う。
お客様は出来るだけ多くの作品を見て回りたいとの希望が多いので、作品の鑑賞時間をもう少し長くしてほしい。また、鑑賞時間が不明な施設については、案内をきちんとしてほしい。シャトルバスの運行が遅れたりした場合、お客様に多大な迷惑をかけてしまう。代替りの交通手段の無い場合がほとんどなので、運行については気を付けていただきたい。
作品が集中している所とほとんど無い所ではお客様の入りが違う。もう少しバランスよく展示されると

良いと思う。
芸術祭は一過性のものだが、それ以外にも継続して経済効果が期待できるような事をして欲しい。例えば企業誘致や大学設立等。
開催期間が当館でお客様を承ることが出来ないで、直接の利益にはなりません予約のお客様の声で、朝のオープン時間がもっと早いといいのに・・・とのことでした。全てでなくても有名所が早く開いてくれると一日で行ける範囲が広がるのにとの事でした。
作品が身近に有るか無いかで温度差がどうしても出る。一つの有名作家に多額を使うのではなく、地元の子ども達も参加出来る場所もあると温度差がなくなると思う。
7月末開催時はお客様は例年にないスロースタートで、8月中旬から終了までは例年にない盛り上がりで終了してしまったという感じだったので、開催期間の延長を希望します。
パスポートを持っている人が割引等のサービスを知らない人が多かった。
食堂は良かったが夜は人が少なかったそう。ある所では地元にごみが多く出たそう。
毎年アンソロジーで、3年に1回は新作+アンソロジーで、街中芸術の充実を。
当店に関しては芸術祭会期中に圏域外からの来店者はほとんどなし。松代では他県・他市町村からの来客が激増したとのこと。旧十日町市街商店、飲食店にも観光客が溢れるような「大地の芸術祭」に、進化することを祈る。
影響の少ない立地なので芸術祭効果はあまり感じなかった。市街地のイベント、作品を増やしてほしい。
関係者は大変ですが、継続は力（発展）なり。頑張ってください。
期間をもっと長くしてほしい。
ポイントの所にもう少しわかりやすい対応等（カーナビなど）をお願いしたい。
外国人の対応が難しかった。英語、会話が出来ない。
第三者委員会などの設置により一部地域に偏った公金投入の費用対効果を検証すべき。分散型のポランティア的開催から脱皮し、十日町4大祭りにひけをとらない「祭典」を目指す。
期間中だけでなく開催のない年にも何かの話題があり何かの行事がほしいものです。
大地の芸術祭の影響はほとんどありませんが、個人的に芸術祭が好きなので今後も開催してほしいです。
お客様との話題が広がり十日町の人も楽しそう。十日町が賑わうことが良い事。関係者の方はご苦労様です。
地域活性化の主たる事業かと思えます。今後の継続を切望いたします。
地域ぐるみでのイベントなどのPRが足りないように感じました。ガイドブックが見つらいとの意見がありました。
各作品ごとの移動距離がどのくらいか初めて来る人にはわかりづらい。（場所も）マイカーで来る人には距離と時間がわかりやすいマップ等を。マイカー以外で来る人には無料巡回バス等を増やしたり、レンタカー利用者にはあらかじめ作品スポットをカーナビに登録しておいたり等、利便性をお客様目線でもっともっと考えていくべき。
リピーターの方も初めてのお客様も作品等に満足していただいた。車以外のお客様は交通が不便なので気の毒だった。
非常にガイドブックが好評で、やや品薄になった時期があったので次回はもう少しご用意して、店舗分も増量してほしい。キナーレの位置はもっと目立たせるべきかと思えます。道案内をする際にあまり目印になるものがなく、説明しづらかった。
作品を見てなるほどと思う作品はなかった。これより十日町病院の建設に市民は力を入れてほしい。
私どもは市内の飲食店なので前の様な街中アートをすすめてもらうと助かります。あと、今迄のアートがたくさん残っているので、それらを活かした企画を望みます。
お客様の御要望ですが、案内の標識が少ないとのこと。もっと大きなわかりやすい看板を設置してほしい！そういう声が多く聞かれますので、宜しく願い致します。
3年というのは長いようで短いものです。前回、前々回に来た人たちから再度宿泊してもらいました。毎年一部の作品・建物の開放をお願いしたい。観光客も望んでいる声もある。
ガイドブックの作成で旧作品と新たな作品を分けていただきたい意見が多かったです。
いろいろ厳しい地域ゆえに、何年かに1度は全国に向けたイベントは必要だと思います。高齢化が進むところに少しの間でも若い人達が来ることは良い刺激になると思います。市民も、他地域との交流は自分たちの文化を見直す機会になります。
店でも芸術祭のアンケートをとっていました。楽しみで毎回来ているという方々が多く、又、初めて来たけどまた来たい、見る所が多くて絞り込んでしか見れないので残念がっている方もいました。
パスポート等の収入額内で大地の芸術祭を行うことができるのならぜひ継続してください。市・県等からの補助金が必要ならやめてください。

<p>今回は特に評判が良く、券も売らせて頂いたのですが、観光業界の人も知らない人が多く、当店の課題として、早めの情報にて団体様のお食事、清津溪谷とかねて宣伝したいと思っています。終わってから観光業者より、今度はお客様の呼び込みをしたいので知らせて下さいとの話が多く寄せられ、団体割引券があるか？の問い合わせもありました。</p>
<p>写真家のお客様で芸術作品が同一箇所に鎮座している事により自然美の景観が損なわれているとの意見がありました。考えてみなければいけない意見かと思いました。</p>
<p>希望としましては開催期間を春か秋に変更して頂きたいです。</p>
<p>イベント情報がもっとほしかった（開会式や閉会式などのメイン会場がどこなのか？ キナーレという声があれば農舞台という声も聞き、情報が錯乱して予想が立てづらかった。）</p>
<p>お客様は宿泊先がないことを心配していました。特に案内が不親切で湯沢や津南方面を紹介しました。時間とお金がかかる。しかし地元の民宿が空いている。駅案内の人がもっと親切に紹介してほしいと苦情を言っていた。他に会場へのアクセスが非常に悪い。バスがうまく運行されていない。</p>
<p>津南地区にも、ちゃんと作品を割り振ってもらいたい。もちろん素晴らしい作品もありましたが、何かドタバタで地元衆も参加の意欲があっても何をどうしたらいいか戸惑っていた。</p>
<p>自店は会場に近く、駐車場が見学者によって満車になり、道路もふさぐ形で止めざるを得ない状況になっていた。松代駅も同様です。交通整理に力を注いでください。</p>
<p>大地の芸術祭の作品のあるなしによってお客の入りが全く違う。松代駅前と農舞台側では大きな差が生じた。松代町内にもぜひ作品の設置をお願いしたい。</p>
<p>大地の芸術祭とは一体何なのだ。市の予算があまっているのでも使い道が無くてやっているのか。もっと他に1人1人の利益になるのに使ってはどうか。1人に与える利益は市の利益になると思っている。</p>
<p>地域に根付いてきたところですのでぜひ継続して続いてほしいと思っています。</p>
<p>色々の国の人達が来てほんとうにたまげました。人が集まるって事はいいことですね。</p>
<p>個人的には芸術祭を楽しませていただけていますが、営業面では暇になっていると感じます。イベント会場に飲食店ができるので仕方ないかなと思っていました。もちろん当店の力不足であるとは感じます。</p>
<p>山間地で限られた人達との交流の中で生活していますが、アートのお蔭で遠い都会の人たちと会話、交流ができるというのは、私達にとってとても楽しく有意義で、物事を前向きな考えにさせて頂いています。ぜひ継続をお願いします。感謝！感謝！</p>
<p>ご苦勞様でした。今後もよろしくお願い致します。</p>
<p>中心商店街にも多くの作品が来たことで、売上増加になりました。今後も是非商店街に作品をお願いしたいです。</p>
<p>3月12日の長野県北部地震により廃業しました。今までにない電話あり。記念品、他の施設を紹介しました。継続を望みます。</p>
<p>膨れ上がった市債の返済見込みの無い中、多大な費用をかけてする事業ではない。赤字を気に掛ける職員若しくは議員はいないのですか？</p>
<p>創意の風は良いですね。</p>
<p>範囲が広すぎるように思います。見学に来る人に気の毒です。</p>
<p>あっちこっちもいいけど1ヶ所集中お願いします。自己満足でしかないですよ。</p>
<p>継続は力なり。</p>
<p>宿は事前に予約をするようにアピールしてほしいです。宿泊特典もパスポートの販売も有無も見やすく一覧にしたり、MAPに宿も示してほしいです。</p>
<p>1～2人の宿泊の方が多いため、部屋数によりすぐに満室になり、土曜に集中したためその日のみ満室です。素泊まりが多かった。</p>
<p>昼間の営業時のお客様が増えた。ランチメニューに工夫をこらして。好評でした</p>
<p>今回が今までの開催の中で一番の盛況だったのではないのでしょうか。特に今回関西圏からの人が多かったのが印象的でした。数組のお客様と話をすることができました。自然と地域に住む人との芸術に感動したとの事です。他から人が来るという事はいろいろな話も出来、楽しいことです。これからもぜひ継続して頂きたいと思います。</p>
<p>人が多く、来て下さる事は良い事です。</p>
<p>川西地区の移動手段が車しかない！（他の地域もだが・・・特に川西地区！！）</p>
<p>回をかさねるごとに、利用するお客様が増えております。お客様からも、次回を楽しみにしている声もお聞きしています。</p>
<p>土曜日、盆の1週間の数字であり平日は少しくらいであり、最後の日曜日9月17日は倍以上の売り上げでありました。ぜひ続けて欲しいと思っています。</p>
<p>メインになる作品近くは努力せずに人が動きますが、横丁の店はいろいろな広告等の措力が必要でした。宿泊する所に街の中の飲食マップ等あれば横丁にも人が入ってくるのでは？旧市内作品も町の中を歩いて</p>

もらえると色々なお店にも立ち寄るし、横丁や市内作品ももう少し欲しい気がしました。
長期にわたるイベントにも関わらず、市街地近辺の展示も少なく誘客へのメリットは少ない。
大地の芸術祭に合せて各地域に有る観光スポットの掘り起こしなどできればと思っております。まだ隠れたスポットなどが多数有ると思っております。
近年は屋内作品が多くなりましたが、屋外作品が本来の大地の芸術祭だと思います。その為にも常日頃から、道路脇のツタを刈ったり、ゴミを出さない様にしたり、建築廃材を片付けておくなどの心掛けが必要だと思います。
ガソリンスタンドなどには無料パンフレットや案内地図などをおいてほしい。
継続は「力」だと思います。大地の芸術祭が無ければもっと下がっていたでしょう。他県の人々と交流ができとてもすばらしい事と思います。
十日町市内（中心部）の見どころ的な案内があったら、何となく十日町に来た方へ芸術祭をアピールできて良いのかと。飲食店ではそういう声をよく耳にします。
公式ガイドブックに載せてください。
毎年やってほしい。2012 過去最高の経済効果でした。
当店は裏通りに有る為か大きな影響は無かったように思います。次回から企業努力が必要かと思う。ぜひ事業を継続してほしい。
各地域ごとに作品数を整理しながらなるべく平均化を図っていただきたい。「こまち」が企画した見どころマップは不平等性であり不満を感じた。
十日町市にたくさんの人たちが来てくれてよかった。
可能ならば芸術祭のマップを主要店舗に置いてほしい。お客様に聞かれても案内が出来なくて申し訳ない。
実行委員会の皆様、大変ご苦勞様です。今後の活動も宜しく期待しております。

第 6 回（平成 27 年） 大地の芸術祭「総括報告書」

（2）作品設置集落・町内に対するアンケート

対象者：新規作品や既存作品を含めた全作品の設置 109 集落・町内の代表者、回答 63 人

問 11. 大地の芸術祭に関わった集落・町内として、大地の芸術祭の運営のあり方や今後の方向性などに対し、ご意見やご要望がありましたらご自由にお書きください。

（以下、主な意見、回答 32 件）

海外来場者の対応として、市から専門のスタッフを派遣して欲しい。
集落の方々が、自発的に拠点で野菜販売してほしい！！ 中々販売する方がいないので、NPO で方策を考えて頂ければ幸いです。
芸術家さん達が深夜に作業する事はやめて頂きたい。今回、警察が出ました。
商店街に芸術作品をもって来るのは難しいのでしょうか？ 商店街に恩恵があまりなく、食堂の人でも全く関係ないくらいと言っていました。
今まで通りで良いと思います。
人手不足の為協力できる事に限りがある。
作家さんが 2 人も入り、作品作りが大変であったし、期間中水くれなど集落民の負担が大でした。集落民は高齢化している為、協力するにしても負担が軽減するよう作家さん、市当局から御配慮していただくと大変ありがたく存じます。
集落としては参加の意欲は希薄だったが、神社奉賛会の熱心な受け入れ姿勢があって十分な「おもてなし」も出来たと思うが、町内としての盛り上がりはなかった。観光物件として残るものなら大歓迎かもしれない。
管理の主体をはっきりさせてほしい。
大地の芸術祭は行われるのはいいんですけど、少し外での雰囲気静かすぎるみたいに思います。もう少し活気があった方がいいと思います。
個人的には良いことであると思っているが、高齢化の中で集落民をまとめて、事に当局事は安易な事ではありません。行政と外からの支援の中で集落を守り、元気な集落として多くの人達と交流をしていけたらと思います。
雨天の時の駐車場完備が必要です。
地元野菜を使っていたら、とても嬉しかった。次も必ず応えたい。
年齢等にこだわらず、ある程度間口を広げるとおもしろいし元気がでる。
奴奈川キャンパスの食堂で地元のお母さん達計 11 名をスタッフとして雇用してもらいました。また、その食堂で使用する野菜、米等地元産を使っていたら、思い掛けない報酬を得る事ができ、参加した人達は喜んで協力していました。地域としても相乗効果があったと思います。
参加して喜ばしい、又結果が出れば自然とおもてなしの好意・感情等が生まれるのではないのでしょうか？
トリエンナーレはそのままで良いと思いますが、作品によっては毎年開催が適しているものもあると思われます。そういった作品については、3 年に捉えられることなく、毎年の催行で構わないのでは？ 「十日町に行けば何かやってる」というキャッチコピーはいかがでしょう？
中央地区振興会の「おもてなし事業」の当番で 1 回参加しました。次回も機会があれば是非参加したいと思います。十日町市にとっては大変良い事業だと思います。
集落の年間行事をこなしていくだけでも大変（高齢者が多くて）なところ。さらに何か協力が必要なイベントが企画されても困るだけ。展示やイベントに関しては「選択と集中」を徹底し、むやみに会場を広範囲にしない。“村おこし”の効果など望めないのだから。
協力者は一部の人のみであり、今後の協力体制に不安があります。建物管理冬期間の雪処理、夏場の草刈り等一人でやっている。これらの事も検討して見てほしい。
来場者への作品説明を地元で当番制でやったが、期間も長く大変であった。大変ではあるが作品説明は当地作品には必要と考える。
次回開催の場合、入り口と帰り口の標識を分かりやすくしてもらいたい。今年は車が多く注意して出入りしており、入り口と帰り口を別にして標識を設定していたが、ほとんど入り口帰り口が同カ所になって

しまい（90%位）非常に危なくて困る。
芸術祭の建物なのか別荘なのかよく分からない。一年中通じてワゴン車で泊まりに来るが、集落との交流はない。
大地の芸術祭の時だけではなく、農作業など忙しいときなど依頼して一緒にやってもらったり、収穫祭などで一緒に作ったものを食するなど地域の関わりを深めてもよいと思う。そうして芸術祭では地域の人が手伝ったりおもてなしができる相互の関係を深めてもよいと思う。当集落の祭りは大地の芸術祭の作家さんや KEEN さんのおかげで活気が出て良い方向に変わってきた。この時だけに終わらせたくないです。
当集落は少子高齢化が進んでいる集落です。大地の芸術祭参加により集落も少しは活気づいた様に思います。特に祭礼の際にはスタッフの方々から祭礼の準備から始まり、KEEN さんより出店、踊りにも参加祭を盛り上げていただき大変感謝しております。また、集落内の車庫のシャッターにも DEAI のシンボルマークでもある草履の網目を模した絵を描いてもらい、集落皆さんの協力体制も出来ております。できれば今後集落の皆さんも参加できるような企画を出してもらえればと思います。
オーストラリアハウスに期待することとしては、是非作家さん達に 1 年～3 年とかの長期で滞在して欲しい（冬も！！）と思ってます。日々の協働を通じて助け、助けられる関係性がうまれたら素晴らしいと思います。短期間の滞在だけで「協力してほしい」と言われても、持続的には難しいと思います。
おふくろ館内に設置されている作品を隣接する空施設に移設してもらいたい。（そば打ち道場の下）
もう少し作品として残るもの、管理しやすい作品であってほしい。運営中に修理する様では困ります。
数年し朽ちてきた作品は撤去すべき。そうでなければ補修してもらいたい。
公園等もあり、又道路も開削しているので公園内に新しい作品をお願いしたい。
地元の関わっている人は良く分かっているのですが、その他の人は何をやっているのか良く分からない事があるので、説明会も個々にもやって頂けると良いと思います。件数も少ないので説明会をやっても出てこない人もいますので（年輩の方）
永久設置の作品がほしい。

(3) 地元商業者対象アンケート

対象：十日町市・津南町内の宿泊施設・飲食店・ガソリンスタンド・コンビニエンススト

ア経営者 408 人、回答 163 人

問 8. 大地の芸術祭に対するご意見・ご感想がありましたら、下の欄にご記入ください。

(以下、主な意見、回答 32 件)

お客様から全体の大きな地図がないか？との意見が多かった。芸術地点が分かるようなマップを市内の店やスタンドに無料配布してほしい（広げれば大きくなる様な物でも良い。地域全部が入った物とか）。
誰でも使える簡単な英語マップを作成してもらいたい。
次回から新作品のみ分かる様なパンフ作成を願います。
無料パンフレット多すぎ、もったいない。逆に有料の商品が高価すぎ、バランスが悪い。入場券の価格設定も疑問。地元住民割引制度も、根本的に価格が高値で、反応がにぶかった。
開催時期を少しだけでも秋に延ばせないものでしょうか？シルバーウィーク頃まで 10 日～20 日ほど延長してほしい。夏は自然とお客様の足が向いてくれ芸術祭に来てくれた方とそうでないお客様が重なり迷惑をかけてしまいますし、市や町にとっても、少しでも長い期間にぎわっていただいた方が良くか・・・お盆とぶつけるのはもったいないですね・・・
8 月の開催はお客様が暑すぎてかなり「暑すぎるとつかれる」と声がありました。
トリエンナーレからビエンナーレにして頂ければ最高です。
3 回～4 回の客は、同じ作品に飽きを感じている人が多い。作品の見直しをしてほしい（2000 年～前回）。
中条、四日町、川治に作品が少ない事。
街中に作品が増えたのか、歩いて作品を見学している人が多かった感じがします。もっと街中に作品があっても良いと思います。
芸術とはいえもう少し誰が見ても分かりやすい作品があればと思います。特に子供向けの物をお願いしたらどうか？
キナーレ内の大掛かりな出品物！！本当に必要でしょうか？市の予算も余裕がある訳ではないと思い

ます。もう少し考えてやっていただきたいと思います。
バスの利用が多くて店の利用はあまりなかった。結局コンビニでは国道に面した所に会場がもっとあった方がよい。
今回はレンタカーや電動サイクルなどで、来場者の細かいフットワークが向上されて良かったと思います。1回目から見ていたが、市内でのアーティスト達の方が多くみられ来場者の姿が多くみられて活気にも満ちていた様に思います。年々上昇していると思います。
本年は天候不順な時もあり大変だったと思います。市街地では“ライオンズの森”の作品が評判でしたが、今一宣伝不足の感と年配者の方々のアクセス方法に工夫があっても良かったかなと思います。
お客様から巡回バスが好評でした。ガイドの養成をお願いしたい。バスの運転手さんの説明に差があった（親切に説明された方、全然説明なしの方）。
バスのツアー、巡回バスの便数を増やしてお客様の利便性を高めた方がよい。車で来ていないお客様が多いと感じた。そういう人たちのために便数を多くしてもらいたい。
お客様から作品の場所が分かりにくいとの声が多かったので、こちらからアドバイスできる様、いくつかのおすすめコース等の案内を示していただけると有難いです。自分（地元）でも迷いました。短い時間の中でより多く作品を見たいという希望が多かったので、どこに寄っても町をあげて歓迎している態勢をとれたらと思います。
継続がとっても大切だと感じました。私どものお店は前回よりも確実に手応えを感じました。ただ、残念な事に十日町市のみなさまと私どもの津南町では町民の意識が足りず、ごく一部だけの盛り上がりで何をやっているのかですら他人事の方がほとんどです。十日町市下条のみなさまのオレンジの▽旗がとても統一感があって良かったです。
今後地元の人々もどんどん参加し、地域が尚より一層一丸となって盛り上げていくべきだと思います。もう少し市民を抱き込み、楽しみ方を考えてください。一部の方々だけだと言われる声を聞くのは寂しいばかりです。
海外からのお客様を増やす取り組みの強化が必要。地元の人々の解説など、コミュニケーションを取られるおもてなしを地元の農作物などの販売などと組み合わせて盛り上げていくような取り組みをもっとやっていくべきかと思います。
クレジットカードが使えるので海外の方も多かったですが、市内でカードが利用可のお店がまだまだ少ないと思います。又、カードが使用できるお店の外国語マップでもあれば便利です。
芸術祭は大変良い事業になってきましたが、ワークショップでのお手伝いや開催までのお手伝い当番までは賃金の支払いを考えた方がよいのではないのでしょうか。ボランティアだけでは続きません。
こへび隊のマナーの悪さが目立ちました。市の為に頑張ってくれるはずの若者なのに残念です。次回からの受入も検討します。
ランチをしている店が少ないという要望を聞いたので、ランチをする店に助成金が出ればよいと思います。
とても効果があり喜んでおります。しかし当社は飲食店ですが、ご来店されるお客様が多くなる事を予測できながらもスタッフをそろえられない日が多々あり（人手不足）、そこが課題です。
経済効果がなければやる意味がありませんので、松代の農舞台の1人勝ちのやり方には納得がいきません。大地の芸術祭で提案された商品をオープンにいただき、どこでも売れるようなシステム構築をお願いします。
恩恵を受けているのは一部だけなので関心はない。人は増えているのは確かだと思う。
毎回ごくろうさまです。アートフロントギャラリーの力も凄いが、それをバックアップしている皆様にも感謝しております。
過疎・高齢化が著しい当該地区にあって、若者の人数が飛躍的に増える、という事態は大いに歓迎いたします。経済効果云々よりはこのような精神的なことです。いぶん救われるような気がいたします。とはいえ、芸術家を受け入れる集落の方々も高齢化し、「3年後は？」という状態。このままで芸術作品を増やし続ける事は、管理費も含めて次世代への「負の遺産」となってしまうかも。終了したら撤去する作品が多かったのはそういうことなのか？それでも、芸術祭終了後「この地区に1年ぐらいい住んでみようか」という芸大卒の若者もいたりして有難かった。
毎年の事ですが、大勢の方に来て頂き、そして十日町の良さをPRできる大地の芸術祭は素晴らしいと思います。県外のお客様と、大地の芸術祭の事はもちろんこの地方の特産物や観光地の事、相手の諸事情など、色々とコミュニケーションがとれて面白かったです。交（好）流ですかね。
大地の芸術祭は北川氏のお力のお蔭で東京の文化そして世界の文化を居ながらにして勉強でき、人生をより豊かにしてくれるものです。小学生、中学生も家庭の人達とよりも学校単位でアートフロントの解説を付けて廻るとより一層妻有に根差した異文化のそれぞれを実感出来ると思います。

謝辞

本研究の遂行と論文をまとめるにあたり、ご指導をいただきました主指導教員の平松庸一先生に心より感謝申し上げます。平松先生におかれましては、本筋から外れ、脇道にそれて遅々として研究が進まない私に対して叱咤激励とともに粘り強くご指導をいただき、研究とは何か、どこに向かって進めばいいのかという研究者としての姿勢、あるべき姿を教示いただきました。修士課程ならびに博士後期課程の在学期間を通じ、長期にわたって本当にお世話になりましたことを重ねて感謝いたします。多くの学びの機会をいただいた平松先生には深く感謝しております。

副査としてご指導いただいた咲川孝先生、長尾雅信先生には、ご多忙な中、本論文作成において有益なご助言をいただきました。私に欠けていた一貫性、論理性の重要性を指摘され、先生方による広い視野からの示唆に富んだご助言をふまえることにより、一つの論文としてまとめ上げることができました。深く感謝申し上げます。

新潟大学を御退官された高山誠先生には、退官される 2016 年度まで副査としてご指導くださいましたこと、感謝申し上げます。

学会発表の際にコメントしていただいた河合忠彦先生におかれましては、学会発表の場だけではなく、直接メールで有益なご助言を頂戴したことに深く感謝申し上げます次第です。

他にも、発表に対してコメントをいただいた先生方、ゼミで一緒に研究活動に取り組んだ方々など、数多くの皆様からの支えによって研究を推し進めることができました。

また、本研究での実証分析対象である大地の芸術祭での調査に際してご協力いただいた十日町市役所の職員の方々、十日町市観光協会の方々、現地でのアンケート調査に協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

本研究を遂行するにあたって先生方をはじめ多くの方々のご指導、ご支援、ご協力をいただいたことで、このようなかたちで論文として取りまとめ、完成することができました。本当にありがとうございました。